
小悪魔彼女 ~ Love Destiny ~

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小悪魔彼女 Love Destiny

【Nコード】

N4536S

【作者名】

南条仁

【あらすじ】

小悪魔系。それは可愛さ、思わせぶりな仕草などで男を翻弄する女の子。大学生の大河は中学生の家庭教師をすることになった。その相手こそ、大人びた可愛さを持つ美少女中学生の梨紅。挑発的な小悪魔系美少女に翻弄されたり、誘惑されてしまったり。可愛い女の子に弄ばれるのは羨ましいのか、悲しいのか!? 可愛い是最強! 痛快ラブコメディ!

序章：初めての先生

【SIDE：日野大河】

面白いと思える事のない退屈な日常。

そこから解放されるのは、きつかけといつか、刺激的なものが欲しい。

俺の名前は日野大河（ひの たいが）。

夢の大学生活、憧れと期待に満ちた独り暮らし。

高校時代の受験勉強から解放され、いざ大学生になったものの、大学生活が面白いなんて感じたのは最初の3ヶ月だけだ。

大学とアルバイト、たまの休みに友人たちと合コンしたりするも恋人はできず。

恋人がいない歴〃自分の人生。

決して自分の顔が不細工でもなければ、モテないと言うわけではない。

基本的に女性付き合いが下手なので、合コンしても、どうにもうまくいかない。

だから、何でもいいから刺激的な何かを求めている。

それは新年が明けた冬の1月に入ったばかりの頃。

俺と彼女が初めて出会ったのは肌寒い真冬のことだった……。

正月休みに帰省していた実家から帰って来た1月初旬。

まだ冬休み中で大学も休みなので、朝の目覚めもゆっくりだ。

寒い時ほど布団の中で眠りにつく幸せは何事にも変えられない。

……のだが、その安眠を妨害したのは腹部への圧迫だった。

「――起きなさい、大河っ！」

「――ぐはっ！？」

女性の声と共に俺の腹部を踏みつける足。

俺は慌てて布団から顔を出すと、まるでサディスティックを絵に描いたような性格をした女王様気取りの美人の女性が、俺の腹を思いつきり踏みつけていた。

「あら、目が覚めたのね。今日はすぐに起きてくれて助かるわ」

「な、中身出るっての。いきなり何しやがる、姉ちゃん！？」

「アンタがさっさと起きないから実力行使したまですよ」

寝ている人間の無防備の腹を踏みつける前にすべき対応は他にもあるはずだ。

それが普通に危険な行為だと知ってほしい。

何プレイだ、これは……？

「こっちは眠いんだよ。だから寝る。邪魔をする……な、ぐぼお！？」

平然と足に力（体重とは言えない）をかけてくる姉ちゃん。

俺を朝っぱらか踏みつける女性、これが俺の姉ちゃんの日野美鶴（ひの みつる）。

俺のひとつ年上の姉で、美人だが気が強くてかなり扱い要注意な人物だ。

「私が起きろ、と言ったのよ？お姉ちゃんの命令に逆らうつもりかしら？」

「……わかった。起きますから、足をどけてください。優しくて美人なお姉さん」

「そう？それならどいてあげる。“一撃”で起きてくれて嬉しい。危うく、足の位置をさらに下の方へ向けるべきだったわ」

「“一撃”の時点で俺にとっては脅威でしかねえよ。しかも、俺の大事な場所を狙うな」

さらりと危険発言されて下半身を守るポーズを布団の中ではしておく。

なんておつかない姉なんだろう。

俺は下半身の心配をしつつ、出来る限り急いで起き上がる。

「まずは洗顔してきなさい。朝食の準備をしてあげるから」

「お願いします……うう」

眠い目をこすりつつも、俺は逆らう事なくリビングへと出ることにした。

はあ、毎日のこととはいえ、この姉の対応だけは慣れそうにない。大学生活に伴い、念願の独り暮らしのはずだった。

しかし、俺が通う大学が姉の通う大学の隣街にあると言う事で、進学してから姉と一緒にアパートを借りて暮らしている。

そりゃ、親からの仕送り代を考えれば同じ部屋で済む方が効率がいい。

親の心配も減るだろうし、その辺の事情も分かる。

だが、しかし、ほとんど実生活において姉の監視下におかれた今の現状は不満だ。

「……ふわぁ、ちくしょー。変な目覚め方のせいで気分が悪い」

起こすのなら、起こすで別の起こし方をしてくれればいいのに。美鶴姉ちゃんは俺にとって幼い頃から脅威の存在だ。

リビングに出ると甘いイチゴジャムと香ばしいパンの香り。

焼き立てのパンとサラダ、それにスープという、いつもの定番の朝食がある。

俺を足蹴にしていた姉は優雅に食後のコーヒーを飲んでいた。

「……いただきます」

食事の用意、炊事や家事等をしてくれる姉の存在が有難いと思う事も事実だ。

そうというのが面倒なので世話になってる事に感謝はする。

だが、それと自由を天秤にかけると微妙なものだ。

「なあ、姉ちゃん。親に相談して独り暮らしをしないか？」

「は？何を今さら。アンタがこっちに来るから、私は去年住んでたアパートをわざわざ引っ越して、広めのこの部屋に変えてあげたのよ。一人暮らししたいならもつと前に親を説得しなさいよ。手遅れだわ」

「……そこだよ、姉ちゃん。よく考えても見ろよ。俺達は大学生だぜ？そりゃ、人には言えない関係も含めてプライベートは大事だろ。それが何が悲しくて姉と弟が2人暮らしせねばならないのだ？」

ありとあらゆる意味で家族が家にいるとくつろげない事もあるのさ。

「そう言うセリフはアンタが部屋に女の子を連れ込めるようになってから言いなさい」

「うぐつ！？そ、それは……。大体、そういう意味じゃ、姉ちゃんも……ハッ！？」

殺気を感じて俺は食べかけの食パンを机に落とす。

爽やかな笑顔で俺にキラツと光るフォークを向ける姉がいる、マジでこええ。

「何か、言ったかしら？よく聞こえなかったわ」

「いえ、何でもありません。スープでも飲もうつと。あはは……はあ」

俺は顔をひきつらせて、スープのカップに手を伸ばす。

この乱暴な性格のため、美人なのに姉ちゃんは恋人のひとりもない。

彼氏でも出来れば、多少、大人しくなるのだろう（という願望）。

「別に今のままでも問題ないでしょう？」

「まあ、そうなんだけど。気持ちの問題？分かるだろ？」

「私は現状で満足してるもの。そんなことを気にするのは女でも作ってからにして。そうすれば考えてあげない事もない」

姉いわく、「独り暮らしって案外寂しいものよ」、「らしい」。

一年だけ独り暮らしを経験した姉だが、この人が本当にそんなことを感じるのか。

それはさておくとして、俺は無理やり起こされた本件を聞く事にする。

「それで、俺を足蹴にしてまで起こした理由は？」

「……焼いたパンが冷めるから？」

「ウソっ！？そんな理由で腹を踏まれたのか、俺」

それならば、もっと優しく起こしてもらいたい。

甘い声に囁かれて……すまん、実姉だけに余計な妄想は毒でしかない。

「というのは、嘘。用件がなければあんな起こし方はしないわよ」

「用件なくても、あんな起こし方をする人のセリフじゃない」

「ご不満ならこれからは優しく起こしてあげるわよ。ゴキブリ用の殺虫剤とかどうかしら？」

「——普通に死んじゃうからやめてっ！？」

姉の乱暴な起こし方の是非については真面目な議論をしたい所だが、彼女は「濡れた雑巾を顔にかけるとか？」と危ない方向に持っていこうとするので無理やりやめた。

俺がもしも死ぬとしたら間違いなくこの美鶴姉ちゃん絡みだろう。

「まあ、そんなどうでもいい事はいいのよ」

「俺の生死はどうでもいいのか。これ以上、話をしていたら俺も怖いからいいや。話を戻して、朝を起こしたって事は何かあるんだろう？そうじゃなきゃ、俺があまりにもかわいそうすぎる」

うちの姉にはよく朝を起こされるが、あれほど乱暴に、さらに言えば休日に起こされる事は滅多にない……ていうか、休日ならこの人も昼まで寝ているし。

俺は食べ終えた朝食を片づけながら本題を聞きだす。

「大河、私が家庭教師のアルバイトをしているのは知ってるでしょ？」

俺が居酒屋でバイトしているように、美鶴姉ちゃんもバイトをしている。

確か家庭教師の派遣をしている所で、家庭教師として高校生を教えているとか。

将来、教師になるための教育大に通う姉にとってはいい勉強になつてゐるそうだ。

こんな人が先生になったら、いかついヤンキーですら更生させられそうだけ。

「そのアルバイト先が新しく人を探しているの。内容は中学生を教えられる人間ね。さすがにアンタでも中学レベルは教えられるでしょ。一応、名門の・・・大学に通つてゐるわけだし」

「いや、教える事は可能だが、何で俺なんだよ？」

「誰か紹介してくれて、事務の人に言われてさあ。アンタなら、いいかなって。ほら、バイトない日は暇そうにしてゐるじゃない」

居酒屋のバイトは小遣い稼ぎのためのバイトで、週に何回もシフトに入らない。

「そりゃ、暇な日が多いのは事実だが、こっに見えて忙しいんだぜ」

「彼女の一人でもいれば、その台詞も認めてあげるわ。というか、既に話は通してあるから、今日は面接の予定もあるの。大丈夫よ、形だけで採用は決定済み。給料も中々いいし。居酒屋のバイトと掛け持ちでもOKだから」

「俺がオツケーじゃねえ！？いつ行くなって決めたんだよ」

こちらの意思がまったくくないのに話を勝手に進めるな。

姉ちゃんは「嫌なの？」と面倒くさそうに言う俺の前に何枚かの紙をつきだす。

「……だったら、これ。今すぐ、私に返してくれる？」

そこに書かれているのは俺が姉ちゃんに借りている金の借用書。急な飲み会代等でお金が必要な時に姉ちゃんに借りた時に紙に書いて残したのだが、たまりにたまって合計8万円ぐらい。

ちなみに俺の貯蓄は残高3万円弱、手持ちを合わせてもすぐには無理だ。

帰省した時に高校時代の友達と遊びまくった年末の後だ、すぐに返せるはずもない。

「ま、待てよ。その返済はゆっくりでいいって言うてくれてたじゃんかよ」

「ええ、別に私はいいのよ？可愛い弟にお金を貸すぐらいは。でもねえ、お父さんはどうかしら。このお金を借りているという事実を知らせるのは簡単という事よ」

うちの父親はそう言う事に非常に厳しいお人だ。

大学に進学するときに約束した絶対にしてはいけない事が3つある。

「大学を中退するな」「借金を含めた金の貸し借りをするな」「子供をつくるな」。

最後は大学在籍時に出来ちゃった結婚した両親からの説得力ある言葉だが。

その3つのどれかに違反したら、今後一切の援助はしないと云う約束だった。

「まだ大学生活も3年、残ってるのにどうするつもりかしらねえ？」

「き、汚い。やり方がリアル過ぎて笑えないってば」

「ここも追い出されたくないわよね？寒い夜空の下を野宿で暮らしていきたい？」

にっこりとほほ笑みを浮かべて紙をちらつかせる美鶴姉ちゃん。

「……家庭教師のアルバイト、話だけでも聞かせてもらいます」

「よろしい。それじゃ、すぐに支度しなさい。これで私の給料が少しだけあがるの。大河が優しく嬉しいわ」

マジで鬼畜すぎるぜ、この人。

姉には逆らえない、と俺は改めて感じるのだった。

第1章：家庭教師、始めます

【SIDE：日野大河】

姉の姑息な陰謀、もとい、家庭教師のアルバイト話はすぐに決定した。

家庭教師を派遣する会社に行くとすぐに簡単なテストと面接が行われた。

一応、現役大学生なので中学生レベルぐらいは余裕だ。

「それでは、これからよろしくお願いしますね。日野さん」

姉の思惑通りにその日のうちに採用決定。

ちなみに姉ちゃんは俺をアルバイトに勧める事で、時給が少しだけあがったらしい。

今度、何か奢ってもらうことにしよう。

無理やりさせられた文句は言いたい、時給もいいのは事実。試しにやってみてもいいかな、と思う程度には興味も持てた。

俺が家庭教師をする生徒とは明日にでも会う予定だ。

一応、資料だけはもらってきたので、家に帰ってから読む。

相手は中学2年生、来年は受験生なので勉強をさせたいと親からの要望らしい。

「それにしても、相手は女の子か。今時の若い子に俺はどうすればいいのやら」

ただでさえ、女の子の扱いが苦手な俺としては困る。

「そんなの悩まなくても別にいいわよ。ただのアルバイトなんだか

ら」

夕食時、相談した俺に姉ちゃんはある口調で言った。

今日の夕食は鍋料理、メインは魚介系、肉系を希望したが断られた。

何でもダイエット中なんだとさ、この姉にも女性らしいところはあるのな。

姉と夕食を一緒に取るのは週に2回ほど、後は各自が自由に食事をとっている。

俺も姉ちゃんもバイト関係で帰宅時間も違うからな。

「私の場合はふたりの生徒を今、受け持ってるんだけど、男の子だろうが女の子だろうが、別にプライベートの事まで首を突っ込むわけじゃないんだから適当にしておけばいいのよ。あくまでも、仕事でしょ？」

「そーいうものなのかな。姉ちゃんも最初はとうだったんだ？」

「私？そうねえ、ちょっとくらい悩んだけど、一回してみたらどうとでもなるものよ。ようするに家庭教師〃生徒の学力UPが目的なわけじゃない。よほどバカな教え方しない限り、普通にしていればいいの」

確かに正論だが今の俺にそれができるのかどうか問題、何事も経験っていうのかな。

「あつ、分かってると思うけど、生徒に手を出しちゃいけないわよ」

「しないっての。相手は中学生だぜ？さすがの俺でもロリコンじゃ

ないさ」

年下女は好みでもないのだ、俺の好みは年上美人なのだよ。
俺は鍋料理を食べながら、明日の事を悩み続けていた。

翌日、俺は家庭教師として派遣された相手の家を訪れていた。

今日から本番、まずは顔合わせと相手の学力チェックを兼ねた第1回目だ。

俺の住むアパートからさほど離れていない高級住宅地。
金持ちの家が立ち並ぶ場所のひとつに、目的地があった。

「えっと、桐原、桐原……あつた、ここか？」

庭付き一戸建て、いかにも金持ちが住んでそうな家だ。

家庭教師なんてのを雇うくらいだからなあ。

相場の値段を聞いてみたが、家庭教師ってのはお金がかかるのだ。
俺はインターホンを押すとすぐに中から女性が出迎えてくれる。

「貴方が家庭教師の日野さんね。初めまして、桐原紗代（きりはら さよ）と言います。あの●●大学の生徒さんなんですってね。私の娘もいずれはああいう大学に通わせたいと思っていますの。よろしく願いしますね」

「こちらこそお願いします」

上品そうな女性、俺が受け持つ相手の母親だ。
紗代さんは俺を家の中へと案内する。

まずはリビングに案内されて俺はソファに座る。

「娘を呼んできますから少しだけお待ちください」

俺はぐるっと辺りを見渡すが、これがお金持ちの家ですか。

外面もすごいが、中も豪華な造りになっている……いいねえ、羨ましい。

「お待たせしました。娘の梨紅です……って、あら？」

いざ紹介、と思ったら紗代さんの後ろには誰もいない。

俺の家庭教師の生徒である女の子の名前は桐原梨紅（きりはらりく）と言つ。

「こらっ、梨紅。せっかく先生が来てくれているのよ」

「嫌よ。私は家庭教師なんて頼んだ覚えはないわっ」

廊下の方で声がするので、そこにいるんだろう。

紗代さんはため息をつきながら「ごめんなさいね」と廊下へと戻る。

「梨紅。貴方のために家庭教師を頼んでもらったのよ？最近、成績も落ちる一方、このままでどうするの？」

「私は勉強なんて嫌いなもの。そんなのしなくたって生きていける」

「……もっつ、いつからそんなひねくれた子になったのかしら」

どうやら実力行使に出たらしい。

廊下からは「ひっぱらないでっ！？」という可愛い叫びが聞こえてくる。

……やれやれ、いつまでかかるんだろうな。

「お待たせしました、日野さん」

それから数分後、根負けしたらしい梨紅ちゃんがようやくこちらに来た。

俯きながら頬を膨らませる彼女。

おっ、中学生にしては綺麗な女の子じゃないか。

梨紅ちゃんは薄茶色の長髪がよく似合う、スタイルもいい美少女だ。

いかにもお嬢さまって言う雰囲気もあるけど、そこもいい。

だが、そんな彼女は俺の方を見ようとしてもしない、これは前途多難か？

「……梨紅、ご挨拶をなささい」

ツーン、と無視状態の彼女。

どうやらご機嫌斜めの様子、これはまた大変そうだ。

「はあ、梨紅もまだまだ子供ね。すみません、日野さん。娘は勉強嫌いなもので」

困り果てた紗代さん、俺は俺なりにしますか。

これもお仕事だし、諦めて帰るわけにもいかないのだ。

「初めまして、梨紅ちゃん。今日からキミの家庭教師をする事になった日野大河です」

「……？」

彼女がようやく俺の方に視線を向ける。

初めは興味なさそうに見てきた彼女だが、俺の顔を見るや俺の方に近づいてきた。

「ねえ、お兄さん。歳はいくつなの？」

「大学1年、19歳だから梨紅ちゃんとは5歳差かな」

中学2年の14歳と聞いているからそれくらい離れている。

「……ママ、家庭教師の話だけどいいわよ。認めてあげる。ほら、先生。私の部屋に来て」

彼女は俺に興味を持ったのか、あっさりと家庭教師を受け入れてくれた。

俺の手を引いて部屋と連れて行く彼女。

いきなりやる気になってくれたのはいいが、逆に俺は困惑していた。

「急にどうしたのかしら？日野さん、娘をお願いしますね」

「は、はい……ホント、女の子って気難しい」

紗代さんに見送られて2階にある彼女の部屋へとつく。

これもまた広い大部屋かと思いきや、俺の実家にある部屋と同じくらいの広さだ。

女の子らしく可愛くファンシーな部屋ではある。

昔の美鶴姉ちゃんの部屋がこんなのだったなあ、今からは想像で

きないけど。

「その椅子に座って。えっと、ひのさんだっけ？」

「日野大河。日野でいいよ」

「じゃ、大河先生って呼ぶわ。私の事は梨紅でいいから」

最初から名前か、俺を名前で呼ぶ人は姉以外いないので何だか照れくさいぜ。

大河ってなんだか大層な名前で呼びにくいんだよな。

勉強机に座った彼女だが、机の上はファッション雑誌が山積み。

これでは勉強ができないので、そのの整理からまずする事にした。整理を手伝いながら俺は尋ねてみる事にする。

「どうして急にやる気になってくれたのかな？」

「どうして？だって、想像していた人と全然違ったから。●●大学の大学生が来るって聞いてイメージ的に眼鏡かけたお堅い男だっと思ってたの。頭はいいけど、他はダメみたいな？でも、先生はカッコいいからオッケーよ」

うちの大学は名も知れているし、頭もいいけどそこまでのイメージはないぞ。

しかし、容姿でやる気を見せてくれるとは……。

「先生だって逆の立場ならどう？超可愛い女の先生が家庭教師なら嬉しいでしょ」

「確かに。それは言えているな」

美人家庭教師とふたりつきり、たまらんシチュエーションです。

「そういうこと。分かってくれたかしら？」

「まあ、それとなく。あつ、これはどこに置けばいい？」

「その辺の隅っこにおいて。あとで自分で片付けておくわ」

俺は雑誌を片隅に積み重ねながら、梨紅ちゃんの資料を思い出す。担当科目は数学をメインにしてくれと言われていた。

「梨紅ちゃんは数学が苦手なのか？」

「んー、別に？テストで20点ぐらいだから大丈夫じゃない？」

「……全然、大丈夫じゃないから。苦手科目なのか」

理系が苦手な女の子って多いからな。

俺はまず軽いテスト問題を彼女にさせて見ることに。

「……これは？あれ、どうやって解くのかしら。公式に当てはめて……公式って何？」

悩みながらもシャーペンで数字を書き連ねていく梨紅ちゃん。

テスト開始から20分、何とかできあがった答案用紙を答え合わせする。

見事に×ばかり……おいおい、これは予想外にひどいぞ。彼女が苦手とする数学だが、見事に方程式関係は全滅だ。

「えっと、梨紅ちゃん。本当に数学が苦手なんだな？」

「だって、分数習ったくらいから算数って興味なかったもの。必要ないことはしない主義なの」

「それにしたって、これは……。一応、私立の中学校に通ってるんだよね？」

「そうよ。学年の成績では優秀な方なのよ。数学はダメでも他はいい成績だからね」

自慢げに彼女は先日のテストの結果を見せてくれる。

他の科目は言うとおり、高得点で問題はまったくくない。

確かにこれは家庭教師が必要なレベルだな、間違いない。

何だかんだで2時間が経過して本日の家庭教師は終了。

「ふう、終わった。大河先生、連絡先を教えてよ。番号とメールアドレス交換しましょ」

「ああ、分かったよ。これでいいかな」

携帯電話の番号を交換し合つと彼女は嬉しそうに笑う。

「また連絡するわ。大河先生、よろしくねっ」

思わず見惚れる美少女中学生、梨紅ちゃんとの出会いはこの日から始まった。

第2章：天使or小悪魔？〈前編〉

【SIDE：日野大河】

それは冬休みも残り数日のある日の朝のことだった。

姉弟仲良く朝食をとっていた俺は思い出したように姉に言った。

「なあ、姉ちゃん。年頃の女の子にはどう対応したらいいと思う？」

「……はい？」

朝っぱらから、俺の質問に美鶴姉ちゃんはパンをくわえたまま固まっている。

そんな銅像の如く固まられる程変な事を言っただつてもりはない。

「年頃の女の子との付き合い方っていうか。ほら、距離感とかあるだろ？」

「……なるほど。風邪ね、そりゃこの寒い冬だもの。大河も風邪くらいひくわ」

彼女は俺の前に薬箱から体温計と風邪薬を差し出す。

あまりにも真顔で突っ込みにくい事をされるので俺は「いらないから」と断る。

「ひどっ！？俺がそんな事を質問しちゃダメなのかよ？」

「それを風邪の熱にうなされた妄言でないとしたら、私が言えることはひとつだけよ。さっさと病院に行きなさい。今ならまだ間に合

うわ。今年の風邪は性質が悪いっていうもの。噂に聞く新型インフルエンザの影響かしら？」

「……本気で心配しないでくれ。めっちゃ傷付くからさ」

俺から女に関する話題が出たらこの扱いって普通にひどくないですか？

「俺だって、たまには女の話が出る時もある。ごく稀にな」

「……それってこの現実世界に生きている子よね？」

「二次元でもなければ幽霊でも、妄想でもない。お忘れか、俺の家庭教師の相手の子の話だよ」

俺ってそこまで女運がないように思われていたんだろうか。

俺はガクツと落ち込みながら、事情を説明する事にする。

それは昨日の夜にまで遡る。

俺が家庭教師をする事になった美少女中学生、梨紅ちゃん。

彼女とメールでのやり取りをしていた俺なのだが、向こうからある提案がされた。

『大河先生。明日、数学の参考書を選ぶのに手伝ってくれない？』

既に家庭教師の2回目をこなした所で彼女には基本から教える事にした。

そのために参考書か問題集が必要だと思い、購入するように言っていたのだ。

だが、自分ではよく分からないと言うので付き添って欲しいと言う。

俺としては暇人だから別にかまわないとオツケーしたのだ。

しかし、よくよく考えてみると、俺は女の子ってどう接していいのかわからない。

家庭教師だと勉強絡みで適当に話す事ができても、こういうプライベートだと難しい。

なので、一応、女である姉ちゃんにその辺を教えてもらおうと思ったのだ。

「……大体分かったわ。そう言う事ならいいけど。アンタが問題集を買ってきてあげたら、話は終わってたんじゃない？普通は一緒に買いに行ったりしないわよ。そもそも、こちら側が用意するものだからね」

「そうなのか？その辺が良く分からないんだよな」

「そういうものよ。前も言ったけど、別に教え子とは仲良くなる必要はないの。信頼さえあればそれでいいのよ？まあ、アンタは初めてだからそういう距離感もまだ分からないと思うから好きにしたらいいと思うけど」

とはいえ、既に約束してしまっているのだから今さら断れない。

「今回は一緒に買いに行く事にするよ」

「で、女の子との付き合い方だっけ……？」

「とりあえず、どっという風に接すればいいのになって」

「アンタはそう言うのが苦手だから合コンで毎回のようには失敗するのよ。もっと前から反省していればよかったのにね」

致命的に痛いところを突かれた俺はうなだれるしかない。
何でもご存知の姉上だけに非常に厳しい意見だ。

「そうねえ。大河の悪いところは女の子相手に逆に気を遣いすぎて
気持ち悪い所かしら。そこまでしなくてもいいって、ところまです
るから。女の子には優しくしてあげるのはいいいことだけど、鬱陶し
いって思われるようじゃダメね……あら、大河？」

「な、何でもない。何でもないから気にしないでくれ、ぐすっ」

思わず目頭が熱くなっちゃったじゃないか。

言われて心あたりがあるのが姉ちゃんのすごい所なわけで。

ああ、思い出すだけでも辛い、過去の俺のバカ野郎。

「……つまり、ある程度は普通でOK？」

「むしろ、それが自然じゃない？ 気配り、気遣いのない男はクズだ
けど、行き過ぎても気持ち悪いだけ。その辺の加減さえ間違えなけ
ればいいはずよ。女心をもう少し理解できるようになさい」

うーむ、女の子とは難しい生き物なのだな。

「それにしても、相手は中学生でしょ？ 子供相手に何を真剣になっ
てるんだか」

「どんな相手でも、下手に対応するよりいいだろ？」

「そうだけどさあ。適当に頑張りなさいよ。何度も言うておくけど
……」

「生徒相手に手を出さない。分かってるって。恋愛感情とかじゃないからさ」

むしろ、5歳下の中学生に手を出すようじゃただの犯罪者だっ
の。

「……ところで、アンタとその子の約束時間って何時なの？」

「10時に駅前で待ち合わせだけど？」

「ふーん。今、9時50分だけど間に合うの？」

「——ナンデストっ!？」

姉ちゃんと話をしていたせいで時間がかかなりヤバイ。

俺は急いで準備をしてから家を飛び出した。

俺が駅前についたのは10時15分。

完全な遅刻の上に携帯電話を忘れてきたので連絡もできず。

駅前には人ごみの中でも目立つ美少女が俺を待っていた。

梨紅ちゃんは俺に気づくと軽く唇を尖らせていた。

「遅いわよ、大河先生っ。携帯に電話しても繋がらないし、心配したじゃない」

「ごめん。遅刻したうえに携帯も忘れてきちゃって」

彼女に怒られながら俺は情けなくも頭を下げる。
すると、怒った顔をしていた彼女はくすつと微笑する。

「……なんてね、実は私も遅刻なの。ついさっきついたばかり。先生に遅れるかもって電話したら、繋がらなかったら怒って帰っちゃったのかなって心配したんだからね？よかった」

彼女は「それじゃ、行きましょ」と俺を駅前のビルに誘う。
駅ビルの中に今回の目的であるこの街で一番大きな本屋がある。
本屋以外にも、この駅ビルには様々なテナントが入ってる。
繁華街に行くよりもここに来た方が何でも揃う。

「先生はデートとかで誰かとよく来たりする？」

「……まあね」

ここはさり気なく嘘をつく、嘘というのも人生にとっては必要なことです。

男には見栄を張らなくちゃいけない時があるのだ。

「そうなの？先生って恋人がいるんだ？」

「恋人はいないよ。今は、だけど」

さらにウソを重ねております。

人生19年、恋人なんていたことないけど、男には（以下略）。

「ふーん。それじゃ、こういうのにも慣れてるんだ？」

彼女がずっと伸ばした白い手が俺の手に重なり合う。
指と指をからめるように彼女は俺と自然な形で手を繋ぐ。

「……梨紅ちゃん？」

な、何で女の子と手を繋ぐシチュを体験しておるのですか？
動揺を必死に見せまいとする俺は自分を抑える。

ここで下手に動揺すれば全てが嘘だとバレテしまう。
年上としての意地を見せねば…… 梨紅ちゃんの手って小さくて温
かい…… じゃなくてっ、流されてどうするっ！？

相手は中学生、意識したら負けだ。

俺の心の葛藤を知らずか、彼女はにこやかな笑みを浮かべていた。

「先生の手って大きいね。男の子って皆こうなのかな？」

「お、女の子より大きいのは当然だ。それより、手を……」

離して欲しいと言おうとしたら、彼女はそのまま歩きだしてしま
う。

「……どうしたの、大河先生？あつ。もしかして、意識してる？そ
んなわけないよね？年上で恋人もいた経験のある先生が年下の女子
相手に意識するなんて。あははっ」

「ははっ。そうだとも。子供相手に意識なんか……ぐっ！？」

今度は何か強く握り締めてきた、ゆ、指が折れりゆ……！？

思わぬ失言で梨紅ちゃんを不機嫌にさせたらしい。

顔は可愛い笑顔なのに、指を砕く勢いで力を込めてきた。

子供発言が気に入らなかつたらしい梨紅ちゃんは低い声で言う。

「……私、子供じゃないけど？そんなに子供に見えるかな？」

「そ、そうだね。大人っぽいと思うよ。うん、だから、その……力を緩めてくれたら嬉しいな？」

素直に謝る、情けない俺。

年下女子に翻弄されっぱなしでどうするのだ。
しかし、意外と握力が強いのか離せないぞ。

「先生の前の恋人ってどんな人だったの？」

「えっ……？あ、いや、どんな人って言われても」

嘘を重ねるのも限界で、真実を告げるのも辛いのです。
しかし、すぐに女の子の事を言えと言われても俺にはそのような女の子なんていない。

「見た目が美人なのに、ものすごくサディストで意地悪するのが大好きなお姉さん」

つい口から出たのが、脳裏をよぎった美鶴姉ちゃんぐらいしかない俺もどうかと思う。

彼女は俺の態度で何かを知ろうとしていた様子だ。

「……さでいすと？それって怖い人だったってこと？」

「気が強いって意味ではトラウマになるくらいに。もうこの話はいいかな？」

「何だ、ホントにいたんだ。女慣れしてなさそうだから嘘だと思ってたわ。昔の相手が怖い人なら仕方ない。ごめんなさい、先生。とても辛い事を思い出させてしまって……大変だったのね」

嘘だと見破られている上に、同情までされている俺の人生って何なのだろう。

泣きたい、ものすごく泣きたい。

しょげてしまう俺の手を未だに繋いだままの彼女。

「お姉さんってことは元恋人さんって年上だったの……？」

「そうだけど。それが何か？」

彼女は「何でもないっ」と笑顔で誤魔化すと俺を駆ビルの最上階へと連れて行く。

俺の隣を歩く梨紅ちゃん、容姿的には中学生と言うよりも大人びているので高校生ぐらいに見えるから……。

はっ、俺、今、何を考えていたのだ、相手は中学生、中学生だぞ？（大事なことから2回言った）

自分が流されている事に自己嫌悪と反省をする。

いくら女性経験が少ないとはいえ、もうちょっとしっかりしろ、俺。

「……先生みたいなタイプって、年下の方が絶対相性がいいと思うの」

「ん、そうかな？」

「そうよ、年上趣味なんてやめて……私なんてどうかしら、大河先生？」

いきなりの告白っぽい言葉と潤んだ瞳に見つめられてしまう。

ああ、俺の今日の運勢、女難の相（年下注意）って出ていなかったか？

第3章：天使or小悪魔？〈中編〉

可愛い年下美少女に翻弄される俺。

この少女、天使か小悪魔か。

一体、どっちなのだろうか……。

「……先生みたいなタイプって、年下の方が絶対相性がいいと思うの」

「ん、そうかな？」

「そうだよ。だ・か・ら……私なんてどう？大河先生っ」

いきなりの告白っぽい言葉と潤んだ瞳に見つめられてしまう。

そんな艶っぽい表情で見つめられるとドキドキものですよ？

というか、俺はロリコンじゃないんだ、ここで反応したら負け。

「お、大人をからかうものじゃない。梨紅ちゃんも自分と同年くらしいの男の子に迫りなさい。俺みたいな年上相手なんて眼中にないだろ？」

大抵、その年代の子は恋愛に興味を持ち、好きな相手ぐらいいるものだ。

俺が中学生の頃は片恋相手の1人や2人、3人、4人……って、全部振られたっけなあ。

あの頃の俺はピュアだったから告白して失恋と言う流れに枕を涙で流していたのだ。

ちなみにフラれ続けた理由？

『大河クンとはいいお友達でいたいの』だって言われて振られま

した。

友達でいたって理由で振られ続けた俺の存在価値って何なのだ。過去の記憶を思い出してまたしよげる。

いかん、女性経験のなさが俺の人生のすべてを物語っている気がするぞ。

「……同級生？全然興味ないわ。だって、子供っぽくて付き合いきれないもの」

「そうか？そんなに子供は嫌いか？」

「苦手と言ってもいいかも。そう言う意味では大河先生みたいな大人って好みだよ。先生はカッコいいし、頼りになるもの」

よくよく考えてみれば俺はそこまで女性に褒められた事がない。梨紅ちゃんが俺と同じ年の子であればと切に悔やむぜ。

まあ、どれだけ褒められようと子供に手を出すわけにもいかず。俺に迫ろうとする彼女を引き離して俺は言う。

「褒めてくれてありがとう。それじゃ、参考書買いに行くか」

「全然、相手にしてくれない。大河先生、かまって欲しいわ」

「くつついても、ダメ。人目が気になるのでおやめください」

幸いにも階段付近なので人通りは少ないが、女子中学生に抱きつかれそうになる大学生の光景は絵図的には非常にマズイのでやめていただきたい。

不満そうな彼女を連れながら最上階にある本屋に俺達は向かう事にする。

「……大河先生、質問があるわ。いい？」

「俺に答えられる事ならどうぞ」

「先生つて、年下に興味ある？」

見事なストレート、ど真ん中の質問が来たぞ！？
普通は変化球から攻めるものだが……。

「俺の好みは年上美人が趣味なんだ」

「……ふっ」

今、この子、俺の事を鼻で笑いましたよ！？
好みを言っただけで笑われるってどうなんだよ。

「先生つて年下に好かれるタイプよ。年上は無理じゃない？」

「うわっ、鼻で笑ったことは華麗にスルー？」

「何のことかしら？」

何事もなかったかのような自然な返し……女の子って怖いな。
怖い女の子はうちの姉ちゃんだけで十分だったの。

「年下に興味があると答えたらどうという返答があっただ？」

「……ここにとびつきり美人で可愛い彼氏のいない女の子がいます
けど？」

「あいにく、俺はお子様には興味がなっ……ぐは!？」

足を踏みつけられているのは気のせいではない。

しかも、女性モノの靴で踏まれるとものすごく痛い。

「子供じゃないって何回言えればいいのかな」

「俺から見れば梨紅ちゃんは十分子供なんだよ。中学生相手に欲情するわけもない」

「……先生の人生、軽く終わらせてあげましょうか？」

彼女は腕を組んだ状態で人を呼ぼうとする。

……この後の予想される展開。

「きゃーっ、誰か助けて。変な人に身体を触られたの」

「何!？変質者か、お前を逮捕する」

「ち、違う。お、俺は無実なんだ。悪いのはこの手なんです」

いかん、俺の輝かしい未来がたった一言で終わる。

あらゆる意味において女性の発言の方が有利。

俺がどうあがいたところで現在の状況では俺は人生の敗者となるだろう。

「待て、早まるな。梨紅ちゃん、キミはとても魅力的な大人らしい女性だ。そこらの中学生とは比べ物にならない」

「……本当に？先生がそう言ってくれるのは嬉しいわっ」

一言で不機嫌になり、一言で喜びの笑みを見せる。
女の子とは何とも扱いにくい……。

危うく犯罪者になりそうなのを回避するのは大変だ。

「……ん？日野か？お前、こんなところで何やってるんだ？」

最悪の場面を大学の同級生に目撃されてしまう。

彼は俺の友人のひとり、中里（なかざと）だ。

「何をしているように見える？」

「妹にじゃれつかれている兄。お前、姉さん以外に妹がいたのか」

よしっ、うまく誤魔化されてくれている。

「そうなんだよ。甘えたがりの妹でさあ、ちよつと地元から出てきて街を案内しているんだ。中里はどうしてここに？」

「……私は別に妹じゃ、むぐっ」

俺は梨紅ちゃんの間元を押さえて何も喋らさないようにする。

冬休み後の俺の大学での立場を守るためだ、やむを得ない。

ここは黙って梨紅ちゃんには妹設定を貫いてもらう事にしよう。

ちなみに地元には本当に俺の妹（高校１年生）がいるので妹がいる事は嘘ではない。

「何言ってるんだよ。俺のバイト先、この駅ビルのCDショップだよ。そーいや、お前の好きな歌手の新曲のCD出てるぞ」

「あつ、そうだった。今度、買いに行くよ」

「……ああ？何か様子が変だぞ、お前？」

「別に何でもないさ。あははっ……」

慣れない嘘をつき続けてるせいだよ、ちくしょーっ。

冷や汗をかくので俺は早く中里には去ってもらいたい。

だが、彼は去るところか余計な地雷をまき散らす。

「そついや、この前の合コンで沢崎（さわさき）って女子大生いたの覚えてるか？」

「沢崎……ひとつ年上の美人のお姉さんだろ。覚えているよ」

冬休み前にした合コンで久々の手ごたえあり、と思ったのだが、最後の決め手にかけて逃がしてしまったのだ。

逃がした魚は大きかった、あれはいい美人でしたよ。

「バイト先の先輩の友達なんだけどさ。また今度、機会があれば会いたいってさ。気があるのなら話を受けるか？」

「そうだな、もう一度あつて話をして……いたっ！？」

俺の足に再び攻撃が……不機嫌度の増した梨紅ちゃんが攻撃を再開したらしい。

「と、思ったけど、俺は今、バイトで忙しいから悪いけどまた今度にしてくれ」

「いいのか？お前、結構、あの子の事を狙っていただろ？飲み会の時も『巨乳姉ちゃん最高！』とか言ってたの忘れたのか？おっと、妹ちゃんの前で言う事じゃなかったか」

彼は「また何かあれば連絡してやるよ」と俺達の前を去っていく。
あの野郎、地雷をまき散らしていきやがった。

「へえ、先生ってば合コンとか行くんだ？」

俺の手を離れた彼女は唇を尖らせると意地悪く言う。

「友達付き合いがあるから、いくこともある」

「……巨乳美女が好きなんだ？」

「そ、それは、その……酔った時の事は覚えてません」

これは本当だ、マジで言った覚えはない。

梨紅ちゃんは「しかも、私の事は妹扱いするし」とご機嫌斜めだ。
やれやれ、怒らせてしまったらしい。

こつ言う時、どうすればいいのか悩みます。

「大河先生って、どういう人間が良く分かったわ」

「……どういう人間？」

「——大河先生ってヘタレでしょ？」

へ、へたれ……バカな、この俺がヘタレキャラだと？

年下の女の子からヘタレだと言われる自分が恥ずかしい上にすぐシヨックだ。

落ち込んだ俺に梨紅ちゃんとはどめとばかりに、

「先生つて、ホントに恋愛経験あるのかしら」

時に真実を突き付けられると言う事は悲しいくらいに辛い事でもある。

俺、もう帰ってもいいですか？

「ごめんなさい。言いすぎたかも……怒ってる？」

黙り込んだ俺の反応に不安になったのか、彼女は顔を覗き込む。根は素直な子で、悪意を持ってるわけではないようだ。

「……大河先生？」

反応のない事が不安な様子。

ここは大人としての対応を取るべきだろう。

「気にしていないよ。どうせ、俺はヘタレだし」

「……気にしているじゃない。軽い冗談なの、気にしないでよ」

男には言われたくない禁句ってものがあるんですよ。

優柔不断、ヘタレ、甲斐性なし、この3つは男にとって屈辱的な言葉なのだ。

女の子に言われている時点でその男の人間性がダメなのは事実だけれどな。

「ホントに怒ってない？私の事、嫌いにならない？」

「この程度で怒らないし、嫌いにもならない。ほら、こんな所にいつまでもいないと行こうじゃないか。目的の本を買いにさ」

満面の笑みで「先生、優しいっ♪」なんて言われると怒る気になれません。

女の子ってずるいなあ、と思わされるのだ。

「——で、結局、大河先生ってホントに恋愛経験はあるの？」

……その件についてはノーコメントでお願いします。

第4章：天使or小悪魔？〈後編〉

【SIDE：日野大河】

梨紅ちゃんの参考書を選びに行くと言う名目のデートと化している。

友人との再会に危うく俺の様々な疑惑が暴露されそうになった。それを乗り越えた今、俺達は駅ビル内をいろいろと見て回っている。

「ねえ、大河先生。この服はどう？」

先ほどから彼女は洋服の試着を繰り返していた。

いつも通り慣れているお店らしく店員とも親しい様子。

中学生にしてはスタイルもいい彼女はモデルみたいにも見える。

まさにひとりファッションショーが続いている。

「……うん、可愛いと思うよ」

「また、それ？もっと反応してくれてもいいのに」

ホントに可愛いから言ってるのに、それも5回続くと彼女も不満そうだ。

俺に「どういうのが好み？」と尋ねて、試着している服は大人っぽくデニムのミニスカート姿が印象的だが、彼女の場合は背伸びしている子供らしくはない。

普通に大人っぽいからよく似合うんだよな。

これで年齢の問題さえなければこちらから告白してるっての。

それだけ彼女は魅力的だし、可愛いし、中学生じゃなければ言う

事なしだ。

「先生、さっきから可愛いって言うてくれるのはいいけど、他に言う事はないの？」

俺の淡泊な回答に「つまらない」と彼女は愚痴る。

「先生、もう少し女の子を喜ばせる付き合い方した方がいいんじゃない？」

……すみませんねえ、女性経験が全然なくて。こつこのつ慣れていないんだよ、ちくしょー。

俺の人生経験で女の子とデートをした事は数えるほどしかないぜ。

「えっと、これとこれと、これを買うわ」

彼女は試着した洋服を幾つか購入するらしい。

さすがお金持ち（社長令嬢）だけあって値段も見ずに即購入だ。

俺は服を買う時、デザインよりも値段とお財布事情との交渉で悩む派です。

高い服を買う時って勇気がいるのが普通だろうに。

こつこつ展開の場合、俺は荷物持ちをするべきだろうか。

向こうから言われる前に荷物を持ってあげると梨紅ちゃんは微笑する。

「気が利いてる男の子っていいわよね。先生、さすがっ」

何だか褒められたのが嬉しいぞ。

梨紅ちゃんは時計を見ながら俺に言う。

「……そろそろお腹空かない、先生？」

「ん？もうそんな時間か？」

俺も時計を見るとちょうど12時過ぎだ。

お昼時と言う事で俺と梨紅ちゃんは昼食をとる事にする。

とは言っても、高級ランチなど到底無理なので、駅ビル地下にある洋食屋さんだ。

「こういう所で食事だけど大丈夫なのか？」

「私は別にそこまでお嬢さまじゃないわ。それに洋食は好きだから何にしようかな」

メニューを選びながら考える梨紅ちゃん。

俺はたまにこの店に来るのでメニューを見なくても注文する品は決まっている。

この店特製の「オムライス」は絶品で月に1度は必ず食べに来ている。

半熟でとろとろの卵が上に乗っている、それがたまらなく美味しいのだ。

「大河先生のお勧めって何かあるの？」

「俺のお勧めはオムライスだな。この店のは美味しいぞ。マジで最高だ」

「オムライス？へえ、そうなんだ。それじゃ、私もそれにしようつと」

俺達は同じオムライスを注文して来るのを待つ。

その間に俺はこちらから彼女に質問してみる事にした。
いつもは俺ばかり質問されているからな。

「そっぴや、梨紅ちゃんって彼氏とかいないのか？」

「彼氏がいたら先生とデートなんかしない。私の理想は年上の男性なの。同級生には興味もないって言ったでしょ。でも、全然出会いもなくて……ねえ？」

何でこちらを見ながら「ねえ？」と言うのでしょうか。

その「ねえ？」は俺も同じく出会いがないでしよう？の「ねえ？」なのか。

それとも、「年上の男性って先生の事だよ」という好意の表れか。……どちらも地雷のような気がするので深く考えないようにした。人間、下手な地雷を踏むのは極力避けるべきなのです。

「恋人は欲しいけど妥協はしたくないんだ。ほら、恋愛って大事にしたいじゃない」

それは今時の子にしてはいい考えだな。

「大事にした方がいいぞ、恋愛って奴は」

「先生の初恋っていつぐらいだったの？」

「……まあ、その話はおいとして」

「何でわざとらしく避けるの？笑わないから言ってみてよ」

俺の初恋話なんて面白みのひとつもありやしないっての。
誰でも過去の事で言いたくない事ってあるだろう。
俺は「教えてよ」と詰め寄る彼女に負けて話すことに。

「……中学生の時、友人の恋人を好きになり、告白して玉砕した。
これでいいか？」

「奪略愛？先生って意外とチャレンジャーだね？」

「好きになつたら真つすぐなタイプだからな」

それでも後先考えずに告白した昔の俺には呆れる。
友人との仲が悪くなることも最悪ありえたのにな。

でも、彼女もまんざらではなかったと俺的には思っていたがそれもまた青春だ。

彼女はツインテールに結んだ自分の髪をいじる仕草をする。

「……先生って愛に障害があつた方が萌える方？」

「燃えるだろ。今、絶対言い方的に漢字が違つてたぞ」

「あははっ。冗談、冗談。先生に奪略愛する勇気があつたことにびっくりしてたの」

「俺だってやる時はやる人間なんだ。人のモノに興味がわるわけじゃない。好きな子が恋人が既にいただけの話さ」

懐かしい頃の記憶だ、それも経験って言える事だろう。
告白して付き合えていたとしても、長くは続かなかつたに違いな
い。

その後も恋愛運はなくて敗北続き、人生の告白した通算成績0勝9敗。

あと一敗で二桁突入しそうなので今は慎重になっているところだ。

「結局、俺って女の子からするといい友達どまりなんだよな。どんな相手でもさ」

「それは分かる気がするなあ。先生の持ち味っていうか、存在の良さ。居心地いいし、優しいけど、本命になれない感じ。あつ、私は先生の事は本命としていいと思ってるから心配しないで」

非常に危ない話題は無視だ、気があるの？とか反応したら負けです。

彼女はわざと無視したことに不満で意地悪くあの話題に触れた。

「それなら、前に恋人がいるって言ってた人はどこで知り合ったの？気の強いお姉さんだったんでしょ？友達の壁をどう越えたわけ？いい友達じゃないってことは何かあったんでしょ？」

つい、うっかり地雷を踏んでしまいました。

マズイ、嘘をついた事を自分で掘り返してどうする。

嘘を重ねる事は地味に大変なんだ、嘘をつきなれていない俺は到底、詐欺師になれそうにない。

どうする、どうすればいい……どう誤魔化せばいいんだあ！？

「——お待たせしました、オムライスです」

俺のピンチを救うように空気を読んでくれた店員が、美味そうなケチャップの匂いのするオムライスを運んできてくれた。

今日も素晴らしい卵の色合いがいい、俺一押しのオムライスだ。

「おおっ、オムライスがきたぞ、食べようじゃないか」

「……先生の恋人の話は？」

「そんなことより冷めてしまっぞ。オムライスは温かいうちに食べないとな」

「……無理やり誤魔化そうとするし。素直に嘘だと認めてしまえば楽になるのに」

年下少女に嘘だと断言されている俺がとてつもなく悲しい。
恋人がいないというのは人生を否定されたり、年下少女にいじめられる事なのか！？

しかし、男のプライドにかけてもここで認めるわけにはいかないのだ。

彼女は渋々、その話題を諦めて、オムライスを食べることにした。
スプーンですくい、一口食べてその表情が変わる。

「うわっ、美味しい。ほどよい卵の半熟具合とか最高ね」

「そうだろう。俺もこのオムライスのファンなんだよ」

「分かる。これはいけるよ、うん。最高っ」

梨紅ちゃんにもご満足いただけたようだなによりだ。
好きなモノの価値を共有できることっていいだな。

「俺の好みのオムライスは……」

オムライス談義で盛り上がりながら、俺達はいい雰囲気度過ごすことができた。

年下とか言ってるわりには俺も梨紅ちゃんの事は気に入っている。俺みたいな奴に素直に慕ってくれるのは嬉しい事だ。

……はて、それより何か忘れてる気がするのだが気のせいだろうか、うん、気のせいだな。

適当にデートを楽しんだあと、梨紅ちゃんを家にまで送り届けてきた。

荷物持ちとしては責任を最後まで果たしてきたぞ。

俺も家に帰ると美鶴姉ちゃんのリビングでテレビを見ていた。

「あら、おかえりなさい。どうだったの？」

「ん。なかなか楽しかったけど」

「はい？……参考書選ぶのが楽しいわけ？」

姉ちゃんに指摘されて俺は重大なミスに気づく。

何か忘れていたと思っていたんだ、そう俺は梨紅ちゃんと何をしに行く予定だったのか。

「——あつ、しまった。参考書買ってくるの忘れてた！？」

普通にデートしてたせいで参考書なんて微塵も忘れてたぜ。

だって、梨紅ちゃんも全然関係ない所に連れていくし。

最初から最後までホントのデート以外の何ものでもない。

そんな俺に姉ちゃんは呆れた顔をして言うのだ。

「アンタはバカでしょ？参考書買いに行かずに何してきたの？」

「何って……デート？」

美少女中学生とデートですが何か？

……ダメじゃん、俺。

まさか、これって梨紅ちゃんの畏だったりするののか？

「別にアンタがロリコン的な性癖を持つ変態でもかまわないけど、家庭教師の仕事に関係して、私にまで影響があったらフルボッコですまないからね？それだけは覚悟しておいて」

「それは怖いので自重します。これからは気をつけますからやめてください」

俺は姉の教育的指導にビクビクと怯えながら、参考書買いに再び駅ビルに出かける。

やれやれ、流されやすい俺の性格、どーにかしないとなあ。

でも、梨紅ちゃんとのデートはそれなりに楽しめたのは事実なんだ。

第5章：一目惚れって信じる？

【SIDE：桐原梨紅】

ねえ、一目惚れって信じる？

私、桐原梨紅は信じている。

そういうモノがあるんだと実感しているから。

一目見た時から“この人”だって思ったの。

私、梨紅はこれまでいくつかの恋愛をしてきた。

恋人として付き合うまではいかなかったけど、恋をしてきたのは全部年上の人。

同年代は子供過ぎてつまらない。

よく告白されたりするけど、同年と言う時点でまず拒否する。

年上にも子供っぽい人間はいるけど、私の好みの絶対的条件は年上。

だって、好きなように甘えられるじゃない。

私は他人に甘えるのが好きだ。

好きなようにさせてくれる、そういう相手を常に求めている。

そして、私は自分が好きになれる相手に出会えた。

親が勝手に家庭教師の話を進めた時にはムカついていた。

私も成績が数学は致命的だったから仕方ない。

けれど、本人が嫌がってる事をさせるのは正直どうなのよ。

嫌がらせでもして相手をやめさせてやろうか。

そんな卑屈な事さえ考えていた私の考えは彼にあった瞬間に変わった。

「初めまして、梨紅ちゃん」

身長は180センチを超えているくらいの長身。

茶髪のイケメンが優しげな表情を私に向けている。

日野大河、それが私の家庭教師の男の名前だった。

大学生である彼は私の好みである年上であると同時に、見惚れるくらいの整った顔立ちでカッコいい人だった。

でも、それだけじゃないの。

彼には私を惹きつけるモノを持っていた。

今まで何人もの年上の男を好きになって来た（片思いばかり）。

好きになる事はあっても、告白とか恋人になりたいかと思う事は実はあんまりなくて、ある程度親しくなったら興味が薄れてお終いと言う恋ばかり……。

そんな私が出会った男の中でも特別に思える相手。

本気で彼を私の恋人にしたいって思えた。

彼の事を知れば知るほど、惹かれていく自分。

私が好きな大河先生はヘタレっぽい。

容姿はかなりいいけど、中身がヘタレ属性ありと気づいたのは冬休みの後半で一緒に出かけた時だった。

私がちよつと触っただけでも反応が可愛い。

なんていうんだろう、とても遊びがいのある人だ。

彼には恋人がいた経験があるというけど私的には嘘だと思う。

だって明らかに女の子慣れしていないもの。

見え見えの嘘、それは反応を見ているだけで分かる気がする。

恋人はおるか女性経験もないに違いない。

そこがたまらなく可愛くて仕方がない。

過剰反応、見栄っ張り、それは今までの私が年上男子に求めているモノと少し違う。

私が年上にこだわっていたのは落着いた感や頼りがいがあるなどの精神的なものだ。

だから、こんな気持ちになれたのは私自身も驚いてる。

本気で人を好きになるとこういう風になるんだ。

理想は所詮、理想でしかない。

本当に人を好きになるとそんなことごとくでもよくなってしまう。
自分が彼にハマっていくのはいいけれど、先生は私に興味をあまり持ってくれない。

残念ながら彼には年下属性はないらしい。

私に迫らせて動揺するものの、つられたりはしないんだ。

すぐに私を子供扱いするから、絶対に振り向かせたくない。

大河先生に振り向いてもらえるようにするにはどうすればいいんだろう？

「先生、私に興味をもってくれない？」

家庭教師をしている最中に私は思い切ってストレートにそう告げた。

「……はい？」

啞然とした表情を見せる彼は何ともいえずにいる。

私は小テストの問題のプリントを手渡して「採点よろしく」と言葉が続ける。

週2回の家庭教師の時間は勉強は嫌いだけど、先生と一緒にいられるのでこの時間は好きだ。

「さて、問題の方は……うむ、9割は埋まってるようだ。ここからどうなるかな」

「無視しないでよ。採点しながらでいいから聞いて、先生」

「俺は今、ものすごく忙しいから無理。大人しくしておきなさい」

先生の反応が冷たい、妙に私の扱いに慣れてきたというか。
答え合わせをする彼に私はへこたれずに話しかける。

「私、先生のこと、かなり気に入ってるの。いえ、好きだと言ってもいいわ」

「それは光栄だ。はい、これ間違い。次は公式ミスで間違い。さらに……はあ、まだまだダメか」

「嘘っ！？そんなに間違えてるの？」

数学問題は公式がどうのこうのと難しいから嫌いだ。

「って、話をそらさないでよ。こう見えて、結構真剣なんだけど？」

「こちららも家庭教師と言うお仕事 중이다。梨紅ちゃん、その辺を考えてくれ」

「別に週に2時間、遊び放題でも私はいいのに」

「お母さんの紗代さんがその台詞を聞いたなら嘆くからやめてくれ。ただでさえ、娘を心配してくれるいいお母さんなのに。次の3学期のテストである程度成績をあげてくれないと俺のクビにも関わらないからな」

それは普通に困るので頑張ろう、ママは敵に回すと厄介なの。
ママもこの私が家庭教師をつけたくらいで簡単に成績が上がるなんて考えていないはずけどね。

「結果をすぐに求めちゃいけないと私は思うの」

「それは結果が出る可能性があつての話だよ。勉強しないで成績UPするなら家庭教師なんていらないわけで……。あつ、何か凹んでる？」

「別に。拗ねてるだけ。先生って真面目だнатて」

「話があるなら、終わってから聞くから。採点終了、結果は……宿題追加だな」

「ふええーん」

小テストは100点中35点でした、まだまだ頑張らないとダメらしい。

というわけで、家庭教師が終わってから本題に入ることにする。

家庭教師の後は少しだけ先生は雑談に付き合ってくれるの。

普段は携帯電話使ったりして連絡取るけど、彼も他のアルバイトがあるらしくて忙しいせいかあんまりちゃんとお話できない。

だから、ゆつくりと個人的な話ができるこの時間が私は好き。

「明日で冬休みも終わりだね。大学も冬休みは終わり？」

「ああ。でも、春休みは長いらしい。大学ってのは学校にもよるが大抵、1年のうち4ヶ月程度は何もないからな。うちの大学だと夏休みと春休みは2ヶ月ずつあるそうだ。春休みは旅行にでもいくかな」

大学は高校とは全然違うんだよね。

私にはまだ高校も遠い話なので実感はゼロだけど。

「お休みたくさんって何だか羨ましいような話ね」

「それだけ休みがあっても暇な気もするが。俺も夏休みはアルバイトで金稼ぎしてただけだったから。実家にも帰らないし」

「先生って確か実家は地方に住んでいるんだっけ？」

「そうだ。電車は都会と違って30分に1本とかだぜ。乗り過ぎしたら終わりだ。市街も寂れてるから、不便で仕方ない。それに比べて都会は最高だな。都会になれたネズミは田舎のネズミには戻れないキモチが良く分かる」

それ、何かの童話の話だっけ？

私は生まれも育ちも都会の方なのでいまいち想像もできない。

「でも、先生って有名大学に通ってるから地元でも優秀だったんじゃないの？」

「一応、進学校だから。俺と同じ高校から入学した生徒は何人かい
るし、特別優秀だったわけじゃない。それなりに努力はしたけどな
梨紅ちゃんも将来のために勉強しなさい、というわけだ」

私の将来の夢は獣医さんだったりする。

家で飼ってるチワワが病気になった時に獣医のすごさに感動した
の。

私もなりたくなって憧れ程度だけど考えてはいるんだ。

「それはおいといて。本題に入ってもいい？」

「おっと、そろそろ帰る時間だ……おじゃしました」

「待って。約束が違うでしょ、先生！」

いきなり帰ろうとする先生の服をつかむと2人してバランスを崩してしまう。

「おわっ!？」

「きゃうっ!？」

かろうじて先生が耐えてくれたので私は彼に抱きつく形になった。
これはこれでラッキー。

思わぬハプニングで先生の体温を肌で感じる事ができる。

「大丈夫か、梨紅ちゃん……?」

「私は大丈夫だけど?」

「……それはよかった。だったら、離してくれると助かるんだけど?」

何だか照れてる様子の先生。

男の人の身体って体格もよくて女の子とは全然違うんだ。

「大河先生。さっきの質問に答えてよ。私に興味をもってくれない?」

私が先生を意識するように彼にも私と同じ意識をしてほしい。

「あのなあ、梨紅ちゃん。俺と何歳離れていると思うんだ？」

「たつた5歳程度じゃない。自分でいうのもアレだけど、美人だと自負してる。将来は絶対に魅力溢れる女になると思うの」

「それならその将来に期待するということだ」

彼は私を引き離すと頭を撫でるようにして触れる。

「年上好きつてのはいいけどさ。梨紅ちゃんも自分に合った相手を探しなさい」

完全に私の事は眼中になし。

ここまで興味なしと態度に出されると私もムツとする。

「そういう事言っただ、大河先生？」

絶対に私を意識させたくて、その頬に軽くキスをする。
少し背伸びをしてから頬に触れる唇。

「り、梨紅ちゃん！？」

「大河先生は私を怒らせたの。意地でも私のものにしてあげる」

頬を押さえて硬直状態の彼に私は言い放つ。

簡単に手に入るモノに価値もなければ興味もない。

相手がこちらに興味ないというのならば振り向かせて興味を持たせる。

逆にそっちの方が燃えてくる性質なの、見てなさいよ、大河先生。

私の本氣ってやつを先生に見せてあげるわ。

第6章：先生の嘘つき！

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生が私にとって大事な男の人になりつつある。
彼を知れば知るほど心を占める割合が増加中。
本当に恋ってすれば楽しいものよね。

「——俺、桐原さんのことが好きだ」

「——私は貴方の事は興味ないわ」

クラスメイトに呼び出されて告白されるのも私にとっては珍しい事ではない。

放課後の校舎、最後まで教室に残るように言われてわざわざ待つあげた。

告白という行為に対する勇氣は理解できる。

だから、告白の言葉だけは聞いてあげる、ラブレターなら最後まで読んであげる。

それが告白を受ける側の最低限の礼儀だ。

けれども、どんな告白をされても、受けてあげるはずがない。

私は同級生には微塵も興味がないのだから。

「ま、待つてくれ。他に好きな人がいるとか？」

諦めきれないのか彼は私に尋ねて来る。

外見もいいし、評判もいい彼はクラスではそれなりの人気の男子。
これで私が年上好きじゃなければ恋人になってあげてもいい相手。

「ええ。好きな人がいるの。大好きな人がね」

私は大河先生に惚れている、この想いが揺らぐ事はない。

「私の心は彼だけに向けられているの」

だって、他の誰と話しても気持ちは高揚しない。

あのドキドキと心臓が鼓動する感覚を得られるのは大河先生だけだもの。

家に帰るとママが何やら忙しそうに出かける準備をしていた。

「おかえりなさい、梨紅」

「ただいま。……何しているの？これから出かけるの？」

「何言ってるのよ。昨日言っただでしょ、今日は私とパパの結婚記念日だからお出かけしてくるって。聞いていなかったの？」

そんな話をしていたような気もするけど、はつきりと覚えていない。

昨夜は勉強に関する説教もされていたので聞いてなかった。

「と言う事は、私の晩御飯は？」

「それも昨日、それなら適当に私が自分で作るって言ってたでしょ」

「……言つたつけ？」

ママは呆れた顔をして、「私の話を聞いてなかったのね」と嘆いていた。

私はこう見えても料理は得意なので、暇な時は自分で作る事も多い。

「お金はテーブルの上に置いてあるから適当に食べておいて。今日は遅くなるから」

「別に帰ってこなくてもいいけど？」

「そう言ってくれるのならお言葉に甘えるわ」

そこをにこやかに笑みを浮かべて言われると子供として照れるんですけど。

まあ、深く気にしないでおこう。

大人には大人の事情があるんだよ、きつとね。

「そう言えば、昨日、大河先生を見たわよ」

「……ん？それがどうしたの？」

同じ街に住んでいるのだから会う事くらいあるはず。

「隣に綺麗な女性を連れていたわ。恋人かしらね？仲よさそうにしていたもの」

「あははっ、何その冗談……ありえないでしょ」

顔は笑顔で、心はちよつと焦り気味。

だ、誰、誰と一緒にだったの！？

それ以上はママも情報は持っていなかったので分からずじまい。
同じ大学の人とか、バイト先の知り合いだとその程度だと信じた
い。

大丈夫、あの女つ気のない大河先生だもの。

でも、出会いがないだけで顔もいいし、氣にいる女性がい
ないわ。

私の中を不安と言う言葉がグルグルと渦巻いていた。

「それじゃ行ってくるわ。戸締りだけはしっかりと
おきなさい」

ママが出かけていく後ろ姿を見て私は軽くため息をつく。

「ホント、うちの両親って仲がいいわよね」

何かと月に一度は記念日だとふたりでお出かけしている
のでいつもの事だ。

そう言う関係って羨ましいとさえ感じる。

「……私も将来はそんな相手と出会えればいいな」

なんて思ったり、まだまだ先の事だけどね。

記念日とかを大事にしてくれる彼氏を作りたい。

大河先生は優しいそうだけど、ちよつと鈍い感じだから大丈夫かな？

「と、いつまでもここにいてもしょうがないし……」

私もスーパーへ食材を買いに行くことにする。
基本的に外食よりも自炊するタイプなんだ。

料理も好きだから、こうして堂々とできるのは楽しい。
その後、思わぬショックな光景を目撃する事になるなんて…
…。

近所のスーパーではいつものように買い物カゴを片手に食材選び。
今日はお肉が安い日なので、お肉メインの料理にしよう。

「肉じゃが、シチュー、カレー……何にしようかな」

まだ肌寒い1月なので、お鍋でもいいけどひとり分を作るには面倒だ。

メニューに悩んでいたその時だった。
目の前を男の人が通り過ぎていく。

「……え？」

見慣れた後ろ姿に私は思わず声をあげる。
そこにいたのは大河先生だった。
片手にお肉のパックを持って歩いている。

こんな場所で会うのは偶然だと思って声をかけようとする。

「大河せん……せえ——？」

けれど、私は声をかけられなかった。
私の視線の先には先生と初めて見る女の人がいたから。

「なあ？たまには肉もいいだろ？いや、お肉にするべきだと神のお

告げだ」

「意味不明だし。鶏肉ならいいけど、牛肉はダメ。高カロリーはダイエットの敵よ」

「いいじゃないか、魚メインも飽きたんだよ。俺もまでヘルシーメニューに巻き込まないでくれ」

「文句があるなら自分で作りなさい」

大河先生が文句を言ってる相手は大人っぽくてスタイルもいい年上の美人だ。

あの彼と一緒に長髪美人がお買い物ものってどうということなの？
ママが言っていた事を思い出して余計に混乱する。

そうよ、これは同じ大学の何でもない人と買い物しているだけに
違いない。

「そりゃ、俺も料理を作ってもらえる事には感謝するけど」

「大河は昔から好き嫌いが多いからね。私だって考えてあげてるのよ」

「そう言いながら苦手のエビを取ろうとするな。俺はエビアレルギーなんだ」

「ただエビ嫌いだけでアンタにエビアレルギーはない。見え透いた嘘をつくな」

「エビをなめるなよ！？エビの尻尾はあの黒い悪魔のゴ●ブリの羽根とほぼ同じ成分なんだからな！エビ怖い、エビ嫌い……まさに人

類の敵だ、あれは宇宙からの侵略者なんだよ」

何だろう、そのやり取りの自然さに私は自分でもかなりショックを受けている。

あの女慣れしてなさすぎる先生が自然に話をする事ができるなんて。

「バカな大河は放っておいて。今日はシーフードカレーにしましょう。魚介類たっぷりのね」

「断固拒否する。肉たっぷりのビーフカレーを要求する。肉、俺に肉を食わせてくれ」

「はあ、アンタは子供か。分かったわよ、たまにはアンタの好きなモノにするわ」

まるで新婚夫婦のように楽しそうに（？）会話しながら会話するふたり。

これってもしかして、もしかしなくても……。

「……大河先生の彼女？」

湧きあがる疑問に私は彼らを遠目に見ているだけしかできない。

先生の嘘つき！

付き合ってる恋人はいないっていったくせに、どういうことなの！？

第7章：貴方は誰？先生の何？

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生が見知らぬ女性と一緒にいる所を発見！？
私はショックで動揺しまくっていたの。

「せ、先生……？」

恐る恐る声をかけると先生は私に気づく。

「あつ、梨紅ちゃんか。スーパーで会うなんて珍しいね。お使いかな？」

私から言わせてもらえば先生がここにいることこそ、確率が低いと思う。

独り暮らしをしているんじゃないの？

「私はママ達が出かけるから夕食の材料を買いに来たの」

「買い物？梨紅ちゃんって料理できるんだ？」

「それくらいは当然よ。自分で料理するのもよくあることなの。それよりも、大河先生は？」

「俺も買い物付き添いだな」

付き添い！？

「いつも買い物とか任せっきりにするのも悪いかなって」

任せっきり！？

それが意図すること……つまりは同棲！？

なんて安直な事を考えてはいけない。

あのヘタレな大河先生が同棲なんてしてるわけないじゃない。

ここは落ち着いて冷静にならなくちゃ……。

私は混乱気味になりつつも、先生の隣に立つ女性に目を向ける。

身長も高くてモデル体型、スタイル抜群な美人のこのお姉さんは誰？

彼女は私の視線に気づくとにこつと笑顔を見せる。

「楽しそうね、大河。彼女は誰なの？」

「俺が家庭教師をしている桐原梨紅ちゃん。中学生の子なんだ」

「へえ、彼女が……。初めまして。話は大河から聞いているわ。私は美鶴よ」

ふーん、美鶴さんっていうんだ。

名前まで美人っぽいじゃない。

……ていうか、大河って呼び捨てですか？

つまりは深い仲だったりするんですか？

「大河、悪いんだけどこのメモの通りに材料をそろえておいて？」

「は？何で俺が？」

「少し彼女とお話がしたいの。男の子でしょ、文句言わずに行ってください」

「そこに男がどう関係するのが分からないな。って、カゴにエビが入ってるし！？こいつを急いで戻してこねば……梨紅ちゃん、悪い。少し待っていて」

美鶴さんに言われて渋々彼はカゴとメモを片手に持ちながら行ってしまう。

先生、既に立場関係がダメじゃん。

尻に敷かれている、もとい、立場関係では美鶴さんの方が上と見た。

「さて、余計なものもいなくなっただし。梨紅さんとは一度話して見たかったのよ」

「……はあ。別にいいですけど」

私としては先生の特別な相手っぽいこの人の正体を知りたいのでかまわない。

「大河が最近、妙に浮かれた感じなのよね。それって、やっぱり梨紅さんが絡んでいるとみていいのかしら？」

いきなり私の男に手を出すなよ、的な発言で牽制してくる。

ここでひるむわけにもいかずに私は対抗する。

「私達は家庭教師と生徒の関係です」

「……この間、デートしたって話は？」

「あれは参考書を買に行っただけです」

先生を連れて遊びに出かけた時の話だろう。

私は最初から参考書なんて買うつもりもなく、先生の事を知りたかっただけなんだ。

そうだ、あの時、確か先生のお友達が誰かの名前を言ってたような気がする。

「もしかして、沢崎さんですか？」

そう、沢崎とかいう美人のお姉さんと大河先生は合コンで知り合っている。

美人というキーワードもついでに思い出したのでほぼ確信だ。私が尋ねると彼女は何やら考える仕草をして、

「なるほど。そう言う事ね。ふーん。あの子も結構やるじゃない」

と、ひとりで納得した様子をみせる。

彼女は軽く腕を組みながら私に余裕の微笑を見せつける。

「そうよ。私は“沢崎千鶴”と言うの。私の大河が最近、やけに年下の女の子に興味があるみたいで気になっていたのよね。どこの女の子と思ってたの。貴方だったのね」

「わ、私の大河って……先生とはどういう関係なんですか？」

「どういう関係だと思う？貴方の想像通りの関係よ」

やっぱり、この人が先生の恋人！？

大河先生の嘘つきっ！

ヘタレのくせにこの私に嘘をつくなんて！

「……で、だとしたらどうする？」

「え？どうするって？」

「梨紅さんは私に何か言いたい事でもあるの？それとも私と彼の関係に不満でもある？顔にそう書いてあるわ」

思いつきり不満ですが何か？

だって、先生の事を好きなのは私くらいだって思ってたんだもの。それがいきなり恋人がいましたって聞かされたら誰だって怒るわよ。

本人は恋人は今はいないと言ってた。

あの反応からして本当だと信じていたのに騙されていたの。

「可愛いねえ。もしかして、妬いてたりする？」

「——や、妬いてなんかいません」

ちよつと声を大きくしすぎたせいで何事かと周囲の視線を集めることに。

うう、恥ずかしいわ。

あーっ、早く戻ってきてよ、先生。

気まずいってば、この人といえるの、ものすごく気まずいんだって。ここで、「はい。さよなら」が言える人間ではない自分が悔しい。逃げたくなる気持ちを抑え込みながら私は美鶴さんから精神攻撃を加えられる。

「……梨紅さんは大河の事が好きなんだ？」

「ぐっ！？別に。好きとかじゃありませんからっ」

「そうなんだ。それなら安心したわ」

どういう意味の安心？

先生に騙されていた私は内心は怒りまくってる状態。

大河先生めっ、私の純情を弄んだ事は絶対に許さない。

彼女がいるならいるって言えばいいじゃない。

そりゃ、いるかもしれないと疑った事はあるけど。

ヘタレ先生のバカッ！！

「それなら別に私と大河がどんな関係でもいいわよね。私達、同棲しているのよ」

「ど、同棲……同棲というのは、つまり、その、えっと……」

「同じ部屋で毎日寝食を共にしているという意味ね」

ガーンっ、もうダメ……。

その一言は私に止めを刺すのに十分なダメージを与えた。

がっくりとうなだれる私に美鶴さんは追い打ちをかけてくる。

「あははっ。ショック受けてる？梨紅さん、見た目は大人びているけど中身は子供のようね。年相応で本当に可愛らしい」

手強いよ、この人。

この私が言い返すこともできないなんて。

「お待たせ、ふたりとも。メモに書いてあった食材はいれてきたぞ。あと、エビは宇宙の彼方に置いてきた。もうエビはみたくもない。」

ていうか、アレはバル・ン星人だと思うんだ」

「何をわけのわからないことを？ありがとう、大河。カゴは私が持つわ。」

「ん？何で？いつもなら持たせつばなしのくせに」

ああ、空気読んでくれているんだ、美鶴さん。

私がここまで不機嫌なのは貴方が原因だっていうのに。
でも、これで遠慮なくやれる。

「——大河先生の浮気者っ！！」

「——ぐはっ！？」

私は思いつきり先生の腹部にパンチする。

と言つても、元々、そんなに力の強い方じゃないので威力はない。
先生はお腹を押さえながら「い、いきなり何をするんだ」ともだえる。

「先生、美鶴さんと付き合ってたんだ。ひどいよ、私の気持ち知ってるくせに。私の事を弄んでいたのね。最低っ！！」

「……は、はい？意味が分からん。俺が何で姉ちゃんと付き合わないといけないんだ？」

「何を言い訳するつての。……姉ちゃん？」

「そつだよ。これは俺の実姉であって恋人などという甘ったるい類の人ではないぞ」

「う、嘘だ。だって沢崎美鶴さんって言うんでしょ？沢崎さんって先生の合コンで気に入ってた巨乳美女じゃない。つまらない嘘で誤魔化す気？！騙されないからね、乙女の純情を弄んだ罪は重いわよ」

私はそんな手には乗らないからね。

大河先生は美鶴さんの顔を見てため息をつく。

「美鶴姉ちゃん、やりやがったな。いいかい、梨紅ちゃん。彼女は沢崎さんじゃない。この人、日野美鶴って名前だ」

「……え？」

私が美鶴さんの方を啞然とした顔で見ると抑えきれなくなったのか、大笑いする彼女。

「ふふつ、あははつ。ごめんねえ、梨紅さん。貴方があまりにも可愛いからついからかいたくなって。私は大河の姉で、恋人ではないから安心して。同棲ではなく、同居をしているから一緒に部屋に住んでいるのは事実だけだ」

だ、騙された！？

私は美鶴さんにかかわれていたんだとようやく理解する。

「梨紅ちゃんに何を吹き込んだ、姉ちゃん」

「基本的に嘘は言っていないわ。沢崎って子が私だと言う嘘はついたけども。それから、勝手にいろいろと誤解したのは彼女よ」

思い返してみると、彼女は名前を沢崎と名乗った以外の嘘はつい

てない。

勝手に恋人だと勘違いしたのは私だもの……めっちゃ悔しいっ
！！

でも、逆にホッとしたのも事実なんだ。

先生には付き合ってる彼女がいないってこと。

私にもまだチャンスは残されているってことだもの。

「梨紅さんをからかってごめんね。うちの弟が興味ある子がどんな
子か知りたくて。そうだ、梨紅さんもひとりで夕食なのよね。それ
じゃ、これからうちで晩御飯と一緒に食べましょう。いいでしょう、
もう少し話がしたいもの。ね？」

私は話をしたくないけど、断れる状況でもなさそうだ。

静かにうなずいた私は彼女から隠れるように、大河先生の後ろを
歩く。

うう、大河先生のお姉さんか……私にとって苦手な人になりそう
だ。

第8章：悪魔VS小悪魔

【SIDE：桐原梨紅】

私の敵はここにいた。

彼女の名前は日野美鶴。

私の好きな大河先生のお姉さんだ。

この私をからかって楽しむ姿はまさに悪魔そのもの。

どうにかひと泡吹かせてやりたい気持ちがあるけど、無理そうだと諦めた。

この人に逆らうとひどい目にあわされそう。

彼女に危機感を抱きながら私は彼らの家にたどり着く。

私の家からそれほど離れていない位置にあるマンションだ。

2LDK……ふたりで住むには良い広さね。

ここで先生と美鶴さんはふたり暮らししているらしい。

話に聞けば去年までは別のマンションで独り暮らししていた美鶴さんが、先生がこちらに来たので同居する形でふたり暮らしし始めたらしい。

私に姉妹はいないのでよく分からないけど、大抵、そのぐらいの年だと自由を求めて独り暮らしをするはずでしょう？

わざわざ同じ場所で住む程、仲がいいってことなのかしら。

「梨紅ちゃんはその辺に座っていていいわ。大河、たまには手伝いしなさい」

「うげっ。俺は嫌だぞ、包丁つてのは嫌いなんだ」

「グダグダ言わずに手伝いなさい」

文句を言う先生を黙らせて、キッチンで材料を袋から取り出す美鶴さん。

私は彼女の本質を見極めたくて自分からある提案をする。

「あの、私が手伝いましょうか？こう見えても料理は得意なので」

「そう？悪いわね。それじゃ、大河は邪魔だから向こうにいきなさい」

「……俺の扱い悪すぎじゃない？」

今度は軽くへこんで大河先生はリビングへと去っていく。

うーん、実弟にも容赦がないっていうの。

その態度がいつもだとしたら、大河先生のヘタレっぷりは彼女の影響のせいかも。

今日の夕食はビーフカレー。

私はジャガイモの皮をむきながら美鶴さんに話しかける。

「大河先生とはいつもこんな感じなんですか？」

「そうね。昔からこういう立場関係よ。私には逆らわせない。これが基本ね」

……どこの姉弟の基本なんだろう。

私の考えが読めたのか苦笑しながら彼女は言うんだ。

「言うておくけど、ウザいとか思ってはいないわよ。ああ見えても、私なりに弟の事は大切にしているつもりだから」

「……へえ、そうなんですか」

全然、そうは見えないのは目の錯覚じゃないわ。
どう見ても普通の姉弟の扱いではない。

「梨紅さんは兄弟はいるの？」

「いえ、一人っ子です。姉か妹くらいは欲しかったんですけどね」

姉妹を羨ましいと思う気持ちが私にはある。

「私には妹もいるけど、妹って可愛いものよ。姉を慕ってくれる良い子ならね」

「……本当にうちの妹は姉に似ず、いい子だよな。癒しキャラだぞ」

いつの間にか背後に戻ってきていた先生が深い溜息と共に言う。
明らかな美鶴さんへの挑発、静かな声で威圧しながら彼女は告げる。

「大河、何か言ったかしら？この世界から消えたい？」

「な、何でもないっす。ただの偵察なんでさっさと戻ります」

慌てて逃げるようにリビングへ戻る先生。

いつもこういう日常なら楽しいというか大変そうだ。

「ホント、大河って生意気な弟よ。梨紅さんも大変でしょう？」

「私にとってはいい先生だと思いますよ」

私が一方的に一目ぼれしているのもあるけど、先生としてはいい人だと思う。

遊ぶ時は遊ぶけど、基本的には真面目なもの。

先生のおかげで苦手な数学も理解し始めてきた。

私はジャガイモの皮をむき終わると、カレーを美鶴さんに任せてサラダ作りに入る。

今日のサラダはカレーによく合うヨーグルトサラダ。

乳製品とカレーの相性はいいし、カレーの辛味をヨーグルトが消してくれる。

私はキュウリとレタスに塩を振りかけて軽く水分をとばす。

あとは包丁で切り刻みながら、ヨーグルトと合わせて混ぜていく。最後にマヨネーズを少量を加えれば完成。

「手際がいいわね。梨紅さんってお料理上手なんだ」

「好きなんですよ、料理するのは……。美鶴さんも料理するんですか？」

「……まあね。うちって、両親が忙しかったから小さい頃からしていたもの」

私よりも断然、料理の腕前がいい美鶴さんは仕上げにカレールーをいれてから、カレーの鍋をかき混ぜている。

「大河と暮らしているけど、一緒に食事するのは土日くらいなのよ。私も彼も互いにバイトがあったりして時間ないから」

「美鶴さんのバイトって……？」

「私も家庭教師。というか、私の方が先にしていて、彼を紹介した

ってわけ」

……となると、彼女がいなければ私と先生は出会った事もなかった。むむつ、何やら彼女に恩義みたいなものを感じてしまう。

スーパードの仕返しをしたいんだけど、話して見ると普通にいい人なので困る。

「梨紅さんは大河が好きなのよね？」

「……なっ!？」

褒めた途端にいきなりストレートボールを放り投げて来る。

「あら、違った？ 弟を見る目がやけに可愛らしいからそうだと思うんだけど」

だから、私をからかったのだと美鶴さんは言う。

「まあ、好きなら好きで良いと思うのよ。ただ、あの子趣味と違ってから……」

「先生の趣味って？」

「完全な年上趣味ね。何の影響か知らないけど、好きになる女って基本的にお姉さん系と言うか……結局、胸の大きい子が好きってことかしら」

ふーん、ホントに巨乳趣味なんだ、先生……。

自分にはないものなのでもすごく悔しいです。

まだ成長途中だもの、これからきつと大きくなるからいい。

私は内心、拗ねながら先輩の元カノについて尋ねる。

「大河に交際相手……？」

「そうです。いたんですよ？」

「交際相手……交際相手……」

何やら考え込んでしまう美鶴さん。

ほら、やっぱり嘘だったんだ。

見え透いてた嘘で、分かっていたけど。

大河先生がついた恋人がいたなんて嘘は……。

「あの子かしら？私も一度くらいしか見た事はなかったんだけど」

「先生に恋人がいるはずないって……え？」

「確か、大学の友達か誰かでものすごく可愛い子と一時期、仲が良かった子がいたのよ。その子と付き合っていたのかもしれないわ。趣味の年上そうには見えなかったから、恋人じゃないと思ってたけど、言われてみれば仲良かったのはあの子くらいなもの。そっか、大河はあの子と付き合っていたのね」

大河先生ってホントに恋人がいたっていうの？

嫌だ、それはものすごく嫌だ。

「まあ、半年も前の事だし貴方が気にすることじゃ……梨紅さん？」

「な、何でもないです。大丈夫です」

ガツクリと落ち込みながら私は肩を落としていた。

先生にそんな人、いないって信じていたのに。

あのヘタレっぷりに女の子がいるはずないって、嘘だっと思ってたのに。

「大河に聞いて見れば？きつと、教えてくれるはずだから」

微笑しながら言う美鶴さん、私にとっては笑い話ではない。

夕食は3人でカレーを食べながら他愛ない話で盛り上がる。

料理上手の美鶴さん特製カレーは程良い辛さで美味しかった。

いつもと違う食事風景、こういうのもいいなあって思ったりする。美鶴さんは結構いい人らしくて、「私は梨紅さんの味方よ」とメアドを交換し合う。

先生が好きだっていうのはバレてるらしくて、もう認めることにした。

「そう言う事なら私も貴方に協力するわ」

彼女が協力的になってくれたおかげで、私としては先生攻略がしやすくなる。

食後は大河先生が後片付けをしている間、私達はこっそりと先生の部屋に入る。

過去の恋人に関する物的証拠を探すためだ。

「勝手に先生の部屋に入ってもいいんですか？」

「別に大層なものはないわよ。あつてエロい本とかDVDくらいなもの」

それはそれで見つけたくない。

男の子ってホントにベッドの下に隠しているものなの？

私はこっそりとのぞいてみるけど、何も無い。

「……さあて、確かこの辺にアルバムの類をおいていたような」

美鶴さんが本棚付近を調べているので私は机付近を搜索。

「あう……」

そして、机の上に怪しい雑誌を見つけて赤面する私。

だ、ダメなんだから、こんなモノばかり読んでちゃ……ちっ、やっぱり巨乳が。

私はそれを不満気に放り投げて視線をそらす。

いつか覚えてなさいよ、先生。

すると、何かを見つけたらしい美鶴さんが「あつたわよ」と言う。彼女が取り出したのは手帳のようなもの、中には一枚の写真が入ってた。

「……お、女の子？」

めっちゃくちゃ可愛い女の子に大河先生が抱きつかれて照れ笑いを浮かべている。

甘えるようなしぐさの彼女、間違いない。

今度こそ、本当の先生の恋人だ、元力ノだと思っけど……本当にいた。

美鶴さんは「確かこの子ねえ。名前までは分からないわ」と認め

た。

「その写真、あとで大河に見せつけて尋ねてみればいいわ」

「でも、勝手に持っていくのは悪いんじゃない……」

「いいわよ、それくらい。あとで返せばいいんだから」

と、言っ て私に手渡してくれる。

それを受け取りながら私はよく写真に写る彼女を眺める。
穏やかで可愛い美少女、これが先生の元力ノさんなんだ。

「……さて、大河が気づく前に部屋を撤退しましょう」

私はその写真を持ちながら部屋を去ることにする。
その写真が思わぬ騒動を巻き起こすなんて……。

第9章：先生の元恋人？

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生は19歳で私は14歳…… たった5歳の違いが大きい。
うっん、歳の差だけじゃない、私達がもっと早く出会えてたらっ
て思うの。

「……これは、リアルに凹むわ」

その写真に写る先生に抱きつく女の子。

以前、先生が元カノだって言ってた年上の気の強い女性には見えないけど、この親密さは恋人以外の何者でもない。

きっと、何らかの関係がある人間には間違いない。

私は美鶴さんから受け取った写真をバッグにいれて、帰る準備をする。

しばらくは雑談していたけれど、夜も遅くなってきたので帰るところにした。

夜道は危ないと言う事で先生と一緒に家までついてくれるらしい。最近はお漢や変質者とか普通にこの街でもいるようなので安心だ。

「準備はできた、梨紅ちゃん……？」

「うん。それじゃ、行きましょう」

冬の夜空はかなり寒い、まだ1月の中旬、寒さのピークはこれからだ。

私はダウンコートを羽織りながら先生の後ろを歩く。

「うう、寒いっつ。冬なんて無くなつてしまえばいいのよ」

「それは北国よ、消えてしまえという意味で？」

「そこまでは言わないけど。温かい場所で暮らしたいと思うわ。先生の実家のある県って南の方だっけ？」

「一応は温かい地方だけど。場所によるけどな。山奥の雪降る場所は雪が降るし、海側だと黒潮で比較的温かい地方もある。俺が住んでるのは海側でそれほど寒くはないからこっちの寒さには辛いものがある」

「……そうなんだ。私って寒いのは大の苦手なの」

早く帰りたいけど、先生と一緒にいる時間が少なくなるのは嫌だ。それに私には最重要任務があるの。

このバッグの中に押収してある証拠写真を突き付けて白状させなくてはいけない。

先生の元カノ、その正体をはかせてあげるわ。

普通に話を聞かされて凹む可能性もあるので、状況によっては延期しよう。

「それにしても、美鶴さんってすごい人ね」

私にとっては衝撃的な出会い、最初から最後まで翻弄されたもの。

「あらゆる意味で逆らってはいけない人だ。俺の実姉ながら危険な人だから、梨紅ちゃんもあんまり信じちゃいけないよ」

「そう？ 私にはいい人に見えたわよ」

「それが姉ちゃんの罠なんだ。あれは絶対に何か企んでいるに違いない。間違いない」

先生の態度から察するに、よほど美鶴さんには痛い目を見せられ続けてきたんだ。

でも、美鶴さんは私には結構いい人にも見えたのは事実。そりゃ、恋人だって騙された事はムツとしたけど、それ以外は先生の事にも協力してくれていたし、現にこうして写真まで探してくれた。

話をしているだけでいつのまにか家までついてしまう。そんなに離れた場所じゃないので、仕方がない。

「それじゃ、俺は帰るよ。また次の家庭教師の日にね」

「ま、待って。そうだ、先生。お茶でも飲んでいかない？」

「でも、もうこんな時間だから」

時計を見ると10時過ぎ、普通ならこの時間には彼を止めたりしない。

けれど、今日は両親がいなくていう事もあり私は彼を誘う。

「大河先生、お願い。もうちょっとだけ一緒にいてよ？」

「と、言われても……俺もキミを送り届けに来ただけだし」

「——お願い、先生っ。今日は家に誰もいないの。少しでもいいからね？」

「その誘い方は何やら誤解を招くんだが……まあ、そう言うなら」

押しに弱い先生だから、ちょっと甘えたふりしたら断らない。
ふふっ、最近、先生の扱いがちょっとだけ分かって来たの。

基本はヘタレなので自分からどうこうできない分、こちらから積極的に攻めると効果的。

ただし、あまり直接的で行くと警戒されるから、今回みたいに間接的に攻める。

私は先生の手を引いて家の中に誘う。

ママ達は先ほど携帯にメールでお泊りするんだって連絡があつた。
……いい歳になつてもラブラブなんて羨ましいなあ。

「先生はコーヒー？それとも紅茶？」

「コーヒーを頼もうかな」

私はコーヒーメーカーを使いながらコーヒーを入れる。

その間にお茶菓子の準備……クッキーでいいわ。

お皿にクッキーを入れて、淹れたてのコーヒーと一緒にテーブルへと運ぶ。

「そう言えば、紗代さん達はどこに行つたんだ？梨紅ちゃんはお留守番か」

「今日は結婚記念日なんだって」

「へえ、そうなんだ。でも、紗代さんって若いよなあ」

「ママは20歳で私を産んでから……もしかして、ママ狙いだっ
た？」

それは盲点、まさかの展開と言っちゃった。
すると私の問いに彼は首を横に振りながら否定する。

「俺には人妻属性ないから。余計な心配はしなくていい」

「そうよね。先生は私狙いだものね」

「……それより、最近の梨紅ちゃんの成績はどうなんだろうね」

うわっ、人の告白をあっさりスルーしたよ、この人。

何気に失礼だとは思いませんか？

あんまり子供相手だからって調子に乗るな、ヘタレ先生のくせに。
私は内心ムツときたので、例の写真を出すことにする。

ここで問いたださなきゃ、タイミング的にも逃しそうなもの。

「そんな事より、私はもつと気になる事があるんだ」

「気になる事？だから、俺には人妻属性もないって。俺の知り合いに20歳以上歳の差があるのに交際している奴がいるけど、それはないなっと思ってるんだ」

「え？それって女性側の方が年上ってこと？若い燕がどうとやらって感じ？」

「そうだ。しかも、そいつと付き合ってた時は別居寸前の関係だったらしくてな。今じゃ離婚してそいつと交際しているらしいけど。略奪愛というか、いやはや、歳の差ってそこまで行くと自分の人生を考えなきゃいけないから難しいよね」

それはそれで興味深い話ではあるけど、また変な形で話題を変えられた。

歳の差がダメだってさりげなく言ってるつもり？

たかが5歳、されど5歳……どうして私は先生と同年じゃないんだろう。

いつも、子供扱いされてばかりの自分。

もっと対等になりたいと大人びてしまうのは当然の事なの。

「……話をそらさないで、先生。今日、聞きたい事があるの。だから、先生をこの家に誘ったのよ。いいから誤魔化さないで。真実だけを述べて。そうじゃないと家から帰すつもりもないから」

「あの、その言い方って俺がまるで何かしたみたい言い方なんだけど」

「そうよ。先生のことだもの。実はこの写真について知りたいの」

私は例の写真を先生につきだす。

コーヒークップを片手に持つ先生の動きが固まった。

先ほどまでと違い、顔色が悪くこわばっている。

「え、えっと、その写真をどこで入手したんだ？」

「美鶴さんが先生の部屋で見つけたって。可愛い人だね？先生もニヤついてるし、仲いい子なんだって？」

大河先生に甘えて抱きつく女性。

ホントに羨ましい……私もしてみたい。

妬み半分、羨望半分で私は彼にこの写真の真実を問い詰めた。

「正直に言つて、先生。この子が先生の元カノなの？」

「元カノ？え？……まさか、これも姉の罠か。俺の些細な見栄すら潰す気か。あの人ならやりかねん」

「何をボソボソ言ってるの？元カノと違うの？こんなに抱きついた
りしているのに友達とかまだ言い訳する？」

意外に素の反応を見せる先生。

この子は違うのかしら？

「前に言つてた元カノさん。私、先生の事をちゃんと知りたいから
教えて」

「うぐづ。そ、それは、そのですね。この写真に写る女の子は俺の
元カノ……って、姉ちゃんめ、余計な事をしてくれる。ここま
でなのか、ちくしょー。俺はどうすればいいんだよ……」

妙に焦りだす先生の様子がおかしい。

問い詰め続けると彼はついに自白した。

「——ごめんなさい、これは俺の妹です……ぐすっ」

「……いもうと？ええっ!？」

だって、美鶴さんは元カノだって断言したのに？

私は本日、何度目かの驚きにびっくりする。

「俺に妹がいるって言っただろ。そうだよ、この子だよ。めっちゃ
可愛い自慢の妹だ。抱きつかれているのは甘えたがりなだけ。全然、

恋人なんかじゃありません。ぐすつ、泣きたい」

「ということは、また私は美鶴さんに騙されたってということなの？」

あの人、私の味方じゃなくてただ私の反応を楽しんでただけなのっ！？

うえーん、こんなに悩んでいたのにあんまりよ。

やっぱり、悪魔だ……これからは簡単には信じないでおこう。

凹んだ気分を直して、私は先生に尋ねてみる。

「この美少女が先生の妹だって言うのは分かった。それなら、本当の先生の元力ノって誰？いい加減に教えてよ。ものすごく気になるの。態度によつては今後の先生の扱いを考えるわ。嘘はつかずに真実を述べて」

私がググツと詰め寄ると先生は冷や汗をかきながら、ものすごく気まずそうに小声で囁いた。

「……ません」

「聞こえない。もっと大きな声で言って」

「……人生で今まで一度も恋人なんていません。そうだよ、いないんだよ！告白しても合コンしても、ダメだったんだよ。ちくしょーっ。年上と些細な見栄くらい張ってもいいじゃないか……恋人いないとダメなんですか。人生の敗北者ですか」

ガツクリと肩を落としてうなだれて拗ねる先生。

「——年頃の妹に抱きつかれて喜んで……恋人がいるって見栄を

バラされた……」

「おい、先生、大丈夫ですかあ？」

「もしかして、私ってば……大河先生の地雷踏んじやった？」

「そっか、先生って恋人はまだいなかったんだ」

その事実には私はホツとする。

だって、私にとってはものすごく嬉しい事だもの。

「笑いたければ笑え。存分に人生の敗者だと憐れんでくれていい」

「望むべき展開だもの。笑うわけないよ、先生。だって、これで私が先生の初めての恋人になるって事でしよう？」

私は彼に向って微笑むと「いや、まだ恋人じゃないし」と突っ込まれる。

「まだって事はこれからチャンスもあるって事でしょ。前向きに考えてよ、先生」

落ち込んだままの先生と対象的にすっきりと気分が明るくなった私。

好きな人の初めての恋人になれるチャンスが残ってた。

大好きな先生の初めての恋人になるのは、沢崎さんでもなければ妹さんでもない。

この私こそが、絶対に大河先生の恋人になって見せるわ。

そのためには、美鶴さんをどうかして本当の意味で仲間にしなといけない。

絶対に敵に回してはいけない人だ、うう……。

……。

その頃的美鶴はリビングでテレビを見ながら思い出したかのように笑う。

「ふふつ、今頃、梨紅さんは驚いてるかしら。大河は自業自得ね、恋人もいなくせにつまんない嘘をつくから。それにしても大河も面白い子に好かれてるじゃない。これはもっと楽しめそうな予感がするわ。次はどうしようかなあ」

魔性の微笑み、まさに悪魔そのものだった――。

第10章：想いの形

【SIDE：日野大河】

美鶴姉ちゃんのせいで俺に恋人がいない事を梨紅ちゃんにバラされてしまった。

せっかく隠し続けていたのに何たる仕打ちだ。

梨紅ちゃんの家家庭教師を初めて一ヶ月が過ぎ、2月に入ろうとしていた。

「いらつしゃいませ」

そんな俺は週1、2回ほどは居酒屋でアルバイトをしている。
今日も夜遅くまでアルバイトをして、疲れ切っていた。

「はあ、今日は散々な目にあつたな」

嫌な客に絡まれた事もあり、俺は愚痴りながら着替えを終えて外へと出る。

一番寒い2月になったせいで、本当に肌寒い。

さつさと帰りたいが夕食も買わなきゃいけない。

俺の住むマンション付近にはコンビニがないので遠回りしなくてはいいけないのだ。

いつもの慣れた道だが、嫌になるなあ。

「……ん？」

俺が夜道を歩いていると楽しそうに談話する中学生ぐらいの集団と遭遇する。

その中にいたのは梨紅ちゃんだった。

「あれ、梨紅ちゃん？」

俺の存在に向こうも気づいたらしく、こちらに振り返ると勢いよく手を振る。

「先生じゃない。どうしたの？あつ、居酒屋でアルバイトしてるって言ってたからその帰りかしら？」

相も変わらず、尻尾を振って機嫌のいい犬のように近づいてくる。ここまでストレートに好意を示されると普通に嬉しい。

「そうだけど、梨紅ちゃんは？」

「私は友達と遊んできた帰りなの。ちょっと遅くなっちゃった」

時計は10時過ぎ、ちよいと中学生が遊ぶには遅い気がするが……。

俺達の会話を他の友人たちが気にしている。

「ねえ、梨紅。この男の人は誰なの？」

「ふふつ。彼はねえ……」

梨紅ちゃんが何やら俺を彼女達に紹介しようとする。だが、それは思わぬ紹介となる。

「もしかして、話によく出て来る年上の彼氏さん？」

「えっ？あの噂の人？へえ、そうなんだ」

……はい？

何で俺が梨紅ちゃんの彼氏なのだ。

自慢ではないが俺の人生「恋人いない歴だぜ……ホントに自慢にならないな。」

そんな俺を放置して彼女達は騒いでる。

「いい感じの人じゃない。やっぱり、年上だよな。同年と違って男らしいもの。いいなあ」

「そうそう。梨紅にはこういう人が似合うんだってば」

当の本人の梨紅ちゃんはものすごく気まずそうにこちらをうかがいながら、

「でしょう？当たり前じゃない。私の自慢の彼氏なんだから」

と、友達に自慢げに話している。

突っ込みたい所だが、それをして彼女の友人たちへの評価をさげるだけだ。

ふーむ、ここはどうやっておくべきか。

空気が読めない男じゃないので、仕方なく彼女に合わせてあげる事にした。

「いつも梨紅が自慢しているんですよ。有名大学に通ってるだけじゃなくて、すごくかっこいい人だって。本当なんですな」

友達のひとりが俺をそう言って褒める。
やめてくれ、照れるじゃないか。

「ホント、梨紅ってば彼氏ができてからその人の話ばかり。でも、お兄さんみたいな人なら仕方ないのかも。梨紅を大事にしてあげてくださいね」

あははっ、心配しなくても俺は付き合ってますから……笑えねえ。

「梨紅ちゃんは可愛い子だから学校でも人気者だろう？」

「ええ、学内の男子のほとんどが好きつくくらいに。でも、昔から全然、同年代の男に興味ないからフツてばかりいるんですよ。それが今年に入ってからいきなり惚気モード。家庭教師でイケメンで、優しい人なら当然かもしれませんけど。確かにいいですよ。私もお兄さんみたいな人なら付き合いたいもの」

……俺つてもしかして、年下にはモテるのか？

そう言えば、これまでも高校時代の後輩にはよく慕われていたな。年上好きだったので興味なかったが、年下路線に目を向ければ……。

イケる、俺の時代が来てる気がするぜ。

だって、俺の人生で女の子たちにこうまで好印象抱かれたの初めてだし。

「も、もっつ……。先生、あんまり浮かれてないで」

不満気に俺の手をいきなりひねる梨紅ちゃん。

痛いっす、俺が何をしたというのだ！？

唇を尖らせて拗ねる姿に友人たちは何やら勘違いをした様子で、

「あらら。怒らせちゃった。それじゃ、梨紅。私達はここで帰るから送ってもらったらいいよ。それでは、お兄さん。さよなら」

「バイバイっつ。彼氏と仲良くしてねえ」

梨紅ちゃんを置いて友達が帰ってしまう。

ふたりだけになったので、俺は梨紅ちゃんに言う。

「さて、何か言う事があるだろう？ 梨紅ちゃん？」

「——大河先生の浮気者っ！ 中学生相手にデレデレしちゃってさあ。ふんっ！」

「——ええ！？ 俺が責められるの！？……なぜか分からないけどごめんなさい」

せっかく話を合わせてあげたのに、なぜか知らないけど怒られる俺でした。

梨紅ちゃんの嫉妬(?)の怒りは寒さですぐに収まったらしい。
俺はコンビニ弁当を買ったついでに梨紅ちゃんに肉まんを差し出す。

彼女は白い湯気の出る肉まんを食べながら、

「うーん。やっぱり、コンビニの肉まんは最高っ」

それひとつで気分もよくなってくれたので、俺も同じように肉ま

んをかじる。

この寒い中で温もりを取り戻してくれる冬の必需品だ。

「それで、何か言う事は？」

「肉まんごちそうさま？」

「違うよね？それとは別件で言う事があるだろう？」

俺が問い詰めると彼女は「先生って意地悪だ」と怒られる。

だから、何で俺が怒られる立場なんだろう。

梨紅ちゃんはちまちまとハムスターのように肉まんを食べ続ける。

「別に私が言い始めたんじゃないからね？先生の事を友達に話したら勝手に勘違いして恋人なんだって話になっただけ。実は私は一度も認めてないんだよ？」

「否定をしなければ同じ事でしょうが」

「うう、だって恋人がいるって友達同士の中じゃ優位になれるんだもんっ」

俺だってその気持ちはよく分かる。

そうなんだよな、恋人がいるってだけでなぜか偉そうにしている奴っているもんな。

ちくしょー、恋人がなんだ、俺は別に悔しくないぞ……嘘です、悔しいです。

そんな青春時代の過去を思い出して俺は思わず頷いていた。

「梨紅ちゃんの気持ちは分かるが嘘はいけない」

「嘘じゃないもの。すぐに事実になるし」

最近覚えたてのスルースキル発動、そこにはあえて突っ込まないでおこう。

「それはさておき、こんな時間まで何をしていたんだ？」

肉まんを食べ終わった俺達は梨紅ちゃんの家に向かう事にした。
俺からすればかなり遠回りの道になるのだが、ここで梨紅ちゃんをひとりで帰らせるわけにもいかない。

この前と違い、この時間帯は変態が出没する危ない時間なのだ。
リアルに最近、この街には危ない輩が出始めてるといふ噂があるからな。

「えっと……それは秘密。乙女には話せない事情つてのがあるの」

「それなら聞かない」

「えー！？そこは気になるから聞いてよ！先生、私の話に興味を持つて」

どっちゃねん……。

今時の少女についていけない俺です、俺も歳になったなあ。

「秘密だけど教えてあげるわ。実は……」

「もうすぐバレンタインデーとかそんな話か？」

「なぜ、それを知ってるの!？」

……秘密でも何でもないじゃん、日付で言えばあと10日程度だ。

「実は友達の恋を応援しているの。さっき、お兄さんって言ってた可愛い子いるじゃない。その子が気になる相手がいるんだけど、この際、バレンタインデーを利用して告白しちゃえーっ、と励ましてたのよ」

「それは理解したけど、こんな時間まで？」

「ついでにカラオケで盛り上がって、遅くなっただけ」

何とも若い子らしい理由である。

「……バレンタインか。もうそんな時期なんだなあ」

俺は遠い目をしながら、独り身の男に悲しい現実を与えてくれる「バレンタインデー」という魔の日を口にする。

俺、人生で一度も本命チョコをもらった記憶がありません。

義理チョコオンリーです、義理って書かれたチョコを実際にもらったこともあります。

思い出すだけで辛い、あまりにも悲しい現実が今年もやってくるのだ。

「心配しなくても私からは先生に愛のこもった本命チョコあげるから」

「……俺、どう反応すればいいんだろう」

人生初の本命チョコを喜ぶべきなのか、それとも悲しむべきなの

か？

「えへへっ。先生、期待していてね？」

「あ、うん……」

梨紅ちゃんから向けられる好意を否定する程、俺は偉くない。

素直に嬉しい半面、家庭教師の生徒というモラルからすると……
悩むべき事態だ。

出会った当初はこちらに遠慮もあつたのか、あまりストレートに表現することもなかったのに、ここ1週間くらいの間にものすごくストレートに好意を示すようになった。

それはそれで俺としては非常に困ってるのだ。

これだけ可愛い子に好きだと言われて嬉しくない男がいるか、否、
いません。

だからと言って、年下すぎる相手を受け入れる事もできなくて……
ああー、梨紅ちゃんが同じ年だったらよかったのに。

「どうしたの、大河先生？ぶつぶつ何か言ってる……？」

「何でもないさ。寒いから早く家に帰りたいなって、それだけだよ」

そんな苦悩をする俺を知ってか知らずか、梨紅ちゃんは不思議そうな顔をしている。

俺達は複雑な事情を抱えながら、冬の夜道を歩いていた。

第11章：ストライクゾーン

【SIDE：日野大河】

大学での講義中、俺は友人の中里と雑談をしていた。

中里とは出身県が一緒の事もあり、気が合うので親しい友人のひとりだ。

「……そっぴゃ、今度の金曜日にまた合コンしないかって話なんだがお前はどうか？」

「金曜か……悪い、俺はダメだ」

「何だ、またバイトか？遊びの時間、潰してまですることか？」

中里の誘いは嬉しいがあいにく、金曜日は梨紅ちゃんの家庭教師だ。

毎週の火曜日と金曜日に彼女の家庭教師をする事になっている。

「家庭教師ってやってみると面白いぜ」

「ふーん。教育大学の奴らがしてそうな事だが、お前にも興味があったのか」

「そういうわけじゃないけどさ。今教えてる子もいい子だし、やりやすいからかな」

「梨紅ちゃんは家庭教師の生徒としてはやりやすい子だ。元々頭がいい子なので教えた事はすぐに覚えてくれる。」

「女の子だっけ？年下相手とふたりつきりか。よく少女漫画とかで
ありそうなシチュだな。……恋は芽生えそうか？」

「そう言う事はリアルにはないって」

……実際には好意を抱かれているようだが、黙っておく。
ここで俺に口リ疑惑がわくのは避けておきたい。

「お前はよくても相手はどうか。あの子、可愛いじゃないか」

「……はて、何のことやら」

ば、バレてた……。

それは先月の駅ビルで梨紅ちゃんとのぶちデートの事だろう。
あの時の遭遇は妹と言う事で誤魔化していたのに。

「バレバレだ。お前は妹だって言ってたけど、どー見ても、お前には
距離感あつたし、あの子もあの子でお兄ちゃんって感じじゃなかつた
からな。妹は実際にいるらしいが、ああいう性格の子じゃないと聞
くぞ」

「……なんて事だ。まさか、沢崎さんの事を言ったのも？」

「わざとだよ、わざと。ははっ、いいじゃないか。ああいう子はお
前に合いそうだ」

中里はどうやら高校生ぐらいたと勘違いしているようだ。
中学生とバレたら怖いので黙っておくでしょう。

「それはおいといて。合コンの件だが、今回はダメだとしても次はいけるのか？」

「誘ってくれるのはありがたいし、俺も行きたいと思ってる」

「……お前、何だか乗り気に思えなくなてな。俺みたいに恋人欲しいと焦ってるのと違って、余裕があるっていうか。その子が気になつて遠慮でもしてるのかということだ。まあ、気のせいならそれでいいが」

恋人が欲しいのは事実だ。

いい加減、恋人の一人は欲しいと願っている。

だけど、今はそういう気分にはなれそうにない……その理由は、深く考えないでおこう。

「おっと、講義も終わりだ。ノートに写さなきゃな」

黒板の文字をノートに写す俺達は慌ててシャーペンを手に取った。

その後、昼食を学食の食堂で取りながら会話を再び続ける。

「そっぴゃ、日野って好みはどんなタイプだ？」

「……俺の好みのタイプ？」

「そっぴゃ。ストライクゾーン広そうだからなあ」

それは心外な、俺はロリから老婆まで行けるタイプではない。

今日の昼食はカルボナーラとラーメン、まさに麺づくし。

定食コーナーが混んでいたので人の少なかった麺類コーナーで注文しただけだが、カルボナーラが好物でもあるのだ。

さすがに昼時は大学内のいくつかあるどの食堂も人が多い。

「ストライクゾーンねえ。俺は案外狭いぞ。基本的には年上好みな。人妻属性はないが、年上には惹かれる」

「それに加えて巨乳好き、と」

「否定はしないが、誰だって好きだろ？」

「……残念、俺は微乳好きだ。だからと言ってロリではないのだよ」

モテない男の会話だな、この辺でやめておくとしよう。

まずは麺の伸びやすいラーメンから食べ始める。

「年下は興味なしか？お前って年上より年下に好かれるタイプだろ」

「……そのようだな。この間、ちよつとした事で自覚した」

「年下女はいいぞ。女子高生、いいじゃん。去年まで高校生だった時は感じなかったが卒業して魅力に気付かされたよ」

「中里は今時の女子高生に夢を見過ぎなんだよ」

彼の趣味をどうこう言うつもりはないが、好みの問題だからな。年下が好きな奴もいれば、年上が好きな人間もいる。

「夢くらいみさせてくれよ。現実には大学生が女子高生と付き合える可能性なんてほとんどないわけだ。同じ年くらいの女子大生を狙うのが精いっぱいさ」

そう言う中里だがルックスも悪くないし、人当たりもいい。

合コンにいけば、女性に不慣れで失敗し自滅する俺と違い、面倒見のよさもあつて人気はあるほうだ……が、結局、恋人ではなく友人となってしまうらしい。

なので女友達は多いが恋人はいない、それが彼の不憫さだった。

「ストライクゾーンを狭めるなよ。もっと広い視野で見えてみるといい」

「自分の好みに幅を広げるつもりはないが、話だけ聞いておくよ」

俺はラーメンを食べ終わり、次のカルボナーラに手を伸ばす。

「……ラーメンにカルボナーラ？食べ合わせ悪くない？」

俺の背後からの声に振り向くと、トレイを持った女性がそこにはいた。

淡い茶髪に髪留めをしたショートカットの女。

どちらかと言うと童顔なので女の子と言った方がよく似合う。

「なんだ、可憐か？どこかの美人が声をかけてきたかと期待したじゃないか」

「私で悪かったわね。大河くん。隣、座るわよ？」

こちらが許可する前に俺の隣の席に座る彼女。

その名は桜塚可憐（さくらづか かれん）。

名前が可憐だからと期待することなかれ。

その性格は怒るとすぐに手が出る、可憐とは程遠い女である。

可愛いけど、怖い女の子。

そういう意味では「美人だけど悪魔」なうちの美鶴姉ちゃんと似ている。

「何だ、桜塚も今から昼飯か？」

「そうよ。ちよつとさっきの倫理学の教授にレポート渡しに行つたの。余計な説教までされてムカついたわ」

「先週出さなきゃいけないものを今日まで待つてくれた事に感謝しておけ」

中里の言葉に可憐はムツと睨みつける。

「怖いから睨むな」と彼は苦笑いしながら席を立つ。

「悪いが俺はちよいと用事があるからな。桜塚の相手をしてやれ」

「ん、そうか。じゃあな」

中里が席を去った後、可憐はトレイに乗せていたカルボナーラを食べる。

「アンタもカルボナーラだったんだ？」

「まあな。俺の好きな味でもある。この卵の絡みがたまらなく美味いんだよ」

「珍しく好みが出たわね。よく分かってるじゃない。黒コショウが利いていて美味しいのよね」

彼女はそう言うと、さつさとフォークを手にして食べ始める。
可憐も同じカルボナーラ好きだったとは……こたわりがあるのはいいことだ。

「それで、大河クンと中里クンは女性の身体的特徴の好みを話していたの？」

「うげっ……もしや、聞いてた？」

「中里クンが逃げた理由はそれでしょ。私と視線が合っていましたから」

偶然、食堂内で俺達を見つけた時に聞かれたらしい。
あの手の話題は女性に聞かれるの恥ずかしいものだ。

「心配するな、可憐。お前は俺の好みから外れた微乳だ」

「……手が滑ったわ、死ねっ！」

慌てて避けた俺の頬を彼女の拳がかすめていく。
風を切る感覚に冷や汗が出る、避けて正解だった。

「な、何しやがる。危ないなあ、おいっ」

「ちょっと手が滑っただけじゃない。気にしないで」

嘘つけ、死ねって言ったぞっ!?

「……バカ。人を不愉快にさせた罰よ」

「あえて、貧乳だとは言わないでにおいてあげたのに……。微乳だと言ってあげたのは俺の優しさだ」

「誰がその事に感謝するかっ。ホント、アンタって他の女の子には優しいくせに私には雑じゃない?扱いがひどいわよ」

「別にそう言うんじゃないんだけどな」

胸のサイズはさておき、彼女はいわゆる友達感覚が強いのだ。
女性慣れしていない俺が普通に話せる相手も珍しい。

悪友意識が強くて、女の子として意識していないせいかもしれない。
い。

「そういえば、大河クンってカテキョ始めたんでしょ?」

「その通り、家庭教師のアルバイトもしてる」

「教えてる子は女の子?それとも男の子?」

「女の子だけど、それが何か?」

俺の問いに可憐は失笑気味に俺に言った。

「子供相手だと大河クンって女の子でも大丈夫なんだ」

「うぐっ……。それでは俺が女の子が苦手みたいな言い方だな」

「……違うの？」

何も言い返せません。

俺は無言で視線をそらして、残りのカルボナーラを完食する。

「年上好きとかいうくせに、実際の年上女性と話してる時の大河クンってものすごく緊張してる姿が可愛いわよ」

「嫌味か、それは！？」

「嫌味よ、それは」

さっきの不適切発言の仕返しとばかりに攻めてくる。

くっ、この可憐を敵に回すと不利だ。

「私相手はともかく、もっと女の子慣れした方がいいわよ？」

「……そんな事をわざわざ言われなくても分かってる」

「それならいいけど。さて、ごちそうさま。食器の後片付けをお願いね」

彼女は俺に食器を押し付けて立ち去っていく。

逃げられた、と後悔しても遅い。

テーブルを見ると、中里も空になった皿を置いていつている。

「あいつら、覚えておけよ」

俺は愚痴りながら全員分の後片付けをすることにした。

悪い奴らじゃないが、俺にはあまり優しくない友人たちだ。

……俺も急がないと次の講義が始まるな。

時計を見てため息をつきながら俺はトレイに食器をのせて席を立つ。

片付けてから俺は次の講義室へと足早に歩き始めた。

第12章：悪魔の嘆きと悲しみと

【SIDE：日野大河】

「つたく、うちの姉ちゃんもホントに人使いが荒い」

今日は土曜日、何も予定はなく大抵は美鶴姉ちゃんと一緒に食事をする日だ。

俺は姉ちゃんに頼まれてあちらこちらに買い出しに出かけていた。その帰り、マンション付近まできたところで可憐の姿を見かける。

「よう、可憐。何だかつかれた顔をしているな？」

「んー？大河クンか。バイト帰りでお疲れ気味なの」

可憐は俺の住むマンションの向かい側のマンションに住んでいる。女性向けのマンションで、姉ちゃんも去年まではそちらに住んでいたらしい。

「アルバイト……。ああ、例の駅前にできたコスプレ喫茶か」

「違うって！？ただの喫茶店、ちよつと可愛い服装のお店であつてそういう変なお店じゃありません。一回来てみなさいよ。あ、いや、ダメ。今は来ないで。これ以上仕事したくない」

ぐつたりとしている様子から察するに人気があるお店のようだ。噂だとオープンして間もないのにかなり繁盛しているらしい。

「開店当初から繁盛していていいじゃないか」

「どんなに忙しくても時給が一緒なら暇な方がいいわよ。忙しいだけつかれるの。今はオープンで忙しいから、しばらくして盛り下がってきたら来て。またその時には連絡するわ」

「その言い方もどうかと思うぞ。まあ、可憐の制服姿がどういうのかは興味あるが」

可憐も見た目だけなら可愛いからな。
それはそれで期待しておこう。

「そうだ、大河クン。もうすぐテストじゃない。そこで、経済学の授業のノートを貸してくれない？私、あれってあんまり講義に出てなくてノートも取ってないのよね。テスト範囲ってノートから出るらしいから写させて」

「うん、嫌だ」

「なっ！？何で拒否するのよ。いいじゃない、貸してくれても」

「前期のテスト時にお前にノートを貸して、散々な事を言われたかな。字が汚い、もう少し要点まとめて書けやら文句ばかり……貸す気になれないから貸しません」

人にノートを借りという字が汚いと文句を言った人にはこころよく貸せない。

別に俺がケチだとかそういうわけじゃない。

「あー、そんなこともあったような。あんまり細かいことを気にしていると将来後頭部の薄さに悩まされるわよ？」

「——お前は俺を怒らせた。絶対に貸さない」

親戚一同、薄毛に悩んでいるだけに俺も将来心配なので冗談でも許せないネタだ。

俺は「もう知らねー」と可憐を置いてマンションへと戻る。

「ちょ、ちょっと、待ってよ。こっちは単位落としたくないの。協力してよ」

「人にものを借りる態度じゃないから嫌だ。ていうか、ついてくるのか!？」

結局、強引な可憐は俺の部屋までついてくる。

「大河クン。女の子がこれだけお願いしているのに冷たいわ」

「……お願い?脅迫の間違いでは?」

なんて俺達が会話していると、室内から叫び声が聞こえた。

「きゃーっ!?!」

その声の主はまさかの美鶴姉ちゃんらしい。

「今の美鶴さんの声よね?」

「そのようだな。何かあったのか?」

俺達は顔を見合わせて「?」と疑問に思いながら家に入る。

キッチン付近で何やら震えている美鶴姉ちゃんを発見。

「どうしたんだ、美鶴姉ちゃん……ハッ!？」

俺達は見ってしまった、姉ちゃんの手に握られているものを。

それは赤い血に染まった包丁、震える美鶴姉ちゃん、そして、叫び声……。

そこから導き出される答え、それはひとつしかない。

「ね、姉ちゃん……ついにやっちまったのか？誰だ、誰をやったんだ!？」

「美鶴さん、自首するなら付き添いますよ？」

ついに姉ちゃんが……いつかやると思っていました。

「そ、そんなわけないでしょ!！」

美鶴姉ちゃんは涙目で俺達に怒りを向ける。

「私は誰も殺してないわよ、ふたりして失礼ね」

まな板に魚がのっているので調理中だったようだ。

なるほど、魚の調理の血だったのね、誤解してしまったではないか。

「だったら、何で叫んだんだよ？」

「あ、あれが出たのよ、もうダメだわ。この家は既に侵略されているわ。すぐに逃げないと……」

「アレ？何だよ、それは？何かいるのか？」

「いるから私が怖がつてんでしょっ！！空気くらい読みなさい」

普段は強気全快のサディストお姉様の美鶴姉ちゃんが震えている時点でおかしい。

彼女を震え上がらせるもの、それに俺は一つだけ思い当たるものがある。

「まさかアレか？我が家にも出たのか、アレが！？」

「そうよ、アレよ。アレがついに出了たのよ。ふえーん」

半泣き状態の美鶴姉ちゃんが俺に抱きついてくる。

「うお！？ちょ、おまつ！？嬉しいけど、包丁持ったまま抱きつかないで？！」

嬉しさ半分、恐怖半分……めっちゃ危ねえ。

とりあえずは包丁は回収、抱きついた状態は維持で話を続けることにする。

「あのさ、アレって何？美鶴さんは何を怯えているわけ？」

姉ちゃんの普段とのギャップに困惑してる可憐は俺に尋ねる。

「アレって言ったらアレだよ。家庭の天敵、黒い悪魔と恐れられている通称、アレだ」

「……あーっ、ゴキ●リか」

「嫌っ！？その名前を言わないで」

美鶴姉ちゃん、威厳ゼロ……この可愛いお姉さんは誰だと言いたい。

あのヤクザすら睨み殺す面影はどこにもありません。

「最強乙女と言っても過言ではない姉ちゃんにも苦手なものはある。主に虫全般がダメなんだが、特に黒い悪魔だけはマジでダメなんだ。どれだけダメなのかはこの光景を見てくれたらわかるだろ」

「そりゃ、アレが得意な人はいないでしょうけど、ここまでおびえるもの？」

「小さい頃に実家で強襲された事があってね。それ以来、トラウマらしい」

部屋にわいて出た黒い悪魔が飛び回る光景。

想像するだけでも気持ち悪いが、さらに言葉にできない仕打ちをされたらしい。

こうして弟に抱きつきながら震える姉を見ているとトラウマがかなりのものと分かる。

世界の嫌われ者、黒い悪魔はすぐにでも退散願いたい。

「しょーがない、ここはお前に任せよう。可憐」

「おーい。私もか弱い女の子で、誰も得意だとは言ってますんけど？」

「頼むよ、可憐。実は俺も苦手なんだ。処分してくれたらノートを貸そう」

というか、この状態では身動きできないし。

「ひつく……えぐつ、怖い嫌だあ……」

しかも、美鶴姉ちゃんが涙目でめっちゃ可愛いからしばらくこの状態を維持したい。

普段から散々な目にあわせられているからなあ。

俺と姉ちゃんに視線を向けて可憐は「ラブラブねえ」と呆れた口調で言う。

「大河クンってシスコンだね。人様の姉弟事情にクビ突っ込むつもりはないけど」

「誰がシスコンだ。俺はその趣味はない」

「美鶴さんの方はどうかしら？はあ。嫌だけどノートのために頑張るわ」

ゴキブリ用殺虫剤を手にした可憐はため息をつきながらキッチンへと消える。

しばらくして、暴れまわるような音が聞こえてから沈黙が続く。キッチンから出てきた彼女は「殺虫剤使わなかったわ」と俺に手渡す。

「……処分完了か？」

「窓際に追い込んでやったら勝手に窓から飛び出したわ。無駄な殺

生すると後片付けが面倒なのよね。無事終了よ」

「部屋から出て行っただけマシか。おい、美鶴姉ちゃん。終わったぞ？」

俺が美鶴姉ちゃんに話しかけるとようやく正気を取り戻したらしい。

「な、何をいつまで抱きついてるのよ！？この変態っ！」

俺を突き飛ばして真っ赤になりながら姉ちゃんは濡れた瞳をぬぐう。

「ふんっ。大河のくせに。いつか返してあげるわ、覚えてなさい」

「俺が抱きついたわけじゃないってのに、何たる仕打ちだ」

いつものことだが、俺の対応の改善を求む……いや、本当にさ。

その後、黒い悪魔を追い出した可憐は姉ちゃんに誘われて一緒に夕食を取った。

何気に姉の可憐への扱いがよかったので、俺が倒しておけばよかったぜ。

食後、俺と可憐は俺の部屋にてノートを探していた。

「それにしても、美鶴さんにも弱点はあるのね」

「そりゃ、あるだろう。あれでも一応、女の人なわけだし」

「大河クン。私も女だからね？その辺、自覚してるかしら？」

「……可憐と話しているとどうにもその自覚が薄くてな」

ホントに女として意識してたら俺はドキマギしっぱなしであろう。
俺は経済学のノートを見つけたので彼女に手渡す。

「かなり失礼な人ね。こんな美人な女の子を自室に連れ込んでるくせに反応もしないなんて。別にいいわ。私も大河クンの事なんてちつとも人間として認識していないもの」

「そこはしておくべきだろう！？」

「……これからポチって呼んでもいい？」

「犬！？ワンコ扱いかよ」

可憐の逆襲、地雷を踏んでしまった。

「どうしたの、ポチ？何かあったの？ポチのくせに私に文句言うつもり？」

「ごめんなさい、可憐さんは立派な成人女子です。これからは意識するようにこころがけますので人間扱いしてください」

可憐を怒らせると本当に後を引きずるから謝るに限る。
以前にひどい目に合ったからなあ。

家も近所で会う事も多い友人なので余計に大変だ。

「まあ、大河クンに女の子として意識されすぎるのも嫌だけど。私の事を好きになっちゃダメなんだからね？大河クン」

「それはないから心配するな」

「……そこで即答するから大河クンはヘタレだと言われるのよ」

なぜか怒られました、何で？

不満そうに言う可憐に俺は女の子とは気難しいと改めて思うのだった。

「カテキヨの生徒の女の子にもそういう態度とってないでしょうね？」

「梨紅ちゃん？うーん。別に普通の態度だと思うけどな」

「それならいいわ。大河クンって女性慣れしてないというか、女性の扱い方が致命的に下手なの。それじゃ、恋人なんて夢のまた夢よ。いい加減、恋人欲しいのならちゃんと努力しなさい」

「……男として何も言い返せないのが悲しい」

可憐に凹まされた俺はうなだれるしかなかった。

ちなみに黒い悪魔に半泣きだった美鶴姉ちゃんが翌日、家の一斉掃除に取り掛かった。

「この家に二度とアレを発生させないために徹底的に掃除するわ」

そのせいで俺の部屋にあったエロい本を含めた雑誌類が発覚、巻

き添えの処分という犠牲になりました。

ちくしょー、黒い悪魔めっ、二度と部屋に来るなっ！！

第13章：小悪魔の囁き

【SIDE：桐原梨紅】

今日は大河先生のためにバレンタインデーのチョコを買いに友達と繁華街に来ていた。

明日が当日ともあって、お目当てのお店にはバレンタイン用のチョコが店内に大量に並べられていて、他にも多くの女の人が買いに来ている。

私の友達、東雲と片瀬のふたりはそれぞれ片思い相手と彼氏にチョコを選んでいる真っ最中。

「うーん。いざ買いに来たものの、こういうモノをあげればいいの？」

私が彼氏と付き合ってる片瀬に尋ねる。

私も別に先生が初恋相手じゃないけど、チョコは誰にもあげた事がない。

中1の頃から付き合ってる子なので経験値は私達より高い。
私と同じく片思いのいる東雲も気になってる様子だ。

「男の子が好きなものってあまり甘すぎないものじゃない？」

「うーん、チョコは甘い方が美味しいけど？」

「それは梨紅の好みでしょ？彼氏のお兄さん、大人なんだからビター系じゃない」

「ビターチョコレートかぁ。と言う事はこれとかあれとか……」

東雲は同級生相手なので普通のチョコにするみたいでふたりで別の売り場へ。

私はひとり大人向けのチョコ選びを始めた。

「ビター系って食べたことないんだよね。苦いの苦手だし」

基本的に甘いもの好きだから私は苦めのチョコは食べない。

「……でも、先生つてば休憩のお茶菓子も普通に食べるし、別に甘いものが嫌いなわけじゃないはず。となると、ビターだとまずくない？うわっ、どっちを選んだらいいんだろう」

最近スイーツ男子とか呼ばれるお菓子好きな男の子も多い。

男子は甘いモノが苦手、というのは単純な考えかも。

あゝあ、もうワケわかんなくなる。

チョコひとつ買うのにこれだけ悩むなんて……。

「面倒だから先生に聞こう、っと」

私は失敗を恐れて先生に直接尋ねることにする。

あげる事は既に明言してるわけで、今さら気にしてもしょうがない。

携帯電話をかけると先生はすぐに出る。

「もしもし、梨紅ちゃん？どうしたんだ？」

「あのね、先生に聞きたい事があるんだけどいい？」

「聞きたいこと、いいけど……ぬおっ!？」

電話先で先生の驚いた声がする。

『ねえねえ、大河クン。この辞書借りるわよ』

そして、その後には女の子の声もした。

「先生、今は誰かと一緒なの？」

『え？あ、うん。友達と一緒にテスト勉強中。それで梨紅ちゃんは何の用？』

先生の女友達、美鶴さんの話だとそれほど親しくしてる相手ってあんまりないって言っていたから気にする事じゃない。

でも、沢崎さんみたいな例もあるし、油断はしちゃいけない。

「先生、その相手って本当に本当のお友達？」

『は？本当の友達？親友と言う意味では……俺達は友達なのだろうか？』

『誰と話してるの、大河クン？女の子？もしかして、女の子！？やだー、大河クンに彼女？付き合ってるの？』

『だあっ！？いきなり何する？彼女は別に恋人じゃないから向こうに行ってくれ』

追及を避けたくて先生が言った一言に軽くへこむ。

そりゃ、私達はまだ付き合っていないけど言い方ってあるじゃない。

『……うわっ、堂々と恋人じゃない発言しちゃって最低だ、大河くん。いいのかしら、そんなこと言って？相手の子、傷つけても知らないからね！。女の子を傷つけたら後が怖いんだよ？』

『傷つけなくても怖い人は怖いんだよ』

『あははっ、それは言えてる。まあ、ダメならダメで大河くんには私がいるしね』

誤解はよくない……これは普通の会話で他意はないはず。

“私がいる”って意味を考えちゃダメだってば。

『あっ、梨紅ちゃん。それで何だっけ？』

「先生なんて知らないっ！ふんっ」

イライラを抑えられずに私はムカついたのでそのまま電話を切る。私はホントにただの家庭教師の生徒でしかないの？

結局、私はビターチョコを購入してから友人たちと合流する。

「梨紅、お兄さんにいいの買えた？……膨れてるけど何かあったの？」

「別に何でもないよ。片瀬たちは？」

「いいのあったよ。自分用もつい買っちゃった」

「そうなんだ。ごめん、私ちょっと用事ができたからもう帰るね」

友人たちと別れると私は急いで先生の家に向かう。

あの女の相手が気になるんだよね。

何となくだけど、私の敵の予感がしてたまらない。

先生を狙う相手は多いかもしれない。

彼のマンションにつくと、インターホンを鳴らす。

「はい？あら、梨紅さんじゃない。大河に用事でもあるの？」

「こんにちは、美鶴さん。あの、大河先生はいますか？」

「大河？ううん、うちにはいないわよ？」

……あれ、予想が外れた。

てつきり、先生の家にいるとばかり思っていたのに。

「先生は今どこに、誰と一緒にいるんですか！？」

「何を慌ててるの？……ああ、そう言う事か。ふーん。気になるお年頃ってやつねえ」

美鶴さんは察しがついたようで微笑する。

このお姉さんの微笑は綺麗だけど何を企んでいるのか分からなくて怖い。

「きつと大河は可憐さんの家にいるはずよ。男と女がふたりっきりの部屋で何をしてるのかしらねえ？気になる？」

「き、気になるのが普通じゃないですか。ていうか、美鶴さん、この間、私に嘘を教えたでしょう。何が恋人ですか、妹さんだって先生から聞きましたよ。全然話と違うじゃないですか！」

「……妹？私に妹なんていないわよ？騙されてるんじゃない？」

「え？そ、それじゃ本当にあの人が……本当に先生の？」

写真の美少女が妹じゃなかったの！？

それじゃ、あの子は誰？

「あははっ、嘘よ、嘘！あれは私の可愛い妹だから。単純な嘘にひっかかってばかりね」

ホントにややこしいからそう言う嘘はやめて欲しい。
こっちは真剣に悩んでいるんだからねっ！

「……美鶴さん、恋する中学生を苛めて楽しいですか？」

「うん、それなりに。真っすぐに可愛いじゃない」

笑顔で答える美鶴さんは本当に悪魔に見えた。
ぐすっ、もうこの人、本当に信じられないよ。

でも、ちゃんと可憐さんの家を教えてもらう事ができた。

どうやら、向かい側のマンションに住んでる大学の同級生らしい。

『大河と可憐さんはマジで怪しい雰囲気よ。これは冗談ではなくね』

と、美鶴さんいわく親しい女性らしい。

……もう信じないから、美鶴さんの言う事なんて。

どうせ、ただの知り合い程度にしか仲良くないんでしょ。

さすが2度同じ手をくらう私ではない。

私がその人の部屋に入るわけにもいかないのでちょっとだけマンション前で待つ。

やがて、先生がそのマンションから出てきた。

「さっすが、大河クン。頼りになるわ」

「……都合よく利用されているだけの気がする」

「気のせい、気のせい」本当に頼りにはしてるんだからね。……あれ？」

そして、私と目が合う女性。

この人が可憐さんらしい、仲はよさそうだ。

「……梨紅ちゃん？」

「この子が大河クンのカテキョの子？可愛いじゃない」

彼女がこちらに近づいてきて笑みを見せる。

今度こそは先生と本命的な仲のよさを見せる人な予感がする……大ピンチ！？

「はじめまして。私は桜塚可憐よ。大河クンの友達なの」

「……どうも。大河先生とはどういう関係ですか？」

余計なこととは言わず、私がストレートに聞くと彼女は答えてくれる。

「私と大河クンは同級生で友達の関係よ。別に同じ部屋にいたから一線越えたわけでもなければ、越える予定もない間柄だから余計な心配なくてもいいからね？下手に勘違いされて恨まれるのは嫌だから」

ら」

「本当にですか？」

「本当だつてば。それにこのヘタレな大河クンに何かできるとも思えないじゃない」

「それは確かに……」

それは納得できるけど気に入らないの。

大河先生はいつものように「そこに同意されている俺つて……」と嘆く。

他人にヘタレと言われなくてはそれだけの努力をすればいいのよ。

でも、先生からヘタレ属性とつたら可愛くなくなるから個人的には嫌だ。

「さっきの電話つてキミだったんだ？大河クンって女の子の扱いが幼稚園児並に下手だから困るわよねえ。鈍感過ぎると言つか気遣いが妙な所で足りてないっていうか。基本的に良い人間ではあるけど、時々苛立たせるタイプの人間ね」

「俺ってそんなに嫌な奴だったのか？」

「自覚ないの……？」

「そんな今さら？的な表情で言われるとは思わなかった」

うなだれる大河先生に私は慰める。

「いいんだよ、大河先生はヘタレでいいの。ヘタレじゃなければ先生じゃない」

「その慰めが余計にキツイっす」

止めを刺してしまったらしく拗ねた先生はマンションへと帰ってしまった。

大河先生のいなくなった後に私は最後の確認で可憐さんに尋ねてみる。

「……先生の事、気に入ってますよね。好きにはならないんですか？」

「ふふつ。彼の手前、そうは言っただけどうかしら？人の気持ちなんてきつかけでいくらでも変わるものじゃない。未来永劫、ないとは言いい切れないわ。でも、梨紅ちゃんが大河クンの事を好きなら、私は応援してあげるわよ？」

「私にそう言った人は意地悪したりするのであまり信じられません」

可憐さんは「私は美鶴さんじゃないから」と苦笑する。

個人名を言わなくてもすぐに分かる美鶴さんって……。

「それじゃ、まずは近いバレンタインデーの話かな。彼の好みは甘い系のチョコよ。間違ってもビター系なんてあげちゃダメだからね？彼ってビター系は大嫌いだからさあ。私も義理で用意しておこうかな。梨紅ちゃんもがんばってね」

嘘っつ、買ってきたのはビターチョコレートなんだけど、どうしようー!？

第14章：ビターチョココレート

【SIDE：桐原梨紅】

気分浮かれるバレンタインデーのはずだったのに思わぬ大ピンチだったりします。

ビターチョコが苦手だという大河先生（可憐さん情報）。

それなのに買ってしまったビターチョココレート。

迷った時にもし嫌いだったらどうしようと悩んでいたけど、的中しちゃうなんて。

でも、先生が悪いんだよ、せつかく聞こうとしていたのにあんなことしてるし。

代わりのものを買いに行く時間もなく、私はこの日を迎えていた。今日は家庭教師の日なので、私はどうしようもできずに諦めることにする。

仕方ないよ、嫌いなら謝ることにしよう。

「こんばんは、梨紅ちゃん。宿題やってきた？」

「うん……やってるよ」

「ん？何か元気ないけど、どうかしたのか？」

テンション下がり気味の私に先生は心配そうに言うので、「何でもない」と誤魔化す。

私気分沈んでいちゃダメだよな。

さて、チョコ問題はともかく、大河先生のおかげで私もちょっとは数学ができるようになってきた。

難しいのは相変わらずでも、やる気の意味では先生がいるから向

上中。

何事もする気がなければ始まらない。

「この公式だと、当てはめていくと……できたわ」

「いい感じじゃないか。これだと近々ある小テストでも良い点取れそうだな」

先生が作ったテストの最中、私は答え合わせのために先生にプリントを渡す。

家庭教師を始めてから苦手科目だった数学でも手ごたえを感じ始めている。

正直、数学嫌いの自分がここまでできるとは思っていなかったの。この調子ならば近日中にある数学の小テストでもいい結果が出せそう。

「ねえ、先生。もし、次のテストでいい点が取れたら？」

「……取れたら、何？」

何で疑問で返されるのかしら。

先生って本当に鈍いわよね。

男の人って何でも鈍いのかなあ、そりゃ鋭ければいいってもんじゃないけど。

「もうっ、大河先生っ。こういう家庭教師のシチュなら良い点取ったらご褒美に何かしてくれるってよくあるでしょ？」

「あー、そういう展開か。……ご褒美ねえ？」

先生は「うーん」と腕を組んで考える素振りを見せる。

男の人ならもつと積極的に動いてくれてもいいと思うけど、先生はヘタレだから許してあげる。

「……良い点取れたら何かして欲しいな」

「エサで釣るか。それで点数があがるのなら、考えてみてもいいけど。具体的にどういう事をしてほしい？」

やった、大河先生がこちらの誘いに乗って来た。

こういう場合はもちろん、アレでしょ。

「……き」

「先に言っておくけど、漫画とかでよくあるデートとかキスとかはなしの方向で」

「す……とかまだ言っていないのに。冗談ですよ、別にご褒美なんていりませんよ。どうせ、私じゃ取れるはずないからっ」

先に言われてしまったので拗ねる。

ツーンと唇を尖らせながら拗ねていたら、先生がため息をつきながら、

「いきなりやる気ダウンって……。あのなあ、梨紅ちゃん。俺は家庭教師なの。結果出ないと意味ないんだからさあ」

「それは嫌だけど、先生がやる気を奪ったんでしょ」

「分かった。そう言うのなら、もし次のテストで60点以上取れ

たら……」

「取れたら何をしてくれるの？」

私が期待に満ちた視線を彼に向ける。

先生は「そんな目で見ないでくれ」と苦笑いする。

「そうだな。どこか遊びにでも行こうか。連れて行ってあげるよ」

「デート？それってデート？」

「“遊び”に連れて行ってあげると言ってます」

そんな改めて言い直さなくてもいいじゃない。

物は言い様ってことで、表現が変わっても意味は大して変わっていない。

ある程度仲のいい男女が一緒に遊びに行く事はデートと呼んでもいい。

「よしっ、デートしてくれるなら頑張るわ」

「……今の段階で60点でも取れるかな？」

ちなみに前の私の点数は20点でした。

数学なんて大嫌いだったから仕方ない。

60点なんて点数は数学に限ってはここ数年、見たことないかも。

「私は1ヶ月前の私とは違うのよ」

「だいいいけどね。さて、それじゃ答え合わせの点数を発表します」

「今回は良い手ごたえあったから八割は越えたでしょ？」

「残念、40点でした。これだと60点はまだまだ遠そうだね」

……頑張るよ、ええ、頑張りますよ。

見てなさいよ、大河先生。

この私が本気を出せばどれだけすごいか思い知らせてあげるわ。

本日の授業も終了、私は終わった後に先生にバレンタインのチョコを手渡す。

内容が内容だけにできる限りは先延ばしにしたかったの、うう。せつかくのイベントなのに気が重いつて……。

「はい、先生。バレンタインデーの本命チョコ、あ・げ・るっ（はあと）」

「本命って言われて渡されたのは初めてだ」

「えへへっ。嬉しいでしょ？人生初なものね？」

「嬉しいというか悔しい。何でこの年になるまで本命チョコをもらったことがなかったんだ。……人生って難しいです」

私としては先生がこれまで誰にもモテなかった方が不思議なんだ。容姿抜群、性格は一部ヘタレだけど基本的には面倒見が良くて優しい……普通ならモテるはずなんだけどなあ。

いい友達として最適なキャラクターとして人気はありそう。

「でも、義理チョコはいっぱいもらってきたでしょ？」

「人生で義理と書いて渡されたチョコを貰う人の気持ち分かる？
辛いぜ、あれは」

「……何て言いながらも、先生って仲がいい女の人とかいるじゃない。可憐さんは？」

「今日、チョコをもらったぞ。思いつき義理っぽい箱でお返し期待と言われた。安物チョコで倍返しって言われてもな」

全くもらえない人よりはマシだと思う。

それにしても、可憐さんもあげたんだ。

うーん、あの人って実は先生に気があるんじゃないの？

未だにその疑問だけは払拭できていないのよね、どうなんだろう？

「その点を考えれば私のは本命チョコだから喜んでくれていいんだよ？」

「あー、嬉しいですね。本当に嬉しい（棒読み）」

「……ふんつ。いいわよ、別に本気にしてもらえなくても」

バレンタインくらいで先生を落とせると思ってない。

年上の先生攻略には時間をかけてゆっくりと落とすつもりなの。

だから、その程度では凹まないと決めている、私は辛抱強い女の子なのよ。

「本命はさておき、チョコをくれたのは嬉しいんだ。さっそく、ひとつもらおっかな」

「ここで食べちゃうの？」

「え？ダメなのか？」

「い、いいけど……」

中身が先生の苦手なビターチョコだけに反応はあまり見たくない。うう、嫌な反応されたら私が辛いじゃない。

先生はラッピングされた箱を開けて中身を見る。

真っ黒いチョコ、見た目からしてビターチョコって感じがする。

甘さ控えめ、苦いチョコレートは男性好み……のはずなのに、リサーチ不足で大失敗。

「いただきます」

先生がチョコをつまんで口に入れる。

もうダメだ、私への好感度ダウンかもしれない！？

「あうあう、ごめんなさいっ！？」

「……ん？何が？美味しいチョコじゃないか。ありがとう、梨紅ちゃん」

「あれ？……美味しい？」

ビターチョコが苦手と聞いてたはずの先生だけど、普通に食べてくれている。

「これぞ、大人の味ってやつだな。よく考えて見たら、バレンタインデーでチョコをもらえる男って普通に幸せだよな。もらえるだけ幸せ、ありがたく思わないといけない。梨紅ちゃんがくれたチョコ、嬉しいよ」

「……大河先生」

まさか喜んでもらえるとは思ってもいなくて、こちらも嬉しくなる。

でも、ビターだけど大丈夫だったのかな？

美鶴さんと違って、可憐さんは私に嘘をつくような人じゃないっぽい。

私はその事に疑問を抱きながらも、不安が消えてホッとしていた。何とか危機は乗り越えられたみたい。

よしっ、気分を一新させてデートのために小テスト、頑張ろうつと。

……。

その後、大河は自宅に帰り遅めの夕食をとっていた。

リビングにやってきた美鶴はテーブルに置いていたチョコを見て、不思議そうに言った。

「これって梨紅さんにもらったチョコ？可愛いじゃない、好かれてるわねえ……あら？」

「そうだけど、それがどうかした？」

「ん。見た目が思いつきりビターチョコだけど、アンタ苦手じゃなかったつけ？甘いチョコじゃないとダメでしょ」

「……別に。わざわざ選んでくれたものを苦手だなんて思わないよ」

大河はそう言いながら「苦いなあ」と苦笑しつつもそのチョコを食べる。

彼がビターチョコが苦手なのは変わらないが、梨紅からもらったものを拒むつもりはないらしい。

「へえ、男の子だね、大河って……。案外いい奴だったのね」

「今まで姉ちゃんにどう見られていたのか気になる」

「そんなことはどうでもいいの。はい、これ」

美鶴が大河にチョコの箱を手渡してくる。

「何と！？美鶴姉ちゃんからバレンタインチョコ！？」

「……そんなわけないでしょ。何で弟なんかにお金だして高いチョコを買ってあげなきゃいけないの？買いに行くのも面倒だったの。あつ、チ・ルチョコでいいなら部屋にあるけど、いる？」

「ですよねえ。安物チョコはいらないや。だとしたら、これは何？」

「妹から愛のこもったバレンタインチョコ。さつき宅配便で届いたのよ。あの子もお兄ちゃんっ子ね。わざわざチョコをこっちに送ってくるなんて。電話でお礼でも言っておきなさい」

大河は「そうするよ」と頷いて、その箱を受け取った。

「ちなみ聞くけど、美鶴姉ちゃん。今年は誰かに本命チヨコあげた？」

大河の質問に美鶴は満面の笑みで彼に言った。

「——それってどうしても聞きたい質問かしら？」

「いえ、何でもありません。さ、さあて、妹からのチヨコは何かありません？」

姉の笑顔にビビる大河はそれ以上は何も聞かずに、妹からのチヨコレートの箱を開封するのだった。

第15章：好きな人のために

【SIDE：桐原梨紅】

テストで60点以上なら大河先生とデートができる、という約束をしたの。

意気込んでみたものの、小テストまで残り数日と迫っているのに勉強は進まず。

苦手科目である数学がそう簡単にできるなら苦労もしていないし、先生に家庭教師をしたら前からできるはず。

現実はその甘くもなく、私はピンチに陥っていた。

こーなったら、カンニングでも何でもして……バレたら痛い目に合うからダメか。

正攻法の勉強もうまくいかずに悩んでいた私は気分転換に繁華街へと出た。

せっかくの休日なのに、家で引きこもっていてもしょうがない。

「……まだ温かくならないのかな」

私は寒さに震えながらダウンジャケットの端を掴む。

2月も中旬、寒さもピークを迎えている。

これさえ乗り越えれば温かくなるはずなんだけど、まだまだ春は遠い。

「本屋でものぞいていこうかな？」

私が駅ビルの中に入ろうとした時に視界の端に見覚えのある顔を見つける。

「……可憐さん、だよね？」

可憐さんが見慣れない男の人と一緒に歩いている。
彼氏とお出かけと言った感じかな？

無視するのも何なので声をかけてみる。

「可憐さん、こんにちはっつ」

「梨紅ちゃんじゃない。今日はひとり？それとも大河クンと一緒に？」

「ひとりですよ。そもそも、先生と一緒にってあんまりないです」

「そうなの？まあ、お互いに時間が合わないんじゃないかな？
ね」

先生も地味に忙しい人だから家庭教師の日以外って中々会えない
んだよね。

うう、もつと会いたいのになっつ。

「あれ、この子って確か……？」

隣の男の人が私の顔を見て思い出したように言う。

「日野の妹、じゃない。日野の家庭教師の子か？」

「そうよ、中里クン。この子が大河クンのカテキョ相手
の梨紅ちゃん。中里クンはあったことあったんだっけ？」

「前に一度だけ。覚えてるかな、ほら、駅ビルで日野の妹って紹介
した時の……」

あつ……確か大河先生の合コンで気に入ったという沢崎さん（巨乳美人らしい）の情報をくれたお兄さんだ。

「俺は中里って言うんだ。大河の恋人？」

「まだ違いますよ」

「梨紅ちゃんは大河クンの攻略途中なのよ」

「……やっぱり、相手の方は気が合ったか。俺の予想通りだな。羨ましい」

中里さんと可憐さんは大学の同級生で、別に恋人というわけじゃないみたい。

大学の後期授業も終わりなので、今は春休み中らしい。

「もう大学も終わったって事は大河先生も自由時間多いですよね？」

「アルバイトは基本的に夜専門だからいつも暇してるはずだ。そういや、今日は……」

中里さんは何かを言おうとして言い淀む。

「何よ、中里くん？大河くんが今日何をしてるのか知ってるの？」

「……んにゃ。何も知らない。さあて、用事も終わったから帰るか」

「待ちなさい、何を隠しているの？大河クンにやましい事があると誤解される行動よ。彼のためにも素直に言いなさい」

可憐さんが彼の襟首をつかみながら脅迫する。

「な、何で俺が責められるんだ、分かった。話すって……。その、大河は今日、女と出かけてる」

「……中里クン？空気読めるわよね？ここに彼を好きな女の子がいるのに平気でつまらない冗談とか言ったら私が許さないわよ？そんなに痛い目にあいたいのかしら？」

「だから、俺が悪いんじゃないだろ！？」

悪魔な美鶴さんと違って、可憐さんは普通に私の恋の手伝いをしてくれる。

心強いお姉さんって感じで嬉しい……。ちょっと暴力的だけど。

「一応言っておくが、女って言うってもお姉さんじゃないぞ」

「余計に悪いじゃない。お姉さんだったら言い訳つくけど、他の女の子って誰？」

「沢崎って人だよ。大河が前に合コンで仲良くなった女の子で……。俺が先輩経由でアイツに紹介した。だあつ、痛いっ、足を踏むな！？マジで痛いって！？」

「何で余計な事をするのよ。梨紅ちゃんに悪いと思わないの！？」

怒る可憐さんと足を踏まれて痛そうに嘆く中里さん。

沢崎さん、ついに本当の天敵出現！？

「俺はこの子の事を知らなかったんだからしょうがないだろ。実は一週間くらい前から相手から大河に会いたいつて話があったらしくてさ。アイツの話だと今日は一緒に会ってるはず」

「……ホント、中里クンって必要ない事しかないわよね」

「俺の責任かい。でも、心配しなくても大丈夫だと思うぞ。どうせ、大河だし」

「甘いわよ、そう言う時に限って案外すんなりとうまく行ったりするの」

中里さんに対して怒りをぶつける可憐さん。

私は複雑な心境になりながら、先生の事を考える。

先生が少なからず私を気にしてくれているのは事実。

ここでいくら自分好みの巨乳美人だからってホイホイついていくはずがない。

「私、先生に電話してみる」

「え？それはそれでどうかと……デート中かもしれないのよ？」

「どちらにしても、変な誤解をしたくないんです」

一方的な考えでモヤモヤしたくない。

私は大河先生に女性の影があるたびに疑ってばかりいる。

でも、一度として先生が裏切った事もないのも事実。

今回もそうであると信じたい。

電話をするとはばらくのコールを経て、大河先生が出た。

『やあ、梨紅ちゃん。今日はどうしたのかな?』

「先生、単刀直入に言うわ。今、どこで誰と一緒にいるの!?!」

『だ、誰と? えっと、それは……』

彼の言葉が詰まる、嫌な予感が……。

「女の人と一緒にだったりするの? 今、駅ビルで可憐さんと中里さんに会って話は全部聞いているの」

『……駅ビル? どの辺にいるんだ?』

「東出口付近だけど? 話を誤魔化さないで」

ちょうど出入り口の付近で人通りも多いので、壁際に立って私達は雑談をしている。

「へえ、そうなんだ……——ツーツー」

——嘘っ、大河先生に電話を切られた!?

都合が悪くなったのかいきなり電話を切られたよ。

もう一度かけなおした方が……でも、しつこい女って嫌われるかも。

そんな風に、不安に思っていたら目の前から歩いてくる人影。

「……ホントにいた。しかも、3人一緒かい」

電話が切れたと思ったら、大河先生、本人が登場した。

まさか本人に会えると思っていなかったのですごくびっくりする。

「せ、先生っ！？ここにいたんだ……ていうか、いきなり電話切らないでよっ！」

「ごめん、ごめん。まさかそんな傍にいるとは思わなくて」

「それはこちらのセリフ。大河クン、今日は美人さんと一緒じゃないの？」

可憐さんに問い詰められると彼は苦笑い気味に言う。

「……まあ、それはいいじゃないか」

「よくない。全然よくないよ、先生！！沢崎さんはどこにいるの？」

私が彼の服に掴みながらムツと怒りを見せると困った顔をする。
そんな顔をしてダメなんだからね。

「中里……何で、バラした？」

「すまん。今の世の中、女って怖い。桜塚の脅迫に負けたのだ」

「それに変な誤解をしてないか？俺がデートでもしてるような？」

先生の言葉に私と可憐さんは声を同じくして呟く。

「——違うの？」

「……全然違う。沢崎さんとあって来たのは事実だけどデートじゃないし。デートなら本当によかったんだが……痛っ！」

私が先生の手をつねると、可憐さんも彼を睨みつける。

「大河くん、女の子の気持ちを理解してあげなさい」

「……はい。で、俺は別にデートしてたんじゃなくて、アルバイトを紹介してもらってきただけだ。今度、西口の通りの方にできる焼き肉屋のアルバイト、さっき無事に採用されてきたところだ」

先生の話によると、今してる居酒屋よりも時給がいいので、そちらへバイトを変えるみたい。

沢崎さんも同じバイト先なので人手不足のために紹介を受けたいらしい。

……って、沢崎さんと同じバイト先！？

「バイトの件は分かったけど、沢崎さんとの関係は……？」

「そうだ、梨紅ちゃん。お腹空いてないか？俺、昼飯食べてないから、何か食べよう」

強引に話題を変えて、大河先生は私の手を掴むと引きずるように歩きだす。

「というわけで、俺は行くよ、可憐。中里もじゃあな」

「……めっちゃ強引に終わらせようとしてる。怪しいわ」

「あれはそれなりに手ごたえがあったか？フラグたちまくりでいいねえ」

彼らと別れた後は、先生は私から話題をそらそうとする。

「で、さあ。次のバイト先つてのが中々いいお店でね……新店舗だから大変だけど、時給もいいからやりがいがあるよ」

「……先生の気になる沢崎さんも一緒だから？」

「そ、それはいいじゃないか。あのさ、本当に何でもないんだ。うん、全然」

「ふーん。何でもないならもつと堂々としていればいいじゃない。何で挙動不審？」

追及すればするほど先生の焦りは止まらない。

ホントに嘘をつくのが苦手な人だ、“純粹”って言うより“ヘタレ”そのものだよ。

「分かった、先生。もうその話は終わりにしてあげるから。今から暇なんでしょ？」

「ああ。どこかの喫茶店でも入らない？」

「それってプチデート？」

「……と言う事にしておくよ。さて、何を食べるかな」

いつもは否定する先生が素直にデートと認めてくれた。

私は腑に落ちないながらも、ここは黙って引いておくことにする。実際は沢崎さんとどういう関係なんだろう？

これは何としても先生とデートして、私に気を向かせないといけ

ない。

私はテストを頑張ると心の中で意気込みながら先生とのプチデートをする。

「そういや、あのふたりって何で一緒にいたんだ？可憐と中里……もしや!？」

「……ただの友達だつて。どう見ても恋人に見えなかったでしょ」

「今、思えば、俺の周囲ってリアル充実してる恋人持ちっていないよなあ」

それは大河先生も同じだと思うの、人の事言えないじゃない。

心配しなくても、近いうちに“私”が先生の恋人になってあげる。

……その前に厳しい現実が待っているけど。

第16章：私の戦い

【SIDE：桐原梨紅】

絶対に負けられない戦いがそこにはある――。

私は静まり返った教室の中でプリントに向き合いながら問題を解いていた。

数学の小テスト、これまで私が苦勞してきた苦手科目。

いつもの私は適当に問題を埋めると諦めてしまう事が多々あった。でも、それは過去の私。

今の私は、大河先生のデートという目標のために勉強を頑張ったの。

そのおかげで、それまで以上に数学を理解した。

「見せてやるわ、私の実力っていうのを……」

試験開始、解ける、解けるよ、問題がすいすい……解ける？

あれ、最初の方は簡単だからあっさりできたけど、途中からややこしくなってきた。

しばらくして、シャーペンが完全に停止する。

「……しまった、これ勉強してないところだ」

出ないと思って勉強を避けた所が見事に出してしまう。

えっと、この問題だとこの公式が必要で……こうすればいいはずだから、ん？

難解な問題に苦勞しつつ今日の私は諦めない。

しつこく考えに考えて、公式をひとつひとつ解いていく。

先生とのデート。

それが私を突き動かす原動力。

他の科目なら一応、トップクラスの学力があるので、やる気の問題なの。

頑張ればできないことなんてないのよ。

家庭教師効果に期待、ちゃんと勉強をした分だけ返ってくるはず。ここまで必死に勉強したのって中学受験以来かも。

私立中学の入学試験は算数が足を引っ張って苦労したもの。

絶対に私とは相容れない存在ね、普通に生きていれば難しい数学なんてほとんど必要ない科目だと思うの。

「はい、そこまで。後ろから答案用紙を集めてきてくれ」

教師の言葉に私はシャーペンを止めて、名前の確認だけして集めてきた子に渡す。

長い戦いは終わったわ。

あとは明日、答案が帰ってくるのを待つだけ。

戦いを終えた私は緊張感から解放されてぐったりしていた。

翌日、数学の時間になり、昨日の小テストが返却される。

100点中60点以上なら先生とのデート。

前回の小テストは20点だったのでそれでも十分ハードルが高い。大河先生が家庭教師をしてくれたこの1ヶ月間でどれだけ成長できたか。

私なりに手ごたえはあったので、自信をもって返却された点数を見る。

「……えっ!？」

私は戻って来たテストの点にびっくりした。
だって、そこに書かれていた点数は……。

その夜は大河先生の家庭教師の日だった。
私は落ち着かない様子で自室で彼を待つ。

「先生、驚くわよね……？」

私はそう呟くともう一度、そのテストのプリントを見つめる。
何度見ても、その点数は間違いない。

私がこんな点をとるなんて……本当に嘘じゃないよね？

「お待たせ、梨紅ちゃん。それじゃ始めようか」

先生が部屋に來たのでいつものように家庭教師が始まる。
その前に先生が「そういえば、テストはどうだったの？」と聞く。

「……ふふふつ、見て驚かないですよ？」

「おつ、何だか自信ありげじゃないか。見せてもらおうか」

私は先生にテストプリントを手渡す。
彼はそれをジッと見て「……ホントに？」と予想通り驚いた顔をする。

「ええ、ホントにその点なのよ」

そこには大きな文字でこう書かれていた。

『—— 32点』

……何度見ても32点、間違いなく32点、声に出して読んでも32点だった。

アレだけ頑張ったのに、まさかの展開でびっくりしたわ。

しかも、中途半端すぎて冗談としても笑えない。

「ふえーん。普通さあ、こういう展開っていきなり80点とか取れて私って超すごいっ！？と言う展開になるでしょ？何で、普通に32点なわけ？イベント補正は？超展開、ご都合主義はどこにあるの！？」

「俺に言われても……。中学の赤点って30点以下だろ？赤点は回避できたじゃないか？」

困り果てた先生の顔、失望させてしまったに違いない。

泣きたい、私の努力は実らず、高得点ならずの結末に泣いてしまいたい。

違うでしょ、ここはイベント的にこうじゃないはず。

高得点ゲットで先生とのデートと言う流れなのに。

私達の予想を見事に裏切る結末に私はがっかりしてた。

「そ、そんなに肩を落としてしよげなくても……？」

「がっかりするでしょ？私がどれだけ頑張ったと思うの？睡眠時間を削ってまで頑張ってもこれ？マジでありえないっ」

「確かに問題をみれば頑張ってるのは分かるけど、使う公式はあつてるのに、使う問題間違える時点でどうかと……」

ちゃんと真面目に勉強した結果が32点、60点なんて夢でしかないの？

「家庭教師も一ヶ月ちよつとじゃないか。実力が付きだすのはこれからだと思つよ？ そんなに焦つてすぐにできないって」

「……私のテンションはさがりまくつたわ。もう数学嫌い。デートだつてできないし、時間の無駄だったのね。ふんっ」

私は拗ねてしまうと見かねた先生が言う。

「落ち込まないで、梨紅ちゃん。努力した事は無駄じゃない。次はホントのテストが3月にあるんだろ？ だったら、それで頑張ればいいじゃないか。本番はそこだろ？」

「……やる気起きないから無理。はあ」

自信があつただけに今回の顛末には自分が情けなくなる。

「私は戦いに負けたのよ。デートもできず、努力も報われず、敗者はただ現実を受け止めることしかできないの」

「戦いつて大げさな……梨紅ちゃんは頑張つたじゃないか。12点UPだよ？」

「大河先生。負け犬の私に優しくしないで。今の先生の優しさが私には辛い」

私は視線をそらして言うと、彼は静かな声で、

「それじゃ、気分を変えて問題をはじめよっか。えっと、前はここまでしたから……」

「ちょっと待つて！？ホントにそこで話題は終わり？」

「だって、優しくしないでっ。プライドのある梨紅ちゃんがそう言うからこの話はやめておいた方がいいのか、と？」

「違うっ！？そんなの本音じゃないのにきまつてるじゃない。本音は先生とデートしたいのっ！甘い恋人みたいに一緒に遊びに行きたいのっ。つまらないプライドなんていらない！」

私はちよっぴり涙ぐみながら先生の身体に抱きつく。

「梨紅ちゃん。勝負の世界って非情なんだよ。1点差もダメなのに、残り28点足りてないから全然ダメ」

「ひどいっ！？努力は認めてくれてもいいじゃない。よく結果だけじゃなくて過程が大事って言うでしょ！」

「いや、テストは結果が全てだから。こーいうことって……甘やかすすぎるのも悪いだろ？」

ヘタレ先生に言われると何だかなあ。

人生ってちよっとくらい甘くたっていいじゃない。

「大河先生。ポジティブ思考に考えてみて。現役女子中学生とデー

トができるのよ?」

「俺がロリコンなら喜ぶだろうが、別に年下属性ないからな」

「……可愛い美少女とデートできるのよ?」

「確かに梨紅ちゃんは可愛いけど、俺は別にデートしたいわけじゃないし」

私、完全に子供扱いじゃない?

あれえ、おかしいな……。

出会った当初は手玉にとるくらいこちら有利だったのになんか余裕じゃない?

「ダメなのよ、先生。この流れはおかしいわ」

「いや、いきなり真顔で言われても」

「だって、先生が私の可愛さにドキマギしてくれなきゃダメじゃないっ!」

「そんなに自信持って言われても、普通に困る」

……ぐすつ、先生つてば冷たい。

私が拗ねてると「仕方ないなあ」と彼は苦笑いをする。

「分かったよ。梨紅ちゃんが今回頑張ったのは事実だから俺も譲歩しよう。さすがに60点取れると思っていなかったし。でも、目標の点数はとれなかったから、どこでもOKってわけじゃないけどいいよね?」

「え？どこかにデートへ連れて行ってくれるの？」

「……まあ、考えておくよ。今週の日曜日くらいで予定たてておくけどいい？」

先生が場所を決めると言う条件付き。

それでも全然OKなので、私が頷くとようやく授業が始まる。

先生とデート、というのが私の目的だったからいい。

本当に行きたい場所はあったけど、それはまた次の機会にとっておく。

「大河先生、優しい〜っ。今のは好感度UPよ」

「そう？梨紅ちゃんもやればできるって事が分かってよかったよ」

私はそこまで数学ができないダメな子と思われていたの？

なにはともあれ、先生と無事にデートができることになりました。今度は自分の実力でしてもらえるようになりたいな。

「えっと、漫画喫茶とかでもいいかな？」

「それは絶対に嫌っ！！」

不安だわ、デート慣れしていない先生に任せて大丈夫なのかしら？

第17章：デートスポット

【SIDE：日野大河】

日野大河、19歳は悩んでいた。

人生に……ではなく、デートスポットに俺は悩んでいる。

梨紅ちゃんとのデートを約束してしまった。

彼女も頑張ってるし、遊びに行く事は別にいい。

俺も春休みで大学は休みだし、アルバイト以外は暇でもある。

問題は俺の経験だ。

人生19年、女の子とのデートなんて数えるほどもない。

デートとは可憐みたいな女友達と出かけるのとは違う。

朝から俺はデートスポットを探して雑誌を眺めながら考えていた。

「……どこがいいのやらさっぱりわからん」

そもそも、相手が年下の中学生だと言う事も問題だ。

夜遅くまで連れまわすわけにもいかない。

おのずと場所も限られてくるわけだ。

「何を悩んでいるの、大河？」

リビングで雑誌とにらめっこをしている俺を鬱陶しそうに見つめる姉ちゃん。

片手には掃除用のホウキ、もう片方にはちりとりと掃除のお姉さんスタイルだ。

先日の黒い悪魔の騒動以来、掃除はかせないと大学が休みの今は毎日のように朝から掃除をしている。

「んー、姉ちゃんか。あのさあ、女の子ってどこにデートに連れて行けば喜ぶと思う？」

「……それって現実に生きてる女の子の話？」

「だから、俺の妄想でもなければ幽霊でもないって。梨紅ちゃんだよ。彼女を遊びに連れて行きたいんだけどね。女の子って何が喜ぶのかよく分からないくて……こうして悩んでいるわけだ」

俺が読んでいる雑誌には『絶対に失敗しないデートの仕方』という特集だ。

しかし、どれもこれも、“女子中学生”との交際方法ではない。夜景の綺麗なホテルやら、バーなど当然ながら同世代のデートスポット特集。

本を買ってきたあとに、ティーンズ雑誌を買えばよかったと後悔。どうにもこの雑誌では参考になりそうにない。

「あつ、そうか。大河って全然デート経験ないもんね」

「……めっちゃ笑顔で言われる事じゃないし」

「だって、経験ないでしょ？誰とも付き合ったことないんだから」

うぐっ、何度もしつこく言われなくても分かっているって。

そりゃ、彼女の一人もできた事ないのは事実だ。だが、それは俺だけの問題ではない。

「そういう美鶴姉ちゃんだって彼氏がいたことなんて……ハッ！？」

気づいた時は手遅れで俺の眼前にはハウキの先っぽが付きつから

れている。

やべえ、地雷踏んだ。

「私はいないわけじゃない。まだ本当に愛する人に出会っていないだけよ。何度も告白して連敗続きのヘタレな大河と一緒にしないで。それに私だってモテないわけじゃない。気になっている子もいるし、恋をしたことがないわけじゃない。分かる？まだ何か他に文句でも？」

冷や汗をかきながら俺は「な、何でもありません」と謝罪する。
何だよ、同じ事を言い返したら問答無用ですか。

こつという性格だから俺以上に彼氏ができないのでは？
姉と弟という立場の差に俺は涙しておく。

「さて、お互いの経験のなさを攻め合うのはやめにしましょう」

「姉弟間の一方的な言葉の暴力に異議があるんですが？」

「却下します。で、デートだっけ？」

無理やり話を変える姉ちゃん俺から雑誌を奪い適当にめくる。

「……アンタ、合コン相手のお姉さんとデートするんじゃないんだからこの本じゃ参考にならないんじゃないの？」

「それはさっき気づきました」

「面倒なら適当に繁華街で遊べばいいじゃない」

「歳の差もあるから趣味が違つところもあるというか……」

その程度ならば俺でも考えつくし、この前みたいに楽しめればいい。

だが、デートとはそういうものじゃない気がする。

「ていうか、何でアンタがあの子とデートなんてするの？付き合ってるわけ？」

「いや、違うけど……。この前、彼女の小テストがあって、いろいろとあり、デートをすることになったんだよ」

「どうせ、梨紅さんがテストの点がよかったらデートしてとか強引な約束をしたうえに、結局大して点数がよくなって残念だったのにもかかわらず、大河に頑張った事を評価してとかいう我が儘を言うてきたからデートをする事になったのね」

「……なんで何も話していないのに具体的に分かるんだ」

姉ちゃん、梨紅ちゃんの事が嫌いなのか。

むしろ、いい遊び相手というべきなのかもしれない。

「好かれているわね、大河。あの子、本気でアンタの事を好きなんだと思うわ。ああ、純情って可愛いわよね。私ももう少し若さがあれば純情路線でいけるのに」

「そもそも、純情って言うキャラじゃないし。姉ちゃんには慎ましさがまず足りていない。そもそもどんな路線でも向ける相手がいないってというのが……」

そこまで言って、俺は自分の口を押さえる。

「待つてくれ、違うんだ。今のはつい口がすべったというか、事実かどうか」

気づいた時には遅かった。

俺は僅かに遅れた判断ミスを呪う。

そこにはこちらにホウキを遠慮容赦なく向ける姉がいた。

……数分後、失言は痛みが変わった。

チクチク痛いよ、地味に痛いっす。

背中にささったホウキの痛みに俺は嘆きながら、

「……で、どこに行けばいいのかアドバイスをくださいませ。お姉さま」

俺は散々ホウキでつつかれて、ようやく許してくれた姉に尋ねる。

「アンタがデートという形式にこだわってるならアクアリウムでいいじゃん。ほら、郊外にできたアレ。まだ一度も行っていないんじゃないの？水族館が嫌っていう女の子って少ないもの」

「アクアリウム？そんなのあったっけ？」

「そうか。アンタがこの街に来たときには既にできたから話題になっっていなかったわね。一昨年の夏に出来た水族館があるのよ。初デートに悩むならそこにいけば？」

水族館、おおつ、デートらしくていいじゃないか。

「それもありだな。それなら、梨紅ちゃんも納得してくれるに違いない」

「……そんなに相手の事を気にして考えること？そもそも、アンタってあの子の事が好きなの？ただの家庭教師の生徒なら気にしなくてもいいじゃない？」

俺にそう言う姉ちゃんは何だか嫌な笑みを浮かべている。

「そ、それは……」

実際のところ、梨紅ちゃんは可愛い。

俺の好みのだ真ん中は年上美人のお姉さんだ。

しかし、妹系の年下美少女に甘えられるのも悪くはない。

「よくよく考え見れば、アンタを好きだっていう女の子って初めてじゃない？」

「それは失礼だぞ、姉。俺だってちよつとはモテるんだよ」

「今まで女の子から告白されたことは？」

「それっぽい雰囲気は何度かあったけども……告白はありません」

言っていて悲しくなる自分がいた。

人生、恋愛がすべてじゃないんですよ！

だからと言って他に何かあるわけでもなく、とても悲しい。

「大切にしなさいよ。むしろ、付き合っちゃえばいいじゃない」

「そんなに簡単にいくものじゃないって」

「機会逃して泣かないようにね？アンタってそういうところ、疎いから」

「……まあ、考えておく」

即決できる問題ではないので今回は置いておく。
今はデートの事を考えなければいけないのだ。

「さて、どういうプランを立てようか？」

デートと一言で言うが、難しいんだなあ……漫画喫茶じゃダメですか？

第18章：小悪魔な彼女へ前編

【SIDE：日野大河】

梨紅ちゃんとデートをするのはこれで3度目である。

彼女いない歴〃人生の俺にとって、これほど回数を重ねた相手は少ない。

というより、女友達と遊びに行くという事以外で、こうしてデートという形をとるのは初めてと言ってもいい。

ファーストデートは参考書を買っていくと言う名目、セカンドデートは喫茶店でお茶しただけ。

今回でようやく本格的なデートをする。

「今回行くアクアリウムって私、実は来たことないんだよね」

デート当日、待ち合わせの場所に10分早く来た俺以上に早く待っていた梨紅ちゃん。

彼女はこの街に住んでいるのだから一度くらいは行った場所だと思っていた。

「そうなんだ？魚は嫌い？」

「いかにもデートスポットってところに友達同士ではいかないでしょ？だから、先生が連れてきてくれたのはすごく嬉しい」

姉ちゃんには「ありきたりな場所でもいいの？」と疑問符をつけられていたが、何とか場所選びは成功した様子だ。

「郊外にあるからバスで行かなくちゃいけないんだ」

駅前にあるバスに乗り込んで20分後、俺達は目的地である水族館へとつく。

日曜日という事もあり、家族連れも多い。

「ねえ、先生……気になる事を質問してもいい？」

「気になること？」

「先生つて、恋人は今までひとりもいなかったのは知ってるけど、デートはしたことがあるの？」

その辺が気になるのか、梨紅ちゃんは「どう？」と尋ねる。

「梨紅ちゃんはデート慣れしてそうだ」

「わ、私は……男の人とデートしたのは初めてじゃないけど、慣れでもない」

「今時の子だから普通なんだろうな」

俺の若い頃（3年くらい前）を思い出して俺はその頃、どうだったかを思い出す。

彼女が欲しくて頑張っていた時期だ、今以上に青春していたかもしれない。

「それで先生の経験は？」

「ノーコメントです」

決して自分の過去に女の子とのデートが一回もなかったわけではない。

……いや、ホントだってば。

館内に入ると水族館独特の雰囲気がある。

入ってすぐに俺達を出迎えたのは大水槽と言われる大きな水槽だ。小魚やエイ、サメなどが群れる光景は海そのもの。

梨紅ちゃんは俺の手を引きながら歩く。

「綺麗〜っ！先生、見てよ。すごくない？」

「ああ。水族館なんて子供の頃以来だけど、迫力があるな」

泳ぎまわるサメを間近で見ると、これも魚なんだと改めて感じる。

「サメって怖いから嫌い」

「梨紅ちゃんでも怖いものってあるんだ」

「さり気なく失礼な事を言うよね、先生。私だって怖いものくらいあるわ」

梨紅ちゃんは苦手なサメから目をそらして、他の魚に視線を向ける。

「一応、私だって女の子なんだからね？」

「分かってるよ」

別に女の子らしくないと言ったつもりはない。
ただ、苦手なものってあまりなさそうな気がしたんだよな。

「魚って、水の中を泳ぎ舞われて楽しそう」

ブルー一色の水槽を見つめながら彼女は言う。

「梨紅ちゃんは海が好きなのか？」

「海もそうだけど、泳ぐのが好き。夏になればよく海に行くの。こ
ーみえて、私はスキューバダイビングの免許だって持ってる」

「へえ、そうなんだ。そんなに海が好きなんて知らなかった」

スキューバダイビングとか本格的だな。

俺の地元は海に近かったから、よく海水浴程度はしていたがそこ
まではしない。

まあ、梨紅ちゃんって社長令嬢さんだし、きっと海辺に別荘とか
あるんだろうな。

大水槽を離れて俺達は別のコーナーへと向かう。

「先生はどんな魚が好きなの？」

「うーん。マグロとサーモン？あとはブリとか」

「それ、お寿司のネタじゃない！」

「冗談だよ、冗談。食べられる魚という意味では好きなのは事実だ。」

「こついう水族館で好きな魚と言われたら……何だろうな？」

俺は考えてみて、パンフレットでとある魚を見つけた。

「これなんてどうかな」

俺が連れて来たのは深海魚コーナーだ。

東京湾ってのは思った以上に深くて、深海魚がよくいるらしい。
この間、テレビでその映像を見て興味があつたのだ。

「深海の魚って地味だよ。暗い色したのばかり」

「確かに灰色の魚やカニばかりだな」

まさに深海って言える魚がそこには展示されている。

巨大なカニのタカアシガニ、水中で生きる巨大ダンゴムシのダイ
オウグソクムシ。

目がなくキバがするどい魚、怖い系の魚が苦手な彼女は嫌そうだ。
これは選択肢を間違えたかも。

「光が届かないからよく目が退化した魚が多いって言うよね」

「……カニとかエビとかばかりじゃん。私はあんまり好きじゃない
なあ。暗い魚よりも派手で可愛い魚とかの方がいい。あつ、別に先
生が“地味”とか言ってたわけじゃないよ？」

言い直されると余計に俺がおっさんっぽいのかと気にするじゃない
か。

何気に年齢には敏感になりはじめているお年頃です。
年下相手にしていると余計にそう感じるんだよね。

「それなら、梨紅ちゃんの好きな魚はなんなのさ？」

「……私？えつと、その、笑ったりしない？」

「俺がいつ梨紅ちゃんの嫌な事をした？少くくは信じて欲しいな」

俺なりに梨紅ちゃんの嫌がることはしていないつもりだ。

何だかんだで俺にとっての彼女は可愛い妹みたいな女の子なのだから。

「いつも先生には意地悪されてるし」

「……してない、してない」

「それじゃ、笑わないと信じてみる。大河先生、ついてきて」

デートらしい雰囲気で彼女が案内したのはクラゲ専門のコーナーだった。

これは意外というか、幻想的な空間がそこには広がっている。

「……クラゲ？」

「そうなの。私はクラゲが好きなんだ」

海月、水母……クラゲは確かに綺麗な生き物だ。

透き通った身体に形も独特で綺麗な種類のクラゲだと発光したりもする。

「クラゲのどういう所が好きなんだ？」

「透明でぶよぶよしてるところが可愛いじゃない」

……言ってる事は何となく分かるが。

あちらこちらの水槽に浮かぶクラゲ。

別に嫌いというわけじゃないが、どうにも好きになれる要素がない。

触手を漂わせてふわふわと浮かぶ生き物に俺は不思議としか思えない。

「幻想的っていうか、綺麗でしょ？先生もそう思うよね？」

「あー、うん」

彼女のご機嫌を損ねないように俺は曖昧な返事で誤魔化す。

クラゲ好きか……見た目が綺麗な種類なら好きと言われてもおかしくないが、見た目グロテスクな深海系のクラゲを知ってる俺はどうにも好きになれないな。

楽しそうに水槽のクラゲを眺める梨紅ちゃん、これはこれでいいか。

いつのまにかデートらしくなってきたので俺も満足していた。

第19章：小悪魔な彼女〈後編〉

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生とのデートは楽しいけど、何か物足りなさを感じていた。水族館を出た後は先生と一緒にショッピングしていた。繁華街って歩きまわるだけでも楽しいもの。

私は同じように恋人っぽい人達を見つめる。

仲良さそうに腕を組んだりしている光景を見て、ハッと私は気づいた。

「……そうか、密着度が足りてないんだ」

あんまり直接甘えすぎると先生は逃げてしまう。

だから控えめにしていた私だけそれじゃデートらしくない。

ここでどうすればいいのか。

私はちらっと先生の方を見る。

彼はいつものように特に変わった様子もない。

デートっぽくないからそうなっちゃうの。

「先生、デートなんだからそれっぽくしてよ」

「ん？具体的には？」

「……腕を組むとかあるでしょ？」

「アレって微妙に歩きにくいから嫌なんだよな」

先生の発言に私は思わず立ち止まる。

……今のつて何、え？

「やだなあ、先生。今のいい方だと経験あるみたいじゃない」

「……それくらいはあるけど？」

さらつと言い放つ彼に私は衝撃を受ける。

嘘、先生ってデートの経験もほとんどないヘタレさんなのに！？

「——どこで、誰と、どんなシチュでしたの！？」

「そ、そんなに詰め寄らなくても……」

私は先生に詰め寄って事の詳細を聞きだす。

「あつ、分かった。男の子同士で腕組んだりして歩いたのね。それならいいわ」

「どんな友人だよ、それ！？そーいう関係の友人関係をもってない。俺は極めてノーマルだ。女の子だよ、女の子」

「それって生きてる女の子だね？」

「梨紅ちゃんまでうちの姉と同じことを言うのはやめてくれ。生きてるし、二次元でもなければ、怪しいお店のお姉さんでもありません。何で俺が女の子の話題出すと皆にそう言われるんだろう」

かなりショック……！

「そうなんだ。先生にそんな経験があったのはいいとして……その

相手は？」

「何か期待させてる所悪いけど、うちの妹だったりする」

「妹さん……？」

大河先生の妹って、平気で先生に抱きついたりしている写真を見たことがある。

もしか、いわゆるブラコンというやつなのかも？

会った事はないけど、お兄ちゃん好きって感じがするもん。

「そして、先生はシスコンなのね……ふう」

なんかショック度が余計に高くなった気がする。

これなら高校の時の同級生とかそんな相手の方がよかったよ。

「俺はシスコンじゃないって！ため息つかないで？」

何やら必死に否定する彼に私はガツクリと肩を落としながら、

「否定できる？ちよっぴり喜んでたりしたんでしょ？」

「い、いや、そんなことは……」

「いいのよ。先生がシスコンの危ない人でも。今、デートしてるのは私だし」

私は何か負けている気分を味わいながら先生の腕に寄り添う。

「……妹以外なら私が最初でしょ？」

「まあ、そうだけど」

「ならそれでよしとするわ。行きましよ、先生」

ぶち凹みしながらもデートを継続中。

先生は嫌がるけど、腕を組んで歩くだけで一気にデートっぽくなる。

いいわよね、これがしたかったのよ。

「そういえば、先生の妹ってちゃんと聞いたことなかったけど、どんな子なの？」

「俺の妹……？普通の子だよ」

「お兄ちゃんに抱きつく妹なんて今の時代、滅多にいないから。仲が良いのは知ってるけど、あまり先生から聞いたことない」

分かってるのは仲がいいことだけ。

写真は見たことあるから顔は知ってる。

大人しそうで可愛い美少女でした。

「前にも言ったかもしれないけど、年齢は梨紅ちゃんより年上。高校1年生なんだ」

「……性格は？姉の美鶴さんみたいな感じ？」

「うちにもうひとり、あんな人がいたら俺は逃げ出してるね。唯一の良心と言ってもいい。うちの美鶴姉ちゃんが悪魔なら、妹は天使だろうな。姉ちゃんとは似ても似つかないくらいに可愛いし、素直

だし、それに何よりも俺に優しいからさ」

先生が美鶴さんにどれだけ虐げられて怯えているのかだけはよく分かった。

……先生、可哀想。

「先生の妹か。一度くらい会ってみたいかも」

私は何気に言った台詞に先生は「会ってみたい？」と乗ってくる。

「え？そうだけど、会えるの？確かかなり遠くに住んでるんだよね？」

「まあ、実家は遠いけどな。春休みにこっちにくるって聞いてる」

先生の話によると、両親が2週間ほど海外旅行へ行くらしくて春休み中は先生の家で妹さんがお泊りするらしい。

「そつか。それじゃ、先生の妹さんにも会えるんだ」

「機会くらいなら作るよ。仲良くしてくれるといいんだが」

先生が好きとか言うなら仲よく出来るか分からない。

美鶴さんという姉を見ているせいか、妹さんってどんな人なのか想像できない。

「きゃっ!？」

先生がいきなり足を止めるので抱きついていた私は足をとめる。腕に抱きつく力を緩めて私は不満気に、

「もうっ、いきなり立ち止まらないでよ！」

「ごめん。この店ってクレープが美味しいらしいけど、よっていく？」

彼が指をさした先にはクレープ屋さんがある。

最近出来たばかりのお店で私はまだ来たことがない。

「うんっ、行こうよ」

「それじゃ決まりだ」

先生と一緒にお店に入り、私は生チョコのクレープを注文する。

種類が豊富で色々と悩んだけど、美味しそうな見た目に惹かれた。

「梨紅ちゃんってチョコ系好きなんだ？」

「甘いのなら全般は好き。先生は……？」

「俺も好きだ。苦いのは少し苦手かな。これにしよう」

先生はイチゴのクレープを注文、甘いもの好きなんだ。

私は前回のビターチョコ事件を思い出しながら、あの事件を繰り返さないように尋ねる。

「大河先生って嫌いなものはあるの？」

「苦めのもの以外なら大抵は好きだよ。あっ、辛いのもダメかな」

「甘党派なんだ。男の人ってそういうの苦手だと思ってた」

「俺は結構好きだよ。今度、美味しい店に連れて行ってあげようか？」

久々に先生と話題がうまくあった。

これよ、こういうのを私は待っていたの。

私が頷くと先生も何だか嬉しそうだ。

「ああいうお店ってひとりじゃ入りづらいからさ」

スイーツ専門店とかって男の人ひとりだと浮いてしまうのも事実。私達は出来上がったクレープを近くの駅前広場でベンチに座りながら食べ始める。

甘くておいしい、噂通りに味も良くて満足だ。

今日のデートは一通り楽しめたと思う。

今度はもうちょっと甘い展開もありで進行できればいいな。

私はクレープを食べながら先生とスイーツ系の話題で盛り上がる。早くホントの恋人になりたい、その気持ちを強くさせていた。

第20章：初めまして

【SIDE：桐原梨紅】

3月になって早3週間、気付けば中学2年も終了。

春休みが開ければ中学3年生、受験シーズンに突入。

勉強は大して好きじゃない、成績は数学以外は悪くないけどね。そんな嫌な雰囲気を感じつつ、私は春休み初日、繁華街にいた。

「……ふわぁ」

春休みに入っただけの春休みのある日、小さく欠伸をしながら出てきたのは映画館。

暗い所から出て来るとなぜか欠伸したくなる。

今日は前から見たかった映画の公開初日。

人気小説を映画化した話題の恋愛映画で楽しみだった。

大河先生も誘ったけれど、今日は用事があるらしくて断られてしまった。

仕方ないのでひとりさびしく映画を見てきたばかりだ。

「映画は楽しかったなあ」

前評判通りに面白くて満足できる映画だった。

「先生と一緒にならもっと楽しめたのに。残念」

せっかくいい映画だったので、大河先生と一緒に見たかった。

楽しいものは好きな人と共有したいと思うのは当然よね。

先生と出会ってからもう2ヶ月、私の頑張りのおかげでちょっと

は距離は近づいた。

ホワイต์デーにも先生は私をデートに連れて行ってくれたもの。
このまま順調にいけば恋人になれるかもしれないって期待はある。
でも、先生に私を好きにさせるにはどうすればいいの？

基本的に年上好き、こればかりは私が生まれ時代を間違えたと後悔するしかない。

大人の魅力を身につける？

それも、背伸びして頑張った所で本物の魅力には到底及ばない。

「好きな人に認めてもらうのって大変……恋愛って難しい」

恋をした事はこれまでも何度かあった。

けれど、その全てを本気で恋に落ちたことがなかったの。

大河先生だから本気で恋に落ちた、なんてね。

ただの憧れを恋だと思っていた年頃からちょっとは成長しただけ。

「……お腹空いた、どこかで食べて帰ろうかな」

時計を見るとお昼時、朝から映画を見ていたからちょうどいい時間帯だ。

駅前付近をいいお店がないか私はうろつくことに。

お気に入りの喫茶店はお客さんが一敗だったのであきらめて第2候補の方へと向かう。

その途中、私はとある少女に気づいた。

人通りの多い駅内をあちらこちらを見渡して困り果てた女の子。

「……どうしましょう？」

携帯電話を見つめているのは可愛い女の子の人。

歳は私よりも上くらい、高校生かな。

大きな荷物を抱えながら駅で迷子になってる雰囲気だ。地方から来た子なんだろう、っていうのは見て取れる。

「どこかで見たことがある気がする」

私は？と思いながらも、彼女に目を向ける。

うーん、どこだっけ？

モデル並みに綺麗なので、雑誌か何かで見たのかも知れない。

あー、でも、あんな可愛い子がああいいう仕草してたらマズイかも。私の危惧通り、彼女の様子を伺う怪しい男の人たちが。

いるんだよね、助けようとしたふりでナンパする性質の悪い男つて。

変に絡まれても可哀想だし、私が声をかけてあげようとする。

「……あの、どうかしたんですか？」

彼女は私に気づくと「すみません」と尋ねて来る。

「初めて来たんですけど、迷子になってしまつて」

彼女は苦笑いをして、私に道を尋ねて来る。

だけど、駅の乗り換えでもなければ観光案内でもないようだ。

「東京駅まではちゃんとこれたんですよ。でも、目的地がよく分かんなくて」

「どこに行きたいんですか？」

彼女が答えのはこの駅じゃなくて、隣の駅の名前だった。そりゃ、迷子になるよ、だって目的地じゃないんだもの。

「え？ここじゃないんですか？」

「はい。間違つて降りちゃったんですね。この駅は乗り換えで、目的地は隣の駅です」

「また間違えてしまいました。ちゃんと確認したんですけど、いつもしちゃうんです」

迷子になるのは日常茶飯事らしい。

彼女は反省した様子で携帯電話を取り出す。

「誰か待ち合わせでもしてるんですか？」

「兄が迎えに来てくれる予定なんです。……あら？」

彼女は携帯電話を見て気づく。

タイミング悪すぎ……画面には電池切れ表示されていた。

これでは誰も助けも呼べない、電話番号も覚えてなさそうだから無理そうだ。

「今から次の電車に乗るしかなさそうですね。……ん？」

私はその女の子の顔をジッと見つめる。

どこかで見たことがある美少女の顔。

そうだ、思い出した！

「あ、あの……もしかして、お兄さんって大河って名前じゃ？」

「そうですけど？私の兄を知ってるんですか？」

きよとんとする彼女、私は思い出していた。

それは先日の大河先生の家で発見した抱擁シーンの写真事件。

あの時に写っていたのが彼女だったんだ。

一時期一方的に敵視していたのでよく覚えている。

それに先生からは妹さんがこちらに来るような話も聞いていたから間違いない。

「大河先生は私の家庭教師なんです。それなら話が早いわ。待っていてください」

私が大河先生に連絡してみると案の定、彼は隣の駅で妹さんを待っていた。

今日のデートを断ったのはこれだったんだ。

『は？俺の妹？何でそっちにいるんだ？全然こっちに来ないのに』

「迷子になったんだって。どうしよう？そっちに行くように言えばいい？」

私はこちらの駅にいる事を報告すると、彼は唸りながら、

『……時間通りに来ないからそうじゃないかって思ってた。悪い、梨紅ちゃん。その子、捕まえておいて。かなり方向音痴だから放っておいたらまた迷子になりかねない。そうだ、駅前の喫茶店あるだろ。この間、一緒にいた所。そこで待っていてくれ』

「分かった。そうするね」

『適当に何か注文して食べていいよ。支払いは俺がするから』

彼はそう言って電話を切った、すぐにこちらに来るそうだと。
ということなので、私達はそちらに移動することに。

私としては元の予定通りなので気にせず彼女を連れていく。
お店はそんなに混雑していないのですぐに入れた。

席に座って適当に注文してから私達は改めて自己紹介合う。

「お世話になりました。私は日野希美（ひの のぞみ）。大河兄さんの妹です。まさか大河兄さんの知り合いにあえるなんて……」

「はじめまして、桐原梨紅です。さっきも言いましたけど、大河先生は私の家庭教師をしてくれているんです」

「話は聞いたことがあります。中学生の子を教えているって……偶然ですけど、本当に助かりました。ホント、地理に弱くて……よく迷子になるんです」

照れくさそうに笑う彼女。

先生との約束の駅は先生の家に近いけど、ここからそんなに離れていない。

乗り換える時に間違えて降りちゃったんだろう、多分。

先生が捕まえておいてって言うからには相当なんだろうな。

私は注文したカルボナーラを食べ始める。

前に先生にオムライスをお勧めをしたらけど、ここはカルボナーラもおいしいんだって。

食べてる姿も絵になりそうな儂げな美少女。

見た目は大人しそうな感じがする……悪いけど、美鶴さんには似てない。

あれが悪魔なら希美さんは天使って感じ、先生もいい子だって言ってたもんね。

「……大河先生の妹っていうことは、あの美鶴さんの妹さんでもあるんですね？」

「そうですね？ 姉さんとも会ったことがあるんですか？」

よく意地悪されてます、とは言えない。

だって、美鶴さんってホントに私に意地わるばかりするんだもん。

「姉は少し個性的な方なので大変でしょう？」

「……大河先生が一番大変そうですね」

「ふふつ。あれはあれで愛情表現なんですよ。姉さんは兄さんの事、かなり気に入ってますから」

そういう問題なのかしら？

弟想いのお姉さんには到底見えないけど、希美さんが言うからには違いないだろう。

希美さんって大河先生とも美鶴先生とも雰囲気は全く違う。

何ていうのかな、穏やかで優しくそんな感じは先生に似てるけど、おっとりすぎてドジっ娘的なところもありそう。

「春休みの間、こちらでお世話になるつもりなんです。梨紅さんも機会があればぜひ家に来てくださいね」

どこかの悪魔の妹とは思えない穏やかさ、妹さんの方はいい人そうだな。

希美さんか……大河先生の妹で歳も近いので仲良くできればいいなあ。

第21章：天使降臨？

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生の妹、日野希美さん。

ものすごくおっとりしている大人しそうな女の子。

美鶴さんとは全然違う印象に私は驚いていた。

姉妹なのに似てないなあ。

最初はお互いに緊張していたので敬語口調だったけれど、話し合ってるうちに普通の口調で話し合えるようになっていた。

と言っても、希美さんの敬語口調は地らしくてあんまり変わらないみたい。

私が口調を戻しても気にすることなく受け入れてくれる。

「希美さんって高校生なんだよね？」

「そうですよ。次で高校2年生になります。梨紅さんは？」

「中学3年生。来年受験だから、大河先生にお世話になってるの」

食後、私達は紅茶を飲みながら大河先生を待っていた。

バイクでこっちに向かっているらしいから、あと10分くらいで来るかな？

「……先生、ですか。兄さんのことを先生って呼んでいるんですか？」

「え？あ、うん……？」

「兄さんをずいぶん慕われているんですね」

兄妹仲がいいから気になるのかな？

特に気にすることなく私は「うん」と頷く。

「希美さんって大河先生とは仲がいいの？」

「いいですよ。小さい頃から甘えていましたから。兄さんって本当に優しいんです。女の人相手だと特に優しくて嫌がることひとつしませんから。地元でも女性のお友達が多かったです。ただ、いい人すぎて恋人はいませんでしたけどね」

先生って小さい頃から女性に弱そう……。

いい人発言でさらに先生が可哀想に思えてきた。

「兄さんの事を聞いてもいいですか？あんまり電話では聞けないので」

「私が知っている事ならいいけど？」

「大河兄さんって恋人とかできました？その辺、尋ねても教えてくれなくて」

大河先生の恋人……と言えば、思い浮かぶのはふたり程度。もちろん、誰とも付き合っていないけど気になる人はいい。

「恋人じゃないけど、仲のよさそうな人はいるよ」

「どなたです？」

「先生の住んでるマンションの近くに住んでる可憐さんって女の人。先生の恋人って雰囲気じゃないけど、ものすごく親しい」

私も何度、関係を疑ったか。

可憐さんと先生って何気に信頼しあってるし、きっかけひとつで深い関係になりそう。

私の味方っぽい立場っぽいことを言うけど油断はしちゃいけない相手だ。

「……他にはいませんか？」

「え？あとは……私も直接会ったことないけど、よく話題に出るのは沢崎さんかな。先生のアルバイト先の年上美人で、以前にも合コンであっただって。先生も気に入っていたみたい」

沢崎さんって名前だけは出るけど、実際に会ったことはない。

美人だって噂は聞くんだけど、先生のアルバイト先の焼き肉屋さんには行ったことない。

行く機会もないので中々会う機会もないんだよねえ。

一度くらいその顔を見ておきたいな、ライバルとして。

ママでも誘って連れていってもらおうかな？

「合コンですか。大河兄さんも大学生ですからそういう機会があってもおかしくないです……。個人的にはあまりして欲しくありませんが。それにしても、兄さんも大学に入ってから女性の縁には恵まれている様子ですね」

私も含めてね、なんて心の中で言ってみたりする。

高校時代はあんまりモテなかったみたいだけど、先生って優良物件だと私は思ってる。

話をしていたら先生から「あと少しでつく」とメールが来た。

「美鶴さんと大河先生がこっちに来てるってことは家ではひとりで寂しくないの？」

「寂しいですね。去年までは兄さんがいてくれましたから。梨紅さんには兄妹は？」

「いない。一人っ子だから。寂しいとか感じた事はないけど、慣れていたなら寂しいんじゃないかなって思ったんだ」

希美さんは大河先生を慕っている様子なので気になったの。

「……梨紅さんは大河兄さんの事を色々と知ってるみたいです。仲いいんですか？」

「私？私は……」

ここで希美さんを味方につけておくのもいいかもしれない。

私達の関係を話しておけば、美鶴さんみたいなことにはならない。

「先生には家庭教師としてお世話になってる。それに、何度か遊びに連れていってもらったこともある。私、先生の事……」

先生が好きだと言おうとしていた。

それが言えなかったのは希美さんの瞳が真すぐに私に向けられていたから。

「お、お兄ちゃんみたいになって……。あれかな、兄属性って持つてるのかもね」

誤魔化すのが精いっぱいでは紅茶を飲み干す。

何だろっ、この違和感……？

さっきまでと違うような気がする。

「そう……。貴方も“そのひとり”でしたか」

そうつぶやくと、彼女も紅茶のカップに静かに口づけた。
そのひとりって何のこと？

「……まあ、そうですね。最初に疑っておくべきでした」

意味深な事を言い、こちらをうかがうような視線を向け続けられる。

「希美さん……どうしたの？」

私の疑問に答えるように彼女は言った。

先ほどと違い、彼女はのんびりとした口調ではなく落ち着いた口調で言う。

「梨紅さん。ぶしつけなことを聞いてもいいですか？」

「いいけど？」

「——私の兄さんのこと、好きですか？」

彼女の浮かべた微笑みに背筋がゾクツとする。

殺気をはらんでる気がしてもものすごく怖い、ドキドキ……。
き、気のせい、気のせいだね？

「……えっと、何でそんな質問を？」

「兄さんと親しそうな人物には必ずする質問です。挨拶代わりみたいなものですね。深い意味ではありませんよ。それで、どうなんですか？恋愛の意味において好きですか？」

変な危機感を抱いた私は誤魔化すように首を横に振る。

気のせいじゃないよ。

このバチバチって言う雰囲気、空気が違うもん。

先ほどまで迷子になってたドジっ子さんには思えない。がらりと変ってしまった雰囲気、圧倒されてしまう。

「知り合って、まだ2ヶ月しか経っていないから……？」

「そうですね。でも、兄さんって優しいですから。気を付けてくださいね」

その笑顔に威圧感を抱く私は何度もうなずく。

「な、何で……私にそんなことを？」

「理由ですか？ただの警告です」

「警告……？」

「——大河兄さんは“私だけ”のものですから覚えておいてください」

めっちゃ怖っ！？

張りつめた空気に寒気がする。

穏やかな微笑みがこれほど怖いとは思ったことがない。

「……私、分かるんですね。兄さんに好意を抱いている人って」

「そ、そうなんだ？」

「ええ。梨紅さんは“違う”みたいでホツとしました。可憐さんと沢崎さんでしたか？その二人は気になりますね……家の近所さんとアルバイト先の先輩。どちらも簡単に会えそうですね」

会ってどうするつもりなのっ！？

兄を慕う妹、その構図は単純なものじゃなさそう。

兄に近づく女は全て排除するみたいな言い方が怖い。

ただのブラコンじゃないってこと？

「変な意味ではないんですよ？ごめんなさい、誤解しないでください」

……変な意味じゃないならどういう意味なんだろう。

「2週間ほどですが、梨紅さんと仲良くしたいです。梨紅さんとは仲良くやれそうな気がするんですよ。連絡先、教えてもらってもいいですか？梨紅さんとはいいお友達になれそうです」

私は無言で頷いて連絡先を交換し合う……何か畏にハマった予感。ふえーん、やっぱり美鶴さんの妹さんだよ、この人。

この場にいるのが怖いので私は先生が来るのを切に望む。

天使は天使でも、希美さんは“墮天使”っぽいです。

何か企んでそうで怖いよお……。

大河先生、お願いだから早く来て〜っ！！

第22章：天使のワルツ

【SIDE：日野大河】

妹の希美がこっちに来るので駅まで迎えに行っていた。

今日から2週間程、こちらに滞在する予定になっていたのだが。

「……遅いな」

予定の時刻から10分経過。

乗っているはずの電車は既に去り、約束の時間を超えていた。乗り過ごしたか、乗っていないかったのか。

携帯電話に連絡しても希美は出ず。

「また迷子になっていなければいいんだがな」

子供の頃から方向感覚が悪く、迷子になってばかりの妹だ。

今回も、地方から東京に出て来ることを心配して、電車の乗り換えが最小限にすむようにこちらで調べて彼女に教えた。

あれで大丈夫だと思ったのが間違이었다。嫌な予感つてのは当たるからなあ。

「まあ、もうしばらく待ってみるか。迷子になったら連絡くらいしてくるだろ」

俺は手持ちぶさに駅内のコンビニの雑誌を読みながら妹が来るのを待ち続ける。

さらに20分経過、雑誌にも飽きてきた頃だった。

俺の携帯にようやく連絡が入ったと思って出て見たら、電話相手

は梨紅ちゃんだった。

今日は映画を見に行こうと誘われたが、希美の件で断ったんだよな。

何だかご機嫌ななめだったので、俺はちよつと警戒しながら電話に出る。

「どうした、梨紅ちゃん？」

「あのね、先生。前に妹さんがいるって話をしていたでしょ？」

「ああ。今日はこっちに来るって事になってるんだ」

「その妹さん、今、私の目の前にいるよ？」

梨紅ちゃんの発言に俺は「マジで？」と驚く。

「は？俺の妹？何でそっちにいるんだ？全然こっちに来ないのに」

「迷子になったんだって。どうしよう？そっちに行くように言えばいい？」

予想通り、希美の迷子癖が発動していたらしい。

隣の駅ならまだ反対の方角に行ったとかじゃないだけマシだ。

「……時間通りに来ないからそうじゃないかって思ってた。悪い、梨紅ちゃん。その子、捕まえておいて。かなり方向音痴だから放っておいたらまた迷子になりかねない。そうだ、駅前の喫茶店あるだろ。この間、一緒にいた所。そこで待っていてくれ」

「分かった。そうするよ」

梨紅ちゃんに出会えたのは偶然だったが運がよかった。
面倒見のいい彼女ならば、妹を任せておける。

「そっぴや、前に写真見られたことがあったっけ」

初対面で妹だと見ぬいた梨紅ちゃんはすごいと思いつつ、俺は急いでバイクに乗った。

ここから隣の駅はバイクで15分程度、渋滞さえなければスムーズにいける。

「しかし、あの子の迷子癖も直らないな」

どこかに出かけたら確実に迷子、家の近所ですらも怪しい。
方向感覚が悪いというか、本当に迷子になるのが癖って言うのは厄介だ。

それ以外では我が妹ながら非の打ちどころのない女の子だと言えるよう。

美鶴姉ちゃんが黒色ならば、希美は汚れなき白色。

存在そのものが純白、天使のように優しく穏やかで癒される素晴らしい女の子だ。

姉ちゃんみたいに無意味に暴力振るわないし、怖くない。

まったくもって、姉に似ないで欲しいと切に願うばかりだ。

悪魔の姉と天使の妹。

両極端な姉妹に囲まれた真ん中の俺は普通でよかったと思う。
早く我が家に希美を迎えたいものだ。

そうすれば、寝ている時ですら恐怖を覚える姉ちゃんから解放される。

やっぱり、癒されキャラってのは必要だと改めて感じた。
こうして普段は離れて暮らしていると妹にどれだけ救われていた

とか、あの姉はいかに弟を苛めてやろうかしか考えていないとか思うわけ。

「それにしても、いつも思うが、姉ちゃんと希美って似てないよなあ」

容姿がどちらも美人なのはいいでしょう。

だが、性格においてここまで両極端なのはもはや血が繋がっていないのでは？

「……なんて、そんなわけないが」

希美はともかく、美鶴姉ちゃんとも残念ながら実姉弟だ。

これで妹が実は義妹だったなんて展開だったら嬉しいね。

俺は別にシスコン気味ではないが、希美に関して言えば、ああいう子が恋人になってくれると人生においてすごく幸せに生きていけると思うのだ。

逆に美鶴姉ちゃんとは悪い意味で義姉でありたかったが（本人には言えない）。

特に混雑もなく道路もすいていたので、予定通りの時間に俺は駅に着いた。

バイクを止めて、俺は梨紅ちゃんと希美が待っている喫茶店に向かう。

駅ビルの中にあるお気に入りの喫茶店。

そこにふたりはいたのだが……。

「へーっ。梨紅さんって彼氏いないんですか？意外ですね。お付き合っている人とかいそうですね。 “好きな人” は？」

「ま、まあね。うん、今、その、好きな人は……」

いつものように優しい笑みを浮かべる天使、希美。

それと裏腹になぜか強張った顔をして怯える小悪魔、梨紅ちゃん。ふたりに何があったのだろうか？

というか、いつもの梨紅ちゃんらしさが無いぞ？

「好きな人” いないんですか？」

「それは、だから、そのね？いる、というか、いないというか……」

しどろもどろに話している彼女。

うーむ、この手の女の子の話題に俺がいきなり登場するのはどうだろうか？

空気を読みたいが、まあ、タイミング悪くても来てしまったのは仕方がない。

「やあ、お待たせ。梨紅ちゃん、助かったよ。希美、無事にこれだよかったな」

俺がふたりに声をかけると、梨紅ちゃんはあからさまにホッとした顔を見せる。

……だから、何があったというのだ？

「大河兄さんっ！お久しぶりです」

「正月休み以来だからな。元気そうだなにより。しかし、いつも通

り迷子になるとは……本当に希美らしいね？」

「すみません。気をつけていたんですけど。携帯も電池が切れてしまいましたから。あっ、私を助けてくれたのは梨紅さんです。大河兄さんの家庭教師の生徒さんなんですよ？本当に助かりました」

「俺も助かったよ。梨紅ちゃん、ありがとうな」

俺がお礼を言うと彼女は「うん」と小さく頷く。
いつもの元気がないのは気のせいだろうか？

「大河先生の部屋で前に写真みたことがあったから」

「へえ……兄さんの“部屋”で？」

「ち、違うのっ！？えっとね、これはね、変な意味じゃなくて……」

梨紅ちゃんが慌てて否定する姿に俺は首をかしげるだけだった。
俺も軽く食事とってから喫茶店を出る。

どうにも様子がおかしかった梨紅ちゃんは最後は疲れたようにぐったりとして、

「そ、それじゃ、またね。先生」

と、言っただけで足早に駅ビルの方へと去っていった。
何か悩みでもあったんだろうか、梨紅ちゃん？

思春期真っ盛りのお年頃、悩みの一つくらいあるだろう。

ここは年上のお兄さんとして、今度の家庭教師の時に相談にでも乗ってあげるとしよう。

「それじゃ、俺達も帰るとしようか」

「はいっ」

俺達は止めてあつたバイクに乗って自宅へと帰ることにした。

家につくと希美は「姉さんは？」と尋ねて来る。

「姉ちゃんなら買い物があるって出ているぞ」

「そうですね。美鶴姉さんとふたり暮らして大変そうですね」

その発言には俺は苦笑いをしておく。

一応、言っておくと希美も姉ちゃんの事が苦手だったりする。

姉ちゃんもさすがに希美相手に暴力沙汰はないのだが、変なところで厳しいところがあるからなあ……。

「また兄さんたちと一緒に生活出来て嬉しいです。兄さんたちが家にいなくなつて当たり前のことが当たり前じゃなくなったこと、すごく寂しかったんですよ」

「まあ、進学だから仕方ないだろ？」

「そうですね……兄さんもあんまり電話とかしてくれませんか。寂しいんですよ？」

可愛く拗ねている希美。

俺は頬をかきながら「電話くらいするようにするよ」と照れくさく言う。

やっぱり妹っていいなあ、と実感しながら俺は部屋の扉を開ける。案の定、姉ちゃんは帰ってきていないようだ。

「一応、姉ちゃんの部屋で希美は生活してもらう事になってるから」

「……大河兄さんの部屋じゃダメなんですか？」

「そう言う事は言わないでくれ。姉ちゃんに潰されるから」

「はいっ。ごめんなさい。ふふっ、相変わらず、美鶴姉さんには弱いんですね」

妹にからかわれて俺は「あれには勝てん」と嘆きながら、

「希美、久しぶりなんだから今日は外食でもしようか？何が食べたい？」

「そうですね……。そう言えば、兄さんって家庭教師以外にもアルバイトをしているって聞きましたけど？」

「ああ。焼き肉屋でバイトしているぞ」

「それじゃ、そのお店でもいいですか？兄さんがどういう場所で“どという人”と一緒に働いているのか見て見たいです」

希美に言われて俺はちよつと困る。

今日のシフトだと沢崎さんもいるはずだが……それよりも、自分のバイト先で食事っていうのはどうにも落着かないんだ。

「ダメですか？何か問題でも？」

「ん。いや、いいよ。希美がそう言うのならそうしよう。俺も客としてあのお店を使うのは初めてなんだ。バイト仲間とか、ちょっと恥ずかしいけどな。味は美味しいと評判の店だぞ」

「よかった。早く姉さんも帰ってきて欲しいです。3人で食事するの、楽しみです」

笑顔の希美に俺もつられて笑みを見せた。

その時の俺はまだ希美が何を考えているのか理解していなかった。彼女が滞在する間に起きる事件についても……。

その時の俺は「やっぱり、希美は可愛いなあ」とシスコン兄貴的な感情を抱いていただけだった。

第23章：愛ゆえの暴走〈前編〉

【SIDE：日野大河】

こちらにやってきた希美と一緒に食事へ行くことにした。
美鶴姉ちゃんは買い物中なので、駅前で合流することに。

「さあて、それじゃ行くか」

「はい、兄さんっ」

部屋を出るや、俺の手を握ってくる希美。

いや、これは変な意味ではなくてですネ。

いわゆる仲のいい兄妹ならではの約束と言いますか。

女の子の手ってホントに細くて柔らかくて最高です。

……違うんだ、妹に手を握ってもらっただけで喜んでどうする、俺！？

希美は可愛いが妹なのだよ、頑張れ、俺。

「どうしたんですか？」

「んにゃ、何でもないです」

ちょっと反省しつつも、拒む理由がないので手は繋いだままだ。

マンションの外に出ると自転車に乗っている可憐に会おう。

嫌なタイミングで嫌な相手に出会ってしまった。

妹と手を繋いでる俺〓シスコン兄貴〓変態？

マズイ、ここは何としてもいいワケをして……。

「大河クン？あら、今日は女の子連れ？可愛い子じゃない」

「あ、ああ。まあね」

「もしかして、恋人？ついに春が来たの？」

「その言い方はどうかと思うが……恋人？」

なるほど、普通に見れば兄妹というより恋人的なイメージに見えるのか。

……何が「なるほど」なのか、よく分からないが。

とは言っても、可憐相手に嘘ついたら後が怖くて面倒だ。

ここは素直に妹だと言っておくことにしよう。

「実はだな、可憐……」

「可憐……？もしや、この方が大河兄さんの近所に住んでいる親しい大学の同級生？」

「初対面の子にそこまで詳しく関係を言われたのは初めてよ。誰なの、大河クン？」

何で希美が可憐の事を知ってるんだろう？

あつ、梨紅ちゃんと話をしていたからその時に聞いたのかもしれない。

「紹介するよ、俺の妹の希美だ。春休みを利用してこちらにきたばかりなんだ。希美、彼女は俺の友人の可憐だ」

「はじめまして、可憐さん。希美と言います」

「へえ、大河クンの妹さんかあ。美鶴さんに似て美人な子ね？兄妹そろって仲良くお出かけ？ふーん。大河クンって恋人いないけど、美人な姉妹に囲まれていれば自然と女の子を見る目も厳しくなるわるわけか」

可憐は嫌味っぽく言いやる。

俺が恋人ができないのは性格のせいだと知ってるくせに意地悪な奴だ。

「可憐さんと大河兄さんは仲がいいのですか？」

「え？私と？別にそんな深い仲でも何でもないわよ。同じ大学の同級生でご近所同士のお付き合いがある程度なの」

「……本当にそれだけですか？」

「本当だけど……？」

希美は可憐をジーツと見つめる。

この子の癖みたいなのだろうが、昔から俺が紹介した女友達とかはよくこうして見つめるんだよな。

俺の交友関係についてしっかり見てくれているのだろうか？

「あれ、しまった。財布を忘れた。すまん、希美。ちょっと取ってくる」

「はい。分かりました」

「可憐。悪いが俺が戻ってくるまで希美を見ていてくれ」

「いいけど？確かにこの辺、最近は治安が悪いけど、そんなに心配することないでしょ？変質者も昼間は出てこないわよ」

「希美をナンパするバカはいるかもしれんだろうが」

俺の発言に可憐は口元を押さえながら笑う。

「……大河クンってシスコンよねえ。美鶴さんの事を含めて」

「違うっての」

何で姉ちゃん込みなんだ、希美はともかくそれは断じて違つと否定させてもらつ。

「いいわ。少し話してみたいし。希美さんって……」

別に冗談ではなく、ホントにここ最近のこの近所は治安がよろしくない。

変質者っぽい人間がうろちろしていると警察も警戒してるくらいだ。

変な事件とか起きなきゃいいけどな。

「さつさと財布を取りに戻るか」

横目で会話する希美と可憐を見ながら俺は再びマンションに戻つた。

俺が財布を取って戻ると、なぜか可憐は気まずそうな顔をしていた。

……はて、何だかデジャブを感じるような？

そうか、梨紅ちゃんだ。

確か梨紅ちゃんも同じような顔をしていたっけ？

「あつ、大河クン。おかえりなさい……。わ、私、もう戻るね。それじゃ」

梨紅ちゃん同様に逃げるように去る可憐。

なぜだろう、お兄ちゃんとしては妹が何か不手際をしたのか心配です。

なんてね、希美がそんな真似をするはずもない。

大方、関西圏出身者と関東の人間では初めて会った時に会話があいづらい、あの微妙な距離感の問題のせいだろう。

不思議なことに関西人と関東人って初対面で仲良くなるには大変なのだ。

文化の違いだろうか、どうにもうまくいかないことが多い。

さて、帰ってしまった可憐を俺は「何だろう？」と疑問に思いながら、希美に言う。

「ふたりで話でもした？」

「兄さんのお話を少しだけ。ずいぶんあの方は兄さんを信頼してるんですね」

「可憐が俺を信頼？ホントかよ、俺にはそんな素振りを見せたことないって」

「……素直になれなさそうな方ですから。内心はどうでしょう。ただし、私の“敵”ではありませんけど」

意味深に希美は言う、再び俺と手を繋いで歩きだす。
敵って何だろう……仲良くなれるとかそっという話？

「そろそろ行きましょうか。あまり姉さんを待たせては不機嫌にさせてしまいます」

「断言できるぞ、絶対に待ってない。むしろ、待つのは俺達の方だ」

「……姉さんならありえますね」

さすがに希美も美鶴姉ちゃん相手にはフォローできないようだ。
我が道を行くタイプの姉を持つと苦労するのである。

「それにしても、希美。成長したな？」

「分かります？ふふっ、こう見えてちゃんと成長してるんです」

胸を強調して微笑む希美。

うむ、中々に成長してますね……っ、違うっ！？

さすがに妹の発育具合に何か言っただけ俺も変態ではないのだ。

「……誤解がないように言っただけ俺が言ったのは身長のことなのだが」

「分かってますよ。冗談ですっ」

可愛く小さく舌を出して彼女は言う。
ホント、可愛い自慢の妹です。

……美鶴姉ちゃんには似ないでホントによかった。

第25章：愛ゆえの暴走〈後編〉

【SIDE：日野大河】

バイト先での焼き肉店では沢崎さんには会えず、なぜか希美がっかりしていた。

沢崎さんの事まで知っていたのは驚いたが、梨紅ちゃんから聞いたと彼女に言われて納得もしていた。

「大河兄さんと“関係”のある人には挨拶しておきたかったんです」

いわゆる「常日頃、兄がお世話になってます」とかだろうか？
ホントに出来た妹である、いい子だよな、希美。

「あつ、大河兄さん。家に帰る前にアイスでも買ってきていいですか？」

「いいよ。それじゃ、俺達は待つてるから」

コンビニ前で希美を待ちながら俺は美鶴姉ちゃんに問う。

「……姉ちゃん、どうかした？」

今日の姉ちゃんは妙に黙ったりして変に怖い。

普段から暴言吐いてる方が黙られるよりはマシかもしれない。

「いえ、別に。あの子の事だからこうなるとは分かっていたけど……既に被害は2人、さっきは未遂に終わったとみるべきか。梨紅さん、可哀想。本当に私の妹ながら怖い子よねえ」

「何の話をしてるんだ？」

「大河に言っても無意味だろうから言わない。ホント、希美は嫌な所だけ私に似てるわ。裏表あるところとか」

「……希美に謝れ、姉ちゃん。それは失礼すぎるだろう」

我が妹はお姉ちゃんと違い、可愛く素直で純粋な子です。

「その原因のひとつはこのバカ大河の過保護のせい。大河に自覚させてあげたいけど、本性を見て実感しなきゃ私が何を言っても意味はない。どうにかして思い知らせてあげたいわね」

姉ちゃんはぶつぶつと呟きながら、俺にびしつと指をさす。

「……まあ、いいわ。大河、忠告だけしておいてあげる。希美の事をどう思う？」

「今も昔も変わらずに天使だと思うが？」

「アンタの天使、希美って実は2面性があるって言ったら信じる？」

「2面性？そんなの誰だってあるだろう？偉い人の前で大人しくなるとか、そういうのだろう。別に普通の事じゃないか」

姉ちゃんは深くため息をつきながら、頭を手で抱える。

「……純粋な意味の好意ならいいんだけどね。あの子の場合は純粋を通りこして悪意になるから怖いよ。純粋な好意か、悪意ある敵

意か。大河、希美の行動に気をつけなさい。アンタの大事なものを傷つけるかもしれないわよ?」

「姉ちゃんに気をつけることはあっても、希美が俺に何かするはずない。ぐわあ!？」

俺の余計な一言が気に障ったのか、姉の一方的な暴力に俺は倒れていた。

希美に気をつけなければいけないことなんてあるはずないだろ？

コンビニから戻って来た希美は好物のアイスを食べながら帰り道を歩く。

美味しそうにアイスを食べる妹に見惚れる。

何をしてても絵になって可愛い子だ。

「美味しいか、希美。アイス好きだからな」

「はい。都会はいいですね。コンビニもすぐ近くにあつて。羨ましいです」

「田舎の実家だとコンビニひとつでも結構遠いからなあ」

「……言うほど、私達の実家は田舎じゃないでしょうに。希美、家に帰ったら部屋の片づけをするのを手伝いなさい」

こちらでの滞在中は姉ちゃんの部屋に泊まることになっている。個人的な部屋が2部屋しかないので仕方ないのだ。

一応、布団は予備の奴を使うので問題はない。

「私、大河兄さんと一緒に寝たいです」

「却下。子供の頃と違うんだから自重しなさい。希美も高校生でし
よう?」

「うう、美鶴姉さんは相変わらず厳しいですね。兄妹なんだからい
いじゃないですか」

希美は拗ねた表情を見せて、俺に甘えるように抱きつく。
アイスは食べ終わったようで、両腕でぎゅっとされる。

「姉さんと違って、大河兄さんは優しいですよ」

「……大河、その妹を引き離しなさい。甘やかせないで」

「そう怒るなよ。せつかくこうして兄妹そろうのって久しぶりだろ
?実家でも中々顔をそろえることってないじゃないか」

大抵、年末に実家に戻った時も、それぞれ、地元の友人と出かけ
たりしていて3人揃うのは何年ぶりかという展開だ。

「アンタの希美への甘さが余計にその子に悪い影響を与えているの
よ」

「そんなことはありません。悪影響なのは姉さんの方ですつ!」

「うぐつ。言うようになったわね、希美。いいわ、今日の夜にたっ
ぷりと説教してあげる。お望み通り、悪影響を与えてあげようじゃ

ないの。その性格から直してあげるわ」

姉ちゃんの怒りを買ってしまった希美は怯えるように、

「大河兄さん、今日は一緒に寝ましょう。お姉さん、怖いんです」

俺に助けを求めて来る妹の力になってやりたいが、残念ながら俺にも姉ちゃんに対抗する手段はほとんどないのが現実だ。

むしろ、対抗策など考えるのも難しい。

「それにしても、大河兄さんとはかく、美鶴姉さんっていまだに恋人のひとりもないんですね。そろそろ、年頃ですし、恋人ぐらい作ってはどうですか？異性を知れば多少はその強引かつ乱暴な性格も改善されるかもしれません」

俺が言えばボコボコにされる恐怖の言葉をさらりと言い放つ希美。怖いもの知らず、というか、何と言うか……実は希美は言う時は言う子なのだ。

姉ちゃんは唇をきゅつと噛みしめて怒りを抑えている様子。

さすがの姉もこの妹相手には結構弱い所があるから反撃しにくい。

「言うじゃない。言うておくけど、私も恋人候補ぐらいいるわよ。付き合わないだけで、気になる相手はいるわ。恋人になるって単純なことじゃないの。恋は難しいのよ」

「その台詞、姉さんの高校時代にも聞きましたね。つまり、あれから成長していない、と。姉さんって恋愛面では本当に大河兄さん以上にダメそうです。あつ、大河兄さんは今の微妙な鈍感ぐあいがいいんですよ？変に敏感だと面白くありませんから」

「……それは褒められているのだろうか？」

微妙な鈍感ぐあいって何だ？

姉ちゃんは俺以下と言われたのがショックらしくて、希美に意地悪し始める。

彼女のほつぺを軽くつねりながら、姉は顔を迫らせて、

「誰が大河以下の恋愛下手だって？これ以下だって言うの、私が？希美ちゃん、あんまりお姉ちゃんを怒らせない方がいいわよ？2週間後、無事に実家に帰りたければね？」

怖っ！？

姉の迫力に怯える弟と妹、この姉はマジで容赦ない。

ふたりに震えあがりつつ、俺達は夜道を歩く姉ちゃんとの距離を開ける。

「痛いです、兄さん。しくしく……美鶴姉さんが苛めてきます」

「可哀想に、希美。大丈夫だったか？」

俺が彼女の頭を撫でてやるとすぐに笑顔を取り戻す。

「……大河兄さん。大好きですよ」

嬉しそうに微笑を浮かべる希美に姉ちゃんは呆れた顔をして言う。

「まるで私が悪人のような言い草じゃない。いじめられたのは私よ？」

美鶴姉ちゃんがこれくらいで凹むはずがない、希美と一緒にしな

いでくれ。

希美の髪は撫でるとふわつとしてとても心地よい。
昔から何か会った時にはこうして撫でてあげると喜ぶのだ。

「アンタ達の仲の良さを見ているとまるで恋人同士ね。兄妹の一線、越えないでよ。さすがの私もふたりを変な目で見た方がいいレベルまで来た気がするの」

「私と兄さんの愛に障害なんてありませんっ」

「……それ、恋愛の愛情じゃなくて家族愛の愛よね？ねえ、希美？」

希美は俺の方へ顔をあげて見つめてくる。

「ちゃんとした家族愛ですよ。私の大事な兄さんですから」

「一応、聞いておくわ。大河が大事なら、私は？」

希美は「ノーコメントにしておきます」と言葉を濁した。
さすがの天使も悪魔の姉にはフォローすらできない様子だ。
俺は家族の触れ合いを楽しみながらしばらくの間、楽しくなりそうだと期待していた。

俺の知らない所で何かが動き出しているとは全く気付かずに。

第25章：警告と後押し

【SIDE：桐原梨紅】

桐原梨紅、14年間の人生で最大のピンチ到来です。

どうしよう、大河先生の妹さんってかなりヤバい人だった。

希美さんは最初はのんびりとしてほのぼのとしている人で可愛い
思っていた。

けれど、大河先生に気がある女の子は敵らしい。

本気で怖かったので私は怯えていた。

あんな一面があるなんて思ってたし。

やっぱり、美鶴さんの妹だと納得もした。

「……でも、放っておくわけにはいかないよ」

私は勇気を出して、今、先生の家の前にいた。

事前に連絡していないけど、どうしても会いたくて。

何て言うか、希美さんの本性を知った今じゃ本人には会いたくない。

だからと言って、無視できるはずもなく。

私は複雑な心境で彼と希美さんにもう一度会おうと決めたの。

チャイムを鳴らすと部屋から出てきたのは美鶴さんだった。

「……梨紅さん？大河に用事でも？」

「美鶴さんか。あ、あの、大河先生と希美さんは？」

「ああ、あのふたりなら出かけてるわよ。今日は仲良くデートだった？」

「で、デート！？兄妹なのに！？」

思わぬ言葉に動揺する私。

それを面白そうに笑う美鶴さん。

うう、また騙された……？

「デート。訂正、街を案内しているわ」

「はう。変な事を言わないで下さいよ」

「別に変なことじゃない。希美本人はデートだと思ってるだろうし。まあ、立ち話もんだから家に入って。お茶くらい入れてあげるわ」

私はリビングのソファに座りながら美鶴さんに尋ねる。

「希美さんって……その、えっと」

美鶴さんは彼女の本性に気づいているの？

私の疑問は向こうから答えてくれる。

「昨日、希美に散々な目にあわされたでしょ？分かってるわよ、あの子の本性っていうのかな。裏の方の顔っていうのをね」

「……意外すぎてびっくりしました」

「小さな頃から大河が大好きなのよ。それゆえに、暴走気味な所があつて……。とにかく、大河に近づく女の子は排除したがるの。過激な意味で。それで泣きを見た女の子は片手で足りない数なのよ」

美鶴さんは呆れた顔をしながら私に紅茶を差し出す。

私はそれを飲みながら、いろいろと希美さんの事を教えてもらった。

「……大河って性格はヘタレでアレだけど、見た目は結構いい男だと思っでしょ？」

「そうですね。大河先生はカッコいい人ですよ」

私が見た目で気に入ったのも好きになったきっかけのひとつだ。

「何で、あの子が高校時代に恋人の一人もいなかったのか気にならない？」

「それは……ずっと気になってました」

先生本人は性格とか言ってたけど、基本的に優しい人だからおかしいとは思ってた。

何かその事にも原因があったのかな？

「裏で希美が暗躍してたのよ。好きになりそうな相手に先制攻撃。ありもしない事を吹き込んだり、梨紅さんが味わった“牽制”を受けたりしてね。暴力じゃなくて、言葉や雰囲気、威圧感つてので相手を追い込むから怖いのよ」

「で、でも、普通のブラコン気味の妹さんってそこまですますか？」

「マジで愛しちゃってるからじゃないの？」

「……それは家族愛ですか？」

違うのは分かってるけど心配なので聞いてみる。
私と同様に美鶴さんの表情も複雑だ。

「それだつたら私も安心できるけど、残念ながら本物の“恋”の方
つばい。“血が繋がっていない”とはいえ、兄妹なのに」

ちよい待って？

今、聞き捨てならない事を言いませんでした？

「え？美鶴さん、今、何て言いました？」

「あははっ、冗談よ、冗談。実は……って言ってみただけ。ホント
の血のつながった兄妹よ、残念ながら。本物の義兄妹なら私も安心
できるけど、本当に血が繋がってるから余計にやつかいなの」

義妹設定とかびつくりさせないで欲しい、冗談にならないから。
よかった、これで血が繋がっていなかったら私の負けは決まっ
ていたかも。

でも、美鶴さんが心配する程、仲がいいんだ。

「とにかく、あの子は大河に関しては一途過ぎるのよ。自分が大河
の一番じゃないと気に入らないし、他に近づく子がいれば牽制する。
そうやって、何人も大河の恋人候補を潰してきたの。それに大河が
気づいていないのがこの問題の大きい所よ」

「先生、気付いていないんですか？」

「大河にとって希美は可愛い妹、自分にとっての天使そのもの。あ
れだけ可愛く懐いてくれる存在がいて、その裏に気づく事なんてあ

るわけないじゃない。私がどれだけ苦労してるか」

私にもしも、優しいお兄ちゃんがいたら……。

考えて見ると、彼女の気持ちは何となく分かる気がする。

ただし、あれだけキツイのはないと思うけどね。

希美さん自身は大河先生には敵意なんてゼロで好意しかない。

それだけに先生が希美さんを警戒する事はない。

うーん、これは何と言うか大変なことになりそうな気がするの。

「希美も大河が絡まなければ悪い子じゃないのよ」

「大好きなお兄ちゃんのためなら容赦はしないんですね」

「それが問題なのよねえ。実兄ラブ〜っ。それって普通にまずいでしょ。希美だっていいいつもまでもブラコンじゃ困るでしょ。姉としては何とかしたいけど、何ともできないわけで……」

希美さんの裏側を大河先生が知れば、彼から直すように言ってもらえるけど、彼女はバレル真似はしないだろうし、大河先生に言っても信じてはもらえない。

手詰まり状態でどうしようもない。

「問題なのは大河の自覚のなさ。もしも、大河が梨紅さんとくっつけば希美も諦めがつくだろうから、頑張って？」

「その代わり、私の命の危機があるのは気のせいですか？」

「……多分」

めっちゃ不安なんですけど？

先生が好きな気持ちは揺るがないけど、積極的に動くのも怖い。そりゃ、これまでの女の子も大河先生を諦めただけあって、一度希美さんと話すと本当に影響力があるの。

「そうねえ。梨紅さんの協力してあげましょうか？大河と恋人になれば、希美も変わるであろつと期待して、本格的に梨紅さんの味方になってあげる」

「……美鶴さんって平気で裏切るから怖いんですよ」

「あれ、私って信頼ない？」

「これまで何回騙されたか。今回こそ、本当に私の味方になってくれますか？」

ショックを受け続けてきただけにすぐに信頼できにくい。

美鶴さんが私の味方になってくれれば、強い味方になるのは間違いない。

「私的には梨紅さんって気にいってるのよ。純粹で騙されやすくて面白いところとか」

「……面白いのは余計です」

「まあまあ、怒らないで。私が積極的に動いてあげれば大河なんてあつというまに梨紅さんのものになるわ」

私の手を握って「頑張ろつね」と笑顔で誘う。

うーん、ちょっと信頼できないけど、美鶴さんが私の協力をしてくれることに。

。だけど、希美さんは私の想像よりも手強くて、怖い人だったの――

第26章：眠れぬ夜に〈前編〉

【SIDE：日野大河】

希美がこちらに来た翌日。

今日の昼に、彼女を街に案内していた時に梨紅ちゃんが来ていたらしい。

姉ちゃんと何か話していたようだが、何をしているんだろうか？
また妙なことを企んでいなければいいのだが……美鶴姉ちゃんが絡むとろくなことがない。

「ふわぁ、眠いなぁ……」

深夜、夜遅くになってから俺は自室のベッドで眠ろうとしていた。
毎週楽しみにしている深夜ドラマを見ていたので時計は夜の2時を過ぎていた。

あいにく、うちにはDVDがないから録画もできないのだ。

「明日は希美と遊びに行くからそろそろ寝るとしようか」

俺は目覚まし時計をセットして寝ようと瞳を閉じる。

コンコンつと控えめなノックの音が聞こえた。

「大河兄さん、希美です。まだ起きてますか？」

「……希美？こんな時間に？」

俺は目を開けて起き上がると、ドアを開けてきたのは希美だった。

「あつ、起こしてしまいましたか？ごめんなさい」

「いや、今から寝ようとしたところだから。どうした、希美？」

電気をつけて部屋に招き入れると彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「その、怖い夢を見たんです。それで……」

「俺の所へきた、と？」

彼女は頷くと俺は「こっちにおいで」と妹を誘う。
実家にいた時もたまにあっただよな。

怖いものが苦手で、嫌な夢を見た時はよく俺のところにやってきたっけ。

「……姉ちゃんは寝てるのか？」

「はい。ぐっすり熟睡しています」

一度眠ったら中々起きないのがうちの姉だ。
悪夢にうなされて怖がる妹の助けにはならないわけだ。

「兄さん、今日はこっちで寝てもいいですか？」

「え？俺の部屋で……？うーん？」

状況が状況だけに断るのは気が重い。
だが、姉ちゃんという恐怖と天秤にかけると難しい。

「——ダメですか、兄さん？」

涙を瞳の端に浮かべながら俺にすがる希美。
可愛い妹の頼みを断る兄がどこにいる？

「いいよ。でも、俺のベッドは狭いぞ？」

「大丈夫です。実家でもたまにしていたじゃないですか」

高校ぐらいまでは希美と一緒に寝るといっなのは時々あった。
その時はまだ希美も子供だったが、今は立派な女の子だ。
すっかり女性らしくなった身体つきに俺はほんの少しだけ意識してしまふ。

この子も成長したなあ……。

「……それじゃ、お邪魔します」

ベッドに入り込んでくる希美は俺の横に寝る。
それほど大きくないベッドだ、ふたりが寝れば多少きつさもある。

「少しだけ寄らせてください」

希美の身体が俺に抱きつく形で触れて来る。
ほんのりと香るのはシャンプーの匂いか？
よく見れば髪の毛が濡れているようにも見える。

「シャワーでも浴びたのか？」

「あっ、はい。寝汗をかいてしまったので……汗臭くないんですか？」

「全然。むしろ、いい匂いがする」

女物のシャンプーの香り、美鶴姉ちゃんが使っているものだ。
俺がそう言っていると希美は照れながら、

「や、やだ、兄さんっ。もうっ、恥ずかしい事を言わないでください」

恥ずかしい事か？

希美の手に触れると僅かながら震えている。

「まだ怖いのか、希美？」

「……ちよつとだけです。本当に嫌な悪夢だったので」

「そうか。でも、変わらないな。昔からそうやって一緒に寝たっけ」

小さい頃から希美が悪夢に悩まされた時は大抵、俺のところへやってきた。

一緒に寝てあげると安心するのか、ぐっすりと眠るのだ。

「だって、私にとって兄さんほど頼れて安心できる人はいません」

俺を褒めてくれる唯一の存在だな。

頼りになるとか言われると素直に嬉しいです。

俺の周りの女の子の評価は「ヘタレ」や「頼りない」やらと散々だからな。

俺は褒められて育つタイプの男の子だと思うんですっ。

「明日もあるんだ、そろそろ寝ようか」

「そうですね。ふふっ、兄さんの横に寝ると本当に安心できます」

優しく慕ってくれる希美がないとダメなお兄ちゃんです。

ホントに希美は妹して理想だなあ。

これだけ可愛い妹がいて俺は幸せだと思う。

「……やっぱり、私はダメですね。兄さんがいないと寂しくて仕方がないんです」

「希美……」

「大河兄さんに甘えっぱなしなのは私の悪い癖です」

悪いところが全然かまわないと言いたい。

希美の体温を感じつつ俺はそっと寝返りをうつ。

「……大河兄さん？」

こちらをジッと見つめていた希美と目があつた。

ね、眠れるわけじゃないじゃん……。

妹相手だと言つのに俺はドキッとしてしまう。

「ふふっ、眠れなくなっちゃいました。兄さん、お話をしてもいいですか？」

「どんな話だ……？」

「うーん。話したいことはたくさんあるんです。まずは兄さんの恋

の話が聞きたいです」

いきなり、俺の苦手分野が来た。

大学生活を初めて1年が経ったと言うのに恋人のひとりもない。梨紅ちゃんにはどうやら好かれている様子でアプローチをかけられている。

でもなあ、梨紅ちゃんは美人だけど中学生だからな。どうにも本気になっていいのか悩んでしまう俺がいる。

「兄さんには恋人みたいな人はいませんよね？」

「残念ながら。中々、相手が見つからなくてさ」

「……梨紅さんとかは仲がいいみたいですな」

「梨紅ちゃん？ 仲がいいっていつでも、ここ数ヶ月の付き合いだし、恋人っていうのじゃないよ。家庭教師の生徒だからね」

希美は何やら思案顔をして「……恐れるに足りず、か」とつぶやく。

「何の話だ？」

「いえ、梨紅さんとは仲良くできそうですって意味です。私、人見知りするタイプですから……兄さんも知ってるでしょ？」

確かに彼女は大人しいから、人見知りする。

性格に問題があるわけじゃないが、他人と距離を作ってしまうんだらう。

「希美の話聞かせてくれ。高校生活はどうだ？楽しいか？」

「はいっ。楽しいですよ。友達もできましたし、部活動も充実しています」

「部活？そっいや、何か部活を始めたんだっけ？何部をしているんだ？」

「水泳部です。室内温水プールなので、夏以外でも練習ができるんです」

希美が水泳か、意外な気もする。
運動神経がいい方ではないイメージがあるんだよな。
希美ってドジ属性ある子だからさ。

「水泳部って楽しいのか？」

「楽しいですよ。泳ぐのは好きです。こう見えても、一年生では優秀な方なんですよ」

「そっか。これから頑張れよ、希美。応援しているからな」

色々な話を話しているとやがて眠気がやってくる。

希美も悪夢は忘れたのか、すっかりと元気を取り戻した様子だ。

「兄さんとじっくりとお話をするのって久しぶりです」

彼女はこちらに視線を向けて微笑む。

間近に見合わせた顔と顔、狭いベッドだから自然と距離も近い。

「……ねえ、兄さん。もつと甘えてもいいですか？」

「え？」

それはあまりにも自然だったので俺は身動きできなかった。
希美が布団の中で俺に抱きついてくる。

唇同士が触れ合うか、触れ合わないかくらいの距離に迫る。

「の、希美、これは……？」

これはさすがにお兄ちゃんと言えど、意識しちゃう範囲なの
が！？

「ずっと寂しかった分を穴埋めしてください」

「そりゃ、寂しい思いをさせたのは悪いと思うけど、これはちよ
つと……」

「……いつまでも子供じゃありませんよ。私も、女の子ですから」

それは甘えると言うよりも誘惑に近い。

普段と違った、艶めかしい希美の表情に緊張する。

「大人になりかけている私をもつと見て欲しい、です……」

ほのかに香る妹の長髪が俺の顔に触れた――。

第27章：眠れぬ夜に〈後編〉

【SIDE：日野大河】

深夜の自室、希美は俺に抱きつきながら甘える仕草をする。見つめ合う瞳同士、お互いの吐息すら聞こえる間近の距離。覆いかぶされるような体勢のシチュエーション。

漫画でよくある展開だが、相手が違わないか？
希美は美人だが俺の妹なわけで、こういう雰囲気になっちゃいかなだろう。

とか言いつつ、ドキドキしまくってる俺がいた。

「……希美？」

「大河兄さんは私の大事な人です。私の事も大切に思ってくれていきます」

「そりゃ、俺の可愛い妹だからな」

美鶴姉ちゃんの狂暴さには姉を持った事を嘆くが、希美の可愛さは妹として最高だ。

兄に従順、素直さを見せてくれる。

これだけよくできた妹を持つと兄としては感無量。

だが、甘えられすぎるのもちょっと困ってしまったり。

「……妹、ですか。そうですね。まあ、そういう兄さんの鈍感さは気に入ってますけど、少しくらい敏感になった方が兄さんのためでもありますよ。そうじゃないと……悪い女の子に騙されてしまいますから」

「悪女ならうちの姉で散々な目にあってるぞ」

「ふふつ。姉さんは別に悪女じゃありませんよ。怖い人ですが、基本的に面白ければそれでいい所があります。本当に悪い女の人に騙されないでくださいね」

姉ちゃん以上の悪女に会えるのも中々いないと思うが。それより、そろそろ身体を離してくれないだろうか。男としての我慢にも限界ラインがあるのだ、妹相手だとしても。

「……兄さんと一緒にいると安心できるんです」

希美もまだまだ子供だなあ。

高校生になっても甘えたがりな性格は変わらない。

「にいい……さん……すう」

希美は俺に何かしようとしていたようだが、眠気に負けて寝てしまった。

……ホントに寝てしまったぞ？

怖い夢を見てたというから、眠いのは確かなんだろう。

「やれやれ。変わらないな、希美。俺も寝るとしようか」

俺も疲れていたので、さっさと寝ることにした。
久々の妹の温もりに包まれながら……。

「ち、違うんです、こういつつもりじゃなかったのに……」

翌朝、なぜか凹んでいる希美がいた。

布団にくるまりながらシクシクと泣き真似をしている。

よほど何か凹むことがあったのだろうか？

「希美？何があつたんだ？」

「……自分の眠りの良さに呆れているだけです」

「昔から寝付きいいよな、希美って。ベッドに入ったらすぐ寝ちやうし」

何やら分からないが、彼女なりに考えがあつたらしい。

「うう、千載一遇のチャンスを逃すなんて……。私、ダメな子です」

「そこまで落ち込まなくてもいいじゃないか」

肩をガツクリと落として、落ち込む希美。

何が彼女をそこまで落ち込ませているのだろうか？

「り、リベンジですっ！大河兄さん、今日も一緒に寝ましょう！」

「……リベンジ？」

「いいから、お願いします。今度こそ、私、頑張りますからっ」

何を頑張るんだろう、希美？

意気込みを見せる希美に俺が疑問を抱いていると、

「――何も頑張らないでいいわ。希美」

部屋の扉がいきなり相手、不機嫌そうな美鶴姉ちゃんが顔をのぞかせる。

「ぬお！？あ、朝から殺気が……どうした、姉ちゃん」

「大河に用はないから安心なさい。おかしいわね。希美ちゃん、何で大河の部屋にいるのかしら？寝る時は私の部屋でって言ったわよね？人が寝ている間にどうしてこの部屋にきてるの？理由を説明してごらんなさい」

「……きゃふんっ！？」

希美の首根っこを掴む姉ちゃんは怒りの形相で睨む。

「や、やあゝっ。やめてください、姉さん！？」

「うっさい。こっち来るなって言ったのを守らない希美が悪い」

「だって、せっかく兄さんに甘えるチャンスなんですから」

「……希美とは一度きっちりお話した方がよさそうね？」

ひっ、と隣の俺がビクつく怖さ。

姉ちゃんの恐ろしさを見た俺は縮こまって動けない。

「違っんです。昨日は悪夢を見て、怖くて、それで兄さんを頼った

「だけなんです」

「悪夢、ね？そんなに見たいなら今すぐ見せてあげるわよ」

「ね、姉さん。嫌あゝっ!？」

引きずられていく希美を俺は見送ることしかできなかった。

ごめんな、姉ちゃんに俺はさからえないのだ。

悲しいけど、俺はこれからも姉ちゃんと暮らさなければいけないので敵にしたくない。

連れ去られた希美が帰って来たのはそれから数時間後の事だった。これから出かける予定だったので、時間までには解放してもらえたらしい。

「くすんっ。姉さん、怖かったです」

よほど姉ちゃんの説教が堪えたのか、瞳の端に涙を浮かべる希美。俺は彼女の頭を撫でながら慰めてあげる。

「怖いお姉さんに何をされたんだ？」

「いろいろ、と。あんな性格だから恋人のひとりもできないんですよ……あっ!？」

希美はビクツと身体を震わせて背後を見る。そこまで警戒しなくてもいいだろうに。

当の姉ちゃんは朝食を食べながら、「ん？」とこちらをうかがう。食パンを口にいれて希美に笑顔を見せるだけで俺達には効果が大
きい。

「あつ、そうだ。ふたりとも今日はどこに出かけるつもり？」

「繁華街でぶらっと遊んでこようかなって……」

「へえ。そうなんだ」

姉ちゃんの言葉に希美は「まさかついてくるんですか？」と危機感を募らせる。

さすがにそれはないだろう？

ていうか、この数日で妹の姉に対する危機意識がずいぶんと高まった気がする。

昔は仲のいい姉妹だったのだが、時の流れとは残酷なものだ……多分。

「別にー。ふたりについていても面白くないからいいかい」

「それはよかったです」

「どーいう意味でよかったのか、分かんないけど。私は、いかな
いだけよ」

「はい？私は……？」

その言葉の意味を理解する前に我が家のチャイムが鳴る。

「誰か来たみたいだ。誰だ？」

今日は別に来客があるという予定もない。
俺が玄関に出ると、そこにいたのは……。

「――おはよう、大河先生っ」

朝から清々しい笑顔を見せる梨紅ちゃんがいた。

「あつ、おはよう。梨紅ちゃん、こんな朝から何か用？」

「あら、来たのね。梨紅さん」

「おはようございます、美鶴さん。時間通りに来ましたよ」

どうやら俺たちではなく、姉ちゃんに用事があつて来たらしい。

「よく来てくれたわ。ちょうど、いいタイミングだったのよ」

美鶴姉ちゃんは俺と希美の前に梨紅ちゃんを連れて来る。

「今日は梨紅ちゃんがふたりと一緒に行くから」

「え？ど、どうしてですか？なぜ、そんなことをしなければいけないんですっ!？」

声を荒げたのは希美の方だった。

「なぜって、希美と大河と一緒にしていると変な方向に行っちゃいそうだから。梨紅ちゃんを混ぜておけば、大丈夫でしょ」

「私と兄さんはふたりで一緒に出かけるんです。姉さんといえど、邪魔はさせません」

「だったら、私が一緒に行こうかしら」

「……くっ、仕方ありませんね。梨紅さんを連れていきます」

即答っ!?

そこまで姉を苦手としなくてもいいだろう。

希美は「準備してきます」と部屋に戻って行った。

今日は落ち込んでばかりだな、希美。

何が理由で落ち込んでいるのかは分からないけどね。

「大河、梨紅ちゃんをよろしくね」

「あ、うん……でも、何で姉ちゃんが？」

「ふふっ。今のままじゃつまらないからね。私が面白くしてあげるわ」

と、何やら物騒な発言をして去っていく姉ちゃん。

あの姉は今度は何を企んでいるのだ？

残された俺は梨紅ちゃんに尋ねてみる。

「うちの姉と何かあった？」

「あったと言えば、あったかな。そんなことより、先生。せっかくの春休みなのに、どーして私と遊んでくれないのよ」

「うえ？それは別に約束していたわけでも……」

「ひどいっつ。休みになったら私と遊んでくれるって言ってたじゃない」

むうっとなりを膨らませる梨紅ちゃん。

それは希美が来る前の話で、俺も適当に返事してたんだよな。

俺は彼女の機嫌を損なわないように「今日は楽しもうじゃないか」と微笑で誤魔化する。

女の子ってどうしてこうも気難しくて大変なんだろう。

俺はちよっと気落ちしつつ、梨紅ちゃんをなだめていた。

第28章：小悪魔の囁きへ前編

【SIDE：桐原梨紅】

希美さんが私にとって、一番厄介な存在だと言う事が判明。

私は何とか美鶴さんを味方にして援護してもらえることになった。変な所で裏切らないか心配な相手だけど心強さはある。

さっそく彼女から連絡をもらった私は大河先生の家に向かう。

何でも今日は希美さんと一緒にお出かけするんだって。

私は全然、かまってくれないのに、ずるいっつ。

先生は最初は私の登場に驚いていたみたいだけど、すぐに受け入れてくれる。

私の事が邪魔だったらショックなので、一安心。

先生たちが向かった先は繁華街。

私達、学生は春休みだけど平日なので、同世代くらいの子が多い。

「先生、どこにいくつもりだったの？」

「そつだな。適当に春用の服でも買おうか、悩んでいたんだ」

3月下旬、もうすぐ桜の咲く季節、春になる。

「先生の服かあ。私がチョイスしてあげよっか」

「梨紅ちゃんが？それも悪くないな、俺のセンスはどうにもよくないようだし」

別にセンスは悪くないんだよ、いい服を先生は選ぶからセンス自体が問題じゃない。

ただし、それが先生に似合うかどうかは別なの。
自分に合う服を選べば、先生は十分カッコいい。

「だ、ダメです。大河兄さんの服は私が選んであげますから」

それまで先生の横で黙っていた希美さんが彼の服のすそを掴む。

「私はついこの前知り合ったばかりの“梨紅さん”と違って、ずっと長い間、兄さんの事を知っているんです。兄さんの事で知らない事なんてありません」

「別に時間の問題じゃないでしょ？こーいうのは自分のセンスの問題でもあるんだから。例え、希美さんが先生の事を理解していてもいい服を選べるかどうかは別問題」

「うぐっ……。大河兄さんっ」

大河先生の腕に抱きつく希美さん、先生はニヤツとしながら受け入れる……。この浮気ものっ。

私の前で見せつけるなんてえげつないよ、希美さん。

「そこまで自信があるのなら私と勝負でもしてみる、希美さん？」

「勝負って何ですか……？」

「どちらが大河先生によく似合う服をコーディネートできるか、って事ですよ」

私は微笑を浮かべながら希美さんに勝負をつきつける。
彼女は「いいですよ」とこちらの勝負に乗って来た。

「いいよね、大河先生？」

「俺はいい服が決まるならいいけど？」

「お店に行くまで予算はどれくらい決めておいてね」

勝負の内容はいたってシンプル。

先生が決めた予算内で、先生に似合う服を選ぶだけ。
最終的には先生の主観で決まるけど、私には自信があった。

「先生のこと、一番分かってるのは誰なのか。見せてあげるよ」

ここらで希美さんに牽制しておかないとね。

1時間後、勝負は決着して私達は喫茶店で昼食をとっていた。
食事をしながら私達は勝負の結果を話し合う。

「大河先生、気に入ってくれてホントによかったあ」

「梨紅ちゃんのおかげでいい服が買えたよ」

今回の勝負は私の圧勝でした。

だって、希美さんはそーいう場所に慣れてなさそうだったからね。
私は大河先生以外にも男の人達と付き合いがあったので結構慣れている。

男性モノの服を選んだことのある経験の差っていうのは大きかつ

たみたい。

「希美のは惜しかったかな」

「いえ、兄さんが気に入った服があるなら仕方ありません」

希美さんも悪くはないけど、先生には少し合わなかったらしい。
選べなかった負け惜しみを言うでもない彼女は絵に描きたい妹だ。

「……むうつ」

不機嫌そうに顔をしかめながら彼女はオムライスを食べている。
内心は勝負に負けたのが悔しかったみたい。

美鶴さんが言っていたもの。

希美さんは先生の前では理想的な妹を演じてるから決してボロは出さない。

つまり、攻めるのならば逆に先生の前の方が効果的だって。

……確かに効果的だけど、睨まれるのは時々怖い。

ていうか、ここまでお兄ちゃんラブとは正直、思ってたの。
初めて会った時からそうだけど、先生に好意を向けたら敵意丸出しなんだよねえ。

ブラコンっていうか、むしろ恋人に抱くような愛情が感じられるのは気のせい？

「大河先生と希美さんって兄妹仲は噂以上にいいんだね？」

「まあ、あの美鶴姉ちゃんがアレだからな。自然と妹の方が仲がよくなってるさ」

「姉さんは怖い人です……。最近になって余計にそう思うようになりました」

苦手意識があるのは希美さんも同じらしい。
私も苦手な方だからフォローはできない。

「……おっと、悪い。ちょっとトイレに行ってくる」

食事中に先生が席をはずしてしまう。

まずい、ここでのふたりつきりは私のピンチになる。

案の定、危惧したとおり、希美さんは私に敵意を向けて来る。
最初会った時はこんな人だと思わなかったんだけど、人って分かんないなあ。

敵意全開の希美さんは私に言う。

「驚きました、梨紅さんが私の“敵”だったなんて……」

「別に敵とか味方とか関係ないよ。どちらも先生のことが好きっただけでしょう？」

「あら、認めるんですか？大河兄さんの事が好きだって？」

「認めるよ。最初の方は希美さんがどういう人間か分からないから誤魔化したけど、私は先生が好き。希美さんは妹なのに私と同じ気持ちっておかしくない？普通じゃないよね？」

私の発言が気に入らないのか、彼女は私から視線をそらす。

「兄さんの事を好きな気持ちでは負けてません」

「負けてなくても勝てない、よ。だって、希美さんと大河先生は……」

私は一拍置いて、彼女に言い放つ。

「――血の繋がった本物の兄妹だもの」

ぐつと彼女の表情が強張るのが見て取れる。

……今の私、ちょっと悪役っぽい？

でも、ここで油断するわけにもいかないので手は緩めない。

「家族愛は深まっても、恋愛感情は深まらないよ？アレって別物だからさ。勘違いしてたらごめんなさい」

「貴方には分からないんですよ。本当の愛はそんなもの、障害になりません。私の愛は誰にも邪魔できません」

「いや、普通に障害になるから……」

その愛が重いつ……自信を持って言える希美さんはすごい子かも？
兄妹だっていうのを改めて強調してあげれば、凹んで引いてくれるかもしれないって思っていた私の算段は甘かったらしい。

「大体、それを言えば梨紅さんなんてまだ“子供”じゃないですか。
兄さんと歳の差がどれだけあると思ってるんです？」

「ぐはっ！？」

こ、子供じゃないっ……私は大人だもんっ。
歳の差を攻められると私がキツイ。

どうしてもそこだけは私も気にしているところだから。

先生がいまいち振り向いてくれないのは歳の差が原因でもある。

「今時、大学生が中学生なんて相手にするはずがない。知ってます？大河兄さんはお子様相手にする気はありませんよ？」

攻めに転じた希美さんは畳みかけるようにトドメを刺しにくる。

「いるんですね、思春期の女の子って変な勘違いをする子が」

「勘違い？それはどういう意味？」

「年上相手に憧れたり、好きになるってのは、自分が子供の証拠ですよ。勝手に包容力とか、甘えられる存在を求めているだけ。自分勝手な想いを兄さんにぶつけないでください。いい迷惑ですよ」

「甘えるって点に関しては希美さんも同じでしょ」

そりゃ、私が年上好きなのは大人の余裕とか、子供っぽくない精神的な意味が大きい。

甘えるのが好きな私を受け止めてくれる存在が好きなんだ。

「それを求めて何が悪いわけ？私が子供だって言いたいのか？」

「ええ。そうです。子供は子供らしく、無駄な背伸びなどせずに相応の同年の相手でも好きになっていればいいんです」

余裕の物言いに私は我慢できそうにない。

……無駄な背伸びって言うてくれるじゃない。

私の努力を否定されて、ムツときた私は言い返してあげる。

「——兄妹同士、仲良過ぎな方がよっぽど変だし、おかしいよっ」

少し声を荒げて言ってしまった。

「……や、やっぱり、変なのか？」

背後からの声に私はハッと振り向いた。

ガーンツ、と落ち込んでいる大河先生。

……あれ、先生はいつ戻ってきていたの……ていうか、私、まずくない？

「大河兄さんっ、くすんっ」

「どうした、希美？何で涙なんて浮かべて……」

「梨紅さんってばひどいんですよ。私達の間係を不健全とか不純だ、おかしいと暴言ばかり言って……私はただ、兄さんの事を“兄”として慕っているだけなのに」

「……え？あれ？」

私はそんなこと言ってもいないし、何でいきなり悪役扱い？
瞳を涙っぱい(?)ので潤ませて希美さんは先生に言うの。

「大河兄さん、私が兄さんの事を慕うのってそんなに気持ち悪い事なんですか？」

「あっ、いや、そんなことはないぞ。俺は妹として希美のこと、可愛いと思ってるし、甘えてもらうのは悪くない。ほら、昔からの事

だから気にしないで落ち込まないでくれ、希美。元気出してくれよ」

「大河兄さん、そう言ってくれて嬉しいです。でも、“梨紅さん”が私たちの事を……」

や、やられたッ!?

わざと“梨紅さん”という名前を強調してきたよ、この人!

大河先生は誤解して私をたしなめるように、厳しい口調で言うんだ。

「梨紅ちゃん、あんまり希美を苛めないでくれ。この子は見た目通り繊細な子なんだ。ひどいことを言わないであげて」

うえーん、何で私が大河先生に怒られるの?

あつという間に先生を味方につけた希美さんの反撃。

どこが天使なのよ、彼女の方が立派な小悪魔じゃない。

先生の評価が低下しちゃう、私はどうすればいいのっ!?

第29章：小悪魔の囁き〈後編〉

【SIDE：桐原梨紅】

私にとっての最強のライバル、希美さん。

まさか好きな人の実妹が天敵になるなんて……。

重度すぎるブラコン。

自分の愛の前には兄妹である事も障害にならない、と豪語する程です。

……美鶴さんも怖い人だけど、それ以上かも。

そんな希美さんは私にある罫を仕掛けてきたの。

「大河兄さん、私が兄さんの事を慕うのってそんなに気持ち悪い事なんですか？」

「あつ、いや、そんなことはないぞ。俺は妹として希美のこと、可愛いと思ってるし、甘えてもらうのは悪くない。だから落ち込まないでくれ、希美」

「大河兄さん、そう言ってくれて嬉しいです。でも、“梨紅さんが……”

や、やられたッ！？

大河先生は私をたしなめるように、厳しい口調で言うんだ。

「梨紅ちゃん、あんまり希美を苛めないでくれ。この子は見た目通り繊細な子なんだ」

私の窮地、このままじゃ先生に嫌われちゃう。

美鶴さんいわく、先生は希美さんの裏面に気づいていない。

だから、素直で従順な妹だと言う印象しかないんだ。

ホントは目的のために手段を選ばないめっちゃ怖い人だっていうのに。

「でも、兄妹にしては仲良過ぎじゃない？ 普通はもっと距離があるんじゃない……」

「よそはよそ、うちはうちです。他人と同じ事が基準だと思わないでください」

「私は先生に言ってるのに……」

希美さんは本気で先生が好きらしい。

そこまで愛される先生の魅力って言うのは分かるけど、心中複雑なのです。

打開できない状況、先生まで敵になる前に状況を何とかしたい。

「——こう言う時のための美鶴さんコールッ！」

私は携帯電話に登録している美鶴さんの電話番号にかける。

もしも、困った事や気まずい展開になったら美鶴さんが手助けしてくれるらしい。

このために美鶴さんに仲間になってもらったんだから。

「……」

ただいま電話中。

「……？」

ただいま電話中。

『おかけになった相手は現在、電話にできることができません』

無情にも留守番電話サービスのメッセージが流れる。

「……ナンデスト、電源切られてるっ!？」

私のヘルプコールは無視ですか？

何が「困った時にはお姉さんに任せて（はあと）」なのよ。

うう、分かっていたけど、美鶴さんは困ってるときに役に立たない。

「何をしています……?」

希美さんはニヤツと嫌みな笑みを浮かべている（ように見える）。

「ううん、何でもない。先生、お昼が終わったら駅ビル内を歩かない?」

「いいよ。希美もそれでいい?」

「私は大河兄さんが行きたい所についていきます」

ふふふつ、こうなったら私一人でもどうにかしてみせる。

希美さんに見せつけてあげるわ……反撃怖いけど。

駅ビル内が混雑しているのを利用して私は先生の腕に抱きつく。

「行こうよ、先生っ」

私は手を引いて行くと希美さんは慌てて引き離そうとしてくる。

「私の兄さんに何をするんですか？」

「別に」。私はいつものようにしてるだけ。希美さんと一緒だよ？」

いつも、という言葉強調してみると嫌そうな顔をする。

「いつも、一緒に……兄さん、あら？」

希美さんが慌てる間に私は彼女を置いて立ち去る。

「ちょっと、兄さん？大河兄さんっ！？」

辺りを見渡してる彼女に罪悪感が……。

うつん、ここで相手を気にしちゃ勝てない。

心を鬼にしても、まずは先生と希美さんを引き離す。

人ごみにまぎれてしまえば、こちらのもの。

彼女は迷子癖があるので振り切るのは簡単だった。

「ん？希美は？いつのまにかいないぞ？」

先生が気づいたのはブティックエリアに入ってからだった。

「ホントだね。迷子になってるのかな？」

「すぐに電話してみよう。あの子は放っておくと危ないから」

「ま、待つて、先生っ」

電話を取り出す先生を止める。

希美さんが心配なのは分かるけど、そう簡単に連絡されても困る。

「大丈夫だよ、そのうち会えるって。高校生なんだから迷子くらいになってもすぐに見つかるって。ね？」

「そうか？うーん、だが、あの子も不安だろうからな」

逆に言えば、先生の携帯に向こうからかけてくる可能性はある。

「ここって電波悪くなかったっけ？私のはまだ大丈夫？先生のはどう？」

その場合を考えて、私はそつと先生の手から携帯を奪い、マナーモードにセット。

こっそりとバレないようにそのまま先生に返す。

「大丈夫そうだね。心配ないって。だから、しばらく私と一緒に行動しよ？」

私は先生に有無を言わずに連れまわす。

私だつて彼とのデートを楽しみたいの。

「あつ、この服可愛くない？」

「梨紅ちゃんに似合いそうだね」

「ホント？私もそう思う。ちょっと着てみようかな」

なんて楽しんでいると、私の携帯電話が鳴り響く。

「美鶴さん？」

電話相手は美鶴さん、何で今さら電話をかけてくるんだろ？

「はい、私ですけど。もう美鶴さんコールは必要ないですよ？」

『え？そうなの？ごめんね、何でか知らないけど携帯の“電源”が切れていたのよ』

「そうなんですか？ハッ、まさか……？」

そんなセコイ真似するのはひとりしかない。

間違いない、それをしたのは……。

『希美でしょうね。ったく、私に邪魔されたからって警戒してたのね。ここまでするとは思ってなくて私も油断したわ』

ちなみに私も先生相手に同じことをしているので、やり返した事になっている。

戦いを制するのはいつだって情報戦、連絡手段を断つと言うのは有効手段だもん。

「今は先生とふたりつきりです。希美さんは迷子で行方不明中ですから」

『あつ、それでさっき希美から電話があつたんだ？電源切れてたから出れなかったけど、何か用事でもあつたのかしら。これってかけ直してあげるか迷ってたのよね』

「かけ直さないでいいですから。しばらくしたらちゃんと回収して帰ります」

希美さん、自爆してる……。

自分で電源切った美鶴さんの携帯に助けを求めても、出れるはずないじゃない。

やっぱり、希美さんはドジっ娘さんです。

「姉ちゃんと電話したのか？」

電話を終えて先生に尋ねられると私は「夕食のメニューの話をしてたの」と誤魔化する。

一時間くらいたったので、私は先生にそろそろ希美さんを探そうと提案する。

「……そうだな。さすがにあの子も心配してるだろうし……って、うお！？」

彼は自分の携帯電話の履歴を見て驚愕する。

ずらつと分刻みで希美さんからの電話があつたらしい、普通に怖いよ。

マナーにしていたから気付かなかったんだらうけど、私の作戦勝ちかな？

「いつの間にマナーにしてたんだろ。希美に悪い事をしたなあ」

彼はそう言って彼女に連絡をとると、なぜか彼女は駅ビルから離れた繁華街にいる事が判明する。

……迷子の希美さんは本当に方向音痴です。

家に帰るまでずっとふくれっ面の希美さんを先生はなだめていた。むうっと頬を膨らませて不満を彼にぶつける。

「ひどいですつ。私の事、放っておくなんて兄さんは私の事、どうでもいいんですね？」

「違うつて。携帯をマナーにして気づかなかっただけで」

「だったら、電話をかけてきてくれればよかったじゃないですか。知らない土地でモノすごく不安だったんですよ？変なお兄さん達に声をかけられたり、お姉さんに『モデルになりませんか？』と声をかけられたりして……」

希美さんってブラコンだけど、見た目はすごく美人だもの。ていうか、さり氣に自分は美人だって自慢している？

「それなのに兄さんったら梨紅さんと買い物をしているなんてひどすぎませんか？」

「買い物じゃないもん、デートだもんつ。……うああっ!？」

いきなり、私は希美さんに腕を掴まれてびっくりする。

「どうした、梨紅ちゃん？希美？」

「いえ、何でもないです。兄さん、反省してくださいね」

笑顔で答える希美さんは私と歩調を合わせて歩き始める。
腕を掴まれているから私は逃げだせない。

「……兄さんの携帯をいじるなんてやること、ひどいですね？」

「そちらこそ、美鶴さんの携帯に細工してたでしょう？」

「さあ？何のことでしょうか。私には分かりません」

しれつと無視してボ口を出さない、この人、手強すぎ……。

「希美さんって性格悪いよね。大河先生、騙されているんだ」

「騙してなんかいませんよ。私は常に兄さんを慕っているだけ。その気持ちに偽りなどありません。これまでも、兄さんに近寄る不穏な方々と“いろいろ”とありましたが」

……いろいろって何だろう？

「貴方みたいに諦めない人は初めてです。大抵、私がある程度介入すれば身を引くのに」

怖いよ、怖い……ブラコン妹、ホントに怖いですっ。

私は身の危険を感じながら勇気を出して彼女に言ってみる。

「……希美さんって自分の事しか考えてないんだね。先生が可哀想だよ」

「それはどういう意味ですか？」

私達は歩みを止めてお互いに向き合いながら睨みあう。

「そのままの意味だよ。希美さんがしてる行動のせいで大河先生が苦しんでいるのが分からないんだ？それってホントの愛情かな？彼の事を本当に思ってるなら、そんなことしないよ」

苦しんでいるのは“恋人いない歴”だけだね。
恋人がいなくて苦しんでたその裏で小細工してた希美さんがいたのは先生も知らないとはいえ不幸だ。

「……聞き捨てなりませんね。いいでしょう。いい機会です、ふたりでお話をしましょう。お互いに言いたい事もありそうですから……ゆっくりとお話をする機会を作りましょう？」

え？ええー、ふたりつきりはちょっと怖いから勘弁してっ！？

第30章：悪魔的な誘い

【SIDE：桐原梨紅】

「……どれにしようかな？」

私は家に帰ってから自分のタンスの中にある可愛いパジャマを選んでいた。

マンションに戻った私達にいきなり美鶴さんが提案してきたのは『お泊り会』だった。

今夜は先生の家でお泊り、一度しっかりと私と希美さんは先生について話し合いを行う必要があるという互いの意見が一致した。

運命の直接対決って、何で先生の実妹と戦わなきゃいけないのかは疑問だけだね。

それだけ希美さんの大河先生への愛情は深いということ。
妹だからどうか言ってられない。

というわけで、私は一度家に戻ってさっそくママに許可をもらってお泊りの準備をしていた。

「梨紅、タオルとかこのバッグにつめておいたわよ」

「ありがとう、ママ。そこに置いておいて」

「それにしても日野先生の家族といつのまに仲よくなっていたの？」

ママは私が美鶴さんや希美さんと関わりを持っていることが不思議らしい。

大河先生を狙っている事はまだ秘密なので私は誤魔化す。

「いろいろとねえ。すつごくいい人たちなんだ」

嘘じゃないけど、基本的に悪い人じゃないと思いたい……。

「そう。梨紅にとってはお姉さんたちなのね。仲良くしてもらいなさい」

そうかもしれない。

私には兄妹がいないから美鶴さんや希美さんっていい意味でお姉さんの存在なのかも。

……どちらも腹黒くなければ、だけど。

「日野先生に迷惑をかけないようにしなさいよ？」

「分かってるってば」

人様の家で迷惑かけるそこまで子供じゃない。

それに私はそれ以上に危機感を抱いているの。

希美さんに何をされるか分からないから怖いよ。

私はお気に入りのパジャマをチョイスしてバッグにしまう。

様々な準備も終了、あとは先生の家に行くだけだ。

「それじゃ、行つてきます」

いざ、決着をつけるために出発。

「希美さんには負けないよっ」

私は意気込みながら、気合を入れて先生のマンションへ向かった。

「……梨紅さん、次はこの魚をさばいてください」

「任せて。お魚をさばくのは結構得意なんだっ」

「へえ、言うだけあって綺麗なものですね」

キッチンに響く包丁の音、魚をさばく私の手つきはそれなりに慣れている。

こー見えて、料理は得意なのですよ。

私の隣に立ちながら料理するのは美鶴さんじゃなくて希美さんだ。

……何でふたり揃ってお料理中なのかと言いますと、ただ今は休戦中なの。

『ふたりとも言いたい事は夜にたっぷりしなさい』

マンションにやって来た私と希美さんに美鶴さんがキツイ口調で言う。

『だから、それまでは一緒にいろいろとしてみなさい。相手の事を知るのって大事なことよ。いがみ合う理由が大河だけなら、違う形で接してみるのも悪くない。話するのは後からでもいいでしょう？』

あの美鶴さんにしてはすごい事を言った。

そのような理由で私と希美さんは休戦しており、言い争いはやめている。

ちなみに先生の家に泊まると言う事に関して、大河先生は聞いていなかったらしく、

『ちよい待て、希美と梨紅ちゃんが一緒に部屋と言う事は……？』

『ふふふつ。大河、今日は久々にお姉ちゃんと一緒に寝ましょうね』

『……な、何だってーっ！？嫌だ、姉ちゃんただけは姉ちゃんだと
けはマジで無理……ぐふっ！？』

『せっかく、私が一緒に寝てあげるっていつのに叫ぶのはどうよ？
希美はよくて私は悪いわけ？あん？』

先生は美鶴さんに腹部を殴られて悶絶、そこまで拒否を示した先生が悪い気がする。

何だかんだで彼女も先生の事を弟として大事にしてるもの。

「梨紅さんってお料理得意なんですね。意外で驚きました」

「よく親の手伝いとかしているから」

「私と同じなんですね。まあ、私は姉さんに教えてもらっただけです
けど」

リビングで「私のおかげだぞっ」と美鶴さんの声が聞こえる。
テレビを見ながらも聞き耳は立てている様子だ。

美鶴さんの料理が美味しいのは知ってるけど、姉譲りなんだ。

「……そう言うのって何だかいいなあ」

「どついつ意味ですか？」

「私はお姉ちゃんとか、兄妹いないから。そう言うのに憧れるかも……」

「そうですか。……あつ、梨紅さん。それは、少しだけ違いますよ」
私が野菜を切ろうとしていたら、希美さんがずっと私の手に触れる。

「この野菜はこう切るんです。その方が見た目的にもいいでしょう？」

「うわっ、本当だ。こういう切り方もあるんだ」

優しく教えてくれる希美さん。

もしも、お姉ちゃんがいたらこんな感じなのかな？

……そもそも、大河先生が絡まなきゃ、ものすごく優しくていい人だったりする。

それから何度か希美さんに指導してもらっ機会があった。

うーん、お料理だと彼女の方が知ってる事も手際もいい。

こちらとしてはすごく教えてもらう事が楽しかったりする。

最後のスープを作っている時に希美さんは小声でつぶやいた。

「何となく、梨紅さんの気持ちが分かった気がします」

「何が？」

「……いえ、何でもありません。そろそろ仕上げましょうか」

くすつと微笑を浮かべた彼女。

希美さんみたいなお姉ちゃんがいればいいのに。
そんなことを思ってしまう自分がいた。

ふたりで作り上げた料理の数々がテーブルに並ぶ。

「おつ、いい感じに美味しそうじゃないか」

見た目の出来の良さに大河先生も褒めてくれる。

先生に褒められるのは素直に嬉しいいつ。

私と希美さんは互いに見合って笑い合う。

料理の味の方も思っていた以上によくできていた。

こーいう食事もたまにはいいかも。

大満足の夕食を終えた後、後片付けを私と美鶴さんがする。

洗い物をしていると彼女はポツリと言った。

「希美って、小さい頃から大河にべったりだったのよ。大河も甘えてくれる妹を突き放したりすることなく、可愛がっていて……。あの子、甘える事になれているの。けれど、今日は違った。希美は梨紅さんに甘えられて嬉しかったんだと思うわ」

「甘えられるのが嬉しい？」

「そう。逆に自分が甘えられる存在になった事がなかった。それで、立場が逆転した事により、彼女も自覚が芽生えたのかもしれない。それが今日の料理作りで希美に起きた変化よ。梨紅さん、今日はあの子に甘えてあげてみて？」

うーん、希美さんに甘えるって言っても、私達はライバルだもん。

「……特別の事なんてしなくていいのよ。普段の梨紅さんでいてくれればそれでいいの。あの子が変わればきつと、梨紅さんにとってもいい事が起きるはず」

「いい事ですか？本当に希美さんに甘えて何かが変わると？」

「ええ。見ていなさい、すぐに分かるから。大河を手にしたいのなら、私の言う事は聞いておいた方がいいわよ？」

それが怖いのだと、彼女の前では言えなかった。

だって、美鶴さん絡みでこれまで何度痛い目にあわされてきたか。でも、私も何となくだけど、希美さんとの距離は縮まっていた。お姉ちゃんみたいな存在だなんて思い始めていたんだ――。

第31章：姉と妹

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生のマンションでお泊り会を実施中。

私が寝るのは美鶴さんの部屋で希美さんが普段は寝泊まりしてるんだって。

綺麗好きな彼女だけあってすごく整頓された部屋だった。

お布団を敷いてると美鶴さんが部屋に顔をのぞかせる。

「梨紅さん、お風呂の準備ができたから先に入っちゃって」

「あ、はい」

「……お風呂からあがってきたら希美と対決ね。覚悟はできてる？」

そう言われたら、この後が怖い。

食事の時は結構仲良くなれそうな雰囲気だったんだけどな。

「希美の心へどれだけ踏み込めるか。それが梨紅さんの命運を分けるかもね」

「怖っ！？命運かけちゃうものなんですか？」

ものすごくプレッシャーを感じながら私は俯く。

「半分くらいは冗談よ。でも、あの子の大河への愛情っぷりは半端ないわよ。本当に愛しちゃってるから怖い。そこを何とかしてあげるのが梨紅さんでしょ？大河にふさわしい子がいるってのを思い

知らせば……」

「希美さんも先生の事を諦める、と？」

「そうなるのが一番ベストだけど、希美の性格からすれば、目の前の敵を排除する方法を優先するかもしれないわ」

……それって、私の大ピンチじゃない！？

説得を失敗したら私はひどい目にあわされそう。

「まあ、そうならないように祈ってあげる」

「祈りなどいりません。効果的な作戦をください」

「うーん。効果的ねえ……そんなものあるかな？」

美鶴さんは腕を組んで考える素振りを見せる。

「何かないんですか？希美さんの弱点とか？これさえあれば大丈夫、みたいな？」

「さっきも言ったけど、話し合いが始まる前に希美に甘えまくってみるのは？あの子って基本的に誰かに依存している癖があるのよ。その依存癖をいい具合に利用する。梨紅さんが生き残るためにはそれしかないわ」

生き残るって、私は何と戦うんだろう。

「私もできる限り協力してあげるわ。お姉さんに任せなさい」

彼女は私の肩を軽く叩いて、自信を持って言う。
今度こそ、美鶴さんを信じてもいいのかな……？

私がお風呂に入っていると、ガサゴソと脱衣所で物音がする。
まさか大河先生がのぞきに來たの？
先生の事が好きな私もさすがにいきなりちよつと困るゝっ！？
なんて慌てていると、浴室の扉が開いた。

「うわっ！？」

「……そんなに驚かなくてもいいじゃないですか」

「希美さん？え？何で！？」

お風呂に入つて來たのは希美さんだつた。
長い髪は軽くまとめて、身体にタオルを巻いている。

「姉さんが梨紅さんと一緒に入れて言われたんです」

そんなに嫌そうな顔をされると私も困るよ。

希美さんもお姉さんの命令には逆らえないらしい。

私は希美さんの身体をジーツと直視する。

色白の肌がとても綺麗で、スタイルも抜群の美人。

服を着ていた時は分からなかったけれど胸の膨らみも、お姉さんの美鶴さんよりも大きいんじゃないかな……？

私はまだ成長途中（だと信じたい）自分のスタイルと比べて素直に凹む。

まだこれから、チャンスはまだあるはず……だもん。

「そっちに入りたいんですけど？」

「あ、うん。どうぞ」

私は既に湯船に入っていたのでシャワーを浴びるため出る。さすがにふたりで入るにはこの湯船は小さい。

「……ふっ」

湯船から出た私を見て希美さんは鼻で笑った。むうっ、何かムカつくっ！

そりゃ、私はまだ子供体系だけど自慢気に胸を強調しないでよ。

「梨紅さんって中学生でしたよね。それなら、まだこれからですよ。心配しなくても大丈夫です。多分」

「ふんっ。そりゃ、子供だけど……ちゃんと成長するんだからっ！」

微笑ましそうな笑顔を浮かべるのが憎たらしい。

希美さんってばホントに裏面は性格悪いなあ……。

私は何か言い返そうとするけれど、あることを思い出す。

『いまのうちに希美に甘えておきなさい』

美鶴さんがわざわざそう言ったからには理由があるはず。勝ち目のない戦いを挑む前に出来る事をしてみよう。

「希美さんって本当に綺麗だよねえ」

「…………え？」

「肌なんてものすつごくまっ白で綺麗その肌を保つのが大変じゃない？日に焼けたら痛そう」

とりあえず、彼女を褒めてみることにした。

人間ってというのは褒められて嫌な思いをする人はほとんどいないもん。

私に褒められるのが意外だったのか、希美さんは落着かない様子だった。

「その白い肌って生まれつきなの？」

「ええ。色素が薄いのは生まれつきですよ。あまり日差しを浴びないように、とか苦労して保っています。紫外線に弱いっていうものあるんですけどね。少し太陽にあたっても赤くなったりして、夏場は大変なんです」

希美さんって本当に驚くほどの色白で美肌で、羨ましいと素直に思える

「長髪の黒髪も手入れとか面倒そう。触ってみてもいい？」

「…………ひっぱらないでくださいよ？」

「そんなことはしないので安心して。うわっ、この髪質もいいなあ。染めてもないからすごくサラサラだ」

「維持するのは大変ですけど、慣れていきますから」

綺麗な黒髪って私の憧れでもあるんだよねえ。
とりあえず、褒めてみる作戦は何とか成功らしい。
先ほどの喧嘩腰と言うか、戦闘モードは解除してくれた。
彼女は湯船につきりながら私の事も褒めてくれる。

「……梨紅さんは小さくて可愛いですね」

それって褒められているのかな。

……ていうか、どこを見て小さいって言った？

髪を洗うためにシャワーを浴びているとふと背後に気配を感じる。

「梨紅さん、少しジツとしていてください」

いきなり希美さんが私の髪を撫でるように洗い始める。

私の髪をシャンプーの泡が包み込んでいく。

「梨紅さんの髪も、よく手入れされていて痛みもほとんどありませんね」

希美さんが私の髪を洗ってくれるのを私は黙って受け入れる。

美容室で洗ってくれるみたいに、人にされるのって何だか不思議な感じがするの。

「普段はツイテイルに結んでいますけど、髪を下ろした梨紅さんもいいですよ」

「ストレートは苦手なんだ。希美さんみたいに似合わないから」

人に向く髪型って言うのはあると思う。

私にストレート系の髪型は似合わない、と勝手に思い込んでいるから普段はツインテールにすることが多い。

人前ではほとんど髪を下ろした状態は見せないもの。

「……昔、姉さんによく髪を洗ってしてもらったんです」

「それだけ長いと洗うのも大変そう」

「ええ。お互いによく洗い合いをしたりしてました。でも、一緒にお風呂に入らなくなってからにはこうする事もなくて……すごく久しぶりですね。懐かしくてついしちゃいました」

ふと、私は希美さんの甘え癖っていうのは寂しがりやさんなんじゃないかって感じたの。

先生に依存するのも、好きだからという理由以外に何かあるんじゃないか。

希美さんは本当は優しい性格なんだから、そちらともっと付き合いたい。

私はシャンプーの泡を流し終わると、希美さんに言う。

「希美さん、今度は貴方の番だよ」

「私、ですか……？」

「そう。私もしてみたいって思ったの。いいでしょ？」

誰かの髪を洗う事もした事がない。

姉妹がいればきつと普通にしていたことかもしれない。

私もそういうのをしてみたいと思ったの。

「それじゃ、お願いします……」

希美さんは小さく呟くと、私の行動を受け入れる。
彼女の髪に触れながら、お互いに雑談を交わしあいながら洗いあ
う。

私にお姉ちゃんがいたらきつとこんな感じなんだろう。

「……ふふつ。お姉ちゃんみたい」

口から自然に出た言葉。

希美さんは驚いた口調で告げる。

「お姉さん、ですか？」

「うん。希美さんって、優しくて温かくてお姉ちゃんみたいだ
なっ
て」

私は彼女の肩に触れて、出来る限り甘えるように抱きついてみる。

「こつという感情、今まで抱いたことがなくて……困ります」

希美さんは戸惑いながらも静かに瞳を瞑りながら、

「でも、悪くありませんね。人に甘えられると言う事も……——」

姉と妹。

今の私達を傍目に見ればきつとそう見えるに違いない。
わずかな間だけど、ほんの少しでも私達は分かりあえた気がする
の。

お風呂から上がった私達はそれぞれ気持ちを引き締める。

分かりあう事ができたとしても譲れない想いがふたりにはある。
希美さんには先生の事を諦めてもらう。

兄妹なんだから、本当の関係に戻るのが一番なんだって。
何としても説得してみせるわ。

嵐の前触れのように穏やかだった時間は過ぎさる。

そして、始まる……荒れ狂う嵐の夜が静かに始まった――。

第32章：微妙な心境

【SIDE：日野大河】

何だか俺の知らない所で何かが動いているらしい。

希美と梨紅ちゃんの様子が変なのだ。

俺の部屋に蒲団を敷く姉ちゃんに聞いてみることにした。

「あのふたり、何かあったのか？」

「別に何も無いんじゃないのー？」

「何かあるからお泊りしたんだろ？」

わざわざうちで泊まるってのは何か変だと俺でも気付く。

「それに妙に梨紅ちゃんが希美に対して変な視線を向けたりさあ」

「それを逆だと思わないのが大河なのよねえ、はあ……」

ため息で返されてしまった。

「逆ってどういう事？」

「例えば、希美が梨紅ちゃんに対して、敵意をもった視線を向けている、とか？」

「何で希美が敵意を持つんだよ。姉ちゃんじゃあるまいし」

「……私の場合は“敵意”じゃなくて、“殺意”だから。あんまり調子乗ってたら、泣かすわよ？」

俺は本物の殺意を向けられていた。
姉ちゃん、めっちゃ怖いっす。

「——ごめんなさい」

即謝罪&頭を下げなきゃいけないレベルの殺気でした。
実姉に鳥肌たつ殺気向けられるってどうなのよ。

「分かればいいのよ。人間、素直になるって大事よね」

「……素直に謝らないとひどい目にあわされると思ったんだよ」

美鶴姉ちゃんを怒らせると本気で怖いんだ。

子供の頃からどうにもこの人に対しては恐怖という感情しかない。
なのに今日は一緒に同じ部屋ってどれだけ俺に怖い思いをさせるのだ。

「それで、あの二人は何をしているんだ？」

「仲良く一緒にお風呂に入ってるわ」

「へえ、そうなんだ。あの二人って仲がいいよな。まるで姉妹みたいで可愛いよ」

「……大河って本当に平和な子よねえ。少しくらい空気読め。わざと読まないだけって思わせる時がたまにあるんだけど？」

怒ったり、呆れたりと大変な姉だ。

……俺が悪いのか？

「大河。アンタの鈍感さに対してもはや言うべき事はないわ」

「ついに俺って見放された？」

「まだかろうじて見放してはないわ。そんな鈍感かつ、変態な大河にも私からひとつだけ言ってあげる」

「変態違っし。ぬおあっ！？ベッドの下を探そうとするな！？」

油断も隙もない姉である。

そこに怪しいものはありませんが……多分。

「この部屋探せば、適当に変な物が見つかるし、アンタの性癖がいかに変態かつマニアックなのかあの子たちに暴露してもいいわ。まあ、それは別に男の子の趣味としてどうでもいいの。私が言いたいのはあの子たちを見守りなさいってこと」

「はい、先生。男の尊厳をバカにされただけで、意味がさっぱり分りません」

「意味が分からないなら、幼稚園から人生やりなおせ」

……ひでえ、今日は暴言吐きまくりだな。
今日の姉ちゃんはどこか機嫌が悪いのか。
俺は姉の機嫌を伺うので必死だ。

「もっつ、イライラするわっ。大河っ！」

「は、はい!？」

「アンタが希美をどう思ってるのか知らないけど、あの子は天使でもなければ従順な妹でもないの。今まで散々、アンタに恋人ができそうだったチャンスをぶち潰してきた張本人なのよ。その辺、いい加減に理解しなさい」

「……はい？」

希美が俺の恋人になるかもしれない女の子達に影響を与えただと？

思い当たる節がまったくなければ、希美がそんなことをするはずがない。

到底、信じられる事じゃない。

「また姉ちゃんの戯言、訂正、いい加減な事を……げふっ!？」

「戯言って言った？せつかくの忠告をそう言っいい方するわけ？」

「訂正って言ったのに、お腹を殴るなよ!？」

口は災いのもと、その意味を身体で理解しました。

「……アンタが余計な一言を言うからでしょうが。希美は天使じゃない。あの子は悪魔なの。分かる?……私と一緒にとか言ったらもう一度行くわよ?次はその下を潰すわ」

拳を握りながら脅すなよ、本気で怖いから狙いを定めなくてください。

俺は痛む腹部を押さえ&守りながら、姉にびびりまくる。

「だ、だって、希美が悪さをするはずがないじゃないか。俺の天使だぞ」

俺を尊敬してくれて、素直で、笑顔が天使みたいに可愛い女の子が悪魔のはずがない。

梨紅ちゃんはどちらかと言えば小悪魔っぽいけどさ。
うちの希美に限ってそんなはずがないんだ。

「思い返してごらん。これまでアンタに恋人ができそうだった時、何が起きた？」

「仲良くなつて告白しようかなって時には大体、向こうから引かれたかも……」

攻勢に出た時には大抵、関係が終わつていて……俺の態度が極端のせいではないか、そう思い続けてきた。

俺って女の子に対して免疫とかほとんどないから仕方ない。

口説くタイミングをミスったのだと後悔してきたのだ。

「……思い出しなさい。そのタイミングの前に必ず、大河は希美をその子に紹介しなかった？いきなり学校前ではち合わせた、とか、デート中に声をかけて来たとか。どこかで希美が絡んでこなかった？」

「うーん。そうだったっけ？」

言われてみればそう言う事もあった気がする。

女の子と遊んでいる時に偶然にも街中で希美と遭遇した事や、帰

りに買い物に付き合つてと、校門前で待っていたとか。

普通のタイミングで出てきたので気にした事がなかったけれど、偶然だろう？

「……ホントだ、俺に恋人ができるかもって時には大抵、希美がその子にあつてるかもしれない。中学の時から合わせたら5、6人に妹を紹介した記憶がある。んー、でも偶然だろ？よくあることじゃん」

「ふーん。微妙に大河つてモテるのね。案外、地味に恋人作り、頑張ってきたの？本当に可哀想。……それが悪夢の始まりよ、アンタにとつても、その女の子達にとつてもね」

姉ちゃんの不吉な台詞に俺はゾツとする。

「ま、まさか？偶然に決まつてる。あの希美だぞ？ぼやくつてしてる、おっとり系の妹がそんな姉ちゃんみたいな策士なわけがないだろ？ありえないってば！？希美が何かを企むはずがない」

「あの希美だからよ。アンタが知らない一面をあの子は持っている。従順に甘えてくれる妹、それが大河の認識でしょう。でもね、あの子の裏面はえげつないの。大河に好意を寄せる女の子の認識は……」

「……に、認識は？」

「悪魔そのものよ。遠慮容赦一切せず。アンタに恋人ができるのを阻止する。全力で関係を潰そうとする」

「いやいや、それは信じないぞ！？」

どこをどう考えても全くもって想像すらできない。

「可愛い顔してるから皆が騙されるのよね。そんなことをするはずがない、ありえない、あれは何かの嘘に違いないって。希美の牽制を受けた子達はそうやって考えてるうちにアンタへの愛情が冷めるとてわけ。フラれ続けた理由、それは別に大河のヘタレ癖だけのせいじゃないってことが分かった？」

「分かりたくない。俺は信じないぞ、そんなこと。希美がそんな真似をするはずがない」

これまでだって、希美はずっと俺の事を応援し続けてきてくれたんだ。

高校時代によく落ち込んだ俺をいつだって優しく慰めてくれたのは希美だ。

『あーあ、またフラれた。何でだろうな、はあ……』

『大河兄さんの魅力に気づいていないだけです。兄さんは優しくていい人なのに、その魅力に気付けなかった。その人達の見る目がなかったんですよ。絶対に兄さんは素晴らしい人に出会えるはずですから、頑張ってください』

あの優しい妹が内心、腹黒い笑みを浮かべていたはずがない。

「どうしても信じないのね？」

「どー考えても信じられる根拠がないからな」

「根拠ならあるわ。それもアンタを納得させるだけの根拠が」

姉ちゃんは自分を指差しながら、はつきりとした口調で言う。

「――根拠は希美はこの“私”の“実妹”だってことよ」

「そ、そうだった！バカな、あの希美がこれまで俺の邪魔をしてきたと言うのか！？嘘だ、そんなの嘘だああ！！！」

頭を抱えて崩れ落ちる俺、希美に裏切られたショックはかなり大きい。

希美が俺のことを裏切るなんて嘘に違いない、嘘だと言ってくれ

……！！

「……ようやく納得させたのに、私も何だか泣きそうな気分よ。私の妹っていう説明一つで信じられるのってどうなの。どこまで私は悪魔だっと思って思われているのかしら？大河のこと、心配してあげてたのに……くすんっ」

姉ちゃんもなぜか俺につられるように落ち込んだ顔を見せる。

この人が落ち込む理由がさっぱり分からん。

「忘れていたよ、希美は美鶴姉ちゃんの妹だったということを」

「……大河、一発殴っていい？マジで殴るわ。お姉ちゃんの怒りをくらいなさい」

「自分で言ったのにっ！？」

「うるさいわっ！私の心は今ものすごく傷ついたの。こんなにも弟想いのお姉ちゃんなのに何て仕打ちなの。ひどいわ。大河のバカっ！」

殺気めいた雰囲気であを責める姉ちゃん。

……意味が分かんないんですけど、ぐお！？

一方的に姉の攻撃を受けてあはベッドの片隅に逃げる。

「暴力反対っ！？の、希美が本当に俺に意地悪してきたとして、その理由は……？俺ってあの子に嫌われるようなことをしたか？恨まれる覚えがないぞ」

「それも違う。恨む理由なんてないわ。あの子はね、大河が大好きなのよ。ブラコンなの、重度のブラコンだから誰にもお兄ちゃんを渡したくない。大好きな人を誰かに取られたくないって必死で周りが見えてないの。ブラコンなうえにヤンデレが追加していると言ってもいい」

我が天使の希美がブラコン＋ヤンデレって……どういことさ？

「……大河ってバカで、どうしようもないヘタレだけど、私達姉妹にとっては大事な家族なのよ。あの子の行動は褒められたものじゃない。それでも、アンタに対しては敵意じゃなくて好意だけよ。今までも、これからずっとね」

「それは俺に向けられてきたものは信じてもいいと言う事？」

「そう。希美は悪い子じゃないの。ただ、大河に対して極端で歪んだ感情を抱いているだけ。その辺をしっかり受け止めてあげるのが大河の兄としての役目よ」

希美にダークな一面があるなんて今でも信じられないけれど、もしも、そうだとするなら過去を含めてこれまでの不可解な事にも納

得ができる。

本当に希美が俺の邪魔をしてきたのか？

と、なると……まさか、今度は梨紅ちゃんが危ない——！？

第33章：想い、激突へ前編

【SIDE：桐原梨紅】

夜になりました、ついに希美さんとの一騎打ちです。
ふたりつきりになるのは正直、怖いよっつ。

「それでは、大河兄さん。お休みなさい」

「ああ、お休み。希美も梨紅ちゃんもゆっくり休んでくれ。何をするか知らないけど、あんまり夜更かしはダメだぞ。……さて、俺も自室へ行こうか。はあ、あの姉さんと一緒なんて……何をされるか怖い」

大河先生は先生でがっくりと肩を落として部屋へと去っていく。
そんなに美鶴さんと一緒に寝たくないの？

美鶴さんって言うほど大河先生に厳しくないと思う。

何ていうのかな、怖い人ではあるけど愛があるっていうか。

私もからかわれて分かったけど、ただ面白ければそれでいいって人なんだと思う。

悪い人じゃないんだと言う事だけはある程度自信を持って言える。
本当の悪魔は美鶴さんじゃない、希美さんのような人だ。

「……さて、兄さんもいなくなりましたから、本題に入りましょうか」

お風呂ではそれなりに親しくなれたと思っていた。
それでもお互いに譲れないものがあるから、言い争うしかないの。

「まず、確認しておきますけど、梨紅さんは大河兄さんの事を愛しているんですか？それとも、ただの憧れ程度なのですか？」

「愛してるよ、大河先生が好きなの。そういう、希美さんは妹なのに大河先生を愛してるっておかしいでしょう？ブラコンも行き過ぎたらおかしいだけだよ」

「おかしい？この私がですか？いいえ、私はおかしくありません。大河兄さんを思う私の気持ちは紛れもなく本物。私は兄さんを愛している。生まれてからずっと兄さんだけを異性として認識してきました。他の誰にも彼は渡さない、あの人はこれまでも、これから先もずっと私一人だけの大切な人なんです。知り合ってからたった数ヶ月程度の人がどうこうと介入してきても無意味です」

……早口でまくしたてる彼女に圧倒されかける。

希美さんの想いは重い。

ある意味、ここまで愛されている大河先生ってすごいかも。

こーいう思い込みの激しい人って男女問わずストーカーになりやすいから注意です。

「想いは時間じゃなくて、その大きさだと私は思うの。確かに数ヶ月前に出会ってから今日まで3ヶ月程度しか経っていないよ。でもね、私はその3ヶ月で先生の事が大好きになったの。優しくて頼りがいも、甘えがいもある。ようやく見つけた私の理想的な男の人。先生が好きな想いは希美さんにも負けないわ」

過ごしてきた時間が問題なんじゃない。

本当に大事なのは想いの深さ、それが一番大事なんだって。

これまでの私の恋は憧れでしかなかった。

年上の包容力を好み、同世代に子供っぽさを感じてた。

今は違う、憧れとかそういうのじゃなくて、本当の意味で私は恋をしている。

四六時中、先生の事ばかり考えているの。

「……そういう、希美さんだって一方的な想いをぶつけてるだけじゃない。大河先生の恋愛の邪魔をして、彼を苦しめたりして。それが愛情だって言えるの？」

「邪魔ではありません。私は兄さんのためを思って、守っただけです」

「そのどこか彼のためなの？自分のためじゃない。自分の好きな気持ちを勝手に押しつけてる、それは本当の愛じゃない」

先生にとって恋愛をするって言うのは大事な事だったはず。

その想いのひとつひとつを潰された事はショックだと思うの。

内心は複雑だけど、彼女の行動が間違えているのは確かな事実だ。

「……私は本当に兄さんのためを思って行動してきたんです。梨紅さんは知らないんでしょう？兄さんって、女運が本当に悪い人なんです。好きになった人、興味を持つ人は大抵、“悪女”なんですからっ」

少しだけ声を荒げて彼女は叫ぶ。

……悪女、悪い女と書いて読む悪女？

「性格のいい人なんてほとんどいません。彼氏がいるのに誘惑したり、遊び相手が欲しいだけの人や、性格の悪い人の外面のよく騙されるんです。兄さんって人がいいせいか、そういう人に好まれやすくて……」

「……本当に？」

「大河兄さんが好きになる人ってほとんどそういうタイプの人ばかりなんですよ。もう最低です。付き合っても弄ばれて捨てられる未来が分かっているのに、全然気づく素振りもなく。私が何を言っても聞く耳も持ってくれません」

大河先生の女運のなさ。

可憐さんとかは普通にいい人だけど、沢崎さんはどうなんだろう？
私が知る限り、それが真実かどうかは分からない。

彼女の思い込みだけ、の可能性もあるけれど、希美さんの言う事が本当ならばそういう人達から先生を守ってきた事になる。

「だったら、私が守るしかないじゃないですか。好きな人を守ろうとして何が悪いんですか？ 梨紅さんの言うとおり、私は妹です。私に愛情があっても、兄さんが私を女扱いしてくれる事はきつとありません。……そんなこと、分かっています」

「希美さん……」

彼女はこちらをキッと睨みつけてくる。

この人って、本当に大河先生の事が好きなんだ。

「私がどんなに甘えても、どんなに傍にいても、兄さんは私を女として愛してくれない。彼を本当の意味で幸せにはできない。恋人として、将来的な存在としても。それならば、妹としてできる事をする。だから、私は——」

希美さんは私に自分の想いをぶつけてくる。

「私はただ、兄さんには幸せになって欲しいだけなのに……」

彼のために相手を見定めてきた。

これまでの行動すべてがその一言に尽きる。

先生の幸せを望んでいる。

これが愛情…… 本当の意味での家族愛。

純粹すぎるほどの愛情だから、真っすぐすぎるんだ。

「……梨紅さんも同じです。大河兄さんの表面部分でしか見ていない。カッコいいから？ 優しそうだから？ そんな理由で好きなんですよっ？」

「ち、違うものっ。私は先生の事を単純な理由で好きなんじゃない」

「どう違うと言っんですか？」

これまで先生に女の子を近づけさせないようにしてきた希美さん。つまり、彼女に認めさせればいいんだ。

私が先生を幸せにできる事を証明できれば……。

「私は先生の事が好き。その気持ちは適当な気持ちじゃない」

「……年上なら誰でもよかったんでしょう？ 兄さんじゃなくてもいいはず」

「大河先生じゃなきゃダメなの」

私は希美さんの問いに想いをこめて答える。

「それなら私に教えてください。大河兄さんが好きだという明確な理由を――」

希美さんがこちらに厳しい視線を向けてくる。

先生への想いで負けちゃいけない。

何とか反撃しないと……でも、どうすればいいの？

希美さんに認めてもらえる、そのために必要な事って――？

第34章：想い、激突へ後編

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生が好き。

この気持ちに偽りはないけれど、よく考えたらいつから好きになっただろう？

人を好きになる気持ちは突然湧いてくるものだと思う。
ひとつのきっかけで、想いがめばえたりして。

「希美さんはどうして、そこまで大河先生の事が好きなの？」

「……私ですか？」

希美さんは私にこれだけ言うのだから、好きになる理由くらいちやんとあるはず。

すると彼女は何かを思い出すような仕草を見せた。

「大河兄さんはずっと私にとって素晴らしい人です。優しくて、私を甘えさせてくれる存在でした。他の誰にも兄さんの代わりはできませんから」

「さっさと兄離れすればいいのに……」

「彼が幸せだと思えば、私だって身を引きますよ。それができないから、私が彼に甘え続けているだけです」

ここまで話して分かったのは希美さんってただのブラコン娘ではないことだ。

彼女は彼女なりの考えがあり、兄を慕っている。

もちろん、過激で怖い一面もあるのは事実だけど。

お兄ちゃんラブ＝愛してる。

というわけでは、どうやらないみたい。

行き過ぎた愛情からくる家族愛を超えた恋愛感情。

それは他人への牽制も含めた演技に近いものがあると私は感じていた。

お兄ちゃんが大好きで守りたいっていう純粹すぎる気持ちちが暴走しているともいえる。

「希美さんって本当にお兄ちゃんラブだね。でも、先生はどうだろう?」

「大河兄さんも私の事が好きですよ」

「……本当の意味、つまり、愛情って意味じゃないけどね。そうじゃないければ、希美さんが頑張って他の女の子に牽制なんてしなくてもいいわけだし」

私の一言がグサツ、と突き刺さったのか彼女は黙り込んでしまう。これは一氣にたたみこめる私のチャンス到来!?

大河先生の方は別に妹以上に思ってる素振りがない。

「……それは、そんなことないです」

「本当にそうかな? だったら、先生の方も希美さんに対してそれなりの対応みせるじゃない。それがただの妹の域から出ていない以上は希美さんのひとりよがりでしょ?」

ここがチャンスばかりに私は正論を彼女にぶつける。

「希美さんと大河先生との間に本当の愛情があるって言える？」

「普通の一般的な兄妹よりも仲がいいですっ」

「でも、それ以上ではない。普通より、上でも、本当の愛情で結ばれている兄妹っているよね？その域まで、希美さんは達していない。だって、大河先生の方には希美さんへの愛情は家族愛のままだもの」

どんなに否定しようと出来ない現実。

「希美さんは先生が好き。先生は希美さんより他の女の子が好き。その事実を認めればいいじゃない。大河先生の幸せを守る？先生が好きになった相手が悪い？すべては先生のため？そんなのはただの言い訳だよ」

「やめて……」

「希美さんはね、そういう言い訳を盾に自分が傷つかないようにしてるだけ。現実をみればいい。先生は希美さんに妹以上の感情はなくて、他の女の子を普通に好きになったりする。それがひとつ目の現実。もうひとつの現実……」

「やめてくださいっ！」

声を荒げて否定する彼女。

厳しい現実を彼女は自分がよく分かっている。

「希美さんは我が侘なだけ。自分に振り向いてくれないから、彼が振り向いた女性に適当な理由付けをして関係を壊す。嫉妬している

気持ちを言い訳で誤魔化してる、ずるい人だって私は思うよ」

「違っんですつ。私は、本当に兄さんのためを思っ——」

それでも諦められないから。

大好きな人に振り向いて欲しいから。

だから、必死になってその人の気を引こうとしてる。

誰だってそうなもの。

好きな人には自分のことを好きだって認めて欲しい。

意気消沈する彼女はうなだれている。

私はここで終わらせるためにも厳しい言葉を彼女につきつけた。

「……兄と妹。行き過ぎちゃいけないラインがある。希美さんの気持ちは分かるよ。でも、だからと言って大河先生の恋愛の邪魔をする権利は希美さんにはない」

「本当なんですよ。兄さんが好きになった人達は悪い人達ばかりでっ！」

「それでもっ！それでも、人は経験をしなきゃ前に進めない。どんな恋愛だって、希美さんは見守る立場にしかないんだから。もし、その人達と付き合っ——先生が不幸になるかもしれない。だけどね、希美さん」

私は精一杯の感情をこめて希美さんに想いを伝える。

「——人の幸せを決めるのは他人じゃない。その人自身だよ」

先生が本当に不幸かどうかなんて分からない。

内心、美人と付き合えてサイコー！とか呑気に思ってるかもしれ

ない。

騙されて、痛い目にあって悲しい思いをしていたのかもしれない。希美さんがそうやって邪魔してきた事は決して良い事じゃないと思うの。

だけど、だからこそ……それは経験させるべきことで邪魔する事じゃなかったの。

「貴方には誰の想いも止める権利はない。だって、希美さんは妹だから」

私はそう言い終わると、ベッドの上に座る希美さんの顔を伺う。

「……ひつく……うつ……」

大粒の涙をこらえながら彼女は泣き顔を見せていた。どうしよう、言いすぎたかもしれない。

「私、悪くないです。全て兄さんのためですからっ」

「……別に注意する程度ならいいけど、希美さんの場合やりすぎなんだってば」

私は泣かせてしまった罪悪感で言葉のトーンを落とす。

基本的に悪い子じゃないことだけは分かった気がする。

深い愛情が彼女にはあって、兄に甘えたい感情が暴走している。

「そんなことばかりしていたら、希美さんだっていつか大河先生に嫌われちゃうよ」

「兄さんに嫌われる……？ い、嫌です。そんなことだけは絶対に嫌

です」

先生はまだ希美さんの悪行（？）を知らないはず。もしも知る事になったら、彼はどうするんだろう？ 叱りつけるとかしたら、きっと彼女は今以上にショックを受けるはず。

「……だから、もうやり過ぎちゃダメってこと」

「何か私を言いくるめて自分が有利なようにしてませんか？」

——ギクツ。

私は図星をつかれて首を横に振って否定する。

「してない、してないっ」

「怪しいですね。そもそも、梨紅さんが兄さんを好きだから私を言いくるめようとして……」

泣きやんだ希美さんは再び、反撃を開始しようとしたその時だった。

ドアの外からノックの音がしたので、私達は口論をやめる。

誰だろう？

ドアを開けると大河先生が普段と違う神妙な面持ちで立っている。

「大河兄さん？ 声がうるさかったですか？」

「そうじゃない。俺はずっと可愛い妹である希美を信じていたかった。けれども、信じていた事実が違うというのは裏切りだと思わないか？ 希美、素直に答えて欲しい」

「……た、大河兄さん？」

希美さんがうろたえるのも無理はない。

そこには普段は優しい大河先生の面影がない。

「——今まで俺の恋愛の邪魔をしていたのは本当か？」

静かな声でひとりの兄として、男として怒ってる姿があったの。

第35章：繋がる気持ち

【SIDE：日野大河】

「アンタの恋愛を散々邪魔してきた張本人。それが希美よ」

俺は美鶴姉ちゃんの言葉を受けてひどく動揺していた。
そんなはずがない。

あの天使のような妹が俺を裏切るはずなんてないのに。
それでも彼女のこれまでの行動をひとつでも疑うと、本当に希美が邪魔をしてきたように思えてしまうのだ。

あの子が俺の恋愛の邪魔をして何の得になるのか分からない。
だが、晴れない疑問に俺自身、彼女を信じられなくなり始めていた。

「嘘だ、嘘だと言ってくれ」

「その考えが嘘だ。現実を見なさい」

「姉ちゃんは黙っていてくれっ!？」

俺はマジ凹みしながら、姉ちゃんの言葉責めに耐える。

「アンタの可愛い妹は天使なんかじゃなくて悪魔なのよ」

「やめろっつ。あの希美がそんな真似をするはずがない」

「目の前の現実から逃げないで受け入れなさい」

「そんなはずがない。あの希美が、そんな真似をするはずがないんだーっ!!」

部屋で絶叫し悶絶する俺はうなだれていた。

もうダメだ、俺は限界だ。

こんなはずがないと思うのに、どうしても変な考えが浮かんでしまっう。

あの子がこの俺を裏切るはずがないのに。

「そんなに気になるなら直接聞けばいいじゃない」

「聞けるわけないだろ。もし、誤解で間違いだったらどうする気だよ」

「それならそれで謝れば済むでしょ？事実だったら、泣いて謝罪してくれるわ」

……本当に俺達の姉なんだろうか、この人は。
発言ひとつでも、すごく怖いのですが。

「優しすぎるのは大河の良い所でもあるけれど、本当にこのままでいいのかしら？」

「希美が悪いわけがない。あの子を疑う事なんて俺にはできない」

俺の態度に嫌気さしたのか、姉ちゃんは俺の耳元で悪魔の囁きをする。

「……いいの？本当に確認しなくて？恋愛運ゼロ、誰とも付き合えなくてもいいの？」

「そ、それは、でも、めぐり合わせと言うか……」

「都合のいい言い訳に意味はないわ。大河、貴方が決めなさい。邪魔する妹から解放されて恋人を作るのか、ずっと邪魔され続けるのか。選ぶのは大河次第よ。自分で決めなさい」

希美は小さな頃から俺を慕ってくれた本当に可愛い女の子だ。甘えてくれる素直な存在。

俺にとっての天使の幻想が崩れるのは信じがたい。

「希美の目を覚ませてあげるのも兄の役目じゃない？」

「俺は、俺はどうすれば……」

悩みに悩んだあげく、俺は姉の言葉をとりあえずは聞く事にした。希美が本当に悪魔かどうか。

どうしても確認したいので、俺は希美のいる部屋の前まで来ていた。

本当にあの子が俺の恋愛の邪魔をしていたのか。それを確認するだけだ、姉ちゃんの戯言ならばそれでいい。

「俺を信じさせてくれ、希美」

俺が部屋の扉を開けようとした時、中から声が聞こえてくる。

「——私は、兄さんのためを思って行動した、それだけです」

「大河先生の恋愛の邪魔をしたのを正当化しないでよ？」

「兄さんは私のもの、誰も兄さんには近づけさせない……」

扉越しに聞こえる声に俺は呆然と立ち尽くしていた。

嘘だ、嘘だと誰か言ってくれ（本日2回目）。

「嘘じゃないわ。これが現実よ」

「ひっ！？ね、姉ちゃん。何でここに？」

いつの間にか俺の背後に立っていた姉は容赦のない言葉を突き付ける。

「さっさと入って解決してきなさい。アンタの疑問はそれで解決。間違いではなかったのだと辛い現実を受け入れてきて」

何度でも言うが、本当にこの人は俺の姉なんだろうか？

「姉ちゃんは誰の味方なんだよ？」

「私？私はね、今は梨紅ちゃんの味方。でも、ふたりの姉として味方であり続ける気持ちはあるわ。真実を確かめてから、自分でどうするかを決めなさい」

姉の後押しで俺は不安を抑えながら部屋の扉をゆっくりとあける。

「大河兄さん？声がうるさかったですか？」

「そうじゃない。希美、俺はずっと可愛い妹である望みを信じていたかった。けれども、信じていた事実が違うというのは裏切りだと思わないか？」

「……た、大河兄さん？」

希美さんが顔を青ざめさせて震えている。
その態度に言い様のない怒りと寂しさが湧きあがってくる。

「——今まで俺の恋愛の邪魔をしていたのは本当か？」

「違うんです。私は大河兄さんの邪魔をしていたのではなくて、守りたかっただけなんです。決して、邪魔をしていたわけでは……」

怯えるように身体を震わせながら希美はするように告げた。
嘘だと思い続けてきたのに。

現実には甘くなくて、真実に絶望する。

「そんな……希美がそんな子だったなんて……。今まで俺をずっと欺いてきたのか。女に振られた俺を憐れむように内心は笑っていたのか？」

「ち、違いますっ、兄さん。私は兄さんの幸せを望んでいて……」

「幸せ？俺の幸せを壊してきたのは希美じゃないか。どうして、キミは俺の邪魔をする。俺だって女の子と付き合って恋愛経験を積みたかったんだよーっ」

人生19年、恋人歴なし。

この謎が妹の暗躍によるものだったなんて、最悪の真実だ。

実はこっそりと美鶴姉ちゃんが手引きしていたのだと思い込んでいた時期もあった。

まさか希美の方がそんな真似をするはずないと、疑った事もなか

ったのに。

「……先生、落ち着いてよ。希美さんが怯えているじゃない」

「黙っていてくれ。梨紅ちゃん。これは俺と妹の問題だ。部外者には関係ない」

「一応、私も被害者ではあるんだけど」

希美がした事は俺の周囲の評価にも関係している。

これまで良い雰囲気になって、いざ告白と言う場面で「ごめんなさい」と言われる展開を何度も経験してきた。

その全てに希美が関わっているとしたら？

「許せるはずがない。希美、キミは一体俺の周囲で何をしてきた？美鶴姉ちゃんから聞いた時は嘘だと思っていたが、まさか本当にしてきたなんて」

「言い訳させてください、兄さん。私は兄さんを守ろうとしてきたんですよ？だって、兄さんって好きになる女性の趣味が悪いんです。悪女ばかり好きになって、苦しむ兄さんを見たくなかったから。だから、私は――」

「悪女？それは違う、確かに俺が好きになる女の子は普通じゃない。失恋していたり、男癖が悪かったり、そう言う一面もある。でもさ、それって一面だけじゃないか。希美はその子たちの一面しか見ていない」

希美が今にも泣きそうな悲しみの表情を浮かべている。

俺が泣かせているのかと思うと辛いが俺も言葉を止められない。

「俺は違つ、いろんな姿を見てきて、好きになった。人を好きになるってそういうことだろ？過去とか、全部受け入れて好きになるものだろ？希美にもこういう一面があった、俺が知らずにいた一面だ」

「それは……」

「最悪だよ、希美。やっぱり、お前も美鶴姉ちゃんの妹だったんだな」

「うう、そんな発言はあんまりです。私と姉さんを同じにしないでください。私、本当に……ひっく、うう……あっ……」

とうとう泣きだしてしまう希美。

そこまで美鶴姉ちゃんと同じにされるのは嫌なのか。
廊下にいる姉ちゃんが聞いたら激怒しそうだがこれが現実なのだ。
それを言ったら、俺だって姉ちゃんの弟なわけで……あまり考えたくないことだけだな。

あの人の顔をした魔王様には逆らえない。

「希美に邪魔されて、恋愛をふいにされ続けてきた俺の気持ちがかかるか？」

「ごめんなさい、ごめん……なさい……」

俺だって怒りたくて怒るわけじゃない。
信じてきた相手に裏切られた怒り。

それは自分を抑えられそうにないのだ。

「……大河先生、その辺でいいでしょ？希美さんだって反省してい

るよ」

「反省？希美を信じ続けてきた俺は許せないんだよ」

梨紅ちゃんが俺を止めようとするが、今日の俺はその程度では止められない。

すると彼女は希美をフォローする発言を始める。

「落ち着いてつてば。そんなの先生らしくないでしょ」

「俺だって怒る時は怒るんだ」

「もうっ、希美さんを責めて何になるの？」

「希美がした事は俺にとってそれだけ許せないってことなんだ。邪魔しないでくれ」

彼女の兄として、俺は彼女を叱る義務がある。
だが、それは思わぬ形で止められる。

「——いい加減にして、先生っ！梨紅ちゃんパンチ！！」

「——ぐはっ！？」

いきなり梨紅ちゃんが俺を突き飛ばしてきた。
バランスを崩して頭からベッドに突っ込む、俺。

「な、何をするんだ？」

あまりの突然の出来事に俺は戸惑いながら、

「今の先生、すごくかつこ悪い。そんなの私が好きな先生じゃないよ。希美さんが意地悪した程度で本当に女の子に振られたって思ってるの？それを信じているの！？」

「……え？」

俺と希美が同時に声をあげて驚く。

何を今さら……希美だって罪を認めているというのに。

「それは、だって、希美が悪いんだろ？」

どちらも混乱気味で言葉が出ない。

そんな俺達を梨紅ちゃんは少し呆れた顔をしつつ言う。

「希美さんが悪いのは事実。それを責めなくなる大河先生の気持ち、よく分かるよ。悔しいって気持ちもね。それで自分の妹相手にそこまで怒らなくていいじゃん。希美さんだって真剣な気持ちで大河先生の事を想って行動した。振られ続けてたのは先生自身も悪いんだからね？全部が希美さんの責任にするのはおかしいよ。彼女だけが悪いんじゃないんだ」

どっという意味だよ、それは――？

第36章：分かりあう心

【SIDE：桐原梨紅】

先生が希美さんの本性を知ってしまった。
ざまあみろ。

希美さんの本当の姿を見ていなかったらそう思っていたかもしれない。
ない。

けれど、今は違う。

彼女と触れ合う事で私は希美さんに親近感を抱いていた。

「先生がフラレ続けていたのは希美さんだけが問題じゃないよ」

前の私なら彼女をフォローする発言なんてしなかった。

先生に責められて泣いてる彼女が可哀想に思えたの。

「……それってどういう意味？」

「あのね、先生。恋してる相手が、妹の嫌がらせ程度で本当に諦め
と思う？自分のものにしたいつて思ってる人が？」

「だから、希美の度が過ぎた嫌がらせが……」

「希美さんって確かに怖いよ。私も脅かされたもの。兄さんに近づ
くなんて」

彼女の性格が美鶴さんと同じような黒さがあるのは事実。
けれど、希美さと美鶴さんじゃ怖さのレベルが違う。

「美鶴さんなら、本当に容赦はしない。でも、希美さんの嫌がらせは試練みたいなものに思えたの。何ていえばいいのかな。この程度で諦めるなら、それまでの想いしかなかった。そんな風に私自身は感じたよ」

「……試練？」

「うん。先生を想つての純粹な行動だったんだと思う」

私がそう言うと彼は怒りを鎮め始める。

「先生がフラれたのはその女の子の気持ちがある程度だっただけ」

理不尽なのは分かるけど、悪いのは彼女たち自身だ。
遊び半分、本当の恋愛ではない。

「あとは先生がヘタレだったのも問題。一度フラれたくらいで諦めたりしてたでしょ？もう一度くらいアタックしないとね」

「グサツ！？お、俺だって頑張っていたのに」

先生自身にも問題はあつて、全てが悪いと責めるのはおかしい。

「つまり、希美さんは悪い事をしたけど、責任を押しつけちゃダメっ。希美さんは先生にとっても大事な妹でしょ？違う？」

先生は希美さんの顔を見つめる。

大河先生も優しい人だからきつと分かってくれるはず。

「うーん。梨紅ちゃんの言う通りではあるんだけどさ」

「何、まだ自分のふがいなさ以外に文句でも？」

「うぐつ。この問題って、本当に俺が悪かったのかな？」

どうにも納得のいかない先生と、成り行きを見守る希美さん。
元々仲のいい兄妹なんだから仲直りして欲しかった。

私には兄妹いないから大切にしていってほしいって思うんだ。

「許してあげて？希美さんだって悪気はあったけど、先生を思っ
たことなの」

「……それは、いや、だからと言って」

先生も可愛い妹の涙を見たくはないはず。
だからこそ、彼もどうしたらいいかわからないんだ。

「ごめんなさい、兄さん……」

シュンツとうなだれながら、頭を下げる彼女。

そんな姿を見て、まだ許さないと言う人じゃない。

彼は仕方なしに「これからはしないでくれ」と短く告げる。

「今までの事は許してもいい。どうせ、俺の女運が悪かった事も入
っているんだろう。希美の行動を含めてな。だから、もういいよ。
俺も強い言葉で責めて悪かったな」

何だか怒りも冷めて、バツが悪そうに彼はそう言う。
希美さんの頭を軽くポンポンと撫でる。

「兄さん……」

「やっぱり、希美は俺にとっては可愛い妹だからさ。これからも仲良くしていきたい」

「私も、今回の事は反省しています。兄さんの迷惑をかける事だけはもう絶対にしません。本当にごめんなさい」

何とか問題は解決かな？

私は雰囲気軟らかくなったのを感じ取り、先生に言った。

「と言う事は、これで私と先生も恋人になれるよね？」

「……何の話？」

「愛の障害がなくなったということでしょう？」

私がそう言っただけに抱きつくと、先生は複雑そうな顔をして、

「そ、それは、また今度な。眠いから今日は寝るよ」

「逃げた！？……ここまで来て逃げるって、そう言う所がヘタレなんだよ？」

先生はその一言にひどく傷ついた表情を見せる。

「ぐはっ！痛い、今のは胸が痛かった……ヘタレって言わないで、お願いだからさ」

「それなら、私とのことも前向きに考えておいてね？」

「善処しておくから勘弁してくれ」

彼はそう呟いて、この部屋から去っていく。

ホント、先生って素直じゃないなあ……。

部屋に残された私と希美さんは改めて向き合う。

「ありがとうございました」

彼女は先ほどと違い、優しい表情を私に向けた。

「どうして、私をフォローしてくれたんですか？私は梨紅さんにひどい事をしてきました。兄さんの恋の邪魔も……。それなのに、なぜ？」

「希美さんが可哀想だっと思ったから。今回の問題は先生にも、周囲にも問題があったと思うの。希美さんって真つすぐなんだ。それを話していて感じていたし、怒った大河先生を見たくもなかったもの」

私の言葉に彼女は考え込む。

今回の事で希美さんも多少の反省をしたはず。

行き過ぎた兄妹愛をこれ以上、行使する事はないと思いたい。

「……貴方はこれまでの兄さんを好きになった女の人の中でも違う気がします」

「私は諦めたりしない、本気の恋をしているもの」

「本気の恋……。そうですか、梨紅さんは兄さんを愛しているんで

すね」

彼女は涙をぬぐって静かに目を瞑る。

「それと、希美さんをかばったのはもう一つ理由があるよ」

「もうひとつの理由？」

「今日1日、希美さんとずっと一緒にいてお姉ちゃんみたいだって思ったこと」

お姉ちゃんのような存在。

私は彼女に抱いていた気持ちが彼女を救おうとした。

「お姉ちゃん。お風呂でもそう言ってくれていましたね。梨紅さん、私みたいなものを姉のように想ってくれますか？」

「希美さんって、悪い人じゃないもの。色々あったけど、私はこれから仲良くしたい。希美さんのこと、お姉ちゃんみたいに慕ってもいい？」

誰かに姉のように甘える行為。

それは私にとっても望んでいたこと。

「……誰かに甘えられるなんて今まで考えた事ありませんでした。私は、甘えるばかりの立場でしたから。それでも、梨紅さんがそう言ってくれるのなら……」

彼女はそっと私の身体を抱きしめてくる。

「——貴方を“梨紅”と呼んでもいい？」

彼女は敬語口調をやめて、私に優しい微笑みを見せたの。
こういう優しい顔をするんだ、希美さんって……。

本当にたくさんの方があって、時間はかかったけど彼女と分かり
あえた。

私もその想いに応えるように彼女をこう呼んだ。

「——うん。いいよ、希美お姉ちゃんっ」

「ありがとう、梨紅」

仲良くなりたいと、同じ気持ちでいてくれる姉のような存在。
年上の姉と呼べる相手に憧れていて私にも呼べる相手があった。
それはすごく嬉しいと思う。

「……仲良くしようね、お姉ちゃん」

想いをこめて、私は笑顔でその一言を彼女に告げた——。

第37章：愛の行方

【SIDE：日野大河】

希美の悪行（？）が明らかになってから一夜があけた。

当初はシヨックで俺も希美にひどい事を言っただが、翌日になれば怒りも冷めた。

あの子はあの子なりに俺を想ってくれていた。

そう考えれば、一方的に望みを責めたのは間違いだ。

「謝っておくか」

朝、目が覚めてから俺は彼女の寝室を訪れる。

まだ寝ているのかと思ってドアを開けると既に希美は起きていた。ベッドで眠る梨紅ちゃんの寝顔を見つめている。

優しい笑みを浮かべている。

「……あら、兄さん？おはようございます」

「おはよう。その、昨日は……」

「昨日はすみませんでした。兄さんに謝っても足りないでしょうけど、本当に反省してます。……もう兄さんの恋愛の邪魔はしませんから許してください」

「俺もきつく言いすぎたよ」

希美はこれからも可愛らしい妹でいてくれ。

姉があんな悪魔なので俺にとっては救いであり続けて欲しいのだ。

「それで、何をしているんだ？」

「“梨紅”の寝顔を見ていました」

「梨紅……？」

希美が誰かを呼び捨てるのは珍しい。

誰相手でも敬語口調の彼女だからな。

年下相手でも口調を変えることはまずない。

「昨日、梨紅が言ってくれたんです。私をお姉ちゃんみたいだつて私、今まで姉扱いされたこともなかったんですけど、初めて妹のような存在を愛しく思えて……」

そついや、姉ちゃんが言っていた。

希美と梨紅ちゃんの仲がよくなっている、と。

それはこういう意味だったのか。

寝顔を見つめ続ける彼女。

梨紅ちゃんの寝顔は確かに可愛い。

「梨紅つてばすごく可愛いんですよ。昨日も一緒に寝たんですけど、その前にずっと兄さんの話をしていたんです」

「俺の話って何の話だ？」

「兄さんのどういう所が好きなのか。惹かれたのかって事です。梨紅は昔から年上の人を好きになる傾向があつたようですけど、大河兄さんは他の人達と違い、本気で好きになった相手だと言っていました」

希美は「こちらが妬けてしまうほどに大好きなんです」と呟く。それは、俺に対してか希美自身に対してか、どちらの意味だろうか。

「兄さんは梨紅の好意を受け止めてあげないのですか？」

「……歳の差もあるし、梨紅ちゃんはいいい子だけど、俺にはちょっとな」

「私には大河兄さんにはよくあっていると感じます。本当に兄さんを愛していますし、性格だって背伸びしている子供っぽさが可愛いじゃないですか。自分に無理してでも相手に合わそうとするのは本気の証拠です」

梨紅ちゃんが俺に好意を抱いてるのは知っているが、そこまで思われていたのか。

当初は振り回されてばかりだった。

もう少し、年上ならば魅力もきつと変わっていただろう。

「彼女なら、きっと兄さんの良きパートナーになると思いますよ。これから成長していきますから、兄さんもいつまでも子供扱いしないで、女として見てあげてください」

「希美がそう言う事を言うなんて珍しいな」

昨日までは敵対(?)していた相手のはずだが。和解して、いろいろとあったんだろうか。

「……今は私にとっては大事な妹のような存在ですから。信頼して

います。兄さんもこの子の本質に触れてみてください。きっとすぐに好きになりますよ」

「そうかな？」

「はい。年下だから、好みじゃないから。そんな理由抜きで本当の梨紅と向き合ってみてください。そうすれば、兄さんも梨紅が好きになります。私も昨日までは正直言っただけに入らない相手でした」

希美ははつきりと言う。

昨日、この子の本性も初めて見たのでショックが大きかったな。

「でも、思いやりもあり、とても人を惹きつける魅力のある女の子だと知り、考えを変えました。今はとても可愛く思います」

希美には年下の相手と付き合う機会がほとんどなかった。

俺の従姉妹も大抵年上ばかりだったので、甘えてばかりの存在だったのだ。

そんな彼女が目に見えて変化した。

その事に俺は驚く。

「……そろそろ、朝ご飯の時間ですね。梨紅を起こさない」と

彼女はそつと梨紅ちゃんの頬に触れて優しく声をかける。

「梨紅、起きて。もう朝だよ」

梨紅ちゃんと言う存在が希美を変化させた。

不思議な子だ、改めて俺はそれを感じさせられていた。

朝から梨紅と希美は一緒に仲良く出かけてしまった。

少し遅めの起床の姉ちゃんもコーヒーを飲みながらその光景を見ていた。

「あの二人、仲良くなってよかったじゃない」

「……それはいいが、これは姉ちゃんの企みか？」

「企み？なんて言い方をされると悪い考えをしていたみたいじゃない。私はずっと希美には甘えてくれる子がいればいいな、と思っていただけ。あの子は人に甘える事に慣れ過ぎていたもの。逆に甘えられる子がいれば、きっと彼女も変われると思ってた」

あのふたりを近づけたのには姉ちゃんなりの理由があったのか。

「……でも、実際にこううまくいくとは思っていなかったのよ」

「最初はどこか仲違いしているように見えたが」

「そりゃ、お互いに敵同士。そう単純なものじゃないわ。でも、梨紅ちゃんも一人っ子で甘えられる存在が欲しいって言うのは分かっていたからね。その気持ちを希美に向かせるようにしたのは正解だったみたい」

コーヒーを飲み終えた彼女はそう呟いて俺を見つめる。

「……大河にとっても妹離れ、寂しい？」

「どうだろう。昨日のショックのせいでよく分らないや」

「ふふっ。あの子は純粹すぎるの。だからかな、私にはなぜか懐いてくれない」

「それは姉ちゃんの性格のせいで……くはっ!？」

俺の後頭部を襲うクッション。

この人は自分を否定されるとすぐに暴力に出るから怖いのだ。

「……大河も少しはお姉ちゃんに懐いてくれないかしら」

「こつ言つ事をする姉にどう慕えばいいのやら。地味にクッションで痛みが来るな」

勢いによつては衝撃も大きい。

クッションを投げた本人はしれつとした顔でトーストを食べていた。

「だったら、俺がお姉ちゃん大好きくつかいうシスコンだったらよかったというのか」

「くすっ……それ、悪くないわ」

「ごめん。俺の方が無理」

「そう? 私としては大河がそんな風に慕ってくれたら嬉しいのに」
うつとりとした表情を見せられて俺はゾクツとした。

姉ちゃんの望む俺にはなれそうにもない。

ていうか、俺に何を望んでおるのだ、姉ちゃんは。

実は思いつきり、ブラコンだったというか衝撃の事実はないと思いたい。

今までの悪意も殺意も、その他もろもろも全部が好意の裏返しだったとか。

そんなのありえない、ありえないけど……いつもの冗談だよね？
やっぱり、姉ちゃんの事だけはよく分からない。

「それで、梨紅さんの事も考えてあげなさいよ？あの子、希美を攻略して、次は本格的に大河を狙いに来るはずだから」

「その背後に誰かさんの影を感じるのは気のせいかな？」

「……気のせいでしょう？誰かさんって誰なのよ」

笑みで誤魔化す姉ちゃん。

梨紅ちゃんとかっそり手を結んだのは今回の事で明らかだ。

「次は何を企んでいるのやら？」

「別に何も企んでいないわ。私は大事な家族が幸せならそれでいいのよ」

姉らしい言葉を、一番似合わない人に言われる事ほど違和感というものはない。

美鶴姉ちゃんの企みはともかく、俺も梨紅ちゃんの事を真剣に考えた方がいいのだろう。

春の訪れが俺にも変化を与えようとしていた――。

第38章：恋に落ちて

【SIDE：日野大河】

大学の春休みも残りわずか。

4月に入り、2週間の滞在をしていた希美は再び実家へと戻った。この2週間で関係を深めた希美と梨紅ちゃん。

まるで姉妹のように仲好くなり、後半はほとんど一緒にいる事が多かった気がする。

希美も俺に対する過剰な反応はなくなり、溺愛していたあの頃が懐かしく思えるほどに、妹はすっかりと兄離れをしてしまったのだ。依存する相手を代えた、と言う言葉が正しいのか分からないがそう言う事なんだろう。

兄離れされた事はあの事件があっても悲しいものだ。

希美の事を思えば兄離れするのは必然的なものかもしれない。だが、こんな事件であっさりと離れられるのモノ、そこはかとなく悲しい。

俺の青春よ、さよなら。

心に穴があいたようなそんな不思議な感覚。でも、希美は俺に言ったんだ。

『大河兄さんはずっと私にとってのたった一人の兄さんですっ』

その言葉に俺は安心した。

兄妹である事に変わらない。

ならば、俺も覚悟を決めるしかないな。

いい加減、妹離れをしなくちゃいけないのは俺の方だったから――
|。

今日は春休み最後の家庭教師の日。

次からは彼女も中学3年生として受験シーズンに突入する。
梨紅ちゃんの部屋で俺はいつものように勉強を教えていた。

「というわけで、次からは問題のレベルもあげていくから」

「はい、先生。実は私の通う私立中学にはエレベーター式なので、そんなに頑張って高校受験をする必要もないよ」

「ダメ。エレベーター式でも上に上がるための試験はあるし、数学もその科目に入ってるんだろ？ 他は抜群に賢いんだから、これだけはしっかり頑張ってくれ」

確かに他の高校に行かない限りは私立のエレベーターは上にあがるのはそれほど難しくない……が、油断はできない。

「梨紅ちゃんの成績なら別の私立の高校へも行けるんだろ？ 可能性がある以上、楽して勉強から逃げることはないよな？」

「うう、数学のない国へ行きたい。将来、役に立つのは電卓計算だけだよ」

「身も蓋もない事を……。梨紅ちゃんは頭いいんだから、もう少し忍耐力をつけてくれ。数学のテストだって3学期のテストでは40点も取れたんだ。この調子ならもう少しで平均点くらいは狙えるようになる、はず」

実際、ものすごく目に見えて得意になった様子はない。

とはいえ、ある程度、数学と言う物を理解し始めてきている。

家庭教師を受けた当初は数学から逃げ続けてきたただだったからな。

ちゃんと向き合うようになったただけでも進歩と言える。

「元々、理解力はあるんだ。応用力さえきっちりこなせば、梨紅ちゃんなら良い点を取れるようになると思うけどな」

「……うん。頑張る」

「よし、いい子だ。それじゃ、続きを始めるか」

軽く頭をなでてやりながら機嫌を伺い、梨紅ちゃんを教えているとちらちらとこちらを伺ってくる。

「ん？どうした、何かあったのか？問題が難しい」

「うん、それは難しいけど……」

「他に何か？」

「何でもないっ。気にしないで」

そう言ってるけど、こちらを気にしているのは見て分かる。毎回している小テストの採点時、彼女は希美の話題を切り出す。

「希美お姉ちゃん、帰っちゃったね」

「そうだな。ていうか、何で梨紅ちゃんと希美が急激に仲良くなっ

たのはよく分からない。ふたりに何があっただ？」

ふたりが姉妹のように仲よくなった理由があるはず。

「うーん。私は元々、お姉ちゃんが欲しかったから。希美お姉ちゃんには妹みたいな甘えられる存在が欲しかったみたい」

「美鶴姉ちゃんも似たような事を言っていたっけ」

「ふふつ。希美お姉ちゃんが甘えてくれなくなつてさびしい？」

梨紅ちゃんにかかわれて、俺は「さあな」と呟く。
俺にも男の意地があるのです。

素直に兄離れされた現実を受け止めたくないだけ。

「その分、私が先生に甘えてあげる」

「はいはい。それは楽しみしているよ（棒読み）」

「うう、全然、感情がこもってない」

膨れる彼女は、いつもと違う。

何やら企んでいる様子なのは気のせいなのだろうか？

「……私、先生へのアタックの仕方を変えるべきだと気づいたの」

「何のことやら？」

「こういうことよ、大河先生っ」

いきなり俺に抱きついてくる彼女。

今までも何回か同じようなシチュエーションがあった。

だから、俺は特に驚く事もなかったんだが……今日はいつもと違った。

「香水、変えたんだ？」

「そうだよ、先生が好きそうな匂いでしょ？」

「背伸びしすぎじゃないかな。これって姉ちゃんとかが使うような匂いじゃないか」

これまで、梨紅ちゃんがつけていた香水と違い、すごく大人びて見える。

顔を近づけてくる彼女。

潤んだ瞳がこちらを見つめている。

「——大河先生、私は先生が好き」

それまで明確に言葉にされた事はあまりなかった。

何ていうか、こういう告白のようなシーンもなかったはずだ。

「私は、ずっと先生が好きだった。もう、どうしようもないくらい」

「……ふ、ふーん」

何だ、なぜだ、今、俺は告白をされているのだ！？

これが彼女の言う甘え方の違いと言う奴なのか。

「真剣に考えてみて、欲しいな。私、先生に比べたら子供かもしれ

ない。けれど、気持ちじゃ負けてないと思うの。先生に釣りあえるだけの女の子になるから……だから、私と付き合ってください」

最後は真剣な顔を見せて俺に告白する彼女。

それは俺を小悪魔のようにからかうでもなく、ひとりの女として俺に向き合っている。

俺に抱きつく彼女はどこか震えているようにも感じた。

緊張しているのか、あの梨紅ちゃんが？

「大河先生、私の事を子供扱いばかりして全然進展してくれないから。こうして態度に出さないと考えてもくれないと思ったの。ねえ、先生。私じゃダメかな？先生の初めての恋人に選んでくれないかな？」

「梨紅ちゃん……」

「歳の差は、私にとっては良い事でも、先生にとっては子供と付き合い合えないって分かってる。でもさ、私だってあと1年たてば高校生だよ？そう考えたら、今からでも付き合い合ってみる気ない？出来る限り、大人っぽくするから」

この香水も、言われてみればいつものツインテールの髪型も大人しくまとめている。

雰囲気が違う気がしたのは、改めて言われてみればいろいろと気がついた。

「……だから、考えて見るだけ考えて。お願いっ」

必死な様子で俺にそう告げる彼女。

その日、授業を終えた後も俺は複雑な心境だった。

梨紅ちゃんが俺に好意を抱いているのは知っていた。
子供だからと相手にしてこなかったのは俺だ。

だけど、彼女は今度は真つすぐに俺に向かってきた。
それを誤魔化す事はできそうにない。

今度は答えを出す、好きか嫌いか、どちらかはつきりと出さなく
ちやいけない。

「俺はどうすればいいんだろう？」

俺は梨紅ちゃんの顔を思い浮かべながらただ悩むことしかできな
かった。

最終章：恋の始まり？

【SIDE：桐原梨紅】

大河先生に本気の告白。

先生に相手にされるか、心配ながらもちゃんとした告白は初めてだった。

「うう、昨日は眠れなかったし」

だって、緊張するんだもの。

告白したからには私も本気で先生を好きだって伝えたくもり。

私は桜並木の立ち並ぶ公園で彼を待っていた。

桜はちょうど見ごろで花見客も多い。

ひらひらと舞うピンクの桜の花びらを私は見つめていた。

「素直にお花見気分にはたれないよ」

それよりも、胸の奥からじわじわと締め付けてくる緊張感が強い。

「こんな風に緊張した事ないのに」

私はベンチに一人座っていた。

先生が来る約束の時間はあと5分程。

それまでの時間が長くて怖い。

「先生と出会ってから3ヶ月。ものすごく長く感じる3ヶ月だった気がする」

私は彼との出会いを思い出していた。

初めての家庭教師。

最初はただのカッコいい人だと思っていただけ。

私にとってはすぐくお兄ちゃんのように親しくなるたびに好きになっただ。

先生は本当に優しく、私はその優しさにずっと惹かれていたの。

「初めは私の方が主導権を握っているつもりだったのに」

そうだよ、最初は私の魅力に翻弄させるつもりだった。

でも、全然なびいてくれなくて……。

同世代にはモテるし、自信もあったのに相手にもされなくて悲しかった。

「これで答えを出してもらった方がすっきりするよね」

私はふう、とため息をつきながら心の準備をしていく。

もしも、ダメだったとしても諦めたりしない。

時間をかけて成長してまた告白すればいい。

『兄さんもきつと梨紅の想いに応えてくれますよ』

昨日、希美お姉ちゃんにメールをして返って来た返事。

和解して仲良くなつてからはよく相談にも乗ってもらっている。
不安はぬぐい去れないけれど、ここまできたら逃げられないし、
逃げるつもりもない。

「……お待たせ、梨紅ちゃん」

やがて、待ち合わせ場所に先生がやってくる。

私を探していたので、手を振ってここにいると私は示した。

「あつ、大河先生っ！」

「待たせたかな？」

「ううん。時間はまだだから大丈夫。ちょっと早めに来ただけだから」

そう、ほんの1時間前にね。

だって、ドキドキしすぎて早く来すぎたの。

「あの、先生……ここは人が多いから移動しない？」

「この賑わいだともこも人でいっぱいじゃないか？」

「ううん。私、この公園の穴場スポットを知っているの」

少し高台になっている公園で上の方には記念碑みたいなものが建っている場所がある。

そこまで上ると下とは違い、花見をするスペースが少なくなるので人も少ない。

記念碑の前には誰もいない、桜の大木の前に私は座る。

誰もいないその場所ならば、私達もゆっくりと話ができる。

「綺麗な桜だよ」

「今週末でもうお終いだって聞いたな。もう新学期だし、そういう時期だよ」

あと数日で見ごろを終えてしまう桜。
散ってしまう桜は少しさびしそうに見える。

「先生、この前の告白の答えを聞かせて欲しいの」

「……」

「私のことが好きか、嫌いか。どちらか決めて」

私にとっては大事な選択。

好きな人に好きと言って欲しい。

先生はジッと私を見つめて考える。

「梨紅ちゃんは、可愛いと思うよ。女の子としてはすごく可愛い」

「……」

「でも、俺の好みもあるけど、それ以上に梨紅ちゃんはまず家庭教師の生徒なわけだ」

「……」

何か言い訳を始めた彼に私は黙り込んでしまう。

もしかして、これって、ごめんなさいフラグ？

やばい、その流れは非常に私にとっては困る。

「さすがに家庭教師の子と付き合ってたのはダメな気がするし、年齢的にも歳の差があるじゃないか。梨紅ちゃんは後1年で高校生になるって言ったけど、その1年って大事だと思うんだよね」

やっぱり、ヘタレの大河先生だ。

こういう言い訳をしてくる彼に私はムツとする。
うだうだとした長つたらしい言い訳を並べてくる。

「もつつ、好きか嫌いかどうか決めてって言ってるの。はっきり言つてよ」

「……いや、話は最後まで聞いて欲しかったんだが」

「最後まで聞いたら私に得な事はあるわけ？」

辛い事実しかないなら、私は言い訳なんて聞きたくない。
だけど、先生は私の態度に笑みを見せた。

「最後まで聞いてくれ。俺はそう言う意味で、今まではずっと梨紅ちゃんの事を対象外として、恋愛対象として全く見ていなかった。
俺の好みでいえば年上趣味だし、年下なんて正直、苦手なんだよね」

ガーンっ、予想していてもフラれるのはキツイ。
何よ、期待させておいてやっぱりそうなんじゃない！

「うつ……うつ……」

私は涙ぐみそうになる心を必死に抑える。
けれど、ある言葉にひっかかりを感じる。

「……今までは？」

「そう。多分、告白された一昨日くらいまでは。俺の気持ちとして
梨紅ちゃんは恋愛対象じゃなかった。けれど、昨日から違うように

感じてきたんだ。歳なんて関係ない、大事なものは何なのか」

先生は私の頬に手で触れてくる。

顔を近くで見つめようとする素振りに私はドキッとする。

「梨紅ちゃんって真つすぐな子なんだよなあ。そういう真つすぐさが希美を変えたんだと思うし、俺にも影響を与える気がする。昨日、一日かけて梨紅ちゃんの事を考えていた。俺にとっては年下の妹みたいな女の子だったはずなのに……」

「大河先生？」

「それなのに、考えれば考えるほどにたった3ヶ月の間に俺の心を支配している存在になっていた事に気づいた。梨紅ちゃんがいる日常が当たり前のようになっていて、逆にいない方が寂しいなんて思い始めていた」

彼は頬に触れていた手で、私の瞳の端をぬぐう。

指先が私の溢れかけた涙をぬぐったんだ。

「梨紅ちゃんを離したくない、そんな風に感じる気持ちって何だろうって考えて見たら、出た答えは単純で分かりやすいものだった。本当に簡単な事だったんだ」

先生が私に優しい声でその言葉を告げる。

「……俺、梨紅ちゃんの事が好きだ」

「大河先生……だって、私のこと」

「うん。一昨日までは気づいていなかった。けれど、昨日気づいた。それじゃダメかな？」

「ダメじゃないっ。全然、ダメじゃないよ」

私は嬉しくて思わず両手で顔を覆ってしまう。
恥ずかしさと嬉しさが入り混じった感じ。
幸せな気持ちの底から溢れ出てくる。

「……今、梨紅ちゃん、すごく顔が赤いよ」

「そ、そう言う事は言わないのっ」

「この桜に負けていないくらい可愛い。そう言う顔をするんだ、初めて見たかもしれない」

私だって、照れて赤くなることもあるっての。
いつもはヘタレな先生に私が翻弄されている。

「うう、先生……何か意地悪だ」

「それが年上の余裕って奴かな？」

「絶対違うしっ。先生の場合は余裕って言うより……？」

私が文句を言おうとするのを彼は行動で押さえ込む。
そつと彼の腕の中に抱きしめられて私は驚いた。

「梨紅ちゃんが好きだよ、その答え……聞かせてくれ」

「私も……好き、大河先生のこと、大好き」

人を好きになる、その意味を私は身にしみて感じさせられていた。彼の腕の中は温かくて、心地よくて。

「んう……」

私はそのまま唇を突き上げると彼はそつと唇を重ねてくる。桜が舞い散る中でのキス。私と先生のファーストキス。

「梨紅ちゃんって大人しくなると案外可愛いな」

「案外って何よ、むうつ」

「ははっ。そういうふくれっ面も、馴染みだけど、俺は笑顔の梨紅ちゃんの方が好きだ」

はつきりとした言葉に私は何も言えなくなる。

「ず、ずるいよ、先生……あっ……」

「大人は皆、ずるいんだよ。だから、素直な梨紅ちゃんに俺は惹かれてる」

こんな風に私を受け止めてくれる彼氏。私の恋人、大河先生……その実感がようやく湧いてくる。

「花見もいいけど、これから街の方にも出ようか」

「うんっ」

私達は桜並木の道をゆつくりと歩く。

恋人らしく、腕を組みあいながら、同じ速度で歩んでいく。

「……ここから始まりだ。俺達の恋愛、いい関係を作って行こう」

私は先生の言葉に頷いて微笑みながら「もちろん」と答える。

ピンク色のカーテンのように舞い散る桜が私達を祝福してくれる。

季節は春、新しい季節が始まり、私達の恋もここから始まったんだ――。

【THE END】

最終章：恋の始まり？（後書き）

「先生、恋の授業しない？」的な怪しい雰囲気になるのが家庭教師ものの定番のはずなのに。この話がそういう流れに行くはずだったのに、行かなかったのはなぜだろう？小思っていた以上に小悪魔っぷりを発揮できなかったのが後悔です。これじゃ、ただのツンデレちゃん……。次回からは美鶴さんを主人公にした続編です。

序章：悪魔も恋がしたい？

【SIDE：日野美鶴】

日野美鶴（ひの みつる）、20歳。

地元を離れて東京に出てきた私は教育大学に通い、家庭教師のアルバイトをする普通の大学生。

私はある事に悩んでいた。

彼氏と彼女、恋人がいるのは大学生にもなれば普通のことだ。

私だって全く男性と縁がなかったわけじゃない。

高校時代はともかく、大学に入ってから何人も男とは親しくなかった。

けれど、結局、それが恋に結びつく事はなく。

気がつけば大学3年生の春を迎えていた。

「はぁ……」

ただいま、大学の講義中。

と言つても、既に残り時間も少なく教授の雑談に話がついていた。

私はため息をつく友人の篠宮茉莉（しのみや まつり）が不思議そうな顔をする。

「どうしたの、美鶴？」

「弟に先を越されたの。私が応援した事もあるけど、実際に先を越されると凹むわ」

「弟って大河（たいが）くん？」

「そうよ。うちの大河。最近、彼女ができちゃったの」

大河は私の弟で、今年で大学2年になる。

うちの大学と違うけれど、近くの大学のために今は一緒に暮らしている。

「……あー、そういうこと。美鶴ってブラコンだし」

「違うってば。それは誤解。茉莉は私の事をどう見てるわけ？」

「弟を溺愛しているお姉ちゃん？わざわざ一緒に暮らすほど仲がいいものね？」

「……違うのに。大河はただの男避け。それ以上でもそれ以下でもない」

大河と一緒に暮らしている理由は、経済的に親の負担も少なくて
すむ事と男と暮らす事での安心感など、いろいろとメリットが多い。
それに何よりも独り暮らしは寂しいから嫌いだ。

去年の1年間、誰もいない部屋の寂しさを感じたもの。

「大河クンにも彼女ができたんだ？いいじゃん、あの子、カッコいいしモテるでしょ？相手はどこの女子大生？向こうの大学？それともうちの大学だったり？」

「……現役の女子中学生」

「は？え、えっと、それは冗談よね？」

「それが冗談じゃないの」

弟の交際相手はまだ中学3年生と歳が離れている。
一般的に歳の差が離れている交際はあまりいいイメージはない。

「大河クンってロリな人？」

「違うわよ。家庭教師している女の子に前から口説かれていて、最近になって大河の方がようやく乗り気になって、交際に発展したわけ」

「ということで、美鶴は凹んでいるのね。大好きな弟を取られちゃったから」

「……だから、凹んでないって」

本当に凹んでいるわけじゃない。

大河に彼女を作るように仕向けたのは私でもある。

相手の子と親しくなり、彼女なら大河を任せられると思い、応援した。

「美鶴も負けてられないって、ようやく彼氏でも作る気になった？」

「そうね。この年でまともな恋愛の一つもしていないのは寂しく思えてきたわ」

「今まで合コンとか開いても全然、反応してこなかったのに？」

茉莉や他の子からも合コンの誘いはこれまでも何度もあった。
実際に行った事もあるけれど、ちゃんとまともな恋愛に発展した事は一度もない。

私にその気がなかったのもある。

「そろそろ、私も恋くらいしてみようかな、と……」

「あら、ホントに珍しい。美鶴がそういう発言をするなんて。何なら合コンでもセッティングしてあげましょうか？」

「……うーん。合コンは好きじゃないわ」

ああいう、いかにも男を選びに来ました的なノリは苦手だ。
こういう考え方が私のダメな所でもあるんだけど。

「恋愛って無理に焦らなくてもいいじゃない？」

「甘いわね、美鶴。そーやって、のんびりとしているから男の一人もできないのよ」

「うぐつ。そう言う事を言われても……合コンって何か怖いのよ」
慣れていない事もあるけれど、適当な相手とは付き合いたくない。
いかにもガつついている男は嫌いだもの。

「美鶴って、気が強いワリには男の子が苦手よねえ」

「……返す言葉もないわ」

「ブラコンだから、他の子にも興味がなかったものね。分かったわ、ちよつと私なりに美鶴の事を考えてあげるから」

茉莉は恋愛慣れしているから任せてもいいと思う。

そうやって話をしているうちに教授も授業を終えてしまう。
春の訪れは私にも何か変化を与えてくれるのかしら？

「……………新入生歓迎会？」

「そうよ。うちのサークルの歓迎会。それに美鶴も来てみない？」

「……………何で、私が？」

数日後、茉莉が誘ってきたのは新入生歓迎のコンパだった。

外国文化の研究をするサークル。

私は基本的には家庭教師をしているのでどのサークルもしていない。

気さくな人が多いので、時折、サークルに遊びに行く程度の付き合いはあるけども。

「今回、新入生の子が結構入ってくれたの。男の子よ、男の子。合コンと違って、美鶴もそう言う場に慣れる事から始めればいい。心配しなくても、名義だけ美鶴もサークルに入ってる事にすればいい」

「茉莉……………」

「そんなに心配そんな顔をしなくてもいいわよ？いつもの傍若無人、女王様っぷりが様になる美鶴はどこに行ったの？」

「……………そんな私は最初からどこにもいないわっ」

普段から私がどんな目で見られているのが気になる発言。
確かに性格は良い方ではないけど、乱暴な事もない。

「はいはい。そんな些細な事はいいの。きっかけさえ、あれば美鶴も進展できるはず」

気が乗らないけれど、こういうのも、経験って言っし。
私自身も変わらなくちゃいけないんだ。

私はその提案を受け入れて新入生歓迎のコンパに出て見る事にした。
た。

いい出会いでもあればいいんだけど。

「んー、美鶴姉ちゃん。どこかに出かけるのか？」

家に帰って用意をしていると弟の大河がテレビを見ていた。

彼もアルバイトをいくつか掛け持ちしているので平日にこうして会うのは珍しい。

実際に同じ部屋に住んでいても、朝くらいしか平日は顔を会わさないもの。

「今年は去年と違って3人から1人に家庭教師の人数も減らしたから暇もあるの」

去年はお金も貯めたくてちょっと無理してバイトを頑張っていた。
無事に3人とも志望校に合格してくれて、一安心した。

今年は去年ほど無理はせずに、自分のペースで家庭教師のアルバイトもしたい。

「ふーん。化粧とかちゃんと決めて、誰かとデートとか？」

「似たようなものかも。大河は今日はバイトはないの？」

「今日は焼き肉屋のバイトが休みだからな。これから梨紅ちゃんにご飯でも食べてこようかなって思ってる」

梨紅（りく）さんは大河の恋人で中学生の女の子。
とても可愛らしい子で、大河も梨紅さんに惹かれて付き合い始めた。

「最近、会っていないけど仲良くしているの？」

「当然。付き合い初めてまだ2週間ほどだけど、付き合い見て分かった事がある」

「分かった事って何なの？」

「恋愛って楽しい物だってことだよ。梨紅ちゃんの事を好きになってみて、俺もちゃんと彼女の事を考えるようになったし」

ヘタレの大河も、ずいぶんと男らしい顔つきになってきた。

梨紅ちゃんが彼を変えた、それは喜ぶべき事なんだろうけど、寂しさもある。

こうやって自分の手から離れていくのは……。

「姉ちゃん？」

「……何でもないわ。今日は遅くなるかもしれないから戸締りはし

ておいて」

「了解。お酒はあんまり飲みすぎるなよ？姉ちゃん、酔うとひどいからな」

私は「善処するわ」と彼に告げて、家から出る事にした。

お店までは歩いて15分程度、駅前の居酒屋だ。

茉莉が与えてくれた機会を無駄にしないように私も頑張ろう。

……と、思っていたのだけど、すぐに問題が発生する。

「だからさあ、これから一緒に遊ばないって誘ってるわけ？分かる？」

「分かりたくないし、分かる気もない。これから予定があるの。どいてくれない？」

駅前で私は鬱陶しいナンパ野郎に捕まっていた。

普段ならぶっ飛ばしてでも相手にしないけども、今日は着ている服もあって、乱暴に状況を乗り越えられない。

彼を何とかしようと困っていると、私の前に別の男が現れる。

その彼は私を男から引き離すと凜とした態度で言い放つ。

「彼女も困ってるようですし、やめてあげたらどうですか？」

「あん？何だよ、お前は……？」

「あまりにも無理やりな貴方の態度が目についたので」

どうやら、私を助けてくれているらしい。

私は彼の背後に隠れるようにしていた。

歳は私よりも下かしら？

どこか幼さを残した顔つきだけど、体格はスポーツでもしているのが立派なもの。

「てめえ、横からいきなり出てきて勝手な事を言ってるんじゃないぜ」

グツとつかみかかろうとするナンパ男、その腕を逆に掴む彼は静かに威圧する。

「暴力は嫌いですよ、僕は……」

「な、何だ、こいつ力が強い！？……くっ、やってられねえな」

力強く握られたのか、腕を抑えてナンパ男は逃げだすように去っていく。

軽く掴まれてた服を直すと、彼は私に優しい声で言うのだ。

「大丈夫ですか？」

「どうも、ありがとう。面倒をかけてしまったけど、おかげで助かったわ。しつこくて困っていたの」

私がそう言うのと彼は「何もなくてよかったですね」と微笑む。その優しい笑顔に私は心をグツと掴まれる感覚に陥る。

初めてかもしれない、男の子の笑顔に心を惹かれたのは……。

「今度からは気を付けてくださいね。貴方はとても綺麗ですから」

「……え？あ、ありがとう」

そう言われて照れる私の前から立ち去る彼の後姿を私は見つめ続ける。

それが私と彼の最初の出会い、もう一度会ってみたいと思った相手との出会いだった――。

第1章：愛を知りたい

【SIDE：日野美鶴】

ナンパ男のせいで少し遅れて待ち合わせ場所の居酒屋に到着した。

……訂正、道にも迷いました。

何とか約束の時間内には間に合ったからいい。

私を待ってくれていた茉莉や他のメンバーと合流する。

だけど、すぐにアクシデントが発生。

「え？場所が分からないの？」

茉莉に電話がかかってきて、どうやら新入生の子のグループが遅れているらしい。

せっかくの新入生の歓迎会なのに、新入生が来ないのも意味がない。

「ちょっと迎えに行ってくるわ。美鶴は他の子と話している」

異文化の研究サークルは茉莉の誘いで何度も訪れた事もあり、顔なじみも多いのですぐに彼女達にも挨拶する。

居酒屋の大きな一室を借り切った中には15人ほどが集まっていた。

大学の中にはサークルがいくつもある。

今の時期はどこもこうして新入生の歓迎が行われているはずだ。

「あら、美鶴さんも来たんだ？」

「はい、茉莉に誘われまして」

「そつか。美鶴さんも準レギュラーみたいなものだね」

サークルで具体的に活動をした事はないけど、茉莉に誘われる事はよくある。

「新入生は何人くらい入ったんですか？」

「今年は8人、女の子は2人で後の6人は男の子よ」

「へえ、珍しいですね。このサークル、女の子の方が割合が多いのに」

まあ、そう言う事情だからこそ、茉莉が私を誘ったのだけど。恋愛なんてする気はあまりないけれど、してみてもいいかもしれない。

私はいつしかそんな風に考えを変えていた。知り合いの人達と話をしていると、戻ってきた茉莉が私の隣に座る。

「お待たせ。皆を連れてきたわよ」

まだ大学生になりたての男女が部屋へと入ってくる。その中に先ほど会ったばかりの男の子の姿を見つけた。

「あつ、貴方、さっきの……？」

「……？ああ、先ほどの女の人ですか？このサークルの先輩だったんですね」

落ち着いた声色の男の子、私は驚きながら彼の方をみつめる。

私をナンパ男から助けてくれた彼がそこにはいた。

ルックスはカッコいいけど、今時の感じじゃなくて古風なイメージを持つ。

「どうしたんだよ、蔵之介？こんな美人なお姉さんと知り合いか？」

「そういうわけではありませんよ。彼女とは先ほど、駅前で会っただけです」

彼の友人らしい男の子はテンションが高そうなタイプの子だ。

「……さっきはありがとう。貴方のおかげで助かったわ」

「いえ。同じ大学の先輩だったとは知りませんでした」

同世代の子と比べたらやはり彼は大人っぽい印象を受ける。

「あ、うん。私は3年の日野美鶴って言うの」

「貴方によく似合う綺麗な名前です。僕は大河内蔵之介（おおこうち くらのみすけ）と言います。よろしくお願いします」

THE・和風……まさに日本男子と言うか、古風なイメージ通りの名前だ。

「こら、そこ。勝手に自己紹介し合わない。これから歓迎会をするんだから、ふたりだけの雰囲気を作っちゃダメよ？」

様子を見ていた茉莉にからかわれながら私達は席につく。

彼女の計らいか、私の正面には大河内クンが座る。
最初は新入生の自己紹介など、歓迎会らしいムードになる。
それも飲み会が始まれば、それぞれが盛り上がる。

「どうも、俺は蔵之介の友人の久瀬直也（くぜ なおや）って言うんです。こいつとは高校時代からの親友なんですよ」

私にそう言っただけ、隣の大河内クンはウーロン茶を飲みながら「親友？」と不思議そうな顔をしている。

「し、親友じゃないのか、俺達……？地味にショック！？」

「……まあ、そうしておきましょうか」

「ひでえ。日野先輩は蔵之介とどこで知り合っただんです？」

「ここに来るまでに少し変な人に絡まれていて、彼が助けてくれたのよ」

そう言えば、あの時の彼は武道か何かしているような印象を受けた。

あんなに簡単にナンパ男を追い返したんだもの。

「なるほど。蔵之介は武道もしてましたからね。こーみえて、かなり強いんですよ。並のヤンキーなんか相手にもなりません」

「……勝手な事を言わないでください」

「ふふつ。ホントに二人は仲がいいのね。それで、大河内クンは何か武道をしてたの？」

私の質問に大河内クンはそつと視線をそらす。
代わりに久瀬クンが答えてくれた。

「蔵之介の家は古くから代々続く旧家の血筋でもものすごく古風な家柄なんですよねえ。名前も和風ですけど、ずっと武道も教えられてきたらしくて……剣道、柔道、合気道とか何でもできるから強いんです」

「……幼い頃から父親に逆らえずに続けさせられていただけです」

「あのおやつさんには敵わないだろ。さすがに、何かと模造刀を振り回すあのおやつさんに逆らう気にはなれないと思うぞ」

……彼のお父さん、怖い人なのかしら？

家庭のしつけが厳しいから、こんなにもしつかりしているんだ。性格も落ち着いているし、座る姿勢も様になる。

今時、こんな古風な男の子も中々いない気がする。

「大河内クンの家ってもしかして、お屋敷だったりして？」

「そーなんですよ。大きな和風屋敷ですよ。こいつ、自宅じゃ普段着が着物ですから。どこまで古風なイメージ通りだって初めは驚きましたよ。嫌味がないくらいに純和風な奴なんですよね」

「へえ、そうなの？和服って大河内クンにすごく似合いそうね」

「……久瀬、変な事を言わないでください」

大河内クンが困った顔するのが可愛い。

そう言う所は歳相応な感じがする。

「美鶴、頼んでいたチューハイ来たわよ」

「ありがとう」

茉莉からお酒を受け取ると彼女は小声で私に言う。

「ほう、大河内狙い？ いいじゃない、あの子、大人しいから美鶴には相性よさそう」

「え？ へ、変な事を言わないでよ。私はそいうつもりじゃ……」

「美鶴は出会いを求めにここに来たんでしょうが。いいからお近づきしちやいなさい。私が協力してあげるから。任せて」

そう言った茉莉はいきなり彼らに私の事を話し出す。

「大河内って確か駅から北の方に住んでたわよね？」

「ええ、今借りているアパートはそちらですが。それが何か？」

「美鶴もその近くに住んでるのよ」

彼の話の聞くと、確かに私の家から1分ほどの間近なアパートに住んでいる事が分かる。

あの辺は学生向けのアパートが多いけど、そんなに近くに住んでいるんだ。

「そのマンションなら近くをよく通りますから、知っていますよ」

「ご近所同士、仲良くしてあげて。美鶴も後輩クンの面倒を見てあげてよ」

「……えつと、まあ、何かあれば相談くらいには乗るわ」

私は何だか気恥ずかしくなってお酒を飲むペースを早める。お酒はあまり強くないので、酔わないようにしないと……。

「日野先輩、質問いいですか？」

久瀬クンは調子のいい口調で私にある質問をしてくる。

「先輩って付き合ってる恋人とかいたりするんですか？」

私は思わずむせそうになるのをこらえる。

うぐっ、人が気にしているのに……。

「久瀬。そのような事は聞くことじゃないでしょう。それに貴方には恋人がいたはずでは？」

「あははっ。いるにはいるけど、それとこれとは別じゃない？」

「久瀬クンは恋人がいるんだ？」

「蔵之介と同じく高校が同じだった子なんですけどね。もう4年目に突入です。同じ大学に通ってるんですよ」

照れくさそうに笑う久世クンは恋愛をしている顔をしていた。

「……大河内クンは恋人はいないの？」

「僕はいませんよ。女性に興味がないわけではありませんが、特に今は恋愛に興味はありません」

「顔だけはいいからモテるんですけど、すぐに堅苦しい性格で女の子に飽きられるんですよ。その性格さえ、直せばなあ」

いかにも硬派な彼は普通の子にはハードルが高そうだ。

「それで、結局、日野先輩には付き合っている人はいるんですか？」

私の代わりに勝手に茉莉が答えてしまう。

「美鶴には同居相手ならいるけどね」

「ちょ、ちよつと、茉莉！？何を勝手に……」

「だって、大河クンと仲いいじゃない」

大河は弟であつて、恋人ではないので誤解されたくはない。

「へえ、やつぱりそう言う相手がいるんですね。そりゃ、日野先輩、かなり美人だから普通だと思いますけど」

私はすぐに誤解を解こうとするけれど、運ばれてきた料理のおかげでタイミングを外してしまう。

大河内クンは特に気にすることない様子だ。

もうつ、変な事を言わないで欲しいのに。

私はこれ以上、変な事を言わないように茉莉を他の子に押し付け

ておくことにする。

久瀬クンも別の子達の方へと行ってしまい、大河内クンとふたりだけになる。

料理を黙々と食べる寡黙な彼。

私は緊張をしながらも、話題を何とか探そうとする。

「……箸の使い方、上手だね？それもお父さんの教育？」

「ええ、そうですね。嫌と言うほど礼儀作法は小さな頃から教え込まれました。僕には兄がいるんですが、彼はもつと厳しく教え込まれていましたよ。僕はまだマシな方ですが、それでも自然と身体が覚えてしまっているんです」

箸の持ち方一つを見て分かるけど、正座の仕方から姿勢まで彼は本当に礼儀が正しい。

そついうのが様になるのは傍目に思うほど簡単な事じゃないはず。

「大変だつたんだ？」

「どうでしょう。昔は嫌に思う事もありましたが、今は別に……。礼儀をきつちりと教育してくれた事の意味は理解していますから。礼儀作法がしつかりとできていないと格好が悪いと思います」

穏やかに微笑む彼に私は見惚れてしまっていた。

それは私の中で大河内クンと言う男の子を意識し始めたきっかけになる――。

第2章：美しき月夜

【SIDE：大河内蔵之介】

その人はとても綺麗な人だった。

大勢の人々で雑踏する駅前の通り。

僕は友人達を待っている、一人の女性が目に入る。

人の気を惹きそうな美しい女性。

彼女は男性に絡まれているようだ。

困った顔をしていたので僕は彼女を助ける事にした。

普段は誰かを助けることなどしない。

多くの人が気になりながらも、見て見ぬふりをするように。

僕も面倒事に関わるのは避けたいと思う側の人間だ。

だけど、彼女は「助けて」と瞳で誰かに告げているような気がして。

放っておくことなどできなかったのだ。

幸いにも相手もただのナンパが目的で、暴力沙汰にはならなかった。

なったらそれは面倒だが、武術をしており自信はある。

もちろん、無意味な暴力は好まないが。

彼女を無事に男から引き離す事ができ、彼女は僕に礼を言う。

僕は気恥ずかしくなり、その場を立ち去る。

待ち合わせ相手との待ち合わせ場所に戻ると、そこには既に何人が来ていた。

「よう、蔵之介。やっときたのか」

久瀬とは高校時代からの知り合いで、同じ大学でも一緒だった。彼に誘われて、あるサークルに入り、今日はその歓迎だと言う。

「……僕は久瀬が来る前から来てましたけどね」

「ははっ、冗談だよ。悪いな、彼女が俺を離してくれなくてさ」

「どうせ、また貴方が何か言っただけだろう」

「うぐっ！？なぜ、それを……飲み会相手が年上のお姉さんばかりだぜ、的な発言をしたらものすごく怒られました」

彼には交際相手があり、その相手とよく揉めている。

いつも軽い喧嘩してるようだが、本格的な喧嘩になる事はないようだ。

「それよりも、だ。俺達には大ピンチなのだ」

どうやら、歓迎会の行われる場所が分からないというらしい。

何でも、場所を聞いてたはずの久瀬が思い違いをしていたらしい。

「いやゝっ、すまん。言われた場所が隣街の飲み屋だと思ってたんだが、どうやら違うようだ。何であの店に行くのにこの駅で待ち合わせるのか疑問だったんだよな。俺もまだこの街をよく知らないからさあ」

「……久瀬に任せたのが間違いでした」

「それ、正解。次からは調子に乗って引き受けないようにする。今、さっき、先輩に頼んで迎えに来てもらっ事にしたから安心してくれ……ものすごくバカにされたけどな。篠宮先輩、性格キツイっす」

久瀬の言つとおり、すぐに迎えの先輩が来てくれて場所まで案内してくれた。

そして、僕はそこで思わぬ再会をする事になる。

先ほど、駅前で助けた女性がいたのだ。

彼女が同じ大学の先輩だと知った時は素直に驚いた。

名前は日野美鶴、と言うらしい。

日野先輩は先ほどの面識もあつて、賑わう歓迎会で話をする事になる。

「日野先輩はお酒は飲まれるのですか？」

「うん。それなりに、ね」

そうは言うが、コップに入るお酒を飲み干すたびに顔色がまずくなつてるのは気のせいだろうか。

……気のせいであつて欲しい。

「大河内くんはまだ未成年だからお酒は早いわよね。こういう大学の飲み会じゃお酒を飲ませたりする悪い人がいるけど、真似しちゃダメよ？下手に飲んで倒れたら大変なことになるんだから」

「……あそこで久瀬たちが騒いでいるのは見て見ぬふりをした方がいいと？」

「そうねえ。見てない、知らない。だから問題が起きても関係ないってね」

何か問題が起きても我関せず。

彼女はそう言ってほほ笑むと僕の顔をジッと見つめてくる。

「……何か？」

「大河内くんってカッコいいなって思ってた。性格もすごく落ち着いているし、地元ではよくモテたでしょ？人気者だった？」

社交辞令として受け取っておこう。

日野先輩に褒められるのは心地よいものだ。

「いえ、全然……。自分でも性格が問題だと思いますよ」

「そう？和風と言つか、古風でいいと思うけど？」

「どうでしょうね。古風と言つか、堅苦しいとよく言われます」

そして、それは僕の事を表現するには正しい言葉だ。

僕は厳しい家に育てられたために、他者とは少し違う。

もっと自由に生きて見たいと思っていた。

今回の大学進学に伴う独り暮らしはそのいいチャンスとさえ感じている。

あの家から離れる事で束縛されたものから解放されたような気がしたからだ。

「大河内くんは自由に生きたいの？」

「それなりに……。家柄に束縛されていたので多少は自由になりたいです」

実家では礼儀作法にうるさく、しきたりやこだわりが多かった。嫌になる事もあったが、今は多少は理解はできているつもりだ。それが大河内家と言つ旧家の古い家に生まれたものの宿命だと。

「まあ、いい機会だから楽しめばいいと思う。家を出てみてから気づく事ってたくさんあるはずよ。私もそうだったもの」

「そうなんですか？」

「うん。私には弟と妹がいるんだけど、実家にいた頃は生意気だつり、素直じゃなかったりと文句ばかり言ったりしてけど、離れてからその大切さに気付いたというか。あの子達がいなくてこんなに寂しいんだなって思わせられたりしたもの」

僕もあの家が懐かしいと思う日がきたりするのだろうか。

「大河内クンも半年くらいすれば分かるわよ」

彼女はそう笑って告げると新しいお酒、今度は日本酒を頼みだす。

「……あまり無理はしない方がいいのでは？」

「いいのよ。何だか、お酒を飲んでると楽しくなってきたから」

それは既に酔っている人間のセリフだ。

顔が赤いのでこれ以上は、やめた方がいいと忠告するべきだろう。だが、お酒を飲む席でそれを先輩相手に告げるのはいいのか？ その判断の迷いが、あとで自分にも影響を与える事になる。

歓迎会も無事に終わり、解散となった。

「うおー、俺はやるぜ、やっちゃるぜー。俺様、最強！やる時はやる男なんでよろしくー」

と、先輩に勧められるままに飲酒したらしい久瀬は意味不明な言葉をつぶやく。

「ああはなりたくありませんね。お酒は20歳になってからにしましょう」

酔っ払いながら二次会へと先輩達と一緒に行ってしまふ久瀬を僕は見送る。

「大河内、悪いんだけどそのお姉さんを家まで送ってあげて？」

「……仕方ないです。これも後輩の仕事ですか」

篠宮先輩に僕は日野先輩を押し付けられてしまった。

問題の日野先輩は思った通り、酔ってぐっすりと寝てしまっている。

僕が背負って連れて帰るしかなさそうだ。

「美鶴のマンションは分かるわよね？そのマンションの521号室よ」

「分かりました」

「家には同居相手がいるはずだから。後は任せるわ。何かあったら連絡して」

僕は頷くと、篠宮先輩はにやつと嫌な笑いを浮かべる。

「自分の家にお持ち帰りしちゃダメよ？ そうしたい気持ちは分かるけどねえ」

「しませんよ。その辺の飢えた狼さんとは違うので」

「おつ、言い切ったわね。ふふつ、それなら安心かな」

それに恋人がいる相手をどうこうするつもりは僕にはない。

日野先輩にそのような相手がいるなら、彼に迎えに来てもらえばいいのに。

そう思ってしまうが、これも一度引き受けた責任だ。

幸いなのは僕も彼女も電車に乗らず、家に帰れると言う事だろう。さすがに人目が付く場所にはいたくない。

僕は彼女を背負いながら道を歩いていると、寝言なのか、彼女は何かを呟く。

「……ん、んう……たいがのヘタレ……」

「タイガー？ 虎の事でしょうか。何の夢を見ているんでしょうね」

背中越しとはいえ、女性を背負うのは色々と気を使う。

触れてしまっている部分については追求しない方がよさそうだ。

香水の匂いにも僕は彼女に女性らしさを感じる。

僕も全くと言っていい程、女性に縁がなかったわけではない。

交際相手はいないが、地元には同世代の女性の知り合いくらいはいた。

しかし、彼女達と先輩は全然違う。

「美人すぎると言うのも、問題です」

魅力的な彼女だけに今の状況は無防備すぎる。
どうこうするつもりは毛頭ないが、それでもひとりの男だ。
嫌でも相手に意識せざるをえない。

「……美しい月夜ですね」

僕は気をそらすために夜空を見上げた。

今日は満月、蒼白い月が僕らを照らしていた。

都会では星は見えないが月明かりくらいは感じる事ができる。

「うん……んうっ」

「……どうしました？」

背中の日野先輩が反応をするので目を覚ましたかと思った。

だが、どうやら眠ったままのようで僕は一息つく。

「眠り姫を起こさないようにするのも気を使いますよ」

だけど、それは苦痛ではない。

日野先輩は魅力的な女性だ、少なからず男性なら惹かれるだろう。
僕もそうだ。

あまり恋愛事には関心はなくとも、この女性には興味を抱く。

「ここですか、彼女のマンションは……」

僕は問題の彼女の部屋までやってくる。

相手の彼氏に変な誤解を与えないようにしなくちゃいけない。

呼び鈴を鳴らすとすぐに中から男の人が出てくる。

彼が日野先輩の恋人だろうか？

「はいはい、こんな時間に何か用……って、あれ？」

扉を開けてこちらを見た彼はびっくりしたような顔をする。

さて、どう言えば現状で誤解を与えないように出来るのだろうか。

これはこれで、言い訳が難しいシチュエーションだと今さらながらに気づいたのだった――。

第3章：眠り姫

【SIDE：日野美鶴】

酔っぱらった日野先輩をつれて彼女の家を訪れる。

マンションの一室、恋人と同棲しているというらしいが、ここで彼女を連れていくのは相手の気持ちとしてはどうなのだろう？
少なくともいい気持ちはしない気がする。

「……あまり気は乗りませんが、仕方ありません」

ここで彼女を放っておくわけにも行かない。

心地よさそうに眠りにつく彼女。

まるで眠り姫のように静かな寝息をたてている。

先輩は本当に美しい女性だと思う。

「これで髪色が黒ならば僕にとっても理想的なんです」

個人的な好みでしかないけれど、黒髪の綺麗な女性に惹かれる。

しかし、彼女のようにウェーブのかかった茶髪と言うのも悪くない。

彼女の部屋の前まできてから僕は緊張をする。

ここには彼女の彼氏がいるわけで、説明すれば何とかなるだろう。
チャイムを鳴らすと中から男性が出てくる。

「はいはい、こんな時間に何か用……って、あれ？」

「あ、あの、僕は……」

日野先輩を背負う僕を彼はジッと凝視して来る。

「何だ、やっぱり酔い潰れて帰ってきたか。悪いね、キミ。大学の後輩？」

「はい、そうです」

「そうか。ありがとう。ついでで悪いんだけど、中まで連れて入ってくれる？」

大体の事情は察してくれたらしく、彼は特に気にすることなく彼女の部屋へと案内する。

女性の私室に入るのは初めてだが、きつちりと整えられた綺麗な部屋だった。

「ベッドに寝かせておいて。あとは、まあ、放っておいて大丈夫だろ」

「……分かりました」

上着だけを脱がせてそのまま、ベッドに寝かせる。ぐっすりと眠る彼女の寝顔。

「バッグの方はこちらにおいておきます」

机の方にバッグを置くと、電気を消して僕は彼女の部屋から出た。

「わざわざ、送ってくれてありがとう。コーヒーでも飲む？」

「い、いえ、僕は……？」

「こう見えてコーヒーだけは淹れるのは上手いってよく言われるから。暇なら飲んでいつてくれよ」

彼にそう言われて僕は断る理由もなかったので、コーヒーをごちそうになる事にする。

「あつ、自己紹介を忘れていたな。俺は大河（たいが）。大学2年生だ」

「大河……。貴方の名前だったんですね」

先ほど、彼女が寝言で呟いていたのは虎ではなく、彼の名前だったらしい。

「僕は大河内蔵之介と言います。大学1年で、日野先輩と飲み会で一緒だったんです」

「ふーん。大河内って俺と同じ名前の漢字だな」

言われてみれば大河と言う名前と大河内（おおこうち）という字は似ている。

それに彼は親近感がわいたのか、笑みを見せながら、

「蔵之介か。いい名前だよなあ。純和風ってよく言われない？」

「言われますね。古い家柄なので、地元ではさほどではありませんでしたが」

「そういうものか。コーヒーが出来たぞ。味には自信があるんで、

どうぞ」

彼が淹れてくれたコーヒーに口をつける。

香りもよく、ほどよい苦みがいい……これは確かに美味しい。

「いい味です。趣味なんですか？」

「ここ最近、ハマってるんだ。コーヒーって本当に奥深くで、面白いよ」

大河さんは最近自分でもブレンドをしてコーヒーを楽しんでいるらしい。

気さくで穏やかな性格、日野先輩もいい人が恋人のようだ。

「……蔵之介はこの辺に住んでいるのか？」

「はい。ここから少し行った場所にあるアパートに住んでいます」

「へえ、そうなんだ。まあ、この辺って最近治安が悪いから気をつけた方がいい。男はあんまり関係ないけど、女性の一人歩きは都合が悪いな。変質者がよく出るんだ。警察も巡回しているけど、中々捕まらなくてなあ」

彼が言うには数ヶ月前から女性目当ての変質者が出没しているらしい。

そういう噂は聞いていたが、本当だったのか。

「だから、蔵之介が“姉ちゃん”を連れて帰ってくれて助かった。この人も一応、女だからな。いざって時はヤバいだろ」

「……はい？」

僕は彼の口から思わぬ言葉を聞いて戸惑う。

「あの人は強そうだけど、ていうか強いけど女だから不安になる事もあるって言ったんだが、そんなに意外だったか？」

「違います。それではなく……彼女は大河さんのお姉さんなんですか？」

「ああ。姉ちゃんだ。気が強くていつも俺を困らせてくれる姉だよ。俺には妹もいるが、素直な妹と違って姉が怖いんだ」

肩をすくめて苦笑いをする大河さん。

これまでずっと同居相手は恋人だと思い込んでいた。彼は彼女の恋人ではなかったのか。

そう言われてこれまでの彼の態度にも納得がいく。

……篠宮先輩、わざとこの事を黙っていたようだ。

「僕はてつきり、大河さんが日野先輩の恋人だと思い込んでいました」

「一緒に暮らしているからそう勘違いされても仕方ないか。ははっ、でも、それはありえないって。ちゃんとした実姉だよ」

僕は残ったコーヒを飲み干しながら彼に尋ねる。

「恋人と同棲していると別の先輩から聞いていたので」

「それはないなあ。だって、あの人が、恋人なんて出来た事ないはず

だ」

「え？でも、あの綺麗な容姿なのに？」

「気が強すぎる我が倅美女に恋人なんて出来にくいだろ？」

彼の話ではこれまで浮いた噂も聞いた事がないようだ。

あれだけの美人なのに恋人がいないのはすごく意外な気がした。

「蔵之介は姉ちゃんに惚れたのか？」

「い、いえ、そういうわけではありません」

「んー。いいと思うけどな。蔵之介みたいな真面目なタイプだと姉ちゃんの好みでもあるだろうし。仲良くなってあげて欲しいと俺は思う。美鶴姉ちゃんって性格は気が強くて怖いけど、人一倍寂しがり屋でもあるからな」

彼は弟として姉を心配しているようだ。

仲のいい姉弟である事は彼の口調からも察することができる。

僕には兄がいるが、あまり互いに関わり合う事はない。

確執があるほどではなくとも、こうして仲のいい姉弟にはどこか憧れる。

「というわけで、これからうちの姉ちゃんとは仲良くしてやってくれよ。俺も最近、恋人ができてあんまり彼女の心配もしてやれないからさ。蔵之介なら安心できそうだ」

「姉思いの弟さんなんですな」

「普通だと思っけど？ていうか、恋人でも出来れば、俺も姉の恐怖から解放される気がするんだ。あの人、身内にはホントに厳しい人なんだぜ」

口ではそう言っても、彼は本当に姉を心配している様子だ。

「コーヒー、ごちそうになりました」

「また来いよ、蔵之介」

「はい、それでは失礼します」

大河さんにはこれからも何か相談があれば乗ってもらっ事にしよう。

頼りがいのあるいい人だと思う。

僕が彼らのマンションから出た時に携帯電話が鳴り響く。

相手は篠宮先輩だった。

『無事にミッションはクリアできたかな？おねーさん、心配したのよ』

「そちらは何とか……篠宮先輩？どういうことなんですか？」

『あははっ。大河クンのこと？』

「恋人ではなくて弟さんでした。おかげで余計な緊張をしたじゃないですか」

彼女は責められても軽く笑っただけで反省の素ぶりはない。そう言う人だと僕も何度かあって分かっている。

『ごめんねー。でも、美鶴にとっての大河クンは大事な存在には違いないのよ？だって、あの子ってすごいブラコンなの』

「そうなんですか？」

『本人は否定するけどねえ。大河クンと話したの？』

篠宮先輩に先ほどの事を話して見ると「彼らしい」と言った。

『大河クンって私も美鶴の家に行くときよく会っけどさあ。ホントに優しい子よねえ』

「……篠宮先輩よりも頼りになります」

『グサツ。おねーさん、今の一言に傷付いたわ。ぐすんっ』

「泣き真似をするくらいなら、少しはその意地悪い性格を直してください」

サークルに入った時からお世話になっているが、どうにも彼女は人で遊ぶくせがあるので、いつも困らせられる。

『あははっ、ごめんってば。美鶴には好感度UPできるようにこちらからもフォローしてあげてあげる。機嫌を直して』

「……なぜ、先輩も日野先輩と僕をくつつけようとするんですか」

『ん？先輩も、と言う事は大河クンからも言われたの？へえ、大河内ってば、大河クンとも仲良くなったんだ。外堀から確実に埋める

作戦は成功してるようね。これは本当に狙ってる?」

彼女にからかわれる前に僕は電話を切ろうとする。

「用がそれだけなら切りますよ?」

「はいはい。意地悪はやめるわよ。大河内って真面目キャラでいじると面白いのよね」

「……人で遊ぶのはやめてください」

僕は呆れた声で彼女にそう呟いた。

面倒見のいい先輩ではあるが、話しているとどうにも疲れる。

「でもさあ、美鶴が気に入ったなら私も協力するから。あの子、今は心の支えだった大河クンに恋人ができて、寂しそうにしているのよ。親友としては放っておけないんだ。それを大河内が何とかしたいって言うなら大賛成だもの」

「……僕は恋愛にさほど興味はないので」

「大学生にもなって、そんなんでーするのよ!?! いい? 最近の男って真面目なのはいいけど、いつまでも草食系とか女の子に言われっぱなしでいいの!?! 男の子って言うのはもって積極的に……——」

……と、何だか別の意味で説教を受ける事に。

僕は彼女が酔っているのだと今さらながら思いだし、しばらくの間、酔っ払いの話に付き合わされることになったのだった。

日野先輩か……。

彼女に恋人がいないと聞かされた時から、僕の中でどこか印象が

変わっている気がする。

それは僕自身も気づいていない心の奥底で何かが動き出していた――。

第4章：会いたい気持ち

【SIDE：日野美鶴】

「ねえ、昨日は大河内とどうだったの？」

大学で会うなり茉莉はニヤニヤと笑いながら言った。
大河内くん、昨日、出会った後輩の男の子。
すごく純和風な男の子で話しやすかった。

「別に、ただ送ってもらっただけよ」

「ホントに？それだけなの？」

「私は寝てたもの。大河は紳士的に対応してくれていたって言うてたわよ。今度会ったら、お礼を言わなくちゃ」

あまり飲み慣れていないので、お酒に酔っぱらってしまった。
彼が送ってくれたみたいで感謝している。

「それだけ？何かあったりしたとか？」

「しません。そういう茉莉はどうなの？昨日の二次会は？」

「適当に騒いで解散したけど？私は別に後輩に興味ないから。男はやっぱり年上じゃないとねえ。ついこの前まで高校生だった子たちに興味はないわ」

バツサリと切り捨てる茉莉。

昨日は結構、後輩の子からもアプローチかけられてたように見えただのに。

「美鶴は大河内を気に入ったんでしょ」

「今時、中々いないいい子だとは思っ」

「よしっ。そんな美鶴にまたチャンスをあげるわ」

「……何か変な事を考えていない？」

彼女は首を横に振って否定する。

「いえ、私は別に楽しんでないわよ」

「顔が笑ってるってば。……それで次は何をするつもり？」

「今日は美鶴、家庭教師のバイトはあつたっけ？」

「ないわよ。去年と違って回数減らしているから」

最近は友人達と遊ぶ時間も増えて楽しい毎日を過ごしている。
自由な時間が増えるってのはいいことだ。

「それなら今日は夕ご飯を食べにいかない？」

「……誰と誰が？」

「私と美鶴が。作戦会議よ。私に任せれば美鶴と大河内をくつつけてあげる」

「余計なお世話は結構よ」

茉莉に任せておくと変なことになりそうで怖い。

それに大河内くんは真面目なタイプだからすぐにどうこうなりそうにもない。

私もまだ自分の気持ちがよく分からないので、焦ることはない。

「甘いわっ。美鶴、いい加減に恋のひとつでもしなさい」

「……それは考えてはいるけど」

「考えているだけじゃダメなのよ。行動に移さなきゃダメ。何回言わせるの」

恋愛に関しての茉莉は何だか厳しい。

私は仕方なく頷くと彼女は何かを企んだ顔を見せていた。
どうにも茉莉が怪しいわ。

……。

その嫌な予感は当たっていた。

待ち合わせ場所にいたのは茉莉じゃなくて、大河内くんだったの。

「あっ、日野先輩。こんにちは」

「お、大河内くん！？どうして貴方がここに？」

彼の話によると茉莉に呼ばれてここにきたらしい。

「あれ、ひとりですか？先輩は来ないんですか？」

どうやら私と茉莉のふたりで来ると思っていたみたい。
私はすぐさま彼女に電話をすると、

『くすつ。どう？これなら逃げられないでしょ？一緒にご飯でも食べて話してもすれば近づくのは間違いないし』

「……明日、会ったらとりあえず覚えておいて？」

『声が低くて怖っ！？こっちは気を使ってあげてるのに』

茉莉に頼んだ私が間違えていた。

こんなの彼にとっても迷惑なだけじゃない。

『そんなに怒らなくても、美鶴も来るって誘ったら二つ返事だったのよ。これは向こうには脈ありと見ていいと思うわ。自信を持ちなさい』

「……二つ返事、ね？」

彼も私に興味くらいは持ってくれていると言ったことかしら？
私は電話を切って大河内クンに言った。

「どうやら、茉莉はこれないみたい。いきなり都合が悪くなったって。どうしよう？」

「そうなんですか。先輩、もしよければこのまま食事に行きます？」

「あ、うん。そうしょっか」

意外にも彼から誘ってくれたので返事をしやすい。

お店の方は最初から決まっていたらしくて、洋風のレストランだった。

最近出来たばかりのお店で、茉莉に近いうちに一緒に行こうと誘われてた場所だ。

「先輩はこのお店には来たことありますか？」

「ううん。ないわよ。大河内くんは？」

「僕は何度か来てます。昨日いた久瀬って奴がいるでしょう。彼と、その恋人の3人でよく夕食を食べに出かけるんです」

「久瀬くんとは高校が同じだって言ってたわね。仲がいいんだ？」

恋人がいるのに、彼も一緒にと言うことは相当仲は良い方なのかも。

彼曰く、3人一緒の方が久瀬くんにとっても口喧嘩せずにすむんだとか。

「どうでしょうね。ほとんど腐れ縁になりつつあるだけな気が……」

「友達は大事にしておいても無駄にはならないわよ。いつも夕食は外食なの？」

「コンビニのお弁当、と言う日もありますが、大抵は外食ですませてしまう事が多いですよ。家事に関してはあまり出来ない方ですか

ら」

いかにも男の子らしい理由だ。

うちの大河も私がない時は、そういうのばかり食べている。

私達は席に通されてメニューを注文して待つ。

私は今日は美味しそうなハンバーグにしておいた。

大河内クンも同じメニューだったので、少し安心。

初めてのお店って味が分からないから楽しみだったりする。

「日野先輩はいつもは？」

「私は自炊オンリーよ。友達に誘われて外食するくらい。自分で作っちゃうタイプなもの。それに料理をするのも好きだし」

「へえ、そうなんですか。先輩は料理が上手なんですね」

彼の言葉には少し驚いているような口ぶりだ。

私は意地悪そうな口調で彼に問う。

「もしかして、意外だと思ったでしょ？」

「い、いえ、そんなことは……」

「やっぱり、そう思っていたんだ？」

「すみません。あまりそう言うイメージがなかったので。先輩は家庭的な女性なんですネ。そう言う女性は良いと思います」

大河内クンに褒められると何だか気恥ずかしくなる。

「また今度、手料理をごちそうしてあげるわ」

「……それは楽しみにしておきますよ。あつ、どうやら料理がきたようですね」

彼が勧めた通りにハンバーグは中々美味しかった。

食事をしながら、私達は他愛のない会話で盛り上がる。

話をしていると感じるのは彼は決して堅苦しい感じではないこと。年齢のわりに落ち着いてしっかりとしているだけに、そこはかとなく堅苦しさがあられると思ってたけども、そう言うことはなくて、すごく話もしやすく楽しかった。

「今日はいろんなお話ができて楽しかったですよ。それでは、先輩。また会いましょう」

「ええ、そうね。今度は私のお気に入りのお店に案内するわ」

別れ際が少しさびしいくらい、いつのまにか私は彼に会うのが楽しみになっていたの。

会いたい気持ち。

大河内クンに対してそんな気持ちが芽生えている自分。

興味のある年下異性……彼の事が私には気になり始めていた――。

第5章：気になる人

【SIDE：大河内蔵之介】

「蔵之介、そろそろお前も恋人を作れよ」

久瀬に何気ない話題からそう言う話をされた。

日野先輩の事が気になる。

など、と目の前の友人に言えばどうなるか。

「……別に僕には必要ありませんよ」

「必要があるとか、ないとかじゃないっての。蔵之介ならよりどりみどりのな。なぜ、その生まれ持った容姿をもっと活かさない？イケメンが持ったないぞ。まったくもって羨ましい限りだ」

「容姿だけで気に入られても、僕は困るだけなんです」

僕がそう呟くと彼から「お前、もったいなさすぎ」とお説教をされる。

それが久瀬なりのおせっかいだとは分かっている。

彼は彼なりに僕を心配してくれているのだろう。

「お前には愛奈との付き合いで借りがあからな。お前にも幸せになつて欲しいんだ。俺が何とかしてやりたいってさ」

河合愛奈（かわい あいな）。

僕と中学時代から知り合いだった女の子だ。

高校の時に愛奈さんと久瀬を結びつけたのは、僕が取った行動ら

しい。

それゆえに、彼は僕に恩を感じているようだ。

「……早くいい人を見つけてくれ。何か恋愛事の相談があれば、俺が愛奈にしろよ？どうせ、蔵之介だと変に考え込んでしまっただけだから。悩むなら相談してくれ」

「返す言葉ありませんね。僕の性格をよく久瀬は知っている」

「長い付き合いだからな。親しき友と書いて親友だろ、俺達？」

「友の人と書いて友人だと僕は思っていますが？その辺には認識の差がありそうです」

彼は苦笑いをしながら「いつか、親友と呼ばせてやる」と悔しうた。

久瀬は付き合いが長いゆえに、それなりに親しい。

だが、僕は元々、あまり人付き合いが得意な方ではない。なので人との距離感に不慣れなのも事実だった。

「と、話は変わるが、蔵之介。今日の夕方は暇か？」

「特に何も予定は入っていませんが……？」

「だったら、悪いんだけど、愛奈の買い物に付き合ってくれないか？荷物持ちを頼まれているんだが、俺もバイトでさあ。アイツ、ひとりで放っておくとすぐに男が近づいてくるし、虫よけを頼んでおきたい」

「……仕方ありませんね」

愛奈さんとも長い付き合いでもある。

彼女は一般的に言えばとても美しい女性だ。

それゆえに、久瀬も心配症なところがある。

街中を歩けばナンパの類は日常的、人目を引く容姿の女性と言うのは大変そうだ。

「頼んだぞ、蔵之介。この借りは今度、食事をおごると言うことで返すよ」

「分かりました。彼女の方には連絡をとっておきます」

「ああ。そうしてやってくれ」

久瀬から愛奈さんを頼まれることは時々ある。

それに僕らが住んでいるアパートも、隣の部屋同士でもある。

僕の部屋の右隣が久瀬、その隣が愛奈さんの住んでいる部屋、と言っつ感じだ。

久瀬と愛奈さんは同棲はしていない。

それはお互いに自分の時間を取るためでもあると、入居時に話あったそうだ。

なお、お互いの親も同居を認めなかったのが理由でもあるらしい。僕は彼女と連絡を取ると、「4時過ぎに迎えに来て」とだけ返事がきた。

大学の授業が終わり、僕は約束通り、彼女を迎えに行く。
この時間は取っている授業が違うので、講義室が離れているため

だ。

「はあいつ、蔵ちゃん。こっちだよ」

「ここにいたんですか。少し探しましたよ」

「ごめんねえ、友達と話をしてたの。今日は久瀬ちゃんの代わりをよろしくっ」

明るい笑顔に僕は頷いて答える。

誰とも気軽に接する彼女は人を惹きつける魅力に長けていた。

「今日は買い物と言うことですが、何か特別なモノでも？」

「ちょっと身の回りの物とか、消耗品とか。一人暮らしってないと不便なモノが多くて。予想外なものが必要だったりするわけよ。蔵ちゃんもそう思わない？」

「いえ、僕はそう思いませんね。あまり気にしていないというのもありますが」

男性の一人暮らしは適当でも問題はさほどない。

女性よりは気にする事も少なくて済むので気が楽だ。

「そう。ホントは久瀬ちゃんを荷物持ちにしようと思ったのに。今日から3日間、連続でアルバイトだって。何でそんなシフトにしているんだか」

「彼は彼の目的があって、バイトを詰め込んでいるのでしょう」

そして、その理由を僕は知っていた。

来月には愛奈さんの誕生日、その誕生日プレゼントを買うために彼はバイトの時間を増やしていると聞いていた。

「ふふつ。分かってるんだよ、それが久瀬ちゃんの優しさだって……」

そして、彼女もまたその意図に薄々気づいてはいるようだ。

「でも、一緒にいる時間を削ってまでは望んでないの。その辺、久瀬ちゃんに蔵ちゃんの方から伝えておいてくれない？」

「そう言っておきましょう。それにしても、おふたりは相も変わらずに仲がいいです。理想的な恋人だと思いますよ」

僕が彼女を褒めると「惚気でごめんねえ」と笑っている。

心の底から愛し合っている、その幸せが目に見えて分かるほどに。僕達は大学を出て繁華街のある方角へと歩き始めた。

「そう言えば、久瀬ちゃんから聞いたんだけど？」

「何をでしょう……？」

「蔵ちゃんって気になる相手がいるってホントなの？」

久瀬にはその話は他言無用に言っておいたはずなのに。彼の口の軽さは信用できない所がある。

僕は肩をすくめる仕草を見せつけながら、

「やれやれ。彼も口が軽いですね」

「くすつ。私達の間には秘密はないのよ？蔵ちゃんが恋なんて初めて聞くし、気になるの」

「別にまだ恋と言うわけではありません」

そう、この気持ちは恋と確信しているわけではない。

「気になる人、というところでしょうか」

「それだけでも十分でしょ。あまり女の子に興味も見せないもんね。高校時代なんて女の子から好かれまくってたのに、告白を断り続けるから実は好色系とか思われてたんだよ？」

「それは失礼な。僕はいたって普通の趣味の人間ですよ」

特別な趣味はない、ただ女性を相手にする経験が未熟なのは事実だ。

僕のような人間が久瀬と愛奈さんを結びつけたのもほとんど偶然の結果と言っている。

「だよねえ。分かっている、信じてたよ」

「その目は半信半疑というところでしょうか」

「ぎくつ。とか言ってみたりして。あははっ、ないない。そんなことないから安心して。相手は大学の先輩なんだった？」

日野先輩が気になる、それは事実だけでも、誰かに話す事なのだろうか。

恋愛の相談などする気にはなれずに、僕は誤魔化しておく。

「気になる人がいますが、特にどうこうしたいわけではありません」

「恋人になりたいとかないの？」

「それも今はないですね。ただ異性として気になる、それだけです」

僕はそう答えると彼女は不満そうに言った。

「そんな事を言っていると、他の誰かに相手を取られちゃうかもしれないよ？恋ってのは早いもの勝ちな所があるじゃない」

「……それもまた一つの未来、ということにしておきます」

「諦め早過ぎ。ていうか、蔵ちゃんって基本的に未練って言うか、何かに執着することって少ないよねえ。あっさりしていると言うか。そういう、あっさりしているところはカッコよくはあるけども、女としては執着心くらい持っていて欲しいわよねえ」

自分でもそう言うつもりはなくとも、そう見えてしまうのだろう。愛奈さんは「蔵ちゃんは良い恋をして」と久瀬と同じことを言っていた。

それから2時間後、繁華街で買い物を続けて僕の両手が荷物の袋でふさがっていた。

「重い？大丈夫？」

「これくらいなら問題はありませんが、寄り道をせずに帰る事を所望します」

「分かったよ。蔵ちゃんがいて助かった」

荷物持ちと男避け、二つの効果を持つ僕が存在。

「……大河内くん？」

そんな僕は駅前を歩いていた日野先輩に気づいた。

これから仕事なのだろう、両手には買ったばかりと思われる高校生用の参考書を抱えていた。

「日野先輩、こんにちは。今日は家庭教師のバイトですか？」

「ええ、これから家庭教師のバイトなの。大河内くんは……女の子とデート？」

どうやら僕と彼女を恋人同士だと勘違いしている様子だ。

すぐに否定しようとする、隣の愛奈さんがムツとして僕に寄り添ってくる。

「そうですよ、“先輩”。楽しいデート中なんです」

「愛奈さん、貴方は一体、何を……？」

僕が止めるまもなく、彼女は腕を掴んで言った。

「ほら、蔵ちゃん。早く行こうよ」

「え、あ、はい。それでは日野先輩。失礼します」

「うん。また今度ね」

いつもと同じ微笑みを浮かべる日野先輩。

だが、今日の笑顔はどこか寂しそうに見えたのは気のせいだろうか？

俺の腕を掴んでいた愛奈さんがしばらくしてから離す。

「どうしたんですか、愛奈さん？変な真似をして」

「変な真似じゃないよ。蔵ちゃんを守ろうとしたの。ああいう、いかにも遊んでそうな大人のお姉さんには気をつけて？何か蔵ちゃんに気のありそうな眼をしていたから。遊び半分で弄ばれたらどうするの？気になる人がいるんでしょう」

「なるほど、そう言うことですか。それは感謝しますが……貴方はひとつ誤解してます」

僕は愛奈さんの行動の意図を理解して、少し苦笑気味に言った。

「彼女の名前は日野美鶴さん。彼女こそ、僕が気になる人だったんですよ」

「え、えーっ！？そ、そうなの！？」

驚く彼女、確かに日野先輩のような容姿のタイプの女性を好む傾

向はこれまでなかった。

「ごめんね、蔵ちゃん。私、余計な事をしちゃった。はうはう……蔵ちゃんの好みっていかにも大和撫子なタイプじゃない。だから、誤解してた。ああいう人はタイプじゃないって思ってたんだもん」

謝ってくる彼女に僕は「後で連絡をしておきますから」となだめる。

彼女が悪いわけではない、ただの誤解なのだから。

「それにしても蔵ちゃんって女の子の見る目、変わったたりした？」

「人は見た目だけではありませんよ、愛奈さん」

「そーかもしれないけど、ああいう美人は気を付けた方がいいよ。絶対に言い切れることがあるの。蔵ちゃん、気をつけて」

「言い切れること？」

僕が尋ね返すと彼女は含みを持った言い方をした。

「——あの人には悪魔的な一面がありそうだもの」

悪魔、か……それはどうなのだろう？

僕はまだ彼女と知り合って間もない。

付き合いの浅さから断言などできないが、何も問題はないと思っていた。

「——悪魔的な彼女、ですか。それはそれで面白いかもしれませんね」

第6章：心の変化

【SIDE：日野美鶴】

今日の家庭教師の相手は中学3年生の華奈（かな）という女の子だ。

今年受験と言う事で家庭教師を頼むことになったので、今日で4回目。

とはいっても、彼女はすごく優秀な子なので、そんなに焦る事もない。

去年受け持った子は1年間、すごく頑張らなくちゃいけなかったので安心だ。

「それじゃ、この問題の答え合わせをするわね」

「はい、お願いします」

彼女の部屋で指導をしていると、ふと彼女がこちらを向いているのに気付く。

「どうかしたのかしら？」

「いえ、先生に元気がないのでどうしたのかと思いました。何かありました？」

何かと言われて思い浮かぶのは先ほどの出来事。

偶然に街中で出会った大河内クン。

彼は見なれぬ女性と仲よさそうにしていた。

まだ知りあってそう何度も会っていないし、私自身も興味を持つ

てるだけ。

それなのに、彼のそういう行動を見てしまうと心が痛む。

「そうね。少しだけ」

「それって男の人の事でしよう?」

「な、なぜそう思うの?」

「だって先生ってすごく男の人にモテそうですから。恋愛とかで悩んでいるのかなって思ったんですよ。違います?」

華奈はからかうというよりも興味があると言った口調だ。

中学生くらいだと恋愛にも興味があるものね。

私は採点をする手を止めずに彼女に話をしてみる。

「そうね。私もこれまで何度も恋愛はしてきたわ（片思いオンリー）」

「

先生の悩みって何なんです?話してみてくださいよ」

彼女にそう言われて私は大河内クンの話をしてみた。

気になる相手に別の女性の影。

よくある話だし、それが彼の恋人ではないと思う。

本人だって恋人はいないって言っていたもの。

「怪しいですね。それって、友達以上恋人未満ってやつじゃないですか?」

「……すぐにでも恋人になるかもしれない相手?」

「そうですよ。私の友達もそんな子がいます。本人同士はくつつ気がないのに、周りから見れば恋人にしか見えない関係。あとはきっかけだけって感じです」

華奈の言っている意味は分かる。

大河内クンは純和風なすごくいい男だもの。
彼に惹かれる人間がいてもおかしくない。

「……先生はどうするんです？相手のこと、気になるんでしょう？」

「気にはなるけれども、ここは相手の出方を見ってみる、かな」

そう、無暗にあの子誰？なんて迫れるほど、私達の関係は近くない。

まだまだ先輩と後輩でしかないのに、そんな話ができないの。
気にはなるけれど今は様子を見るくらいしかできそうにもない。

「先生って大人ですね。私なら無理かも。絶対に相手を問い詰めてしまいますよ」

「華奈は好きな子はいないの？」

「この前、失恋しちゃって。それ以来、恋はしてません」

私は採点を終えて彼女に答案を返す。

「そうなの。華奈もいい恋愛ができるといいわね。これ、答案よ。
正解が多いけれど、簡単なミスが何ヶ所があるわ。もう少しだけ落ち着いて問題に取り組めばいい」

「分かりました。気をつけます。恋愛の方も、頑張ってみますね」

彼女はにこつと笑い、私もつられて笑う。

「気になる相手がいるなら、積極的に攻めてみればどうです？先生
って綺麗だし、迫られて嫌な男の人なんていませんよ」

「くすつ。そう？頑張ってみようかしら」

私はそう言っただけの少しだけ気が楽になっていた。
まだ何も分からない、憶測だけしかないのだから。
下手に気にして滅入る場合ではない。

華奈の家庭教師を終えて私は家に帰ると、大河と梨紅さんがリビングでじやれていた。

訂正、じやれてと言う表現というよりイチヤついていた。

ソファーにふたりで座りながら身を寄せ合ってテレビを見ている。

……弟のこういう光景は姉としてあまり見たくない。

「あつ、おかえりなさい。美鶴さん」

「梨紅さん。来ていたの？」

「土日の間、梨紅ちゃんの両親がふたりで旅行にいくらしいんだ。
だから、梨紅ちゃんは2泊3日、うちでお泊りさせることにした。
悪いけど面倒をかける。姉ちゃん、いいよな？」

「別にかまわないわ。梨紅さんは私の部屋で泊ればいい。でも、今日の夜から?」

今日は金曜日、明日からでも良い気がするけど。

「もう夕方から出かけているんです。パパとママ、仲が良くてよく二人で旅行をしているんですよ。今回は東北の方へ行くって言っていました。帰りは日曜日の夜なんです」

「へえ、そうなの。今回のお泊りは許可は出ているの?」

「当然ですよ。私一人だと不安なので先生に預かってもらいなさいって」

梨紅さんもまだ中学生、ひとりで置いておくのは不安も多い。そう言う意味では大河は彼女の両親に信頼されているんだろう。あんまりがつつくタイプでもないし。

「寝る部屋だけ、分ければあとは好きにして。夕食はもう食べたの?」

「うん。さっき、食べてきた。姉ちゃんはこれから……?」

「そうね。今日は作るのが面倒だから外に出て食べてくるわ」

何だかこれから自炊という気持ちになれない。

何気にまだ大河内クンの事を引きずってる。

あの親しそうな子とどういう関係なのか。

そう言うのって気にしたらどうしても、気になって仕方ない。

私は家庭教師用の荷物を置いて、もう一度外へ行くことにする。

「へえ、姉ちゃんがそう言うのって珍しいな。いつてらっしゃい。夜だから気をつけて」

「何かあったら連絡するわ。連絡があれば3秒で助けにきなさい」

「え？殺しかけ寸前の犯人を？」

「……大河。私もち弱い女の子だってことを分かってる？」

大河は「むしろ、襲いかかった犯人がボコボコにされる光景しか目に浮かばない」と肩をすくめて笑って言った。

私も女なのに、どういう意味なのかしら。

「大河、帰ったら覚えてなさい」

「……まあ、何かあったら言ってくれ。助けにくらい行くからさ」

「ふんつ。返り討ちにするから大丈夫よ」

私が拗ねると梨紅さんと大河に笑われてしまう。

もうつ、私は普段から二人にどう思われているの。

「うわあ、ねえ大河さん。見て。あの料理、すごく美味しそう」

「おー。すごいなあ。テレビで見るとうまそうに見えるけど、実際はどうなんだろ？」

「絶対に美味しいよ！食べてみたいって思わない？大河さん、連れ

て行つてよ」

「そうだな。あの辺なら、値段も悪くないし今度行つてみるか」

何だかんだでラブ甘な恋人同士。

再び見つめ合つてイチャつく彼らを背に私は家を出る。

「……いい風ね」

家を出ると心地よい春の夜風を感じた。

月がないので今日は少し夜道が暗い。

街灯に照らされた静かな夜道を歩いて行く。

「まだ9時過ぎなのに、誰もいないのも珍しいわ」

この時間帯ならまだ人通りは多少あるのに、今日に限つてない。

……コツン。

その違和感に気づいたのはしばらくしてのことだった。

あと少しで繁華街にたどり着くと言う時に、背後から聞こえてくる足音。

私と同じように歩いている人がいるのは普通だ。

気にする事はない、そう思っていたのに。

コツン、コツン……。

夜の道に響く足音、私と歩調を合わせるような不思議な感じ。

私は直感的に嫌な予感がした。

この付近には数ヶ月前から若い女性を狙った痴漢がいるらしい。変質者の噂が絶えない事は知っていたけど、実際に遭遇した事はない。

「……まさか、ね」

私はバッグから手鏡を取り出してこっそりと背後をしてみる。後ろから私のあとをついてきているのは男の人のようだ。

この道はほとんど一本道なので目的が同じだけに違いない。そう思うのに、彼はこちらとほとんど歩調がずれることなくついてきていた。

男の人ならとづくに私をぬかしてもいいはずなのに、距離を詰めるでもなく距離を取り続けられている。

気のせいじゃない、予感が確信に変わり始めていた。

まさか本物の変質者に追われるなんて思いもしていなくて。

私は動揺している自分に気づく。

ハッ、この私に変態相手に臆するなんてありえない。

何かされても返り討ちにしてやるわ。

そう、心で思うのに僅かに震える指先。

……怖い。

素直に認めたくない感情が私にある。

振り返るのが怖いので、足音だけに集中してしまう。

だから、私は目の前の相手に気づくのが遅れてしまった。

「きゃっ!？」

軽く前から来た人にぶつかってしまふ。

私を抱きとめた相手にビクツとして、相手の顔を見た。

「あつ、ごめんなさい。……あれ、日野先輩じゃないですか？」

「お、大河内くん!？」

私は思わず彼に抱きついてしまう。

背後から迫っていた男はそのまま私達の横を無言で通り過ぎて行く。

考え過ぎだったのかしら？

私はそう思っていたのに、彼が真横を通りすぎる時に背筋が凍る。

「……チツ」

私に舌打ちをして立ち去っていく男。

「えっ……!？」

私はドキツと心臓が高鳴り、怖くなっていた。

男は再び闇夜の道へと消えていく。

「本物だったの……?」

呆然とする私を大河内くんは不思議そうに「大丈夫ですか?」と顔色をうかがっていた。

彼と会わなければ私はどうなっていたんだろう?

「……ひ、日野先輩?」

私は「ごめんね」と一言だけ謝って彼に力強く抱きしめていた。怖かった、本当に怖くて、どうしようもなく安心が欲しかった。

大河内クンはどうしていいのかわからずにいたけども、やがてそつと私の髪を撫でる。

「よく分かりませんが、もう大丈夫ですよ」

彼の落ち着いた声に私は安堵しながら必死に動揺する自分を落ち着かせようとする。

こんなにも怖い思いをしたのは初めてだった。

「大河内くんがいて本当によかった……」

彼の腕に抱かれながらしばらくは私はジッと動けずにいたんだ――
|。

第7章：傍にいて

【SIDE：日野美鶴】

変質者に追われて恐怖を抱いた私は、偶然にも居合わせた大河内クンに救われた。

彼は繁華街から帰って来るところだったらしい。

私はファミレスに行くのを彼にも付き添ってもらった。

「ありがとう、大河内クン。本当に助かったわ」

「いえ、先輩が無事でよかったですよ。あの男が噂になっている犯人ですか？」

「そうだと思う。今年の初めくらいから変質者が歩いているってよく聞いてたけど、本当に会うなんて思いもしていなかった」

女の一人歩きには要注意、と警察から言われている通りだった。私は注文していたオムライスを食べながら、

「……怖かった、と認めたくないわ」

恐怖を思い出す。

ただ人に背後を歩かただけなのに。

やはり、変質者というカテゴリの人間だからこそその恐怖なのかしら。

大河内クンはコーヒークップに口をつける。

もちろん、私のおごりで彼にはお礼をしたかった。

「先輩はとても美人ですから、狙われても仕方ありません。これからは気を付けてください。何かあれば僕も協力します」

大河内クンの言葉は嬉しくありつつも、あの変態に追われるのは嫌な気持ちだ。

「……私、あんな変態なんて自分で倒せるとか思ってたのよ。それなのに相手に追いまわされただけで震えたの。あんなの初めてですごく苦痛だったわ」

「日野先輩も女性なんですから当然です。それが普通なんですよ」
相変わらずの落ち着いた声に私は食事を続けながらも気が楽になる。

大河内クンの存在が私には安堵できる。

「ああいう輩は許せんね。警察は動かないんですか？」

「警戒はしてくれて、パトロールはしてくれているの。でも、捕まらないのよね」

かれこれ、4ヶ月以上も捕まらずに被害者だけは増えている。
本当に性質が悪い変態に打つ手はない。

「……」

「……」

そこでお互いに無言になってしまう。

私達は偶然の再会に変質者というハプニングがあって、忘れてい

ただのだけでも、ただいま、微妙な関係になっていた。

夕方会った時に一緒にいた女性は誰なの？

特別そうな相手がいると言う事は驚きだったもの。

どちらから切り出せばいいのか分からず。

仕方なく、私から彼に話をしてみることに。

「……夕方の時の女の子、可愛かったわよね。大河内クンの恋人だったの？」

「あ、いえ、あの子は……」

「同じ大学の同級生？それとも恋人？」

彼女の正体が知りたい。

でも、もしも肯定されたらと思うとドキツとする。

「彼女は日野先輩が想像されている関係とは違います。言うならば女友達というものですよ。高校からずっと一緒に、親しい相手ではありませんが、恋人ではないんです」

「友達以上恋人未満？」

家庭教師の生徒、華奈が言っていたような関係？

きっかけひとつで関係が変わってしまうような……。

だけど、彼は思わぬ事を言うんだ。

「違います。彼女には既に恋人がいます。久瀬を覚えていますか？」

「ああ、久瀬くん。覚えているわよ」

飲み会の時にいた調子のよかった男の子だ。

大河内クンとは対称的なのに仲がよかったんだよね。

「あの子は久瀬の恋人なんですよ。名前は河合愛奈。愛奈さんとは住んでいるアパートも同じで、今日は彼女の付き添いで繁華街に一緒にいただけです。久瀬も心配症で、彼女は美人ですから他の男に声をかけられないようにと虫よけ代わりでもあつたんです」

彼は苦笑を浮かべながら言った。

久瀬クンか、恋人がいるって話はしていた気がする。

「そうだったんだ。3人とも一緒のアパートに住んでいるの？」

「はい。隣同士ですよ。久瀬と愛奈さんは同棲もしていないので」

「恋人同士なら同棲してしまえばいいんじゃないの？」

「住んでいるアパートが学生向けの一部屋だけのタイプですから。ふたりで暮らすとなると広い部屋も借りなくてはいけないでしょう。それに自分の時間が欲しいから別々に暮らしていると言っていました」

私も大河と同居しているけど、広めの部屋を借りなくちゃいけない。

そう考えると、学生向けのアパートだと家賃も安いし、敷金も礼金も低い。

普通に暮らすだけならそちらでもいいのかもしれない。

「あれ？その愛奈さんって人は？」

「駅前のお店で久瀬がアルバイトをしているんです。そのお店に送ってきました」

「そういうことか。ふーん、付き合ってはいなかったのね」

何だか私が勝手に考えていただけみたい。

「でも、あれだけ親しそうなら久瀬クンとじゃなくて、大河内クンと付き合う可能性もあったりして？ 一緒の高校だったんでしよう？ 向こうもまんざらじゃないって態度だったものね」

「それは、まあ……」

彼にしては珍しく言葉を詰まらせる。

……ん、何でそこに引つかかるの？

「過去にそう言う雰囲気になかったわけではありませんよ。実際に彼女の気持ちはこちらに向いた事もありますが、最後は久瀬を選んだ。それだけの関係です」

「……それって大河内クンは告白されたということ？」

「明確にされていなくても人の想いを感じる事はできます」

「ふーん。それで大河内クンの方もその気だった？」

私は気になりつつも、さりげなく尋ねてみる。

彼は首を横に振りながら、否定する。

「残念ながら、そういうものではありませんでした。あいにくと、

好みタイプではなかった事もありますが、久瀬が彼女に一目ぼれをして、恋愛を続けてたのも知っていたので、彼女の気持ちを久世に向けさせるようにしたんですよ」

「……友達思いなんだね。ちなみに大河内クンの好みと言うのはどうという女の子？」

私の問いに彼は少し照れくさそうに言う。

「穏やかで気品のある大和撫子のような女の子でしょうか。中々、いませんけどね」

純和風な大河内クンにはぴったりのイメージ。

多分、そう言う子が隣にいてこそ、よく合いそう。

……私みたいなタイプは全然正反对じゃない。

彼の好みと違うのは残念だけど、それがすべてじゃないはず。

「大河内クンってどういう恋愛をしたいの？」

「……僕は女性との交際経験ありませんから具体的にどうと言われてもいまいち、想像できないんですが。そうですね、好きになつた人の傍にいたい、その人の時間を自分の物にしてしまいたい。そういうタイプなのではないでしょうか」

「へえ、大河内クンって純愛系なんだ」

束縛と言うよりも傍にいたいだけかもしれない。

そうやって大事にされる相手になれたら……。

私はいつのまにか、彼の事が気になり始めている自分にハッとする。

今、その誰かを自分に当てはめそうになっていた。

「……傍にいて、か。あのさ、大河内くん。例えば、何だけども」

私は彼に自分でも思いもよらない言葉を告げていたんだ。

「——私でも、傍にいたいとか思ってくれたりするのかな？」

彼は私の顔を見て、驚いたような顔をしていた。

分かってる、言ってる自分が一番びっくりしているから。

彼の好意を知りたい、彼に愛されてみたい。

いつしか、私の中にあつた彼への興味は好意へと変わりつつあつた。

片思い程度の恋愛経験しかない私が初めて自ら積極的に動き出したの——。

第8章：告白の言葉

【SIDE：大河内蔵之介】

これまでの人生で誰か気になる女性がいなかったわけではない。
本気になれる相手には巡り会えていない。

日野先輩はそんな僕に言うのだ。

「私でも傍にいたいって思える？」

「え？日野先輩の……？」

それがどういう意味なのか、理解するのに時間はかからなかった。
顔を赤らめて告げる彼女を見ればどういう意味が分かる。
これまでも何度か経験したことがあるシチュエーション。
他人から好意を向けられるのには慣れていない。
僕は先輩のことを考えながら、言葉を選ぶ。

「日野先輩。お店を出ましようか」

と、まずは場所を変えて話をする事にした。
そういう話はこのようなファミレスでするものではない。
だが、彼女はそれを否定と思ったのか、表情を暗くする。

「……ごめんなさい、変なことを言ってしまったって」

もしか、勘違いさせてしまったのだろうか。

「気を悪くさせたかったわけじゃないの」

シュンツとしてしまう彼女。

勘違いをさせているとしたら、それは僕の本意ではない。

「違いますよ、日野先輩。このような話をする場所ではないと思っただけです。場所を変えましょう。この近くで落ち着ける場所は…」

少なくとも、即断することはない。

自分の気持ちはまだ微妙だとしても、相手を気にしているのは確かなのだから。

「この近くに公園がありましたよね。そちらの方へ行ってみませんか？」

彼女にそう告げると頷いた。

駅前の公園は夜でも人気がある。

適度な人通りもあるので、日野先輩が襲われたようなシチュにもなりにくい。

ここなら安心して話をする事ができるはずだ。

「先輩、先ほどの話です。俺に近づきたいと言いましたよね」

「うん。言ったわよ」

「それは“恋人”という意味ですか？」

ストリートに尋ねると彼女は「え？」と意外な反応を示す。

「ち、違わないけど、違うって言うか。そう言う意味の告白だったわけじゃなくて、その、何て言うのかな。雰囲気で、言ったのもあって」

「別に告白ではなかった、と……？」

言われてみれば別に好きと言われたわけではない。
ただ、傍にいたいという台詞だけだった気がする。

「えっと、私は大河内クンに興味があるのよ。今日だってそう。知らない女の子と歩いているのを見て、何だかショックだったもの」

「……僕も日野先輩の事は興味がありますよ」

「それって異性としての興味？」

「だと思えます。僕はあまり恋愛経験がありませんので、明確には言い切れませんが」

それでも、彼女に興味を抱いているのは事実だ。
彼女も僕に興味を持っている。

「不思議なモノですね。まだ数回しかあっていない間柄なのに」

「……そうね。大河内クン、提案があるんだけどいい？」

彼女は改めて僕にある提案をする。

「今はまだお互いに好きかどうか分からない、でもとても気になるって感じだと思うの。だったら、その気持ちを明確にした方がいいでしょう？好きか嫌いかわ、どちらなのか。明日、暇なら私とデートでもしてみない？」

「日野先輩とですか？それは……」

悪い提案ではない。

こちららも彼女に興味を抱く以上はどういう関係を望んでいるのかはつきりさせておきたいと言つのもある。

「いいですよ、日野先輩」

「ホント？それじゃ、明日、待ち合わせ場所は駅前。昼の1時でOK？」

「はい。それでかまいません」

デートか、互いの気持ちを確認し合うにはいい方法かもしれないな。

「どついつ場所に連れて行ってくれるか、楽しみにしているわ」

だが、彼女は僕にある無理難題を押し付けてきたのだ。

満面の笑みで言われて「は、はあ」と頷いてしまう。

デート場所なんて大した経験もないのでどうすればいいのか。

それは僕を困らせることになる。

こつこつ所から考えなければいけないものなのか。

だけど、そう思いながらも「悪くないな」とどこか気持ちは高ぶ

っていた。

日野先輩との距離が縮まるのかどうか、楽しみだ。

第9章：意外な問題

【SIDE：大河内蔵之介】

大学の学食での食事のことだった。

「……久瀬、貴方に質問があります」

「んー？何だ？」

「デートと言うのはどういう場所するのが理想的なのだと思いますか？」

僕の発言に目の前にいた久瀬と愛奈さんが啞然とした表情を見せた。

そこまで驚かれるようなことではない。

「ねえ、久瀬ちゃん。私、蔵ちゃんの口から変な言葉を聞いた気がする」

「ははっ。愛奈。どうやら俺もだ。おっ、あれか。ゲームの話か。携帯ゲームの恋愛ものにハマってるのか？そういう話題か？」

「……なぜに二次元だと断定するのでしょうか。現実の女性とのデートの話です。貴方がたは恋人なのだから、参考まで聞いてみただけなのですが」

さらに硬直する久瀬。

僕の親友でありながらその態度はどうなのだろう？

「え？だ、誰とデートなの、蔵ちゃん！？」

「そうだぞ、俺、そんなの聞いてないし」

「……だから、今、話しているんですが」

ふたりの驚きように多少呆れつつも、僕は彼らに問う。

「色々考えたのですが、どうにも自分一人で解決できる問題ではなさそうです」

「デートか。ついに大河内にもそんな相手が出来たんだなあ」

「相手はもしかしてあの人の？」

「あの人？愛奈は誰か知ってるのか？」

愛奈さんは僕に「あの人の人だね？」と問いかける。
彼女の言うあの人は日野先輩で間違いない

「大学の美人の先輩らしいよ。名前は確か、日野先輩だっけ？」

「な、なあに！？あの日野先輩が相手だということか！？」

「……久瀬、驚きすぎです」

「そりゃ、驚くだろう！？あの超絶美人をモノにするとは何とも羨ましい。この野郎、いいところどりしやがって。俺もあんな美人とでーとしてみ……ハッ、お、落ち着け、愛奈。これは、その……」

久瀬の顔色が青ざめる、愛奈さんの怒りを買ったせいだろう。

「——久瀬ちゃんの浮気者っ！」

「ぎゃふんっ」

この2人に相談したのは間違いだったのだろうか。

数分後、落ち着きを取り戻したふたりからの提案。
頬を叩かれて顔を赤くする久瀬。

自業自得しか言いようがない。

そんな彼を放って愛奈さんはある提案をする。

「デートなら良い場所があるよ」

彼女が僕に差し出したのは『絵画展』のチケットだった。

「これって美術館のものですか？」

「そう。先輩からもらったけど、私は興味ないし」

「……美術館とは、人を選びますよね」

僕は面白そうだが、彼女はどうかだろうか？

「その辺は大丈夫だって。雰囲気さえ作ればOK」

「愛奈は適當すぎ。そんなに簡単に女が喜ぶなら、苦勞なんてしな
ぎゃー!？」

「久瀬ちゃんはお黙り」

今日の愛奈さんはどこか機嫌が悪いようだ。
下手に逆らうと久瀬のようになる。

「蔵ちゃん。初デート、楽しんできてね。先輩と上手く行く事を応援してるよ」

「ありがとうございます。それにしても、この歳で初デートとは……」

自分ではそのようなつもりはなかったのに。
改めて考えると交際はおろか、デートらしいデートも特別な相手
とした事がない。

「蔵ちゃんは真面目だもん。しょうがないよ」

「高校時代に遊んでおくべきでしたか」

「やだ。蔵ちゃんからそう言う発言聞きたくないなあ。久瀬ちゃん
みたいな事を言わないでよ。こらっ、久瀬ちゃん。蔵ちゃんに悪影
響を与えるな」

その恋人は既にノックダウン中。

愛奈さんのそう言う手の早さは高校時代から変わっていない。

「でも、蔵ちゃんもデートするなんて、なんか複雑かも」

「……そうですか？」

「だって、あの蔵ちゃんがだよ？硬派を絵に描いたようなタイプなのに」

「僕だって人に恋愛をする事もありますよ」

愛奈さんにとってはそれが信じられないらしい。

「まあ、そう言う事なら協力してあげる。ほら、久瀬ちゃんも」

「……人を足蹴にしておいてよく言う。分かったよ、蔵之介の恋を応援してやるさ」

友人達の力を借りて、僕はデートの話をする。

経験不足は仕方ないので、ある程度は参考になる意見をもつおう。それにしても、自分がこういう風にデートや恋愛のことに悩むようになるなんて。

僕自身が信じられていないのも事実だった。

第10章：初デートへ前編

【SIDE：大河内蔵之介】

初めてのデート。

悩んだ末に、愛理さんからもらった絵画展のチケットを使う事にした。

美術館に行くのは久しぶりだ。

この街の美術館には当然ながらまだ行った事はない。

一応ながら場所は分かっているのに、道に迷うことはないけども少し不安はある。

「さて、そろそろ時間ですね」

駅前で待ち合わせ、と言うのも考えたけども、日野先輩は美人で、すぐに男の人から声をかけられてしまうだろう。

なので、僕は彼女の住むマンションの前で待ち合わせることにした。

待ち合わせの雰囲気はないけども、その方が安全だと判断した。

先輩も先日も変質者に会ったばかりなのだから。

彼女もそれを気にしてか、すぐに了承してくれた。

「お待たせ、大河内くん」

「……え？」

こちらに気づいて手を振る彼女はとても綺麗な容姿だった。

服装も美しいが、特にメイクも際立ち、普段よりも美人に思えたのだ。

「日野先輩、綺麗ですね。思わず見惚れてしまいました」

「あ、ありがとう。ストレートに褒められると照れるわ」

顔を赤らめる彼女に僕は本題を切り出す。

「それでは行きましょうか」

「ええ。それで、大河内くんは私をどこに連れて行ってくれるのかしら？」

「それはついてのお楽しみにしてください」

楽しんでもらえるかどうかは別だ。

ここから先は僕の行動次第だと久瀬と愛奈さんが言っていた。

彼らから幾つかのアドバイスをもらい、このデートを楽しいものにしたい。

訪れた美術館は現代アートの絵画展が行われていた。

あまりこういうモノに馴染みはないが、興味がないわけではない。

それは日野先輩も同じようだ。

「へえ、美術館か。大人っぽいチョイスねえ」

「遊園地などの方がよかったでしょうか？」

「うっん。騒がしいのは苦手だから、私はこういうの好きよ」

どうやら、最初の賭けには勝てたようだ。

休日で、それなりに人の賑わいを見せるが美術館という場所柄が騒がしいほどではない。

受付でチケットを渡し、ふたりで美術館の中へと入る。

「日野先輩は美術館に来たりしますか？」

「私？ここではないけども、友達の付き添いで行ったくらいね」

「そうですか。楽しんでもらえればいいんですけど」

「大河内くんが楽しませてくれるんでしょう？」

くすつと微笑をする彼女にドキッとさせられる。

これは、参った。

頑張らなくてはいけないと思いながら、僕は絵画を眺めていく。この美術館は主に現代アートを飾っている若者向けの美術館らしい。

館内には僕らのように若い人が多くみられた。

「へー、色鮮やかな絵ね」

派手な色合いの絵を眺める彼女。

「先輩はこういう絵を好むんですか？」

「うん。私は好きかな。人物画よりも抽象画の方が好きかも。大河内くんは？」

「風景画が好きでしょうか。落ち着いたものが好きです」

「あつ、それは分かるなあ。ねえ、見て。アレは何だろう?」

ふたりで絵や芸術品を見て回る。

初めてのデート。

特に意識しなくても雰囲気は僕らを楽しませてくれる。

「これは……?」

僕らが眺めているのは虹を表現した絵だ。

七色の虹、斬新なイメージを絵にした面白い作品。

きらびやかなプリズムが印象的だ。

「現代アートって堅苦しさもなく面白いわね」

「本当ですね。僕もあまり知らなかったんですが」

僕はこの現代アートの美術館に若い人が多い理由を実感していた。美術館と言うのはある程度の年齢がある人が行く場所だと思っていたけど違う。

古くて価値のある画家の絵というのは難しいものだけでも、新しい発想で描かれた現代アートと言うのは斬新さと驚きに見せられる感が僕らの世代にはあっているんだろう。

「それにしても綺麗。七色を上手く表現していると思うわ」

「まるでCGみたいなアートですね」

「ホントね。表現力がすごい。これだけの感性が私にも欲しいわ」
僕らが絵に魅入られていると、ふたりの距離が近いのに気付く。
真隣同士、手を伸ばせば触れ合える距離。

「……大河内くん？」

彼女に声をかけられるまで、その横顔を見つめていた。
いけない、今日の先輩は綺麗でつい見惚れてしまうから。

「いえ、何でもありません。そろそろ、休憩にしませんか？」

「そうね。この美術館にはカフェがあつたのよね？」

「ええ。そちらに行きましょう」

僕はカフェの方へと移動する。

大きな美術館はカフェやレストランなどがあり、一日中楽しめる
ようになっている。

僕はオープンカフェのテーブル席に座った。

「先輩は紅茶でいいんですか？」

「お願い。あとはケーキもね」

「分かりました。少し待っていてください」

僕は注文をすると、ふと携帯電話のメールに気づく。
相手は愛奈さんからだった。

『デートは順調？緊張してない？』

僕の事を心配してくれているのだろう。

「何も問題はありませんが、女性を意識するのは……大変ですね」

そう返事を打つと彼女から返信があった。

『デートは女の子を楽しませたら勝ちだからね。頑張って！』

と言う、応援のメールが返ってくる。

頑張れ、か。

「僕は頑張っつて、先輩に気に入られたいんでしょうか」

自分の気持ちはまだ分からない。

日野先輩は僕に興味を抱いており、僕もまた彼女を知りたいと思った。

だからこそこのデート。

互いをよく知りあうために。

「もう少し、僕も積極的でもいいのかもしれないね」

そう呟きながら、僕は携帯電話をしまう。

カフェラテとレモンティー、それにチーズケーキをトレイに乗せて僕は日野先輩の待つテーブル席へと戻る。

「このデートが楽しいと思ったら、僕の気持ちも変わるんでしょうか」

そんな事を考えながら、彼女のところへと僕は向かう。

「初めてのデート、まだまだ楽しめそうです」

第11章：初デート〈後編〉

【SIDE：日野美鶴】

初めてのデート。

私の人生では男の子とふたりっきりで出かける事はほとんど記憶にない。

弟の大河ならば何度かあるけども、それくらいだ。

今まで出会いがなかったわけじゃないけども、積極的に恋愛に向き合ってきたわけではないから経験は年齢のわりには少ないと思うの。

……大河のことをバカにはできないわね。

人の事ならどうとでも言えるのに。

自分の事になると、臆病になってしまう自分がいる。

それでも、私は彼の事が気になるのよ。

大河内クンのことが……。

美術館のカフェで私達はティータイムを楽しんでいた。

こういう大きな美術館ではカフェなどを楽しむことができる。

オープンテラスの席に座りながら私は紅茶の味を楽しむ。

「大河内クン、この後の予定も決めてくれているのかな？」

「そうですね。もう少し美術館の中を見てから先の事も一応はプランをたてています」

「ホント？頑張って考えてくれるんだ？」

彼もこのデートに乗り気みたいで嬉しく感じる。

女の子とデートらしいデートはしたことがないみたいだから、互

いにドキドキし合っているのが何だかい。

「日野先輩は楽しんでくれていますか？」

「私？こうして美術館のデートは楽しめているわよ。意外な発見と言つか、新鮮さがあるもの。大河内くんはどうかしら……？」

「僕は……楽しいですが不思議な気もしています」

「不思議？それはどういうこと？」

彼に尋ねて見ると、私の方を彼は真っすぐに向いて、

「これまで女の人と一緒にいたいと思った事がありませんだったので……。でも、今は少しずつ、先輩との時間が楽しいと思えるようになってきているんですよ」

「そう、なんだ」

面と向かって言われると恥ずかしい気持ちになる。

彼は照れくさそうにするわけでもなく、真顔で言うから余計に……。

大河内くんは、真面目な子なんだと思う。

彼の気持ちが少しでも私に向いてくれるのなら、このデートに意味はある。

「そろそろ、行きましょうか。日野先輩」

「……うん」

私は飲み終えたカップを片付ける。
彼と再び美術館の中を歩きながら絵を鑑賞する。
いつしか私の中で膨らんでいく気持ちに気づく。
大河内クンが私にとって特別な存在になっていく。
人が人を好きになるってこういうことなのかな。
そんな事を思いながら私は彼の横顔を見つめた。

「大河内クンがあんなお店を知ってるなんて驚きだったわ」

夕食後、私たちはのんびりとふたりで繁華街を歩いていた。
美術館の後は繁華街を歩き、そして私達は雰囲気の良いお店で食事を楽しんだの。

「まだあまりこの辺りのお店は知らないのよね？」

「ええ。それほどは。ですが、あのお店は久瀬達から教えてもらっていたんです。とはいえ、さすがに一人で入るには雰囲気が良すぎますから」

苦笑い気味な彼だけど、私は嬉しかった。
私を楽しませようとしてくれている。
その気持ちがとても伝わってきたから。

「そういえば、帰る前にもう一ヶ所、よってもいいですか？少し歩くんですが」

「いいけれど？」

「最後は個人的にも気になっていた場所なんですよ」

どこに連れて行ってくれるのだろうか。

そんな楽しみ方に心が躍る自分がいる。

些細なことでも好きな人と一緒にいる事は心が満たされる。

私にとっては初めてに近い経験だ。

私も女だったのね。

そんな事を感じながら、私は彼の後をついて行く。

繁華街から少し歩いた場所にある大きなビルだった。

ここは私もスポットとしては聞いたことがある。

この街のデートスポットは恋人同士でくる事が多い場所だから。

「……このビルの最上階は展望台になっているそうですね」

「うん。夜景が綺麗だって聞いたことがあるわ。私もここに住んで2年以上たつけど、ここには来たことがない。この下の映画館とかならたまに来るけども、最上階までは機会がなくて……。ここは大河内クンも知っていたんだ」

このビルは映画館やボーリング場などがあり、最上階は展望台にもなっている。

周囲にも恋人同士が寄り添って窓の外を見下ろしていた。

「行ってみましょうか」

私達が近づくと、夜景がよく見える。

この街を一望する事ができ、夜の街並みは光があふれている。
煌めく輝きは本当に綺麗だ。

「綺麗ね。想像以上に眺めがいいわ」

「はい。僕もそう思いますよ」

「興味はあるけど来づらい場所なものね」

恋人同士でもない限りはここにくることもない。

「ここも久瀬くん達のお勧めなの？」

「いえ、ここは久瀬からではなく、初めてこの街に来た時に知っていた場所なので。久瀬からも話は聞いていましたけどね。まさか自分がここに誰かを連れてくる事は想像していませんでした」

微笑する彼と視線が交差する。

彼の些細な行動に見惚れる自分がいる。

私はこの1日のデートで、彼の事を愛している事に気づいた。

大河内クンの存在。

彼への気持ち。

昨日、彼に助けてもらってから、私の中で大きくなり続けている。今日一日のデートは私達の気持ちの確認のためのデート。

好きか嫌いか、興味があるだけの仲で終わるのか、それとも――。

「あのね、大河内くん」

「はい？何でしょう？」

私は自分の想いのままにある言葉を口にしていった。

「――私、やっぱり、貴方の事が好きみたい」

私の気持ちは答えが出ていた。
だから、私は彼にそう答えていたんだ――。

第12章：愛する人を見つけて

【SIDE：大河内蔵之介】

思えば僕があの日から彼女に惹かれていたのかもしれない。
初めて僕らが出会った、最初の日から――。

日野先輩は美人で大人の女性だ。

けれども、時折見せる純粋さは年上をあまり意識させない可愛さもある。

出会ったときから不思議な魅力を感じて、あの事件もあって……。
昨夜、不審者に狙われた時、僕を頼ってくれた先輩。
今日のデート、僕にとってはこんなにも誰かを意識したのは初めてだった。

「あのね、大河内くん。私、やっぱり貴方の事が好きみたい」

紅潮する頬、どことなく緊張しているのが見て取れる。

先輩は僕に告白をする。

「大河内くんは私にあわせてくれたり、優しくしてくれるじゃない。
こう見えて、男の子との付き合いがあんまりない私には新鮮だったのよ」

「それが今でも信じられないんですが。日野先輩は正直、モテますよね？」

「……うっ、それは」

彼女は恥ずかしそうな表情を浮かべていた。

美人ゆえに男性から言い寄られることもあるはず。

「前にも言ったかもしれないけれど、男の子って苦手なの。弟とは仲がいいけれど、他の異性って怖いイメージもあったから。告白とかされたことも、人を好きになりかけたこともあるけど、何も進展したことはないわ」

「僕と似たようなものということですか」

僕もそうだった。

女性との接点がなかったわけではないが、自分から付き合いを求めるとはなかった。

けれど、今は先輩に興味を抱いてこんな風にデートまでしている。

「私は大河内クンのこと、最初は古風で気配りのきく男の子なんだって思ってたの。貴方とは気があいそうだなって感じてたんだ」

彼女は夜景へと視線を移す。

僕も再びそちらに視線を向ける。

「昨日のことがなくても、私はきつと貴方に惹かれていたわ。でも、今日のデートで私は想いがはつきりと自分にあるんだって自覚したの」

「僕も……今日、日野先輩とデートをして感じたことはあります。女性とこんな風にふたりつきりで出かけることは今までありませんでしたから」

彼女とすごしたこの長くも短いように感じた1日。

僕の傍で笑みを見せてくれた彼女。

お互いをよく知るために、それが趣旨だったこのデートは成功だったといえる。

「ねえ、大河内くん。もう一度言うわ。私は貴方が好きなの。私の恋人になつてほしい。年上の私が言うのもなんだけど、大河内くんって寄り添いたくなるっていうか、甘えたくなるの。こんなお姉さんじゃ嫌かな？」

「……」

彼女の告白を受けて僕は考える。

日野先輩と僕は似ている。

性格的にも相性はいいし、何よりも僕自身が彼女に惹かれている。初めて女性として誰かを意識している自分に驚いていた。

これが人を好きになるということならば……。

僕はその感情を認めざるを得ない。

なぜならば、僕が返事を言う前に身体が先に反応していた。

「……大河内くん？」

僕は日野先輩の手を握りしめていた。

女性らしい細い指の感触。

絡めあうように彼女はそつと握り返してくれる。

「男の子の手だね。大河内くんの手って大きいのね」

「先輩の手は思ったよりも小さなものです」

「大河内くん。返事、してもらえるかな？」

「はい。いろいろと僕も考えてみました。先輩と出会ってからまだ日は浅いですが、僕は日野先輩が好きなんだと思います」

相手を意識した時点で恋は始まる。

いつだったか、久瀬がそんなことを言っていた。

彼女はとつくに意識する存在になっている。

ならばこそ、僕はその気持ちを認めなければいけない。

「本当に？」

「今日のデートはとても楽しいものでした。何気ないことすらも、楽しく感じるのは日野先輩が傍にいたからだと思います」

「私もとても楽しかったわ。こんなの初めての経験だもの。今もそう、すごく心が満たされているの」

「僕は誰かを好きになる自分を想像なんてしたことがなかったんですが……人を好きになるのは不思議なものなんですね」

彼女のウェーブのかかった長い髪がなびく。

こちらを見上げていた先輩は少し涙ぐんでいた。

「よかった……。それでも、ふられたらどうしようってドキドキしていたのよ」

「僕でいいのなら、よろしくお願いします」

「ありがとう、大河内くん。私も貴方が好き」

周囲の目を気にせずに抱き合う。

他のカップル連れも似たような感じなので気にらない。

「嬉しい。今、すごく嬉しいわ」

微笑みを見せる日野先輩は子供のように可愛く見えた。

「先輩の笑顔は可愛いですよね」

「可愛い？可愛いって私には似合わない表現じゃない？」

「そんなことはありませんよ。先輩はとても可愛らしく見えます」

僕の言葉に彼女は照れてしまった。

そういう仕草も可愛いと思えてしまうのは、僕は本当に彼女が好きらしい。

一度好きだと認めると、人は不思議なもので、それが当たり前のことのように思えてしまう。

目の前で笑う彼女が愛おしい、と。

「……ううっ。恥ずかしい。でも、恥ずかしいついでにお願いして
もいい？」

「はい？何でしょうか？」

「あのね、私って……結構、甘えたがりなんだけど……いいかな？」

「もちろん。好きな人に甘えられて嫌がる男はいないでしょう」

寄り添ってくる彼女を抱きとめながらふたりで夜景を見つめる。
恋人同士として、この場にいられることの幸せ。

「とてもいい夜になったわ。綺麗な夜景を大河内クンと見られるなんて」

「……僕ですよ」

望むのならばこの二人っきりの時間がもう少しだけ続いて欲しい。初めて好きな人ができた。

大切な人で、時に可愛らしく、とても魅力的な女性。

今日という日を、この夜を僕は忘れないと思う。

日野先輩と僕はかけがえない恋人同士になれたのだから――。

最終章：悪魔の心は誰のもの？

【SIDE：日野美鶴】

私と蔵之介くんが付き合いだして1カ月。

私は自分の家のキッチンで料理をしている最中だ。

「ねえ、蔵之介くんは好き嫌いはあったっけ？」

「そうですね。辛いものが苦手ということ以外はたいしてありません」

「うん。分かった。気をつけるね」

「美鶴先輩の料理は美味しいので、なんでも好きですよ」

「ありがとう。そう言ってくれると私もうれしい」

好きな人に料理を作るのって、弟に料理を作るのとはまた違う。和風なものが好きだから、料理も和風中心になる。

蔵之介くんとこうして夕食を一緒にするのも慣れ始めていた。

「そう言えば、先輩もたまにはサークルの方に顔を出してくれって言っていましたよ」

「ホント？それじゃ、また遊びに行こうかな」

蔵之介くんにはサークル活動があり、私も家庭教師のアルバイトがある。

週に数回程度時間があう時はこうして一緒の時間を楽しんでいる。ホントは私が彼の家に作りに行きたいんだけど、彼が気を使って、こうして私の家にきてくれるんだよね。

リビングで彼は大学の課題の勉強をしていた。

「美鶴先輩、辞書をかりますよ」

「うん。今日は何のレポートなの？」

「倫理学ですね。安西教授の講義のレポートです」

「それなら、私の部屋に前に使ったノートがあるわ。参考程度になるとは思うから。あの教授、ちょっと面倒なレポートを出させるもの。部屋のいつもの場所にあるから」

彼は「見せてもらいますね」と私の部屋からノートを持ってくる。自室に恋人を入れるという緊張感も最近は慣れてきた。最初はものすごく彼も私もドキドキしていたけど。

「……あら？大河からだ」

ふと、携帯が鳴って電話にでると弟の大河からだった。

『あつ、姉ちゃん？俺、俺。今日は梨紅ちゃんのところでお泊りすることになったから』

「……まさか、中学生に手を出す気？」

『違うつての！？梨紅ちゃんの両親が泊りがけで出かけるって言うからさ。彼女の母親にも頼まれたんだ。たまにあるだろ。変なこと

をするわけじゃない』

梨紅さんのお母さんもずいぶんと大河を信頼しているみたい。
あの子を信頼していいのかしらね。

「……犯罪者にならないことを祈るわ、姉として」

『はいはい。しませんって。そういや、姉ちゃんも蔵之介と一緒に
?』

「そうだけど?それが何か?」

すると電話越しに大河は笑いながら私に言った。

『だったら、姉さんも蔵之介にお泊まりしてもらえば?』

「なっ。何をバカなことを言ってるのよ!??」

『冗談だつてば。でも、あいつはいいやつだけど、男でもあるから
なあ。いやいや、姉ちゃんも気は強いが押しに弱いタイプだ。どう
なることかねえ?』

なんてことを言うのかしら。

蔵之介クンと、そんな……ハッ、変なことを考えちゃダメ!?
こ、これは大河の罠なんだから余計なことは考えちゃダメなの。
……少しだけ変なことを想像した自分が嫌いだ。

『まあ、そういうことだから後は好きにどうぞ。それじゃ』

大河にからかわれて、私は少しドキッとしてしまった。

まったく、姉をからかうなんて。
……帰ってきたらお仕置きしてやる。

「大河さんからの電話ですか？」

「あつ、うん……」

部屋から出てきた彼はノートを片手に不思議そうに私に言う。

「先輩、顔が赤いようですけれど、何かありました」

「え？う、ううん。なんでもないわ。ノートは見つかった？」

「ええ。すぐに見つかりました。美鶴先輩は几帳面ですよ。整理整頓された部屋ですから。綺麗好きなんですか？」

黒い悪魔（ゴ・ブリ）が嫌いなので部屋の掃除はこまめにしている。

時々、大河の部屋も掃除してあげるけど、あの子の部屋は魔の巣窟でいろんなものがでてくるのよね……恋人の梨紅さんがいるのに男の子らしいといえそうだけど……蔵之介くんも？

「そうかも。今度、蔵之介くんの部屋も掃除してあげよつか？」

「……い、いえ、僕の部屋はいいですよ」

怪しい……？

でも、恋人を怪しむのはよくないわよね。

「んー。別に遠慮しなくていいのに。男のプライベートは大河で慣

れてるし」

特に変な本やDVDが出てきても怒るつもりはない。

蔵之介クンの場合は真面目な感じだけど、その辺は気になる。」

「別に何か怪しいものを隠しているわけではないんですが」

「それならいいじゃない？」

「あ、あはは……そうなんですけど」

彼は苦笑いを浮かべている。

まあ、プライベートな空間はいじられたくないのかも？

誰にでも触れられたくないことってあるし、深くは追及しない方がいい。」

「それよりも、お鍋の方がわいてますよ」

「あつ、忘れてた。もうすぐできるから待っていて。掃除の件は考えておいてね？」

「……はい。分かりました」

恥ずかしそうにうなづく彼に私は内心、可愛いなって思えたの。

蔵之介クンってそういう素直な反応をするから私は好きだ。

私は再び料理に集中して、夕食を作ることにした。

食後になって、私たちはレンタルビデオ店で借りてきた映画のDVDを一緒に見ていた。

ソファーで私は彼の肩に寄り添う形で身を預けている。

……恋人に甘えるというのはすごく気が楽になる。

心も満たされるし、何よりも幸せな気持ちになれるから好き。

「こうしてテレビで映画を見るのもいいけれど、映画館にも行きたいわね」

「いいですね。今度、一緒に行きます?」

「うん。私、みたい映画があるの。一緒に行きましょう」

蔵之介くんがそつと私の髪を撫でる。

「……んっ、くすぐりたい」

「美鶴先輩って撫でられるの好きですね」

「他人に甘えられることが好きなのかも。私って、弟と妹がいるから。誰かに甘えるのって中々なかったのよね……年下の蔵之介くんに甘えるのも悪いかな」

「僕がかまいませんよ。先輩のそういうところ、好きですから」

嫌みのない笑み。

彼の落ち着いた雰囲気により私にとって甘えなくなる衝動かられる。

見ていた映画はキスシーンに入っていた。

「映画のキスって……見ていると恥ずかしくなるわ」

「他人同士のキスをみせつけるということですから」

「……し、しないからね？」

一応、確認で言うと彼は微苦笑をする。

「美鶴先輩、照れると可愛いですよね。僕は先輩のそういうところも好きです」

「うう……」

蔵之介くんの方が私よりも年上みたいに感じるのはこの包容力かもしれない。

だからこそ、私も素の自分を彼に見せることができる。

彼と恋人になって、私は恋が楽しいことだと知った。

大河と梨紅さんの関係を見て、感じたこともある。

「私ね、大河たちを見て恋人って楽しいのかなって思っていたの。

あの子たちは幸せそうに見えたから。どこか羨ましかったのかもね」

蔵之介くんに出会うまで恋に興味がないと思っていた。

でも、違っんだと彼に出会って気付かされた。

私は誰かを好きになろうとしていなかったただけなんだって。

「僕も似たようなものかもしれません」

「私たちって似た者同士だから惹かれあったのかしら」

「きつかけとしてはそうかもしれませんが、今は惹かれるべくして惹かれたのだと感じています。好きですよ、美鶴先輩」

「私も好きよ」

想いを確認しあうだけでもいい。
この気持ち、大事にしたい。

「ねえ、蔵之介くん……我がママを言ってもいいかしら？」

「はい。別にかまいませんが」

「実はね、今日……大河が帰ってこないから……——」

少しずつ、私たちの関係は前へと進んでいく。

恋愛の関係は思っていた以上に難しい。

いつかは私たちもすれ違ったりするのかもしれない。

だけど、私は蔵之介くんとの出会いを運命だと決めている。

出会い、恋をしたことが私たちの運命だって。

今という時間を彼と一緒に過ごしたい。

私はまだ彼に本当の自分を見せていない。

いつか見せる時がきても、きつと彼なら私を受け入れてくれる気がした。

ねえ、蔵之介くん。知っている？

女の子って、男の子にしか見せない悪魔な顔があるのよ？

【 THE END 】

最終章：悪魔の心は誰のもの？（後書き）

まさにタイトル詐欺。「悪魔な彼女」とタイトルをつけておきながら、悪魔度がグッとさがった美鶴さんの恋物語です。あの魔王っぷりはどこに消えた？蔵之介が大河並のヘタレさんなら、美鶴さんの魅力を引き出させたのかも。やっぱり、魔王っぷりを発揮してこそ美鶴さんですよ……。というわけで、これで小悪魔彼女シリーズも完結です。楽しんでもらえたら幸いです。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4536s/>

小悪魔彼女～Love Destiny～

2011年5月9日20時10分発行